椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

—4—

上　巻

福岡県築上郡築城町所在
安武・深田遺跡　安武・土井の内遺跡

1991

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

—4—

上　巻

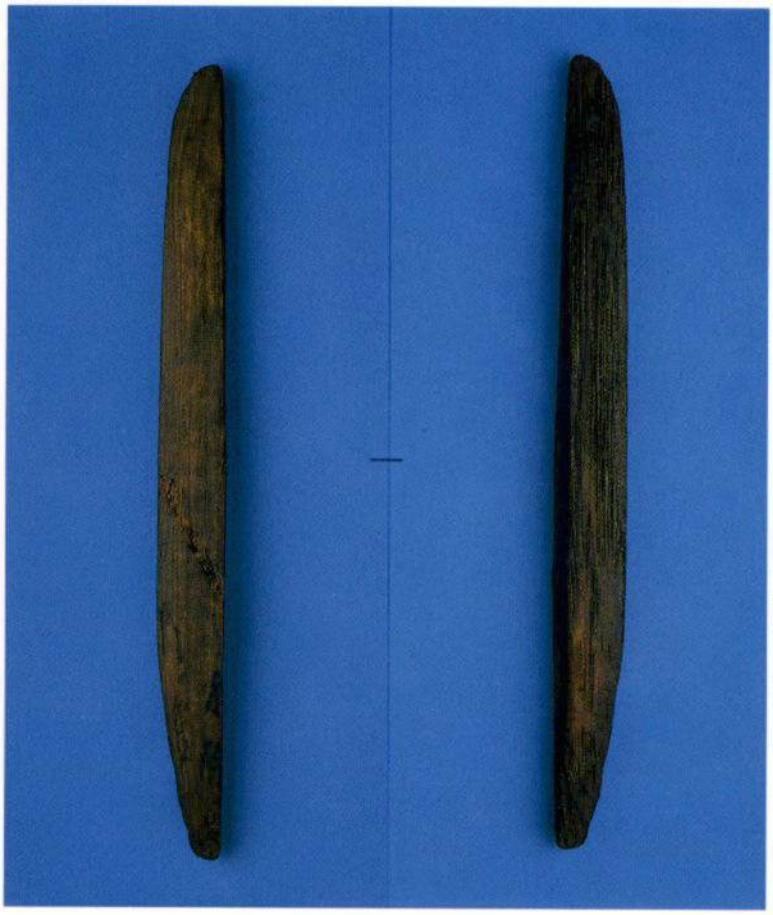
福岡県築上郡築城町所在
安武・深田遺跡　安武・土井の内遺跡

安武・深田遺跡　航空写真（南東上空から）

1　50号竪穴住居跡出土　　絵画土器（25）

2　　同　　水鳥

1　谷地区流入口付近（北から）



2　木　　簡

1　2号貯蔵穴

2　谷地区16区槌の子群出土状況

序

本書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和61年度から実施している一般国道10号線椎田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

今回の報告書は昭和63～平成元年度に調査を行なった築上郡築城町大字船迫および安武に所在する４ヶ所の遺跡についてのもので，第４集として刊行するものであります。

本書が地域の文化財保護の一助として活用して頂ければ幸いです。

なお，発掘調査に際し御協力いただいた関係各位ならびに地元の方々に，心から感謝申し上げます。

平成３年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　御手洗　康

例　言

1．本書は福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて実施した，一般国道10号線椎田バイパスに伴う発掘調査の4冊目の報告書である。

2．本書に掲載した遺跡は築城町に所在する第3地点，第5地点，第6－A地点（安武・土井の内遺跡），第6－B地点（安武・深田遺跡）の4ヶ所である。

3．遺構の写真撮影・実測図作成は調査担当者が行なった。

4．出土遺物の整理は，九州歴史資料館および文化課甘木事務所で岩瀬正信氏の指導のもとに行ない，報告した原資料については，甘木事務所にて保管している。

5．出土遺物の写真撮影は調査担当者のほか，九州歴史資料館石丸洋氏・林崎新二・内本浩子両氏の助力を得，実測は若松三枝子・鬼木つや子・佐藤みゆき・渡辺輝子・高瀬照美さんの協力を受けている。

6．挿図浄書については，甘木事務所の塩足里美さん，九州歴史資料館製図室で豊福弥生・江上佳子・薗牟田秀子・関久江さんの助力を得た。

7．安武・深田遺跡出土の鉄器については，新日本製鉄所・大澤正巳氏に依頼し，分析結果について玉稿をいただいた。

8．安武・深田遺跡出土の木製品については，琉球大学助教授の林弘也氏に依頼し，玉稿をいただいた。

9．安武・深田遺跡出土の木簡及び墨書土器については，九州歴史資料館の倉住靖彦氏に依頼し玉稿をいただいた。

10．出土した鉄器についての処理は，九州歴史資料館・横田義章氏にお願いした。

11．本書の執筆は，Ⅰ～Ⅲ－1・3・4・6，Ⅳ－1・3，Ⅴ，Ⅵを木下修，Ⅲ－2～6，Ⅳ－2・4・5を水ノ江和同，Ⅲ－4を飛野博文，Ⅲ－5の墨書土器・木簡を倉住靖彦，Ⅶ－1を大澤正巳，Ⅶ－2を林弘也が行ない，文末に責任の所在を明らかにした。

12．本書の編集は木下，水ノ江が分担した。

本 文 目 次

〔上巻〕

Ⅰ　はじめに …… 1

1．調査の経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 10

1．築城町・椎田町周辺の地理的環境 …… 10

2．築城町・椎田町周辺の歴史的環境 …… 14

Ⅲ　安武・深田遺跡 …… 19

1．調査の概要 …… 19

(1)　遺跡の立地 …… 19

(2)　地区割り …… 20

(3)　遺構の概要 …… 20

(4)　層　　序 …… 21

(5)　谷地区流入口 …… 22

2．縄文時代の遺物 …… 25

3．弥生時代の遺構と遺物 …… 26

(1)　竪穴住居跡 …… 28

(2)　土　　壙 …… 54

(3)　貯 蔵 穴 …… 56

(4)　甕 棺 墓 …… 58

(5)　土 壙 墓 …… 59

(6)　柱 穴 群 …… 61

(7)　包含層出土の遺物 …… 63

(8)　谷地区出土の遺物 …… 68

4．古墳時代以降の遺構と遺物 …… 73
(1) 竪穴住居跡 …… 73

〔中巻〕

(2) 掘立柱建物跡 …… 173
(3) 土　　壙 …… 191
(4) 落ち込み …… 212
(5) 溝 …… 216
(6) 道路状遺構 …… 233
(7) 土 壙 墓 …… 233
(8) 柱　　穴 …… 234
(9) 杭　　列 …… 236
5．包含層および谷地区出土の遺物 …… 239
(1) 土　　器 …… 239
(2) 石　　器 …… 254
(3) 鉄　　器 …… 261
(4) 木　　簡 …… 261
(5) 木　　器 …… 263
6．おわりに …… 276
(1) 弥生時代の土器について …… 276
(2) 弥生時代の竪穴住居跡について …… 280
(3) 出土遺物について …… 282
(4) 古墳時代以降の竪穴住居跡について …… 285
(5) 掘立柱建物跡について …… 289
(6) その他の古墳時代以降の遺構について …… 290
(7) 古墳時代以降の出土遺物について …… 291
(8) 古墳時代以降の安武・深田遺跡 …… 292

Ⅳ　安武・土井の内遺跡 …… 293
1．調査の概要 …… 293
2．縄文時代の遺構と遺物 …… 294
(1) 陥 し 穴 …… 296
(2) P33 …… 309
3．弥生時代の遺構と遺物 …… 311
(1) 竪穴住居跡 …… 311
4．古墳時代以降の遺構と遺物 …… 314
(1) 竪穴住居跡 …… 314
(2) 掘立柱建物跡 …… 338
(3) 土　　壙 …… 342
(4) 溝 …… 345
(5) その他の遺構と遺物 …… 348
5．おわりに …… 349
(1) 縄文時代について …… 349
(2) 弥生・古墳時代について …… 351
Ⅴ　第5地点の調査 …… 353
1．調査の概要 …… 353
2．遺構と遺物 …… 353
Ⅵ　第3地点の調査 …… 357
1．調査の概要 …… 357
2．遺構と遺物 …… 360
3．おわりに …… 361
Ⅶ　自然科学系の調査 …… 363
1．安武・深田遺跡出土弥生・古墳期の鉄片・鉄製品の金属学的調査 …… 363
2．安武・深田遺跡出土木製遺物の樹種 …… 373

巻　頭　図　版　（上巻）

〔安武・深田遺跡〕

巻頭図版　1　　安武・深田遺跡航空写真（南東上空から）
巻頭図版　2　(1)　50号竪穴住居跡出土絵画土器
　　(2)　　同　　水鳥
巻頭図版　3　(1)　谷地区流入口付近（北から）
　　(2)　木　　簡
巻頭図版　4　(1)　2号貯蔵穴
　　(2)　谷地区16区槌の子群出土状況

図　版　目　次　（中巻）

〔自然科学系の調査　Ⅶ—1〕

本文対照頁

図　版　1　鉄片の顕微鏡組織 ……364
図　版　2　鉄器片の顕微鏡組織 ……364
図　版　3　安武・深田遺跡出土鉄片（FK25）片状黒鉛析出部の特性X線像（×1,000）…365
図　版　4　安武・深田遺跡出土鉄片（FK25-2）の特性X線像（×1,000）……365
図　版　5　安武・深田遺跡出土刀子（FK27）の特性X線像（×1,000）……370
図　版　6　安武・深田遺跡出土鉄鏃（FK30）中非金属介在物の特性X線像（×1,000）…371

〔自然科学系の調査　Ⅶ—2〕

図　版　1　木材顕微鏡写真　1 ……373
図　版　2　木材顕微鏡写真　2 ……373
図　版　3　木材顕微鏡写真　3 ……373
図　版　4　木材顕微鏡写真　4 ……373
図　版　5　木材顕微鏡写真　5 ……373

図 版 目 次 （下巻）

図 版 1　安武・深田遺跡全景（北から）…… 1
図 版 2 (1) 遺跡遠景（西から）…… 1
(2) 遺跡上空から椎田町方面を望む …… 1
図 版 3 (1) 遺跡上空から南を望む …… 10
(2) 安武・深田遺跡と土井の内遺跡（南東から）…… 10
図 版 4 (1) 遺跡全景（北から）…… 19
(2) 調査区中央から東半部全景（北から）…… 19
図 版 5 (1) 調査区西側全景（南東から）…… 19
(2) 谷地区区割りの状況（北東から）…… 20
図 版 6 (1) 谷地区西側の崖線（南西から）…… 20
(2) 基本土層堆積状況（26号溝北端）…… 21
図 版 7 (1) 谷地区流入口全景と9号土壙（北から）…… 22
(2) 流入口の護岸（北西から）…… 23
図 版 8 (1) 流入口断面の状況（北東から）…… 23
(2) 出土遺物 …… 24
図 版 9 (1) 縄文土器 …… 25
(2) 50・52・60号竪穴住居跡周辺（北から）…… 26
図 版 10 (1) 35号竪穴住居跡（北西から）…… 28
(2) 44号竪穴住居跡周辺（南東から）…… 30
(3) 炉跡（南西から）…… 30
図 版 11　35・44号竪穴住居跡出土土器 …… 31
図 版 12 (1) 50号竪穴住居跡垂直写真 …… 32
(2) 50号竪穴住居跡全景（東から） …… 32
図 版 13 (1) 炉跡と製鉄跡（東から）…… 33
(2) 炉跡と製鉄跡（調査完了，南から）…… 33
図 版 14　50号竪穴住居跡出土土器 …… 35
図 版 15 (1) 50号竪穴住居跡出土土器一括 …… 35
(2) 水鳥を描いた壺（No.25）…… 36
図 版 16 (1) 製鉄跡近景（南から）…… 38
(2) 出土鉄器と石器 …… 39

図　版　17　(1)　52号竪穴住居跡周辺（北西から）…… 41
(2)　52号竪穴住居跡全景（北東から）…… 41
図　版　18　(1)　出入口階段（北から）…… 42
(2)　出土遺物 …… 43
図　版　19　(1)　60号竪穴住居跡全景（北東から）…… 45
(2)　出土土器 …… 47
図　版　20　(1)　61号竪穴住居跡周辺（北から）…… 49
(2)　61号竪穴住居跡全景（南から）…… 49
図　版　21　(1)　61号竪穴住居炉跡（東から）…… 49
(2)　61・65号竪穴住居跡出土土器・石器 …… 50
(3)　69号竪穴住居炉跡（南東から）…… 51
図　版　22　(1)　74号竪穴住居跡周辺（北から）…… 52
(2)　74号竪穴住居跡全景（西から）…… 52
(3)　炉跡（西から）…… 53
図　版　23　(1)　74号竪穴住居跡出土土器 …… 54
(2)　52・60・69・74号竪穴住居跡出土石器 …… 54
図　版　24　(1)　6号土壙（南西から）…… 54
(2)　6号土壙出土土器 …… 54
(3)　7号土壙（南から）…… 55
図　版　25　(1)　2・1号貯蔵穴（南東から）…… 56
(2)　1号貯蔵穴（北西から）…… 56
(3)　1号貯蔵穴完掘後（南から）…… 56
図　版　26　(1)　2号貯蔵穴全景（西から）…… 57
(2)　2号貯蔵穴埋土（北東から）…… 57
(3)　出土杓子 …… 58
図　版　27　(1)　弥生時代墓地群（南東から）…… 58
(2)　甕棺墓（南東から）と甕棺 …… 58
図　版　28　(1)　1号土壙墓（南東から）…… 59
(2)　2号土壙墓（南東から）…… 60
(3)　3号土壙墓（南東から）…… 60
図　版　29　(1)　P727土器出土状況（南東から） …… 61
(2)　P727出土土器…… 62
(3)　胴上部のタタキと胴下半のケズリ …… 62

図　版　30　(1)　土壙・貯蔵穴・柱穴出土石器 …… 62
(2)　柱穴出土土器 …… 63
(3)　分銅形土製品 …… 66
図　版　31　(1)　3号溝下層・包含層出土土器 …… 63
(2)　包含層出土土器 …… 64
図　版　32　包含層・谷地区出土土器 …… 65
図　版　33　(1)　谷地区出土甕 1 …… 68
(2)　谷地区出土甕 2 …… 68
図　版　34　谷地区出土土器 …… 72
図　版　35　(1)　東側竪穴住居跡群（南から） …… 73
(2)　北東側竪穴住居跡群（西から） …… 73
図　版　36　(1)　調査区南東端（南西から） …… 75
(2)　1～3号竪穴住居跡（北東から） …… 75
図　版　37　(1)　2号竪穴住居跡（南西から） …… 75
(2)　3号竪穴住居跡（北西から） …… 77
(3)　1・2号竪穴住居跡出土砥石・土器 …… 77
図　版　38　2・3号竪穴住居跡出土土器 …… 77
図　版　39　3・4号竪穴住居跡出土土器 …… 80
図　版　40　(1)　4号竪穴住居跡（南東から） …… 80
(2)　5号竪穴住居跡（北西から）と出土土器 …… 81
図　版　41　(1)　6号竪穴住居跡（南東から） …… 85
(2)　7～10・12号竪穴住居跡（北東から） …… 85
図　版　42　(1)　9号竪穴住居跡（東から） …… 87
(2)　同カマド（東から） …… 87
図　版　43　(1)　9号竪穴住居跡遺物出土状況 …… 88
(2)　9号竪穴住居跡出土土器 1 …… 88
図　版　44　9号竪穴住居跡出土土器 2 …… 89
図　版　45　10号竪穴住居跡（東から）と出土土器 …… 91
図　版　46　(1)　11号竪穴住居跡（北西から） …… 94
(2)　12号竪穴住居跡カマド出土土器 …… 95
(3)　13号竪穴住居跡Ｐ3 …… 95
図　版　47　(1)　13号竪穴住居跡（南から） …… 95
(2)　同カマド（南から） …… 96

図　版　48　(1)　13号竪穴住居跡カマド復原状況 …… 96
　　(2)　出土土器 …… 97
図　版　49　(1)　竪穴住居跡・溝出土鉄器・耳環 …… 97
　　(2)　13号竪穴住居跡出土遺物 …… 99
図　版　50　(1)　14～18号竪穴住居跡（南東から）……101
　　(2)　14号竪穴住居跡（南東から）……101
図　版　51　(1)　14号竪穴住居跡カマド（南東から）……101
　　(2)　出土土器 ……103
図　版　52　(1)　15号竪穴住居跡（南から）……103
　　(2)　16号竪穴住居跡（南から）と出土土器 ……103
図　版　53　(1)　18号竪穴住居跡（東から）……105
　　(2)　同カマド（東から）と出土土器 ……105
図　版　54　(1)　19号竪穴住居跡（南東から）……106
　　(2)　同カマド（南東から）……106
図　版　55　　19号竪穴住居跡出土土器 ……108
図　版　56　　遺跡南半竪穴住居跡群全景（北東から）……112
図　版　57　(1)　22号竪穴住居跡（南東から）とカマド ……112
　　(2)　24号竪穴住居跡出土土器 ……113
　　(3)　25号竪穴住居跡出土土器 ……115
図　版　58　(1)　28号竪穴住居跡と谷地区流入口（北から）……117
　　(2)　29号竪穴住居跡出土土器 ……119
　　(3)　32号竪穴住居跡（南から）と出土勾玉 ……120
図　版　59　(1)　36・44・45・51号竪穴住居跡周辺（西から）……121
　　(2)　36号竪穴住居跡（南東から）……123
図　版　60　(1)　37・52号竪穴住居跡（東から）……124
　　(2)　37号竪穴住居跡（南から）……124
図　版　61　　37号竪穴住居跡のカマドと遺物出土状況 ……125
図　版　62　　37号竪穴住居跡出土遺物　1 ……125
図　版　63　(1)　37号竪穴住居跡出土遺物　2 ……129
　　(2)　38号竪穴住居跡（南東から）……130
図　版　64　(1)　39号竪穴住居跡（北東から）……132
　　(2)　40号竪穴住居跡（南東から）……133
図　版　65　　41号竪穴住居跡（北東から）とカマド・出土土器 ……133

図　版　66　(1)　42号竪穴住居跡（南から）……137
(2)　43号竪穴住居跡（南から）と出土遺物 ……137
図　版　67　(1)　45・51号竪穴住居跡垂直写真 ……138
(2)　46～48号竪穴住居跡（西から）と46号竪穴住居跡出土土器 ……141
図　版　68　(1)　47号竪穴住居跡カマド（南東から）……141
(2)　48号竪穴住居跡カマド（南東から）……143
図　版　69　(1)　51・53号竪穴住居跡出土土器 ……146
(2)　54号竪穴住居跡（南から）と出土土器 ……146
(3)　55号竪穴住居跡（南から）……150
図　版　70　(1)　56号竪穴住居跡（南東から）……150
(2)　55・57号竪穴住居跡（南西から）と57号竪穴住居跡出土土器 ……152
図　版　71　58号竪穴住居跡（南東から）とカマド・出土遺物 ……152
図　版　72　(1)　59号竪穴住居跡（南東から）……154
(2)　62号竪穴住居跡（南西から）……154
図　版　73　(1)　64号竪穴住居跡（南東から）とＰ１・Ｐ３ ……157
(2)　66号竪穴住居跡（南から）……158
図　版　74　(1)　67～80号竪穴住居跡全景（西から）……158
(2)　67号竪穴住居跡（南から）……159
図　版　75　(1)　67号竪穴住居跡カマド・Ｐ１・出土遺物 ……159
(2)　68号竪穴住居跡（南から）……160
図　版　76　(1)　71号竪穴住居跡周辺全景（北から）……162
(2)　73・75号竪穴住居跡周辺全景（北西から）……164
図　版　77　(1)　71号竪穴住居跡（南西から）と出土遺物 ……162
(2)　72号竪穴住居跡（南から）……162
図　版　78　73号竪穴住居跡（南東から）とカマド・出土遺物 ……164
図　版　79　(1)　75号竪穴住居跡と22号掘立柱建物跡（南東から）……165
(2)　75号竪穴住居跡カマド ……165
図　版　80　(1)　76号竪穴住居跡周辺全景（南東から）……165
(2)　76号竪穴住居跡（南東から）……166
図　版　81　(1)　78～80号竪穴住居跡（西から）……167
(2)　79号竪穴住居跡（南から）と出土土器 ……168
図　版　82　(1)　80号竪穴住居跡（南から）……169
(2)　同遺物出土状況 ……169

図　版　83　(1)　80号竪穴住居跡カマド（南から）……169
　　(2)　同支脚の甕出土状況 ……169
図　版　84　　80号竪穴住居跡遺物出土状況と出土土器 ……171
図　版　85　(1)　3号掘立柱建物跡（南東から）……175
　　(2)　7号掘立柱建物跡（北西から）……177
図　版　86　　10～16号掘立柱建物跡周辺全景（北から）……179
図　版　87　(1)　10号掘立柱建物跡と53号竪穴住居跡（南東から）……179
　　(2)　10号掘立柱建物跡Ｐ７土層断面（南西から）……179
図　版　88　(1)　11号掘立柱建物跡（南東から）……179
　　(2)　12号掘立柱建物跡（南東から）……180
図　版　89　(1)　13号掘立柱建物跡（南東から）……180
　　(2)　15号掘立柱建物跡（南東から）……182
図　版　90　(1)　14号掘立柱建物跡（東から） ……182
　　(2)　14号掘立柱建物跡Ｐ２土層断面（南から）……182
図　版　91　(1)　16号掘立柱建物跡（南東から）……182
　　(2)　17号掘立柱建物跡（南東から）……182
図　版　92　(1)　18号掘立柱建物跡（南から）……183
　　(2)　20号掘立柱建物跡（南から）……186
図　版　93　(1)　19号掘立柱建物跡と73号竪穴住居跡（西から）……183
　　(2)　19号掘立柱建物跡（南東から）……183
図　版　94　(1)　21号掘立柱建物跡（南から）……186
　　(2)　23号掘立柱建物跡（北西から）……186
図　版　95　(1)　25号掘立柱建物跡（北西から）……187
　　(2)　26号掘立柱建物跡（南東から）……188
図　版　96　(1)　27号掘立柱建物跡（北西から）……188
　　(2)　28号掘立柱建物跡（北西から）……188
図　版　97　　29～32号掘立柱建物跡（南東から）……189
図　版　98　(1)　29～31号掘立柱建物跡（南から）……189
　　(2)　32号掘立柱建物跡（南から）……190
図　版　99　(1)　5号土壙土層断面（南西から）……194
　　(2)　9号土壙（南東から）……196
　　(3)　5・9号土壙出土土器・木器 ……196
図　版　100　(1)　11号土壙（北東から） ……197

(2) 11号土壙（北西から）……197
図版 101 11号土壙出土土器・木器……200
図版 102 (1) 12号土壙（南から）……203
(2) 12号土壙出土土器・木器および13号土壙出土土器……203
図版 103 (1) 15号土壙（南東から）……206
(2) 16号土壙（北東から）……207
図版 104 (1) 17号土壙（上は南西から，下は西から）……207
(2) 20号土壙（南西から）……209
図版 105 23号土壙（上は土層断面で北西，中は遺物出土状況で南東，下は完掘状況で南東から）…210
図版 106 (1) 23号土壙遺物出土状況（北から）……210
(2) 23号土壙出土土器……212
図版 107 (1) 24号土壙（北西から）……212
(2) 25号土壙（南から）……212
図版 108 (1) 1号落ち込み（東から）……212
(2) 1号落ち込み出土土器……213
(3) 2号落ち込み出土土器・石製紡錘車……215
図版 109 (1) 2号落ち込み（北東から）……215
(2) 2号落ち込み遺物出土状況（北から）……215
図版 110 (1) 1号溝（東から）……216
(2) 1号溝（北東から）……216
(3) 5号溝土層断面（南東から）……218
図版 111 (1) 3号溝土層断面（左は南から，右は南東から）……217
(2) 2号溝出土土器および3号溝出土土器・石鍋……217
図版 112 谷地区東半と14・15号溝（北東から）……223
図版 113 (1) 11号溝（西から）……221
(2) 11号溝出土土器……221
(3) 14号溝土層断面（南西から）……223
図版 114 (1) 14号溝出土土器……223
(2) 22号溝（東から）……226
図版 115 26・28号溝（北西から）……227
図版 116 (1) 26号溝土層断面（北西から）……227
(2) 26号溝上層遺物出土状況……228
(3) 26号溝出土土器……228

図　版　117　(1)　26号溝遺物出土状況……227
(2)　26号溝出土土器・台石……229
図　版　118　(1)　26・28号溝（西から）……232
(2)　28号溝土層断面および遺物出土状況（南西から）……232
(3)　28号溝出土土器……232
図　版　119　道路状遺構（北東から）……233
図　版　120　4号土壙墓（上は土層断面で南東，中は小木片出土状況で西，下は完掘状況で南西から）……233
図　版　121　(1)　各種柱穴……234
(2)　柱穴出土土器……235
図　版　122　(1)　1号杭列出土状況（左は東，右は北から）……236
(2)　1号杭列出土杭……236
図　版　123　(1)　2号杭列出土状況（南から）……236
(2)　3号杭列出土状況（南西から）……236
(3)　2号杭列出土杭……236
図　版　124　谷地区全景（北東から）……239
図　版　125　(1)　谷地区1～8区全景（北東から）……239
(2)　谷地区29～36区全景（南西から）……239
図　版　126　谷地区遺物出土状況……239
図　版　127　(1)　谷地区18区貝ブロック出土状況……239
(2)　谷地区18区獣骨出土状況……239
図　版　128　谷地区出土土器　1……239
図　版　129　谷地区出土土器　2……241
図　版　130　谷地区出土土器　3……245
図　版　131　谷地区出土土器　4……245
図　版　132　墨書土器……250
図　版　133　(1)　谷地区出土埴輪・瓦……251
(2)　谷地区出土製塩土器……251
(3)　谷地区出土製塩土器の布目圧痕……251
(4)　谷地区出土鉄器……261
図　版　134　(1)　谷地区出土石庖丁……254
(2)　谷地区出土石斧……254
(3)　包含層出土石斧……254
(4)　谷地区および包含層出土石器……254

図　版　135　　木　　簡……261
図　版　136　(1)　谷地区16区槌の子群出土状況……263
　　(2)　谷地区16区槌の子群周辺出土木器・土器……264
図　版　137　　谷地区出土木器　1 ……264
図　版　138　　谷地区出土木器　2 ……266
図　版　139　　谷地区出土木器　3 ……266
図　版　140　　谷地区出土木器　4 ……269
図　版　141　　谷地区出土木器　5 ……269
図　版　142　　谷地区出土木器　6 ……275
図　版　143　　谷地区出土木器　7 ……276

〔安武・土井の内遺跡〕

図　版　1　　安武・土井の内遺跡遠景（南東から，手前は安武・深田遺跡） ……293
図　版　2　(1)　安武・土井の内遺跡全景（西から）……293
　　(2)　安武・土井の内遺跡全景（東から）……293
図　版　3　(1)　安武・土井の内遺跡中央部（南東から）……293
　　(2)　安武・土井の内遺跡北半全景（南から）……293
図　版　4　(1)　1・9・10号竪穴住居跡（南東から）……293
　　(2)　遺跡西半全景（東から）……293
図　版　5　(1)　遺跡南半全景（北東から）……293
　　(2)　1・2号溝およびその周辺 ……293
図　版　6　(1)　遺跡南端部全景（北東から）……293
　　(2)　12・15・26号土壙（東から）……295
図　版　7　(1)　6号土壙（南東から）……296
　　(2)　7号土壙（西から）……296
図　版　8　(1)　8号土壙（南から）……296
　　(2)　9号土壙（北東から）……296
図　版　9　(1)　10号土壙（南から）……296
　　(2)　11号土壙（東から）……296
図　版　10　(1)　12号土壙土層断面（北東から）……300
　　(2)　12号土壙（南東から）……300
図　版　11　(1)　14号土壙（南東から）……300

(2) 15号土壙（南東から）……300
図版 12 (1) 16号土壙（南東から）……300
(2) 17号土壙（南西から）……300
図版 13 (1) 18号土壙（東から）……300
(2) 20号土壙（南東から）……303
図版 14 (1) 21号土壙（東から）……303
(2) 22号土壙（東から）……303
図版 15 (1) 23号土壙（東から）……303
(2) 24号土壙（北西から）……303
図版 16 (1) 25号土壙（南西から）……303
(2) 26号土壙（東から）……303
図版 17 (1) 27号土壙（東から）……308
(2) 28号土壙（西から）……308
図版 18 (1) 29号土壙（北東から）……308
(2) 30号土壙（北西から）……308
図版 19 (1) P33（南から）……309
(2) P33出土打製石斧 ……310
図版 20 (1) 3号竪穴住居跡（東から）……311
(2) 3号竪穴住居跡（南から）……311
図版 21 (1) 3号竪穴住居跡遺物出土状況 ……311
(2) 3号竪穴住居跡出土遺物 ……312
図版 22 (1) 1号竪穴住居跡（南東から）……314
(2) 1号竪穴住居跡カマド周辺の遺物出土状況 ……314
図版 23 (1) 1号竪穴住居跡カマド東側遺物出土状況 ……316
(2) 1号竪穴住居跡カマド ……316
図版 24 (1) 2号竪穴住居跡（南東から）……320
(2) 2号竪穴住居跡カマド ……320
図版 25 (1) 4号竪穴住居跡（東から）……320
(2) 4号竪穴住居跡カマド ……320
図版 26 (1) 5号竪穴住居跡（南東から）……324
(2) 5号竪穴住居跡遺物出土状況 ……324
図版 27 (1) 6号竪穴住居跡（南西から）……326
(2) 6号竪穴住居跡カマド 1……326

図　版　28　(1)　6号竪穴住居跡カマド　2……326
(2)　6号竪穴住居跡遺物出土状況……327
図　版　29　(1)　7号竪穴住居跡（南西から）……329
(2)　7号竪穴住居跡カマド……329
図　版　30　(1)　8号竪穴住居跡（南東から）……329
(2)　8号竪穴住居跡カマド……329
図　版　31　(1)　9号竪穴住居跡（南東から）……334
(2)　9号竪穴住居跡カマド……334
図　版　32　(1)　10号竪穴住居跡（東から）……334
(2)　10号竪穴住居跡カマド……335
図　版　33　(1)　10号竪穴住居跡遺物出土状況　1……335
(2)　10号竪穴住居跡遺物出土状況　2……335
図　版　34　(1)　2号掘立柱建物跡（南東から）……338
(2)　3号掘立柱建物跡（南東から）……338
図　版　35　(1)　4号掘立柱建物跡（東から）……338
(2)　6号掘立柱建物跡（南東から）……342
図　版　36　(1)　1号土壙（南東から）……342
(2)　3号土壙（北から）……342
図　版　37　(1)　4号土壙（北東から）……345
(2)　同礫除去後……345
図　版　38　(1)　5号土壙（南東から）……345
(2)　同礫除去後……345
図　版　39　(1)　1号溝土層断面（南西から）……345
(2)　2号溝土層断面（南東から）……347
図　版　40　1号竪穴住居跡出土土器　1……314
図　版　41　1号竪穴住居跡出土土器　2……314
図　版　42　1・4・5号竪穴住居跡出土土器……320
図　版　43　6号竪穴住居跡出土土器・石器……326
図　版　44　10号竪穴住居跡・1～3号土壙・P32出土土器……334

挿 図 目 次 (上巻)

〔安武・深田遺跡〕

第 1 図　10号線椎田バイパス路線図 (1/400,000)……2
第 2 図　表土剝ぎ……4
第 3 図　雪の中での調査風景……4
第 4 図　谷地区の調査風景……4
第 5 図　気球写真による撮影……5
第 6 図　水鳥出土状況……5
第 7 図　文化財調査の安全パトロール……5
第 8 図　水没する遺跡の復旧作業……5
第 9 図　写真撮影のための清掃風景……6
第 10 図　小学生谷地区を掘る……6
第 11 図　こげなもんがでたぁ!……6
第 12 図　安武・土井の内遺跡調査風景……7
第 13 図　安武鎮守様の夏祭り……7
第 14 図　城井川上流の英彦山をのぞむ……10
第 15 図　北へのびる山地 (椎田町方面をのぞむ)……10
第 16 図　周辺遺跡分布図 (1/50,000行橋・蓑島・田川・中津)……折り込み
第 17 図　海岸へ迫る山地 (豊前市松江付近)……11
第 18 図　豊前近海の海産物……11
第 19 図　築城町に広がる扇状地……12
第 20 図　谷底平野……12
第 21 図　椎田バイパスの路線と地形……13
第 22 図　天徳寺　宇都宮鎮房の墓……19
第 23 図　谷地区区割り図 (1/1,200)……20
第 24 図　安武・深田遺跡地形図 (1/2,000)……折り込み
第 25 図　基本土層図 (1/30)……21
第 26 図　谷地区中央横断・36区北端土層図 (1/80)……22
第 27 図　谷地区流入口実測図 (1/200, 1/40)……23
第 28 図　谷地区流入口出土土器・土製品実測図 (1/3)……24

第 29 図　縄文土器拓影 (1/3)……25
第 30 図　弥生時代遺構配置図 (1/1,600)……26
第 31 図　35・44号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……27
第 32 図　35号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4) ……29
第 33 図　35号竪穴住居跡出土砥石実測図 (1/3)……30
第 34 図　44号竪穴住居炉跡土層図 (1/20) ……30
第 35 図　44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)……31
第 36 図　44号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)……31
第 37 図　50号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……32
第 38 図　50号竪穴住居炉跡・製鉄跡実測図 (1/20) ……33
第 39 図　水鳥出土状況実測図 (1/10) ……34
第 40 図　50号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4)……35
第 41 図　50号竪穴住居跡出土絵画土器(25)拓影 (1/2)……36
第 42 図　50号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)……37
第 43 図　50号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/3, 1 は1/2) ……38
第 44 図　50号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)……39
第 45 図　小玉実測図 (1/1)……41
第 46 図　52号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……42
第 47 図　出入口部の階段……43
第 48 図　52号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4)……43
第 49 図　52号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)……44
第 50 図　52号竪穴住居跡出土砥石実測図 (1/3)……44
第 51 図　52号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)……44
第 52 図　60号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……45
第 53 図　60号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)……46
第 54 図　60号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/3, 1 は1/2) ……47
第 55 図　61号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……48
第 56 図　61号竪穴住居炉跡実測図 (1/20) ……49
第 57 図　61・65・69号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)……50
第 58 図　65・69号竪穴住居跡実測図 (1/60, 1/30) ……50
第 59 図　61・69・74号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/3, 1 は1/6) ……51
第 60 図　74号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……52
第 61 図　74号竪穴住居炉跡実測図 (1/30) ……53

第 62 図　74号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)……54
第 63 図　6・7号土壙実測図 (1/30) ……55
第 64 図　6号土壙出土土器実測図 (1/4)……55
第 65 図　6号土壙出土石器実測図 (1/3)……55
第 66 図　1・2号貯蔵穴実測図 (1/30) ……56
第 67 図　1・2号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)……57
第 68 図　2号貯蔵穴出土石斧実測図 (1/3)……57
第 69 図　2号貯蔵穴の埋土……57
第 70 図　2号貯蔵穴出土杓子実測図 (1/4)……58
第 71 図　1号甕棺墓実測図 (1/20) ……59
第 72 図　1号甕棺埋置状態……59
第 73 図　1号甕棺墓出土土器実測図 (1/4)……60
第 74 図　1～3号土壙墓実測図 (1/30) ……61
第 75 図　P727実測図 (1/20)……62
第 76 図　柱穴出土弥生土器実測図 (1/4)……62
第 77 図　柱穴出土石器実測図 (1/3)……63
第 78 図　3号溝下層一括出土土器実測図 (1/4)……63
第 79 図　包含層出土土器実測図1 (1/4)……65
第 80 図　包含層出土土器実測図2 (1/4)……66
第 81 図　包含層出土分銅形土製品実測図 (1/2)……66
第 82 図　谷地区出土弥生土器実測図1 (1/4)……67
第 83 図　谷地区出土弥生土器実測図2 (1/6)……68
第 84 図　谷地区出土弥生土器実測図3 (1/4)……69
第 85 図　谷地区出土弥生土器実測図4 (1/4)……70
第 86 図　谷地区出土弥生土器実測図5 (1/4)……71
第 87 図　古墳時代竪穴住居跡配置図 (1/1,600)……73
第 88 図　1～3号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……74
第 89 図　1・2号竪穴住居跡出土土器・石器実測図 (1/3)……76
第 90 図　2号竪穴住居跡出土耳環実測図 (1/2)……77
第 91 図　3号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/4)……78
第 92 図　3号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)……79
第 93 図　4・5号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……81
第 94 図　4・5号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/4)……82

第 95 図　5 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……83
第 96 図　4 ・ 5 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3)……83
第 97 図　6 ・ 8 ・ 9 号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……84
第 98 図　6 号竪穴住居跡出土石皿実測図 (1/4)……85
第 99 図　7 ・12号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……86
第 100 図　7 ・ 8 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)……86
第 101 図　9 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……87
第 102 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)……88
第 103 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)……89
第 104 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3)……90
第 105 図　10号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……91
第 106 図　10号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……92
第 107 図　10～12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3, 118は1/4)……93
第 108 図　11号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……94
第 109 図　12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)……95
第 110 図　13号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) ……95
第 111 図　13号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……96
第 112 図　13号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)……97
第 113 図　13号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)……98
第 114 図　13号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3)……99
第 115 図　13号竪穴住居跡出土砥石実測図 (1/4) ……100
第 116 図　13号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2) ……100
第 117 図　14・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)……101
第 118 図　14号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) ……102
第 119 図　14号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)……103
第 120 図　16～18号竪穴住居跡実測図 (1/60)……104
第 121 図　15～18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) ……105
第 122 図　18号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)……105
第 123 図　19号竪穴住居跡実測図 (1/60)……106
第 124 図　19号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)……106
第 125 図　19号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3) ……107
第 126 図　19号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4) ……108
第 127 図　19号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3) ……109

第128図　20号竪穴住居跡実測図（1/60）……110
第129図　21号竪穴住居跡実測図（1/60）……111
第130図　22号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60，1/30）……112
第131図　23号竪穴住居跡実測図（1/60）……112
第132図　20～27号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……113
第133図　24・25・27号竪穴住居跡実測図（1/60）……114
第134図　26・28～30号竪穴住居跡実測図（1/60）……116
第135図　28号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……117
第136図　29号竪穴住居跡出土土器・石器実測図（1/3）……118
第137図　32号竪穴住居跡出土勾玉実測図（1/2）……120
第138図　31～34・36号竪穴住居跡実測図（1/60）……121
第139図　30～32・36号竪穴住居跡出土土器・石器実測図（1/3，285は1/4）……122
第140図　37号竪穴住居跡実測図（1/60）……124
第141図　37号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……125
第142図　37号竪穴住居跡出土土器実測図1（1/3）……126
第143図　37号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/4）……127
第144図　37号竪穴住居跡出土土器実測図3（1/3）……128
第145図　37号竪穴住居跡出土土器・石器実測図4（1/3）……129
第146図　37号竪穴住居跡出土土器実測図5（1/4）……130
第147図　37号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）……131
第148図　38・40号竪穴住居跡実測図（1/60）……131
第149図　39号竪穴住居跡実測図（1/60）……132
第150図　39号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……132
第151図　39・40号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3，372は1/4）……133
第152図　41号竪穴住居跡実測図（1/60）……134
第153図　41号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……134
第154図　41号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……135
第155図　42・45号竪穴住居跡実測図（1/60）……136
第156図　43号竪穴住居跡実測図（1/60）……137
第157図　43号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……138
第158図　42・43号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……139
第159図　45・46号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3，411・412は1/4）……140
第160図　46号竪穴住居跡実測図（1/60）……141

第 161 図　46号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……141
第 162 図　47～49号竪穴住居跡実測図（1/60）……142
第 163 図　47・49・51号竪穴住居跡出土土器・石器実測図（1/3，419は1/4）……144
第 164 図　51・53号竪穴住居跡実測図（1/60）……145
第 165 図　51号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）……146
第 166 図　54・55号竪穴住居跡実測図（1/60）……147
第 167 図　53～56号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……148
第 168 図　56・59号竪穴住居跡実測図（1/60）……149
第 169 図　57号竪穴住居跡実測図（1/60）……151
第 170 図　57号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……151
第 171 図　58号竪穴住居跡実測図（1/60）……152
第 172 図　58号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……153
第 173 図　59号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）……154
第 174 図　59・62～64号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……155
第 175 図　62・63・67号竪穴住居跡実測図（1/60）……156
第 176 図　64・66号竪穴住居跡実測図（1/60）……157
第 177 図　67号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……158
第 178 図　68号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60，1/30）……159
第 179 図　66～68号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3，511・512は1/4）……160
第 180 図　71・72号竪穴住居跡実測図（1/60）……161
第 181 図　71号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）……162
第 182 図　73・75号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60，1/30）……163
第 183 図　71・73・76・79号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……164
第 184 図　76・77号竪穴住居跡実測図（1/60）……166
第 185 図　78・79号竪穴住居跡実測図（1/60）……167
第 186 図　80号竪穴住居跡実測図（1/60）……168
第 187 図　80号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……169
第 188 図　80号竪穴住居跡出土土器実測図 1（1/3）……170
第 189 図　80号竪穴住居跡出土土器実測図 2（1/4）……171
第 190 図　カマド内の支脚甕……171
第 191 図　盛土工事と調査風景……172
第 192 図　安武・深田遺跡のその後（築城インターチェンジ，西から）……172

挿 図 目 次 （中巻）

〔安武・深田遺跡〕

第193図　古墳時代掘立柱建物跡・土壙等配置図（1/1,600）……173
第194図　1～4号掘立柱建物跡実測図（1/60）……174
第195図　5・6号掘立柱建物跡実測図（1/60）……176
第196図　7・8号掘立柱建物跡実測図（1/60）……177
第197図　9・11・12号掘立柱建物跡実測図（1/60）……178
第198図　10号掘立柱建物跡実測図（1/60）……179
第199図　13・14号掘立柱建物跡実測図（1/60）……180
第200図　15・16号掘立柱建物跡実測図（1/60）……181
第201図　14号掘立柱建物跡Ｐ2土層図（1/20）……182
第202図　17号掘立柱建物跡実測図（1/60）……182
第203図　18号掘立柱建物跡実測図（1/60）……183
第204図　掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）……183
第205図　19・22号掘立柱建物跡実測図（1/60）……184
第206図　20・21号掘立柱建物跡実測図（1/60）……185
第207図　23・24・26号掘立柱建物跡実測図（1/60）……187
第208図　25号掘立柱建物跡実測図（1/60）……188
第209図　27・28号掘立柱建物跡実測図（1/60）……189
第210図　29～31号掘立柱建物跡実測図（1/60）……190
第211図　32号掘立柱建物跡実測図（1/60）……191
第212図　1・3・4号土壙実測図（1/30）……192
第213図　3～5号土壙出土土器実測図（1/3）……193
第214図　5号土壙実測図（1/30）……194
第215図　9号土壙実測図（1/60）……195
第216図　9号土壙出土土器実測図（1/3，35は1/4）……196
第217図　9号土壙出土木器実測図（1/4）……197
第218図　11・14号土壙実測図（1/30，1/60）……198
第219図　11号土壙出土土器実測図1（1/3）……199
第220図　11号土壙出土土器実測図2（1/4）……200

第221図　11号土壙出土木器実測図（1/4）……201
第222図　11・12号土壙出土木器実測図（1/8）……202
第223図　12・13号土壙出土土器実測図（1/3）……204
第224図　15・16・18号土壙実測図（1/30）……205
第225図　17号土壙実測図（1/60，1/30）……206
第226図　18・19・21・22号土壙出土土器・石器実測図（1/3）……207
第227図　19・20・22・24号土壙実測図（1/30）……208
第228図　21・25号土壙実測図（1/60）……209
第229図　23号土壙実測図（1/30）……210
第230図　23号土壙出土土器実測図（1/3，90は1/4）……211
第231図　1号落ち込み実測図（1/80）……213
第232図　1・2号落ち込み出土土器・石器実測図（1/3，17は1/4）……214
第233図　2号落ち込み実測図（1/60）……215
第234図　1・3～6号溝土層図（1/30）……217
第235図　1・4～6号溝出土土器実測図（1/3）……218
第236図　2・3号溝出土土器・石器実測図（1/3，26は1/4）……219
第237図　6号溝出土鉄器実測図（1/2）……220
第238図　11・14・16・19・23号溝土層図（1/30）……221
第239図　11号溝出土土器実測図（1/3）……221
第240図　14・15号溝出土土器実測図（1/3）……222
第241図　16～25号溝出土土器実測図（1/3）……224
第242図　26・28号溝土層図（1/30）……226
第243図　26号溝出土土器実測図1（1/3）……228
第244図　26号溝出土土器実測図2（1/3，90は1/6）……229
第245図　26号溝出土鉄器実測図（1/2）……229
第246図　26号溝出土土器実測図3（1/4）……230
第247図　28号溝出土土器・石器実測図（1/3）……231
第248図　道路状遺構実測図（1/80）……233
第249図　4号土壙墓実測図（1/30）……234
第250図　柱穴出土土器・石器実測図（1/3）……235
第251図　1号杭列実測図（1/20）……236
第252図　1号杭列出土木器実測図（1/8）……237
第253図　2号杭列実測図（1/30）……238

第 254 図　1 号杭列断面 ……238
第 255 図　3 号杭列実測図 (1/30)……238
第 256 図　谷地区出土土器実測図 1 (1/3) ……240
第 257 図　谷地区出土土器実測図 2 (1/3) ……241
第 258 図　谷地区出土土器実測図 3 (1/4) ……242
第 259 図　谷地区出土土器実測図 4 (1/3) ……243
第 260 図　谷地区出土土器実測図 5 (1/3) ……244
第 261 図　谷地区出土土器実測図 6 (1/3) ……246
第 262 図　谷地区出土土器実測図 7 (1/3) ……247
第 263 図　谷地区出土土器実測図 8 (1/4) ……248
第 264 図　谷地区出土土器実測図 9 (1/4) ……250
第 265 図　墨書土器実測図 (1/3) ……251
第 266 図　谷地区出土製塩土器実測図 (1/3) ……252
第 267 図　谷地区出土製塩土器拓影 (1/3) ……252
第 268 図　谷地区出土埴輪実測図 (1/3) ……253
第 269 図　谷地区出土瓦実測図 (1/3) ……253
第 270 図　谷地区出土陶磁器実測図 (1/3) ……253
第 271 図　包含層出土石器実測図 1 (1/3, 5 は1/2)……254
第 272 図　包含層出土石器実測図 2 (1/3, 13・14は1/2)……255
第 273 図　包含層出土石器実測図 3 (1/2) ……256
第 274 図　谷地区出土石器実測図 1 (1/3) ……257
第 275 図　谷地区出土石器実測図 2 (1/3, 40～42は1/2)……258
第 276 図　谷地区出土石器実測図 3 (1/3) ……259
第 277 図　谷地区出土鉄器実測図 (1/2) ……260
第 278 図　木簡実測図 (1/3) ……262
第 279 図　谷地区槌の子群出土状況実測図 (1/20)……264
第 280 図　谷地区槌の子群付近出土土器実測図 (1/3, 4 は1/4)……264
第 281 図　谷地区槌の子群付近出土木器実測図 (1/4) ……265
第 282 図　谷地区出土木器実測図 1 (1/2) ……266
第 283 図　谷地区出土木器実測図 2 (1/20)……266
第 284 図　谷地区出土木器実測図 3 (1/4) ……267
第 285 図　谷地区出土木器実測図 4 (1/4) ……268
第 286 図　谷地区出土木器実測図 5 (1/6) ……270

第287図　谷地区出土木器実測図6（1/6）……271
第288図　谷地区出土木器実測図7（1/6）……272
第289図　谷地区出土木器実測図8（1/4）……273
第290図　谷地区出土木器実測図9（1/4）……274
第291図　谷地区出土木器実測図10（1/10）……275
第292図　谷地区出土木器実測図11（1/4）……276
第293図　弥生時代竪穴住居跡（1/320）……281
第294図　苅田町法正寺・木ノ坪遺跡出土凹線文土器（1/4）……282
第295図　古墳時代以降の遺構変遷図（1/1,600）……285

〔安武・土井の内遺跡〕

第1図　安武・土井の内遺跡調査風景……293
第2図　安武・土井の内遺跡地形図（1/2,000）……294
第3図　縄文時代遺構配置図（1/600）……295
第4図　6・7号土壙実測図（1/30）……297
第5図　8・9号土壙実測図（1/30）……298
第6図　10～12号土壙実測図（1/30）……299
第7図　14・15号土壙実測図（1/30）……301
第8図　16～18号土壙実測図（1/30）……302
第9図　20～22号土壙実測図（1/30）……304
第10図　23・24号土壙実測図（1/30）……305
第11図　25～27号土壙実測図（1/30）……306
第12図　28・29号土壙実測図（1/30）……307
第13図　30号土壙実測図（1/30）……308
第14図　P33実測図（1/20）……309
第15図　P33打製石斧出土状況（北から）……310
第16図　P33出土石器実測図（1/3）……311
第17図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）……311
第18図　3号竪穴住居跡出土砥石実測図（1/3）……312
第19図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……312
第20図　弥生・古墳時代遺構配置図（1/600）……313
第21図　1・4号竪穴住居跡実測図（1/60）……315

第 22 図　1 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)……316
第 23 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3) ……317
第 24 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4) ……318
第 25 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3) ……319
第 26 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図 4 (1/4) ……320
第 27 図　2 号竪穴住居跡実測図 (1/60)……321
第 28 図　2 ・ 4 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)……322
第 29 図　2 ・ 4 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) ……323
第 30 図　5 号竪穴住居跡実測図 (1/60)……324
第 31 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4) ……325
第 32 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3) ……326
第 33 図　6 号竪穴住居跡出土砥石実測図 (1/3) ……326
第 34 図　6 ・ 7 号竪穴住居跡実測図 (1/60)……327
第 35 図　6 ・ 7 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)……328
第 36 図　6 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3) ……329
第 37 図　6 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4) ……330
第 38 図　6 号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3) ……331
第 39 図　8 ・ 9 号竪穴住居跡実測図 (1/60)……332
第 40 図　8 ・10号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)……333
第 41 図　7 ～ 9 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) ……334
第 42 図　10号竪穴住居跡実測図 (1/60)……335
第 43 図　10号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3) ……336
第 44 図　10号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3, 122は1/4) ……337
第 45 図　1 ・ 2 ・ 4 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)……339
第 46 図　3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)……340
第 47 図　5 ・ 6 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)……341
第 48 図　2 ・ 6 号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3) ……342
第 49 図　1 ・ 3 号土壙実測図 (1/30)……343
第 50 図　1 号土壙出土土器実測図 (1/3, 1 は1/4)……344
第 51 図　2 ・ 3 号土壙出土土器実測図 (1/3) ……344
第 52 図　2 号土壙実測図 (1/30)……345
第 53 図　4 ・ 5 号土壙実測図 (1/20)……346
第 54 図　1 号溝土層図 (1/20)……347

第 55 図　2 号溝土層図 (1/20)……347
第 56 図　1・2 号溝出土土器実測図 (1/3) ……347
第 57 図　柱穴 (1～6)・包含層出土土器実測図 (1/3)……348

〔第 5 地点〕

第 1 図　遺跡付近地形図 (1/2,000) ……354
第 2 図　遺構全体図 (1/300) ……355
第 3 図　双子池から遺跡をのぞむ ……356
第 4 図　調査区東側全景 ……356
第 5 図　調査区西側全景 ……356

〔第 3 地点〕

第 1 図　遺跡付近地形図 (1/2,000) ……357
第 2 図　遺構配置図 (1/500) ……358
第 3 図　1～4 号土壙実測図 (1/30)……359
第 4 図　4 号土壙と調査区北半全景 ……362
第 5 図　調査区南半全景 ……362

付　図　目　次

〔安武・深田遺跡〕

付　図　　安武・深田遺跡遺構配置図 (1/400)

〔安武・土井の内遺跡〕

付　図　　安武・土井の内遺跡遺構配置図 (1/300)

表　目　次

〔安武・深田遺跡〕

表　1　10号線椎田バイパス関係遺跡一覧表 …… 3
表　2　周辺遺跡一覧表 …… 14
表　3　弥生時代竪穴住居跡一覧表 ……281
表　4　古墳時代以降竪穴住居跡一覧表 ……286
表　5　掘立柱建物跡一覧表 ……289

〔安武・土井の内遺跡〕

表　1　古墳時代竪穴住居跡一覧表 ……352
表　2　掘立柱建物跡一覧表 ……352

〔自然科学系の調査　Ⅶ—１〕

表　1　供試材の履歴と調査項目 ……364
表　2　安武・深田遺跡出土鉄片（FK-25）のねずみ鋳鉄部のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 …… 366
表　3　安武・深田遺跡出土鉄片（FK25-2）の鉄素地のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 …… 367
表　4　安武・深田遺跡出土刀子片（FK27）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 …… 368
表　5　安武・深田遺跡出土鉄鏃中（FK30）非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 …… 369

〔自然科学系の調査　Ⅶ—２〕

表　1　出土木製遺物 …… 374
表　2　同　定　表 …… 374

I はじめに

北九州市を起点とする国道10号線は，九州の東海岸沿いに鹿児島市へ通ずる大動脈である。特に，大分市との間は活発な文化・経済活動に伴い交通体制の整備が急務となっていた。北大道路の計画はそうした状況から計画されたもので，苅田拡幅工事，行橋バイパス，椎田バイパス，豊前バイパス，中津バイパス，宇佐別府道路と結んでいく。このうち椎田バイパス（正式には一般国道10号線椎田バイパス）は，行橋市辻垣から豊前市船入までの間16.2kmであるが，京都郡豊津町徳永と築上郡椎田町上の河内間10.3kmについては、一般有料道路として日本道路公団が建設する。

文化財の発掘調査については，昭和61年５月１日より開始し，26ヶ所が対象となったが，遺構の存在しなかった４ヶ所を除いた22地点を実施し，平成元年12月20日をもって完了している。

平成２年度については，豊津町に所在する第２－Ａ地点（砦見遺跡），第２－Ｄ地点（下原遺跡），第２－Ｅ地点，第２－Ｆ地点（カワラケ田遺跡），築城町に所在する第３地点，第５地点，第６－Ａ地点（安武・土井の内遺跡），第６－Ｂ地点（安武・深田遺跡）および，椎田町の第８地点（広末・安永遺跡）についての出土遺物の整理作業を，文化課甘木事務所・同太宰府事務所・九州歴史資料館で行ない，その報告書３冊（第３～５集）を公刊した。

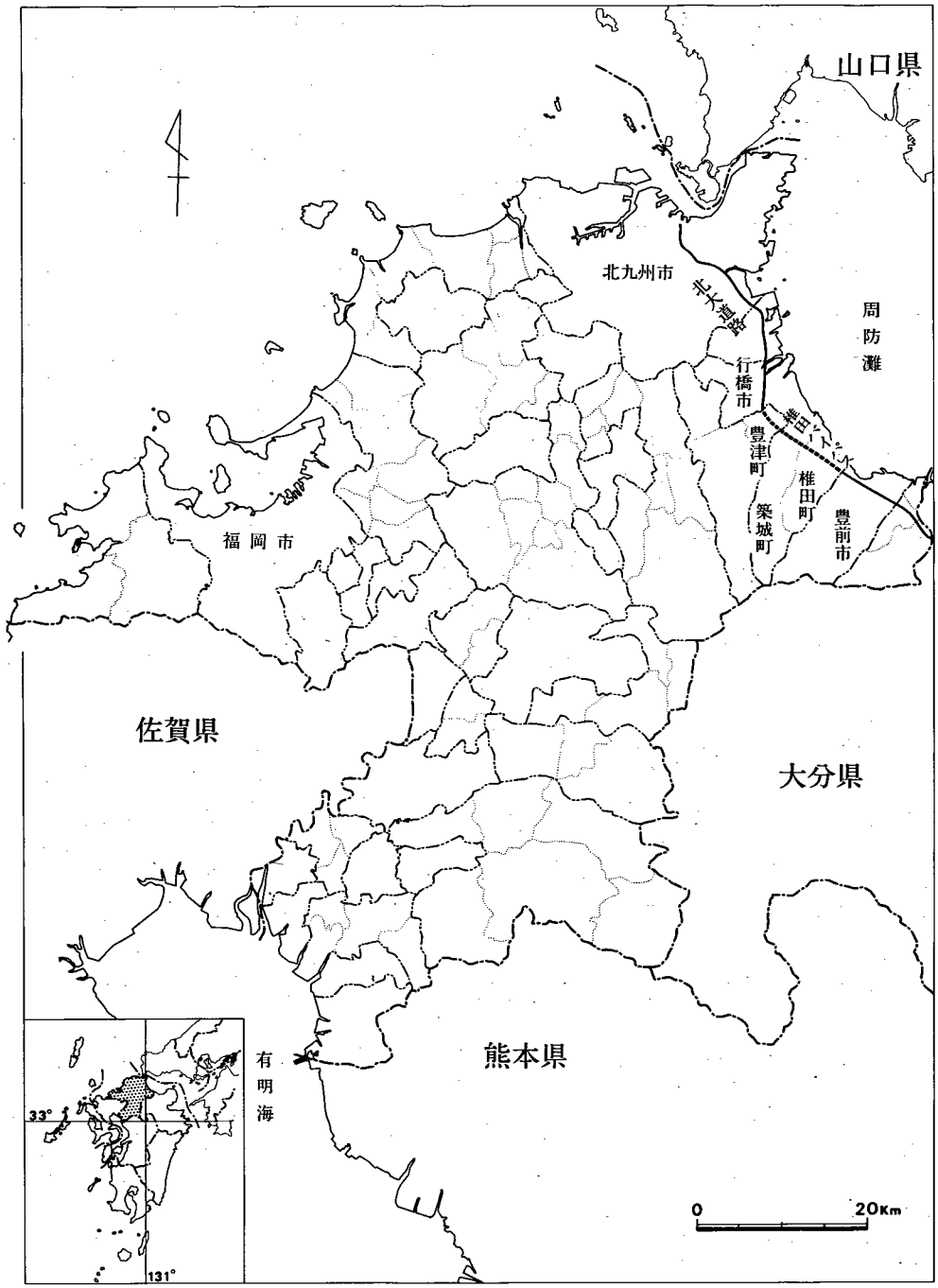
１．調査の経過

城井川以北の築上郡築城町に所在する４遺跡の調査は，昭和63年度と平成元年度に実施した。調査内容・期間・面積等については下記の通りであるが，安武・土井の内遺跡，安武・深田遺跡については，用地未買収や建設工事の着工に伴う調査の分断があり，体制としては満足のいくものでなかった。

地　点	遺　跡　名	所　在　地	調　査　期　間	面積(㎡)	内　　容
3		築城町大字船迫	平１　５月24日～５月31日	4,683	古墳，土壙
5		〃　安武	昭63 10月15日～11月14日	4,547	柱穴群
6－A	安武・土井の内遺跡	〃　安武	平１　２月３日～３月31日 平１　７月25日～８月26日 平１　11月13日～12月20日	5,300	縄文，陥し穴 弥生，集落 古墳，集落
6－B	安武・深田遺跡	〃　安武	昭63 11月４日～64年３月31日 平１　４月６日～７月22日 平１　８月29日～11月22日	22,000	弥生～奈良，集落・墓地

安武・深田遺跡

築城インターチェンジ建設に伴う調査で，一時的な中断はあるものの，約１ヶ年間の調査となった。調査区域内には未買収地・水路・生活用道路等の物件があり，それらの付け変え工事，



第 1 図　10号線椎田バイパス路線図（1/400,000）

表1　10号線椎田バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積(㎡)	調査地区と面積				備考	報告書
					61年度(㎡)	62	63	平1		
1	神手遺跡	豊津町徳永	弥生・古墳集落，墓地	1,200	試掘(1,200)	1,000				
2-A	皆見遺跡	〃 皆見	弥生・古墳・奈良集落	9,600	試掘	9,600				
2-B	八ツ重遺跡	〃 〃	〃	11,000	〃	11,000			豊津町委託	1集
2-C	弓田遺跡	〃 下原	〃	3,300	〃	3,300			〃	1集
2-D	下原遺跡	〃 〃	〃	2,000	〃	2,000				3集
2-E		〃 〃	〃		〃	2,000				3集
2-F	カワラケ田遺跡	〃 皆見	〃	3,000	〃	2,900				3集
3		築城町船迫	土壙	4,683				4,683		4集
4		〃 〃			試掘(3,600)				遺構なし	
5		〃 安武	弥生散布地	4,547	試掘		4,547			4集
6-A	安武・土井の内遺跡	〃 〃	縄文・弥生・古墳集落	5,300	〃		800	4,500		4集
6-B	安武・深田遺跡	〃 〃	弥生・古墳集落，墓地	22,000	〃		11,000	11,000		4集
7-A	塞ノ神遺跡	〃 赤幡	中世石積	450	〃			450		
7-B	赤幡・森ヶ坪遺跡	〃 〃	古墳～平安集落	20,800	〃		2,000	18,800		
7-C	赤幡・十双遺跡	〃 赤幡・広末	弥生・古墳集落	9,500	〃		7,500	2,000		
8	広末・安永遺跡	〃 広末	〃	5,900	〃		4,900	1,000		5集
9	広幡城遺跡	〃 水原	弥生・中・近世城跡	13,800	〃		13,800			
10	山崎遺跡	椎田町水原	縄文・奈良集落	7,200	7,200					
11	尾久保屋敷遺跡	〃 〃	古墳集落	160	160					
13	寺尾遺跡	〃 日奈古	〃	5,800	5,800					
16		〃 山本			試掘				遺構なし	
18		〃 上り松			〃				遺構なし	
21	石堂中後ヶ谷古墳群	〃 石堂	古墳墓地	19,500	19,500					2集
22	菜切古墳群	〃 福間	〃	11,000	11,000					2集
23	頭無古墳群	〃 山添	〃	15,000	15,000					2集
24		〃 石堂				442			遺構なし	
			計	175,740	(4,800) 58,660	32,242	44,547	42,433		

土工盛土工事との関連から工事工程に準じた調査工程を道路公団工務課と綿密に協議し，対応した。また，調査区の西側を横断する谷地区の調査では，雨のために全域がたびたび冠水するという悪条件が重なり，長時間を費やさざるを得なかった。以下，日誌をたどって調査の経過を追ってみたい。

昭和63年

11月４日(金)　重機にて表土の除去を開始。

11月15日(火)　テントの設営，器材の搬入。

11月22日(火)　県道側より遺構検出にかかる。

12月１日(木)　１～３号住居跡の調査。

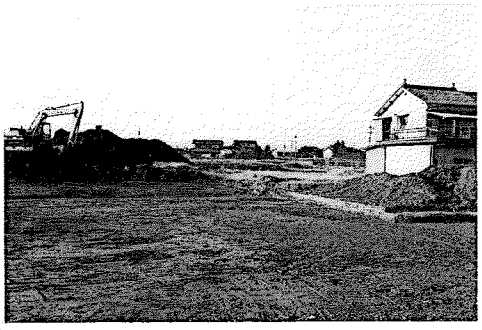
12月８日(木)　県道沿いの全景写真。

12月13日(火)　５～10号住居跡の調査。いずれもカマドを付設する住居。

12月16日(金)　大雪のため作業中止。

12月19日(月)　曇とあまり条件には恵まれなかったが，ヘリコプターにて10号線椎田バイパス関係の遺跡を空撮。

12月23日(金)　３号溝西側の下底部より，弥生時代の土器が纏まって出土し，遺構の存在も予想された。



第２図　表土剝ぎ

昭和64年・平成元年

１月７日(土)　昭和天皇崩御

１月８日(日)　改元して「平成」となる。

１月10日(火)　15～17号住居跡，１～３号土壙の調査。

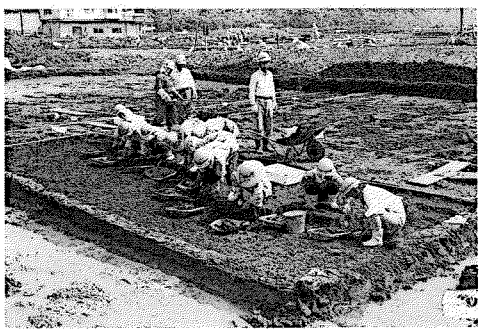
第３図　雪の中での調査風景

２月１日(水)　安武・土井の内遺跡の調査に並行して入る。

２月３日(木)　32号住居跡より勾玉出土。

２月14日(火)　谷地区南端部の調査に入る。上層では奈良時代頃の須恵器が出土。

２月22日(水)　谷部の南端で，幅２ｍほどの水路を検出し，流入口と名付ける。谷の下層に堆積する砂層から，弥生時代中期後半～後期の土器が集中して出土し，丹塗り土器も目立つ。



第４図　谷地区の調査風景

3月1日(水)　気球により，全体写真撮影。

3月14日(火)　弥生時代の35号住居跡，6・7号土壙の調査。6号土壙は井戸のようだ。

3月31日(木)　14号溝を完掘。

4月6日(木)　平成元年度の調査を開始。

4月8日(土)　谷35区より木簡出土し，築城駅などとの関連が注意されだす。

4月17日(月)　44・50号住居跡の調査。50号住居跡では鉄器・鉄製品の出土が目立つ。

5月8日(月)　50号住居跡より「鳥」を刻んだ絵画土器出土。また，炉の西側より鉄鋌と焼土面の拡がる落ち込みがあり，製鉄跡と判明。本日は安全パトロールがあり，本庁より視察。

5月18日(木)　50号住居跡の南側に甕棺1，土壙墓2を検出。

5月23日(火)　谷地区中央部の調査に入る。

6月5日(月)　雨のため，各種図面の整理作業。

6月7日(水)　谷地区の粘土層では，各種の加工材が出土する。

6月20日(火)　谷地区23～26区を完掘し写真撮影。

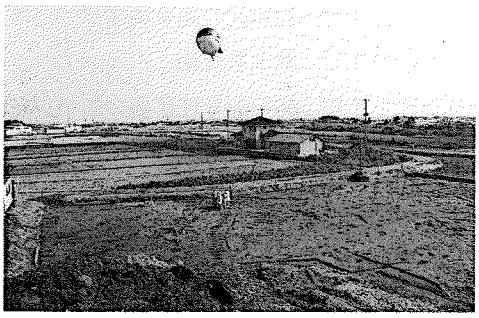
6月21日(水)　長雨により，調査区域を縦断する水路が決壊し，遺跡水没する。周辺の水田所有者から苦情が出，復旧作業に追われる。

6月29日(木)　調査区北東の気球写真。

7月11日(火)　64・65号住居跡の調査。昨日，本日と築城小・下城井小学校の生徒の見学会。

7月12日(水)　午前中は築城町文化財協議会を主体とした町民説明会を行ない,午後は築城小学校5年生と寒田小学校生徒による現地見学があり，谷地区の調査を体験してもらう。遺物を掘りあげる度に，あちこちで歓声があがる。

7月15日(土)　谷地区で2基の貯蔵穴を確認。2号貯蔵穴より杓子出土。



第5図　気球写真による撮影

第6図　水鳥出土状況

第7図　文化財調査の安全パトロール

第8図　水没する遺跡の復旧作業

7月22日(土)　谷地区の調査終了。

8月29日(火)　調査を再開。

9月4日(月)　66～69号住居跡の調査。69号住居跡は炉のみしか判らない。

9月14日(木)　26号溝は深さ1m近くに達し，古墳時代終末頃の土器が多く出土。

9月19日(火)　台風22号接近のため作業中止。ここ一週間ほど雨が続き，排水に追われる。

10月3日(火)　69～75号住居跡の調査。弥生時代の74号住居跡はその大部分が67号住居跡の下にあったが，円形プランである事が判明。

10月19日(木)　調査区の北東端について遺構を検出。住居跡・建物跡が重複しているらしい。

10月26日(木)　気球写真の撮影。75号住居跡周辺の下層の調査をしたが，縄文土器等は出土しなかった。

11月13日(月)　78～80号住居跡の実測図作成。

11月22日(木)　図面を点検し，本日にて深田遺跡

第 9 図　写真撮影のための清掃風景

第 10 図　小学生谷地区を掘る

第 11 図　こげなもんがでたぁ！

の調査終了。

安武・土井の内遺跡

工事工程との関係で，昭和63年度・平成元年度にまたがり，３回に分けて実施した。

平成元年

２月３日(金)　東側の町道付け変え工事に伴い，東側調査区の一部を先行して調査に入る。

２月６日(火)　１・２号住居跡の調査。２軒とも調査区域外へのびるが，未解決の用地のため次年度へ繰り越す。

２月８日(木)　１号建物跡の調査。

２月15日(木)　各遺構の実測。

７月25日(木)　調査区を南北に貫く現水路の西側より調査を再開。

７月29日(土)　１号溝は上層より陶器が出土。

７月31日(月)　同志社大学森浩一先生来跡。１号溝は３・４号住居を切っている。

８月２日(水)　台風12号の影響により天候不安定。現水路よりの漏水のため現場水没する。

８月７日(月)　３号住居跡は，ベットを持つ弥生時代後期後半の住居跡で，遺物も良く遺存。

８月12日(土)　盆休みのため現場の整理。

８月18日(金)　気球写真をとる。

８月21日(月)　各遺構の実測図作成。

８月26日(火)　平板測量も終了し，安武・深田遺跡に再度もどる。

11月13日(月)　調査区東半の遺構検出に入る。

11月16日(木)　P33とした遺構より，縄文時代と考えられる打製石斧２点が出土する。

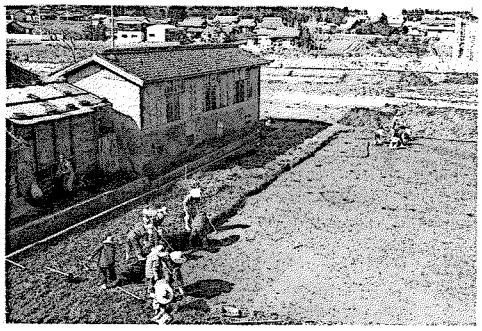
11月21日(火)　７～９号住居跡の調査。８・９号土壙を掘り上る。遺物は出土しないが形態から縄文時代の陥し穴と推測された。

11月23日(木)　４～６号建物跡の調査。建物は住居跡の間を埋めるように位置する。

12月５日(火)　陥し穴と考えられる土壙群が，地山と若干色調を異にした埋土で見つかり出す。

12月13日(水)　土壙群の実測に追われる。

12月15日(金)　全景写真。



第 12 図　安武・土井の内遺跡調査風景

第 13 図　安武鎮守様の夏祭り

12月19日(火)　器材・図面を点検し，撤収。

12月21日(木)　豊前事務所を閉鎖し，10号線関係の調査を完了する。

調査関係者は下記の通りである。

日本道路公団福岡建設局

局　　長	杉田　美昭（前任）	臼井　　信	
次　　長	吉岡　康行（前任）	進　　哲美	
総務部長	安元　富次（前任）	進　　哲美（前任）	堀　　義任
管理課長	副島　紀昭		
管理課長代理	三野　徳博（前任）	荒木　恒久	

日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所　　長	山田　将博（前任）	大島　　勲	
副所長（事務）	佐藤健一郎		
副所長（技術）	坂牧　嵩三（前任）	国本　忠敬	
庶務課長	樫川　敏博		
用地課長	二神　鉄男（前任）	益岡　政夫	
工務課長	佐々木俊治（前任）	飯田　文夫	
築城工事区工事長	山口　宗雄		
椎田工事区工事長	黒田　義樹		

福岡県教育委員会

総　括

教 育 長	竹井　　宏（前任）	御手洗　康	
教育次長	大鶴　英雄（前任）	淵上　雄幸	
指導第二部長	大平　岩男（前任）	月森清三郎	
指導第二部参事	葉石　　勳（兼任）		
文化課長	葉石　　勳（前任）	六本木聖久	
文化課課長補佐	平　　聖峰（前任）	安野　義勝	
文化課課長技術補佐	宮小路賀宏（前任）	石松　好雄	
文化課参事補佐	柳田　康雄		
同	井上　裕弘		

庶務・管理

文化課庶務係長	池原　脩二		
文化課主任主事	沢田　俊夫		

調　査

文化課調査班総括　柳田　康雄（兼任）
同　総括補佐　井上　裕弘（兼任）
同　技術主査　木下　修（調査担当）
同　技術主査　中間　研志（現福岡教育事務所）
同　主任技師　伊崎　俊秋（現京築教育事務所）
同　主任技師　飛野　博文（調査担当）
同　技　師　小田　和利（現主任技師）
同　技　師　水ノ江和同（調査担当）
同　文化財専門員　木村幾多郎（現大分市立歴史資料館長）
同　文化財専門員　日高　正幸
調査補助員　高田　一弘
調査補助員　武田　光正（現遠賀町教育委員会）

発掘作業員（築城町・椎田町）

杉野　政一　田中　義毅　竹本　進　川本　英紀　竹本　妙子　竹本スマ子　西本　房子
吉元アヤ子　有吉マリ子　吉元キヨミ　吉元テルヨ　元島サツ子　繁永マリ子　繁永ナミ子
繁永みすえ　吉元ユキ子　白石マサ子　吉元　和子　繁永アイ子　藤澤　美澄　繁永　忍
有永ヤエノ　繁永トヨ子　則松美千代　大沢　年子　新　めぐみ　内藤ツヤ子　小野シメ子
山崎かよ子　中村レイ子　川本　房子　吉井テズ子　柴原ヒトミ　原　テル子　池永　京子
吉元　満枝　白石ヨシ子　城戸トミ子　長尾　洋子　久本　英子　海津　恵子　田原ふじ子
鎌田つる代　森　仲美　谷口　知子　白石　竜二　北代　直樹　井上　明　田口マリ子
平川ヒトエ　永田　友見　中村千代子　林　一二三　安成　英之　高橋　康人　長尾　洋子
大田サエ子　永野　孝子　池永　なみ　池永さだ子　井上キクエ　大田キヨ子　水上八重子

その他，京築教育事務所，県立求菩提資料館，築城町教育委員会，前田・丸磯共同企業体，築上郡文化財協議会，地元安武区，国立博物館対策室には種々御配慮いただいた。

また，福岡県文化財保護指導委員の濱島三司・宮本工・川本義継・一川淳江氏をはじめ，松下辰章・石野博信・小田富士雄・森浩一・藤丸詔八郎・飯田昭・大尾勝美・百留隆男・高橋章・相原孝行・森重高岑・大木本法通・重松敏美・多田寛・長嶺正秀（苅田町教育委員会）・末永弥義（豊津町教育委員会）・丹羽博（豊前市教育委員会）・吉元保美（築城町教育委員会）・永尾勝重・末永栄一・白石善次郎（安武区長）・合羅謙治・棚町信康・菅野瀰栄子・横山康子・榎憲一郎・野中五郎・小川秀樹・副島邦弘・緒方泉・奥村千恵子・桑本亜子・友清光子・平石史子・小島佐枝子・西奇子・中塩屋リツ子・藤井カオル・石井紀美子の諸氏・諸兄には現場ならびに報告書作成において御教示・御助力をいただいた。記して感謝の意を表します。

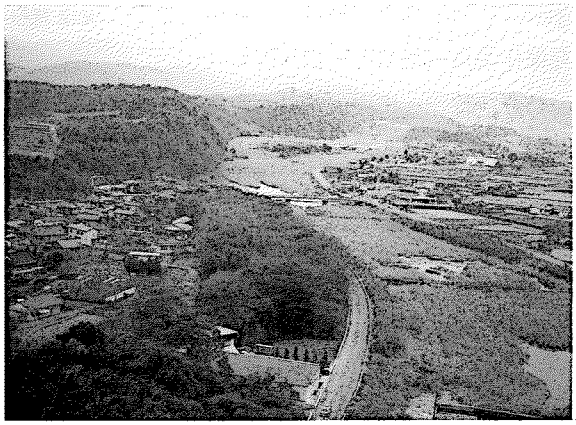
II　位置と環境

1．築城町・椎田町周辺の地理的環境

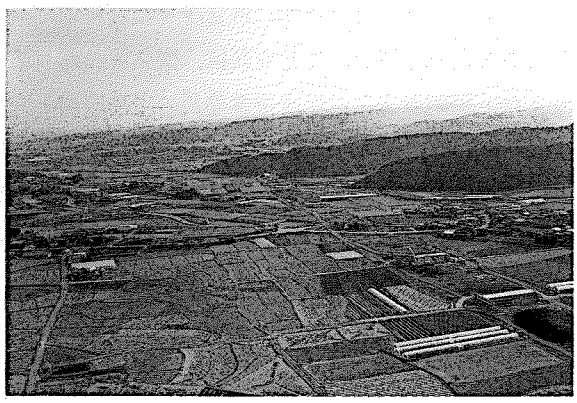
福岡県北東部のうち，周防灘に面する京都・豊前地方については，近年，圃場整備事業を始めとする開発行為の進捗に伴い，文化財の調査例もしだいに増加しつつある。今回の10号線建設に先立つ文化財の調査は，当地域に巨大な試掘溝を入れたのと同じ事でもあり，従来，台地上及びその周囲に限定されていた遺跡の立地を見直す結果となった。ここでは，周辺の地形を山地・河川・台地と低地（扇状地・谷底平野・自然堤防）・海岸に分類して地形の概略を記し，そこに立地する遺跡についても若干触れたい（註1）。

山　地

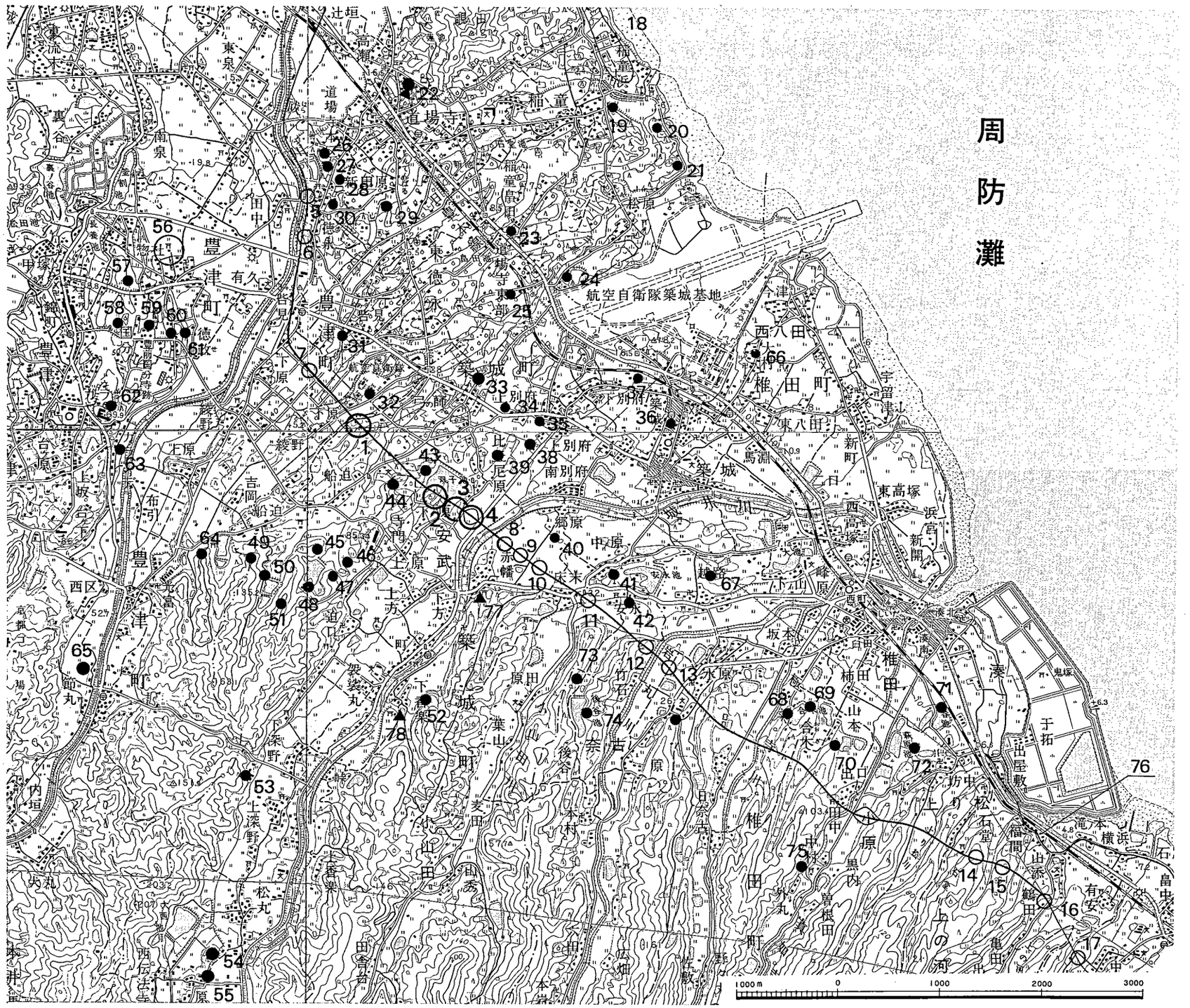
英彦山（標高1,200m）から犬ヶ岳（1,130m）・経読岳（992m）・雁股山（807m）から大分県八面山（408m）と東西へ連なる英彦山山系は，九州中部に発達する火山地形の北端部に位置し，南側の地域と分水嶺をなす。熔岩山地として輝石安山岩質を基盤とし，そこから周防灘に向って急激に低下する放射線状の稜線は，海岸間近まで迫り陸路交通の障害ともなっている。犬ヶ岳を中心とする山岳地帯にはツクシシャクナゲが自生し，国の天然記念物として指定され，5月には薄ピンク色の花が山々を染める。犬ヶ岳の北側に位置する求菩提山及び英彦山は古代修験の山として多大な信仰を集め，豊富な遺物や修験場が山中に多く遺っている。一方，山頂から周防灘へのびる山地は，豊前市で15km，築城町付近では20kmに達し，その端部を見れば，豊前市八屋で海岸まで3km，築城町で3～4kmと近く，実に椎田町・豊前市境の豊前松江で



第 14 図　城井川上流の英彦山をのぞむ



第 15 図　北へのびる山地（椎田町方面をのぞむ）



第 16 図　周辺遺跡分布図（1/50,000 行橋・蓑島・田川・中津）

は100ｍに未たず，直接海岸に没していると言っても良い。従って，当地域は海岸に沿った狭い沖積地に人々の営なみが集約され，海の幸・山の幸に依存する食生活が近年までも息づいている（註２）。

この山地は軟らかい凝灰岩ないし凝灰角礫岩から形成される。河川はその谷麓を浸食し，河岸に洞穴を築き，大分県境の山国川や，椎田町真如寺川左岸の小原（75）では洞穴遺跡として縄文人の居住地となる（註３）。古墳時代においては，豊前市から椎田町にかけて横穴を穿ち墓地（合木横穴群68，小原横穴群70）に利用される。又，台地上では火箱古墳群(44)，石堂中後ヶ谷古墳群（14）等の群集墳や宇都宮氏の築いた中世山城である広幡城（12）等々が分布するが，同時に弥生時代前期末の住居跡・貯蔵穴が検出されることにも注意を払っておきたい。

河　川

行橋平野を形成する今川と，大分県中津平野を形成する山国川の一級河川もこの山地を水源とするが，この両河川以外にも多くの中小河川がみられる。第16図の周辺遺跡分布図では北より祓川・音無川・城井川・小山田川・岩丸川・極楽寺川・真如寺川・上り松川・石堂川・上の河内川・角田川といった11河川の名を上げられる。この間約10kmほどであり，各河川間の距離は僅か１km未満しか無い。つまり，山地の尾根がいかに狭く，また，開拓が進んでいるかが判る。これらの河川は，城井川の全長22kmが最長と英彦山系を水源としているため非常に短く，かつ，急峻である。流域面積が狭いため僅かな流量しか保有しない。一方，周防灘沿岸は瀬戸内性気候に属し，年中温暖であるが，年間降水量は県下でも最少の1,500mm以下しかない。従って，慢性的な水不足地域でもあり，上水道の確保に困難をきたしている。近世以降，山麓部付近には灌漑用ため池が多く築かれているのを見る。角田川中流の畑冷泉では，凝灰岩

第 17 図　海岸へ迫る山地（豊前市松江付近）

第 18 図　豊前近海の海産物

中の伏流水として一年中涸れることのない清水が湧き出，豊前市三名水として指定されている。

台　地

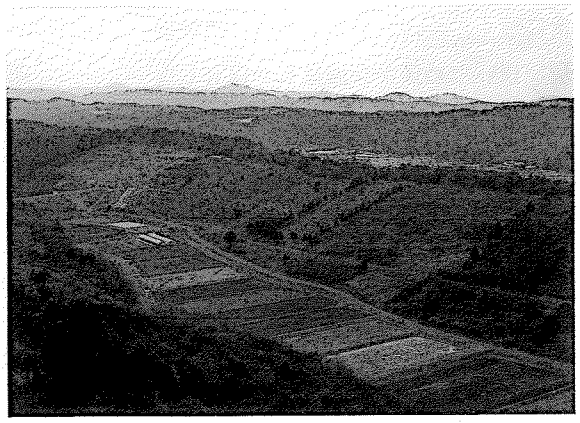
山地に別れを告げると，山麓から海岸近くまでに３つの洪積台地がある(註４)。北から，音無川と城井川間にある築城原は，築城町赤幡橋付近から始まり，途中に谷を取り込み断続的に下別府あたりまで広がる。標高は35～10ｍで，台地上には第５地点（２），安武・土井の内遺跡（３），別府遺跡（34）等の古墳時代の集落が知られる。城井川と岩丸川間は越路原と呼ばれ，標高は30～10ｍである。築城町広末あたりから椎田町越路にかけて広がり，台地上には弥生時代中期初頭の集落と終末期の古墳が検出された広末・安永遺跡（11），横井塚古墳群・安永古墳群（41・42）が立地する。岩丸川と真如寺川の間に広がるのが椎田原で，椎田町水原あたりから10号線に達し，直に海岸に至る。標高40～５ｍほどで，鞍部に多くのため池の分布を見る。谷池東遺跡（71）では先土器時代の細石核が採集され，出口遺跡（72）は縄文時代の集落跡である。

この地域の低地とした地形には，扇状地・谷底平野・自然堤防・沖積地が見られる。

扇状地

各河川は山麓の緩斜面に至り，上流の凝灰岩質の谷麓を浸食し，運搬してきた土砂を堆積しだし，河川の長短により大小の扇状地を形成する。扇状地はそのまま海岸まで達し，築城町・椎田町の市街地はいずれもこの扇端部に位置している（註５)。従来はこの扇状地に立地する遺跡は椎田町水原の石町遺跡(註６)が唯一知られる程度であった。しかし，今回の椎田バイパス建設に伴う築城町赤幡の森ヶ坪遺跡（９），十双遺跡（10）の調査により，弥生時代後期から古墳時代・奈良時代の一大集落が発見され，また，豊前市中村の石丸遺跡（17）は角田川左岸に縄文時代集落遺跡が検出されるなど，当地域の扇状地イコール氾濫原といった遺跡立地の捉え方を修正せざるを得ない。しかし遺跡内は河原石が全面を覆うといった状況は共通している。

第 19 図　築城町に広がる扇状地



第 20 図　谷底平野

谷底平野

各河川に沿っては谷底平野と呼ばれる流域の山地を侵食した細長い平野（沖積地）が発達する。この平野は上流に向っても中流域と同じぐらいの幅を持ち，集落を形成する。特に城井川・祓川ではそれが著しい。この谷底平野は各谷々で独立した生活圏を持っており，築城町赤幡の赤幡神楽（77），寒田山霊神社の寒田神楽，袈裟丸清地神社の円座餅搗行事（78）といった県指定の無形民俗文化財があり，祓川最上流の犀川町帆柱には天保十（1839）年の普請帳を持つ直屋農家である永沼家住宅が残り，国指定建造物に指定されている。

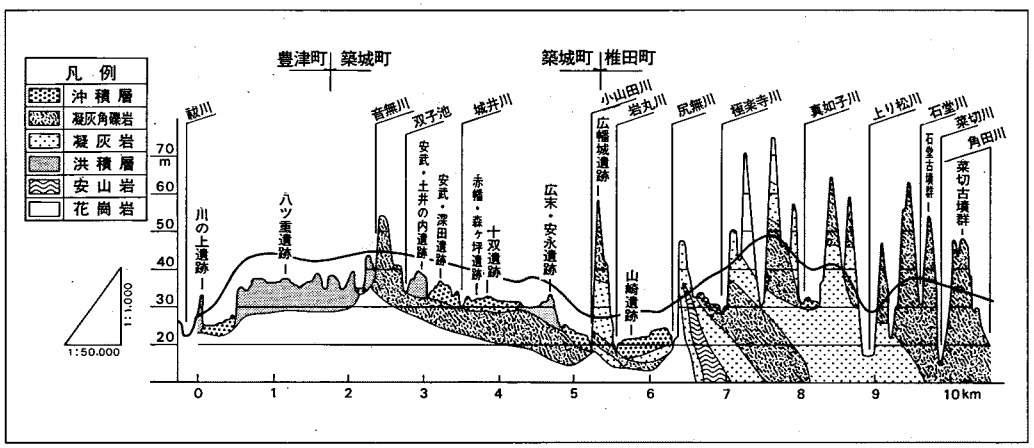
自然堤防

今川・山国川では当然ではあるが，中河川である祓川・城井川でも自然堤防が見られる。城井川左岸中流域の県道寒田下別府線はその堤防上を走っている。今回報告する安武・深田遺跡（4）はここに立地する。祓川右岸の弥生時代終末の墳丘墓が発見された豊津町徳永・川の上遺跡（6）は河岸段丘上の遺跡である。

海岸と砂丘

椎田町から豊前市にかけての海岸線は埋め立てられ，干拓地ないし工業団地となっているが，これは豊前海が遠浅であることによる。また，椎田町浜宮八幡宮から北側にかけては砂丘が良く残っている。この椎田町から豊前を抜け宇佐に至る道は奈良時代頃から開かれた官道として，椎田町石堂から石原の海岸沿いを通っており（76），北は豊津町豊前国府（56）に寄り，大宰府へと通じていた。

第21図は椎田バイパスの路線について，地山断面と路面高，および堆積物を表示した図である（道路公団原図）。築城町以北では洪積台地と沖積地が，花崗岩で構成される台地上にのり，椎田町以南では凝灰岩質の狭い山地が，河川の侵食を受け深い谷を形成している事が良く理解できる。



第 21 図　椎田バイパスの路線と地形

2．築城町・椎田町周辺の歴史的環境

築城は，古くは740年（天正12）藤原広嗣の乱に築城郡擬少領佐伯豊石が官軍に降伏したとする記述がその名を見せる最古のもので，「和名抄」には豊前国豆伊岐とあって，綾幡・桑田・槇木・大野の4郷に分けられる。また，「延喜式」には築城駅がおかれ，駅馬五疋を置くとされ，古代は政治的基盤が整備された地域として知られる。歴史的にこの地域を概観してみよう。

表2　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	内容	福岡県文化財番号
1	**第3地点**	築城町船迫	古墳	土壙	
2	**第5地点**	〃 安武		散布地	
3	**安武・土井の内遺跡**	〃 〃	縄文～古墳	陥し穴・住居跡・建物跡	950084
4	**安武・深田遺跡**	〃 〃	弥生～中世	住居跡・甕棺・土壙墓・建物跡・木筒・木器	950083
5	居屋敷遺跡	豊津町徳永	古墳	窯跡・横穴墓	
6	徳永・川の上遺跡	〃 〃	縄文～古墳	陥し穴・墳丘墓・土壙墓・住居跡・古墳	
7	八ツ重遺跡	〃 呰見	弥生・平安	住居跡・井戸	
8	塞の神遺跡	築城町赤幡	中世	石積	
9	赤幡・森ヶ坪遺跡	〃 〃	古墳～奈良	住居跡・建物跡・瓦	
10	十双遺跡	〃 赤幡・広末	弥生・古墳	住居跡・建物跡	
11	広末・安永遺跡	〃 広末	弥生・古墳	住居跡・古墳	
12	広幡城遺跡	椎田町水原	弥生・中世	住居跡・貯蔵穴・宇都宮氏出城	
13	石町遺跡	〃 〃	縄文	住居跡	
14	石堂中後ヶ谷古墳群	〃 石堂	古墳	円墳・横穴式石室	
15	菜切古墳群	〃 福間	古墳	〃	
16	頭無古墳群	〃 山添	古墳	〃	
17	中村・石丸遺跡	豊前市中村	縄文	住居跡	
18	稲童古墳群	行橋市稲童	古墳	円墳	140323
19	上迫横穴	〃 〃	〃	横穴	140334
20	豊後塚古墳群	〃 塚原	〃	円墳	140336
21	高畑古墳群	〃 〃	〃		140342
22	隼人塚古墳	〃 高瀬	〃	前方後円墳・横穴式石室・6世紀後半	140312
23	小迫池東南遺跡	〃 稲童	〃	散布地	140354
24	尾曲古墳	〃 松原	〃	円墳	140343
25	郡界原遺跡	〃 道場山	弥生	散布地	140319
26	寺屋敷横穴	〃 〃	古墳	横穴	140314
27	鬼塚古墳	〃 〃	〃	円墳・横穴式石室	140317
28	上人塚古墳	〃 〃	〃	円墳	140318

番号	遺跡名	所在地	時代	内容	福岡県文化財番号
29	五反田池北遺跡	行橋市道場山	弥生	箱式石棺	140353
30	中原古墳	豊津町中原	古墳	円墳	
31	国富池遺跡	〃 国富	弥生・古墳	集落	920011
32	三ツ塚1・2号墳	〃 .	古墳	円墳	920012・13
33	弓の師遺跡	築城町弓の師	弥生・古墳	集落	950073
34	別府遺跡	〃 上別府	古墳	集落	950071
35	別府城跡	〃 〃	室町		950072
36	築城城跡	〃 築城	〃		950069
37	狐塚遺跡	〃 下別府	弥生	石棺3基	950070
38	笠山遺跡	〃 上別府	古墳		950074
39	比丘尼原遺跡	〃 比丘尼原	〃	集落	950075
40	下清水遺跡	〃 赤幡	弥生	石棺・管玉・磨製石鏃 町文報1	
41	横井塚古墳群	〃 広末	古墳	円墳6基・横穴式石室	950055～60
42	安永古墳群	〃 〃	〃	円墳6基	950062～67
43	双子池遺跡	〃 安武	弥生	集落	950076
44	火箱古墳群	〃 船迫	古墳	円墳3基・横穴式石室	950001～3
45	茶臼山窯跡	〃 〃	奈良	須恵器・瓦窯	950011
46	堂がへり窯跡	〃 〃	〃	2基・須恵器A窯・瓦B窯	950007・8
47	堂がへり古墳群	〃 〃	古墳	2基・横穴式石室	950005・6
48	中の丸遺跡	〃 〃	弥生	集落	950009・10
49	裏ヶ迫古墳群	〃 〃	古墳	円墳5基・横穴式石室	950018～22
50	宇土窯跡	〃 〃	奈良	瓦窯	950023
51	ひめのり古墳群	〃 〃	古墳	円墳4基・横穴式石室	950012～15
52	丸山遺跡	〃 下香楽	平安	経塚・天治2年（1125）銘経筒	950044
53	焼毛鞘古墳	〃 上深野	古墳	古墳	950025
54	高畑城跡	〃 松丸	室町	山城	950026
55	金敷古墳群	〃 伝法寺	古墳	円墳2基・横穴式石室	950027・28
56	豊前国府推定地	豊津町惣社・国分	奈良	官衛・建物跡 町文報3～5・8	920112
57	北原遺跡	〃 国分	中世	建物跡・井戸 町文報6	
58	正道遺跡	〃 〃	奈良・平安	建物跡・塼仏 町文報8	920019
59	豊前国分寺	〃 〃	奈良	講堂基壇 国史跡	920111
60	豊前国分尼寺	〃 徳政	〃	礎石	920018
61	徳政瓦窯跡	〃 〃	〃	瓦窯	920017
62	ガランデ遺跡	〃 豊津	弥生	集落	920070
63	上坂廃寺	〃 上坂	奈良	塔心礎 県史跡	920074
64	頭無池西古墳群	〃 吉岡	古墳	円墳5基	
65	節丸西遺跡	〃 節丸	縄文	後期集落	920109の内
66	野中城跡	椎田町西八田	中世		940001

番号	遺跡名	所在地	時代	内容	福岡県文化財番号
67	西高塚遺跡	椎田町高塚	古墳	集落	940004
68	合木横穴群	〃 合木	〃	横穴5基	940012～16
69	合木遺跡	〃 〃	〃	集落	940017
70	小原横穴群	〃 小原	〃	横穴11基	940028～38
71	谷池東遺跡	〃 上り松	先土器・古墳	細石核	940021
72	出口遺跡	〃 〃	縄文	集落	940024
73	後谷古墳	〃 奈古	古墳	古墳	940009
74	後谷池遺跡	〃 〃	〃	集落	940010
75	小原岩陰	〃 小原	縄文	後期	940039
76	豊前古代官道	〃 上り松	奈良～	大宰府豊前国府～宇佐	150066
77	赤幡神楽	築城町赤幡		赤幡八幡神社 県無民	950046
78	円座餅搗行事	〃 下香楽		清地神社 〃	950079

先土器時代の遺跡については，正式な発掘調査はまだ知られていないが，豊津町甲塚の長養池，川の上遺跡（6）にてナイフ形石器，椎田町谷池（71）より細石刃核が採集されている（註7）。

縄文時代では，近年大規模な集落遺跡が相次いで発見され活気づいている。北より，祓川左岸，豊津町節丸の節丸西遺跡（65），岩丸川右岸，椎田町水原の石町・山崎遺跡（13），角田川左岸，豊前市中村の中村石丸遺跡では，後期中頃以降の大集落が調査された。大量の土器・石器の他，土偶の出土も見られる。同じ後期の遺跡としての椎田町小原岩陰（75）は，当地域特有の凝灰岩が侵食され形成された大きな岩陰であり，平成3年度に調査が予定されている。開地遺跡と洞穴遺跡の居住環境の比較等，興味深い。溯って早期では豊津町徳永・川の上遺跡，築城町安武・土井の内遺跡にて，落し穴状の土壙が纏まって検出されている。築城町赤幡の十双遺跡（10）では後期～晩期の住居跡1，土壙1の他に包含層も確認された。その他に築上郡内では大平村原井三ツ江遺跡・土佐井遺跡では後期の住居跡と土偶が，豊前市吉木遺跡では古式の押型文土器が報告されている（註8）。

弥生時代の大集落としては，行橋市下稗田遺跡が知られ，稲童の北へ続く長井の浜では，前期の石棺群が密集して存在したらしい。しかし，築城・椎田町内では既存の遺跡は少ない。築城町安武の双子池遺跡（43）では，工事中に住居跡・貯蔵穴が発見されている。赤幡の下清水遺跡では水田下より前期末から中期前半の箱式石棺6基が調査され，磨製石鏃・碧玉製管玉の出土を見る（註9）。今回の椎田バイパスの調査に伴う広末・安永遺跡（11）では，中期前半の住居跡6，貯蔵穴18のほかに土壙・溝が検出された。十双遺跡（10）では中期2，後期30の住居跡，貯蔵穴8があり，銀製品・漢式土器の出土を見る。その西に隣接する赤幡・森ヶ坪遺跡（9）でも後期の住居跡5と谷部より多量の土器が出土し，両遺跡は後期の拠点的な集落遺跡

となるのであろう。城井川左岸の安武・深田遺跡（４）では中期末から後期前半の住居跡９，甕棺墓１，貯蔵穴２等が検出されたが，住居跡の形態，土器の特徴等非常に瀬戸内中部地域の影響が大きい。安武・土井の内遺跡でも後期後半の住居跡が１軒ある。徳永・川の上遺跡では終末頃の墳丘墓や石棺・土壙墓群が調査され，鏡・玉・鉄器等の副葬品が豊富に出土し，注目される。

古墳時代になっても，可耕地の少ない当域では目立った古墳が知られず，行橋・苅田平野の有り様と大きな差異がある。稲童古墳群（18）中の主墳である石並古墳や，６世紀後半の隼人塚古墳（22）といった前方後円墳は行橋平野に目を向けたものであり，現在のところ築城町・椎田町・豊前市内には前方後円墳は存在しない。しかし，今川上流の犀川町花熊古墳，大熊古墳といった規模の小さな前方後円墳の立地を考えれば，城井川下流域にもその存在が予想される。終末期の群集墳になると，山地及び洪積台地上に多く分布する。行橋市鬼塚古墳(27)，同寺屋敷横穴（26），豊津町三ツ塚１・２号墳（32），築城町堂がへり古墳群（47），裏ヶ迫古墳群（49），ひめのり古墳群（51），安永古墳群（42），椎田町合木横穴群（68），小原横穴群（70）等の円墳，横穴墓が知られる。椎田バイパスの調査では椎田町石堂中後ヶ谷古墳群(14)，菜切古墳群（15）が７世紀後半から８世紀前半の横穴式石室を持つ円墳群とされている（註10)。集落遺跡としては，安武・深田遺跡，安武・土井の内遺跡では５～７世紀代を中心とする住居跡が80軒，建物跡34のほかに土壙・溝があり，赤幡・森ヶ坪遺跡では奈良時代にかけてであるが住居跡105，建物跡16が検出される。その他に初期須恵器窯跡として豊津町居屋敷遺跡（５）が椎田バイパス関連の遺跡として調査された。

奈良時代に入ると遺跡が集中して分布する。豊前国府は豊津町惣社付近に比定（56）され，現在も範囲確認調査が続けられている。豊前国分寺（59）は国府の南0.5kmと至近の距離にあり，講堂の基壇と寺域を限る溝が検出され，国指定史跡となっている。東に谷を挟んで対峙する国分尼寺（60）は現在礎石の一部を残すのみである。また，豊津町上坂の上坂廃寺（63）は巨大な塔心礎を持ち，県指定史跡となっている。出土する瓦は百済系と老司系のもので７世紀後半頃ともされる。これら古代寺院･官衙を葺いた瓦は，豊津町徳政瓦窯（61），築城町船迫の茶臼山窯跡（45），堂がへり窯跡（46），宇土窯跡（50）等が知られる。安武・深田遺跡では谷地区より須恵器を伴出して木簡３点と墨書土器・緑釉陶器・平瓦の出土を見，赤幡・森ヶ坪遺跡では石帯・銅鋺・平瓦・製塩土器が出土している。城井川を挟んだ両遺跡の遺構・遺物の有様は，赤幡を中心とした地区に官衙（築城郡衙・築城駅）などの存在を予想させる。これは，前述したように，大宰府・豊前国府・宇佐へ通じる官道（76）が赤幡地区の条理遺構からも窺えるといった説（註11）の考古学的根拠の一つになるのかもしれない。

中世の遺構としては多くの山城・平城が存在する。椎田町水原の広幡城（12）は，築城町城井谷に本拠を置いた宇都宮氏の出城の一つである。

註1　地形の分類及び周辺の地形については，下記の文献に拠るところが大である。長野覚「各論1　地形分類図」『周防灘周辺開発地域 ── 土地分類基本調査 ── 中津』福岡県　1970

註2　宮本工・恒成雪香著「豊前漁村の食・豊前山間の食 ── 聞き書福岡の食事」『日本の食生活全集40』農山漁村文化協会　1987　　椎田町湊・豊前市合河地区の四季折々の食生活が日常食・各行事食・晴れ食などに分けられて詳しく説明されている。

椎田町湊には魚市場があり，周防灘沿岸で獲れる，しゃこ・赤えび・わたりがに・きぬ貝・赤貝・あさり・かきやぼら・こち等の小魚が多量に水揚げされ，町内の魚屋の店先にトロ箱に山積みにされ並ぶ。我々の食卓にも四季折々の幸が盛られ，調査の忙しさを紛らしてくれた。現在でも椎田の海岸には，石を何段にも半円形に積み重ね，潮の干満を利用して魚を獲っていた「石干見（いしひび）」と言う古代からの漁法が残っている。余談ではあるが，大分県中津市の植野貝塚（後期）以北の周防灘には貝塚遺跡が知られていない。近年の縄文後期の大規模な集落の発見が遺跡の立地という観点からこの問題に対する回答の糸口になるかもしれない。

註3　大分県本耶馬渓町枌洞穴は山国川右岸の縄文時代後期の遺跡，福岡県大平村原井岩陰は左岸にある岩陰で未調査だが縄文時代。椎田町小原の小原岩陰は真如寺川左岸にあり縄文時代後期の遺物が出土。福岡県内では洞穴遺跡の調査例はないが，築上郡内には凝灰岩が侵食された洞穴・岩陰が多く分布している。

註4　第3地点（1），豊津町の中心部や豊前国分寺周辺の遺跡（58～60）はいずれも洪積台地上に立地する。

註5　築城扇状地，椎田扇状地，松江扇状地などと呼ばれる。

註6　築上西高等学校の郷土部により採集が続けられ，縄文時代後期の土器・石器が多量に出土することで知られる。椎田バイパス建設により調査され竪穴住居跡等を検出。字名から山崎遺跡（13）としているが同一の遺跡。

註7　築上西高等学校の郷土部により採集され，所蔵。

註8　大平村教育委員会「原井三ツ江遺跡」「土佐井遺跡群」『大平村文化財調査報告書5・6』1989，1990。　　豊前市教育委員会「吉木遺跡」『豊前市文化財調査報告書6』1989

註9　築城町教育委員会「付，下清水遺跡 ── 安永遺跡」『築城町文化財調査報告書1』1984
なお2基の箱式石棺は下城井公民館前庭，築城小学校校庭に移築している。

註10　福岡県教育委員会「石堂中後ヶ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告2』1990

註11　日野尚志「豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条理について」『佐賀大学教育学部研究論文集22』1974

III　安武・深田遺跡

1．調査の概要

(1)　遺跡の立地（第24図）

安武・深田遺跡は福岡県築上郡築城町大字安武1,421～1,460，1,485～1,490番地に所在する。椎田バイパスに2箇所設置されるインターチェンジのうち築城インターチェンジ建設に伴う調査区でもある。

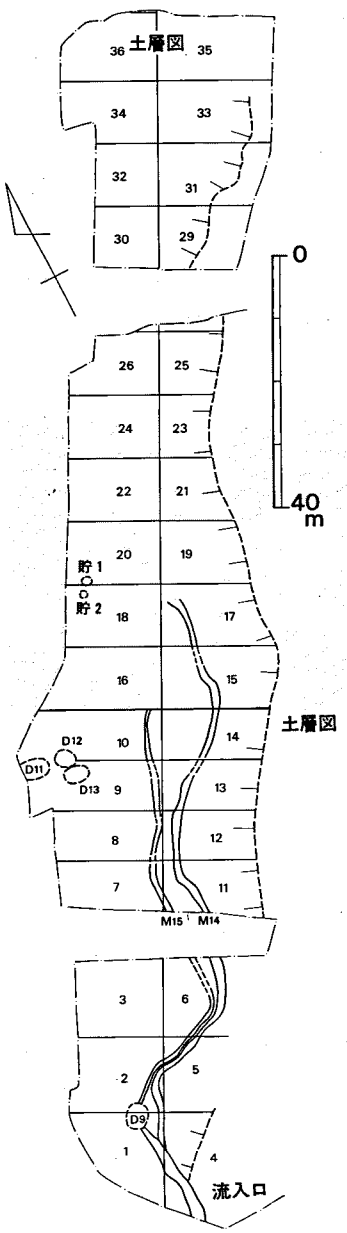
築城町は築上郡の西端に位置する海のない町である。南は大分県に接し，英彦山から派生する山地に囲まれ，総面積の65％を山林が占め農林業が盛んである。町の中央を南北に貫く城井川は，犬ヶ岳を水源とし，全長22.1kmで約1,000m下り，椎田町新開で周防灘に注ぐ。

中流域の本庄・伝法寺・深野では西側に0.5～1km幅のやや広い谷底平野を形成する。上本庄にある天徳寺は室町時代にこの地を支配した宇都宮氏の菩提寺で，宇都宮鎮房を含め三代の墓がある。また，本庄の大楠は根廻り32mに達し，樹令1,800年とされる大木で，国の天然記念物に指定されている。城井川が安武・赤幡付近に達すると，両側に連なっていた山地が途切れて，海岸に向って扇状地を形成する。遺跡は扇状地つけ根付近の城井川左岸に立地する。この城井川左岸は県道寒田・別府線が通る自然堤防が発達し，遺跡もこの上にのっている。西側は洪積台地となり，約1.5mほどの比高がある。この台地は開析が進み，狭い台地間に谷が複雑に入り組み，2kmほど北側へ標高10mぐらいまで続く。この洪積台地との境界，崖線に沿っては幅20mに未たない谷が細長く水田として営なまれている。遺跡内では谷地区と名付けた場所にあたり，自然堤防の後背湿地とも考えられる。この地を地元では〝深田〟と呼んでおり，遺跡名とした。調査区の標高は南端で34.5m，北端33mを測り，200mで比高1.2m北へ下る程度であり，ほぼ平坦な地形と言える。

第 22 図　天徳寺　宇都宮鎮房の墓

(2) 地区割り

調査区内には6本の現水路が南北に延びており，中の2本については調査していない。調査区割は西側の谷地区とそれ以外に2分割し，谷地区は包含層の調査のため小区割に分けたが，それ以外は地区割りをせず，南北に残した水路から，調査区の東側・中央部・西側に分け，方位によって北・南としている。



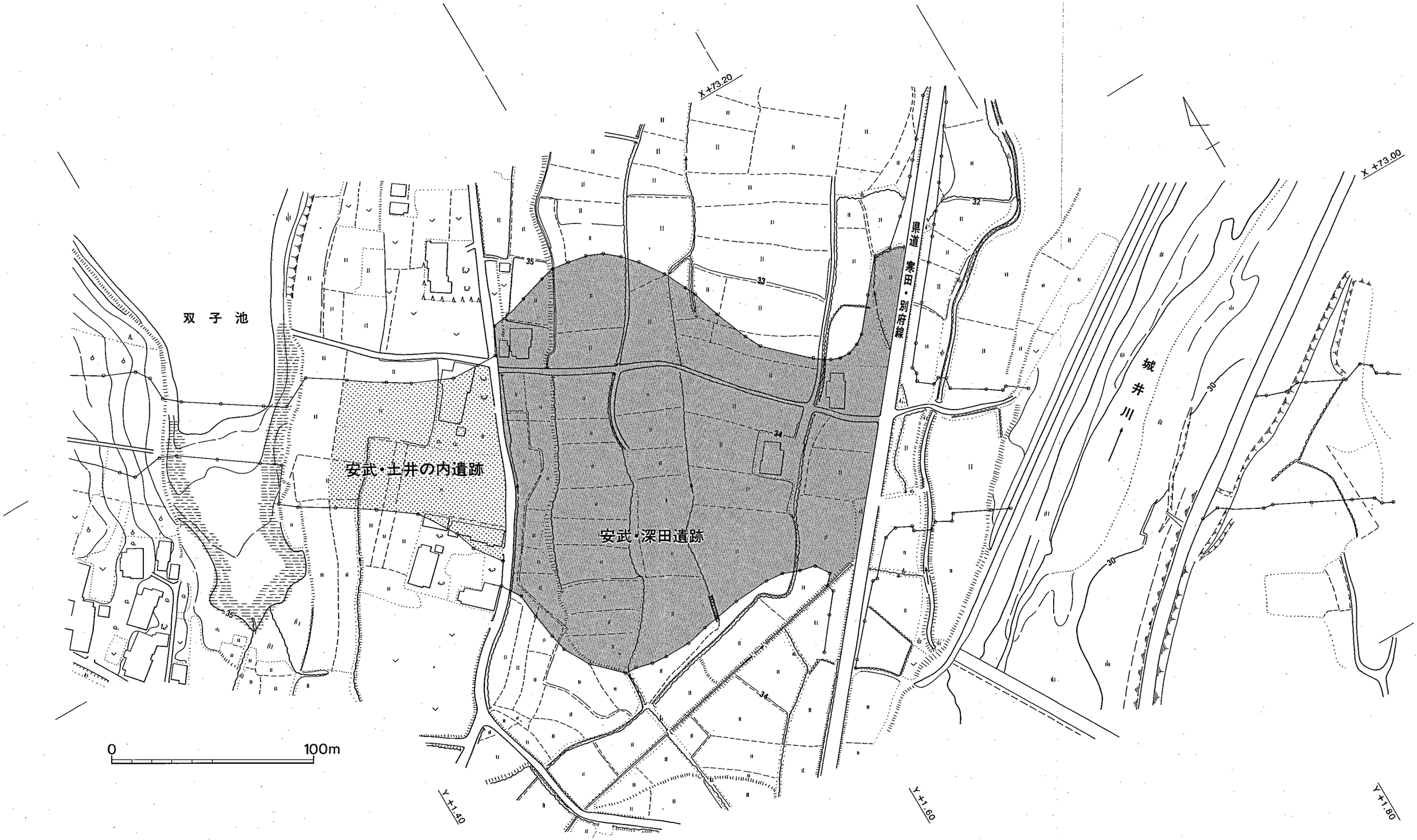
第 23 図 谷地区区割り図(1/1,200)

谷地区の地区割りは第23図の通りである。谷部のほぼ中央に中軸線を設定し，幅10mで分割した。当地区については当初調査範囲に含まれていなかった関係から1～6区，7～14区及びそれ以降の15～36区の番号の付し方がまちまちである。

(3) 遺構の概要（付図）

検出された遺構・遺物は縄文時代後期から江戸時代までに及ぶが，主体を占めるのは弥生時代～中世の時期である。縄文時代の遺構はないが，後期から晩期の土器が若干出土した。弥生時代では竪穴住居跡9軒，土壙2基，甕棺墓1基，土壙墓3基のほかに柱穴群がある。古墳時代の遺構は竪穴住居跡64軒，掘立柱建物跡30棟，土壙24基，土壙墓1基，溝15条等と柱穴群。奈良時代の遺構は竪穴住居跡6軒，掘立柱建物跡2棟，溝11条がある。中世に属す遺構は土壙1基，溝2条があげられる。

それらの遺構のうち，谷地区に位置するものは，弥生時代では1・2号貯蔵穴，古墳時代の9・11～14号土壙，1・2号落ち込み，15号溝。奈良時代では谷地区への流入口とそれに連絡する14号溝がある。谷地区でも1・2号貯蔵穴，11～13号土壙や槌の子群の一括遺物は谷中央部より西側に位置しており，隣接する安武・土井の内遺跡から人の手が加わった可能性がある事は否めない。それ以外の遺構の配置としては，調査区の中央部北半には弥生・古墳時代の竪穴住居跡（65・64）が見られる程度なのは，この付近に浅い旧谷が入り込んでいるためで，道路状遺構はこの谷の東側肩部を通って，東西方向に延びている事になる。

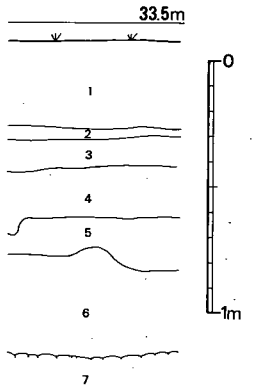


第 24 図　安武・深田遺跡地形図 (1/2,000)

(4) 層　　序

基本層序（図版６，第25図）

安武・深田遺跡の基本的な土層堆積を，調査区の中央部北端部にあたる26号溝から説明を加える。１層は灰褐色を呈す水田耕作土で層厚35cm，標高33.4ｍ。２層は水田床土で層厚５～７cm。３層は灰褐色土で粘質土をブロック状に含む。層厚12cm前後で古墳時代後期以降の堆積土。４層は淡茶褐色粘質土で５層との境界は凸凹している。層厚20～25cmあり，古墳時代後期の遺構はこの層の上面から掘り込み，弥生時代の遺構は下層から掘り込んでいる。５層は暗黄褐色粘質土で層厚15～20cm。６層は黄褐色シルト層で層厚33～40cm。７層は河原礫層になるが，その標高は32.2ｍである。この土層以下の土質はボーリングによると，地表から－2.5ｍで青灰色の風化凝灰角礫岩層が厚さ2.5ｍほど続き，その下部２ｍも凝灰角礫岩の土層となる。この両層には径５～15cmほどの安山岩礫が点在し，標高26.7～28ｍ付近は火山灰状を呈すとされる（註１）。



第 25 図　基本土層図(1/30)

一方，洪積台地上に立地する安武・土井の内遺跡では２層の床土下に茶褐色粘質土・黄褐色粘土層が表土下2.2ｍまで続いており，凝灰角礫岩の風化した土質が直接のっている事が判る。

これらの地層の基盤は，中生代の花崗岩，花崗閃緑岩で，この上位に耶馬渓層と呼ばれる安山岩質火山角礫岩・凝灰角礫岩・凝灰岩からなる火山砕屑岩で覆われる。これらの土壌は台地では安山岩の風化により赤色化して現われているので判断しやすい。

谷地区の層序

基本層序は城井川の自然堤防上の層位でもあるので，ここでは谷地区の地層について若干記しておきたい。第26図は15・16区の谷を横断する土層図である。堆積土は８層の河原礫層まで70cmの層厚で10枚に分けられる。礫層のレベルは32.5ｍで，調査区北端より30cm高い。谷底は東側でややU字状を呈すが，大概平坦に近い。これらの土層のうち遺物を出土するのは，２ａ層の黒褐色粘質土，２ｂ層の褐色粘質土(バフン層)，３層の灰青色砂層である。２ａ層は谷地区の全域を覆い，層厚15～40cmで，北にいく程厚く堆積する。この層の上位は古墳時代末以降から平安にかけての遺物が多く，木簡・墨書土器もこの層から出土した。２ｂ層は褐色の腐殖土で通称バフン層と呼ばれる土層。15・16区の土層図には無いが，26区以北の谷部に堆積する。北端の36区では10cm内外であるが中央部では20～25cmと厚くなる。この層のない26区以南では黒褐色の粘質土（黒褐色粘質土下層として遺物を取り上げている。）が厚く堆積する。層中から

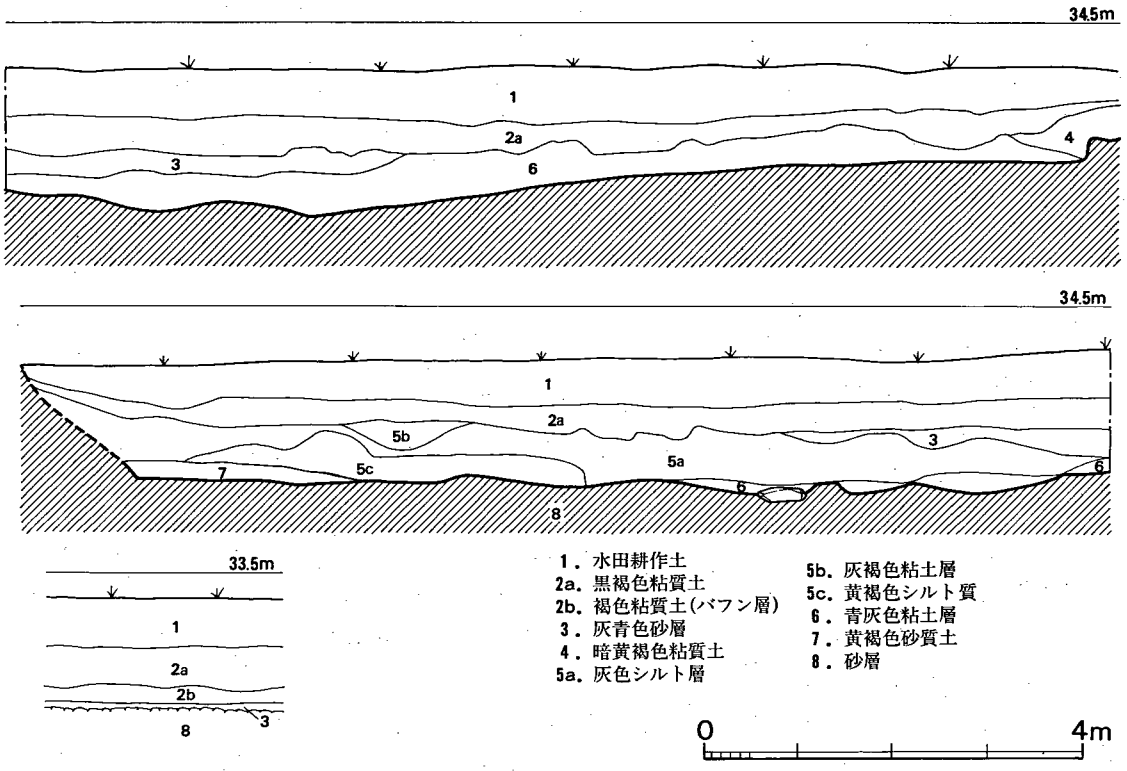
は古墳時代の遺物が多量に出土し，特に木製品の遺存度が良好であった。３層の灰青色砂層は全域に見られ，中央部から南部にかけては15～20cmの層厚を持つが，北端の36区では僅か５cmほどしかなく，礫層へと続いている。層中よりは弥生時代中期末頃の遺物が主体となって出土したが，量的には南端の２～６区に集中している。

註１　日本道路公団による椎田バイパス内ボーリング調査資料。

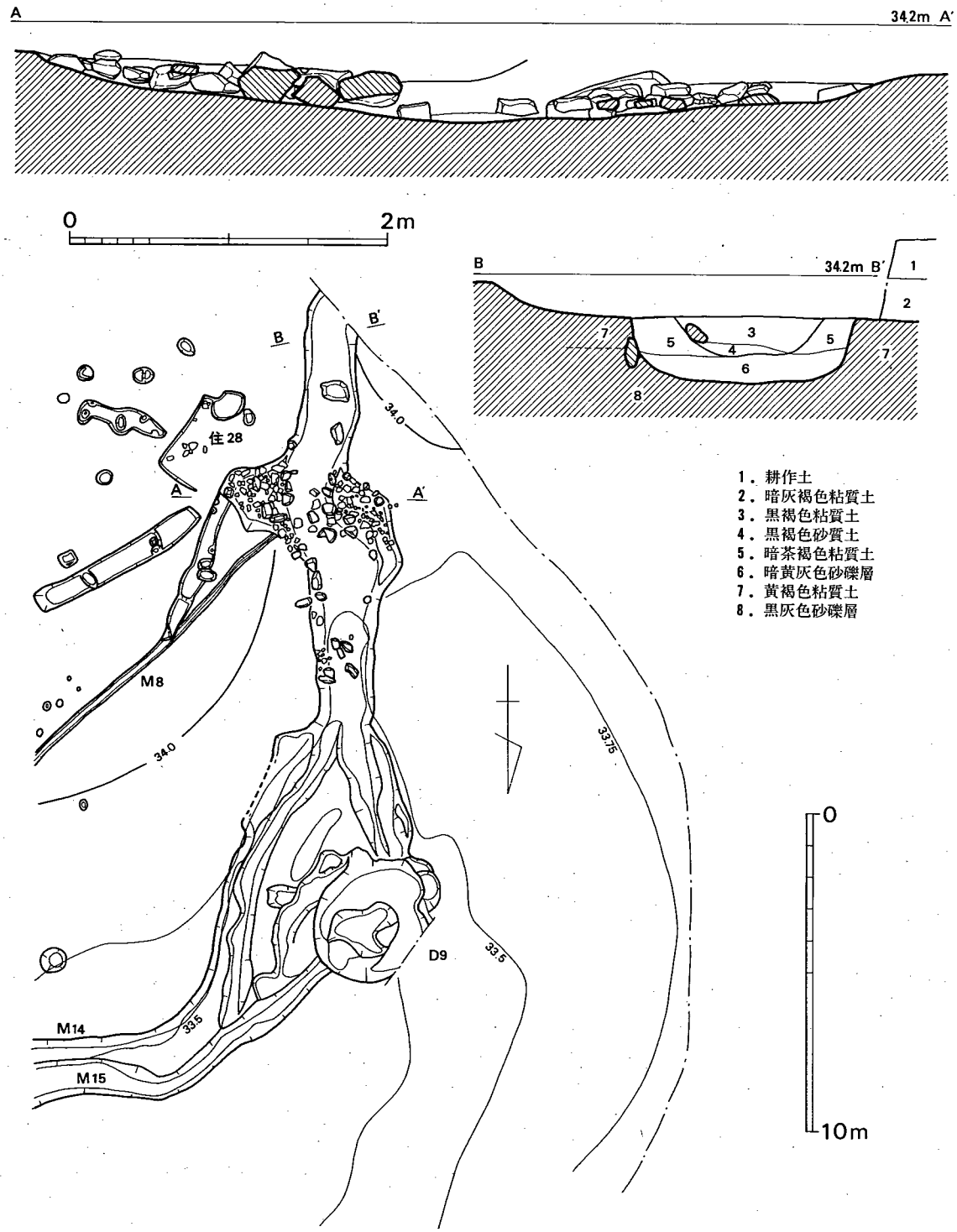
(5)　谷地区流入口

谷地区は本来的には自然堤防上に立地する安武・深田遺跡と洪積台地上の安武・土井の内遺跡間の幅20ｍほどの狭い谷であり，北側へ１kmほど延びている点については前述した通りである。従って，この谷が自然流路となっていた事は疑いないが，古墳時代の末から奈良時代にかけて，谷部への流入水路が掘られている。

流入口は調査区の南端４区から１区の方向へ真直ぐ北へ17ｍのびる。幅は1.5ｍから２ｍで，断面は浅いU字状を呈し，深さ40cm。溝内の堆積土は４枚で，３層の黒褐色粘質土と，４層の黒褐色砂質土が５層の暗茶褐色粘質土と６層の暗黄灰色砂礫層を切っているので，当初の流入口が埋没した後に再度掘削した事が判る。新しい水路は幅90cm，深さ25cmと狭く浅いもので，



第 26 図　谷地区中央横断・36区北端土層図（1/80）

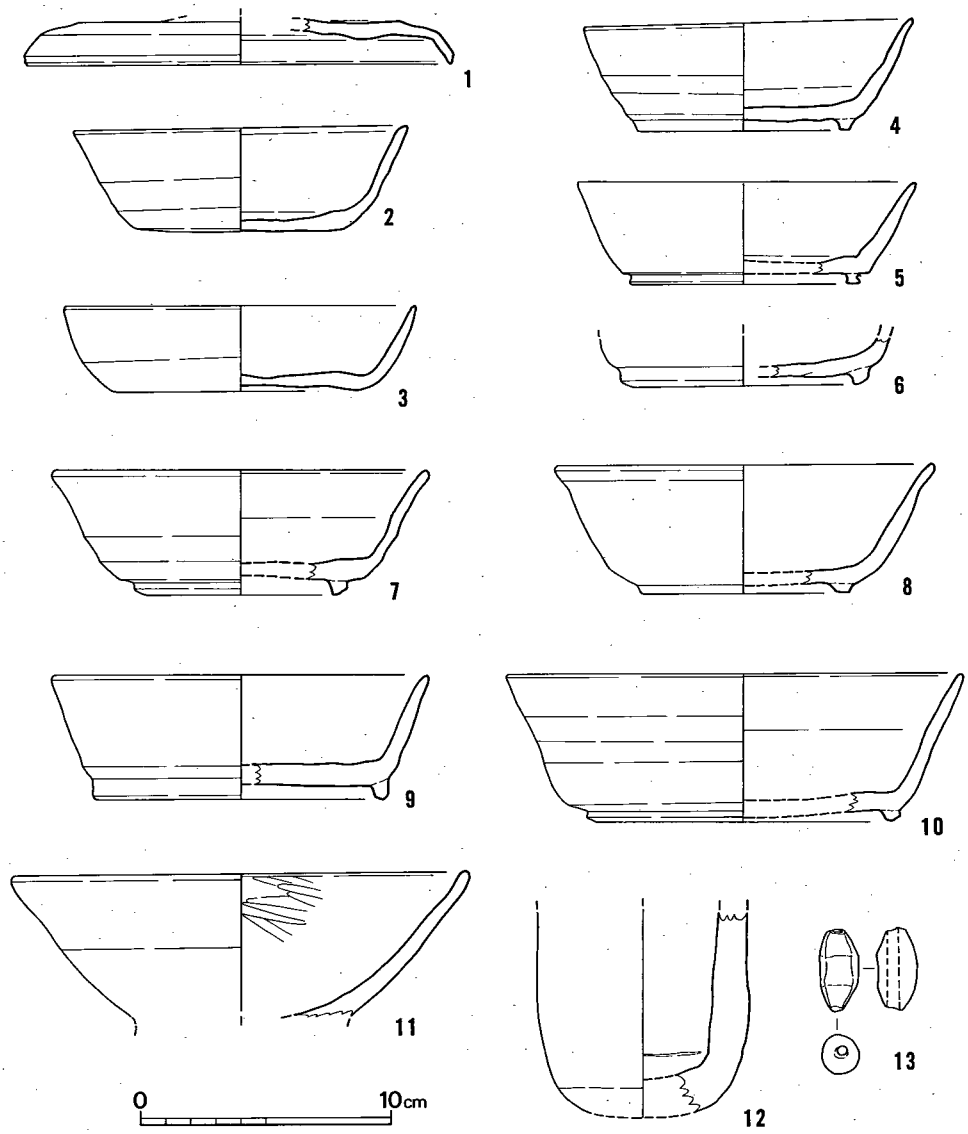


第 27 図　谷地区流入口実測図 (1/200, 1/40)

土層は14号溝のものと同一である。

流入口の中間部は屈曲し，その両岸には幅２ｍ，長さ３ｍのテラスを有し護岸状の石積みがある。この石積みは河原石を平積みし，両岸には河原石の小口部を置く人工のものである。屈曲部にテラス面をもたせ護岸石積みするなど，水量調節に係わる施設であったと見て良いだろう。流入口の先端は枝分れし，東側は14号溝と合流し台地の西縁に沿って80ｍ程北へ延び，17区付近の谷中央部で消滅する。西側の水路は，古墳時代の９号土壙の上まで延び谷の自然流路となる。

出土遺物は須恵器が多く，他にタコ壺形土器・土錘等が出土した。



第 28 図　谷地区流入口出土土器・土製品実測図（1/3）

土師器（第28図11･12）　11は黒色土器A，いわゆる内黒土師器である。高台を欠くが，内弯ぎみに広がる椀で復原口径18.2cm。外面は回転ヘラケズリの後口縁部付近のみヨコナデ。内面はヘラミガキを施し，燻した後漆塗りしている。12はタコ壺形土器で器壁1.3～1.6cmと部厚い。

須恵器（第28図１～10）　１は撮を欠損する蓋で，かえりは長めで高い。口径17cmでナデ調整。２～10は坏で，無高台のもの（２・３）と有高台に分けられる。器形的には，外方に広がり口縁部付近で外反するが，３は若干内弯し，外面に黒色顔料を塗布する。口径14cm，器高3.4cm。有高台坏は４の13cmから10の18.1cmまである。高台は台形で低く，９を除いて端部やや内側に付く。調整は不明のものが多いが，８は胴下半をヘラケズリ，９は底面をヘラケズリの後に高台付近をナデ消す。

土製品（第28図13）　完形の土錘で，ラグビーボール状の体部を有す。全体手捏ね整形で色調は淡赤褐色を呈す。長3.3cm，径1,45cm，孔径0.38cm，重6.5ｇ。

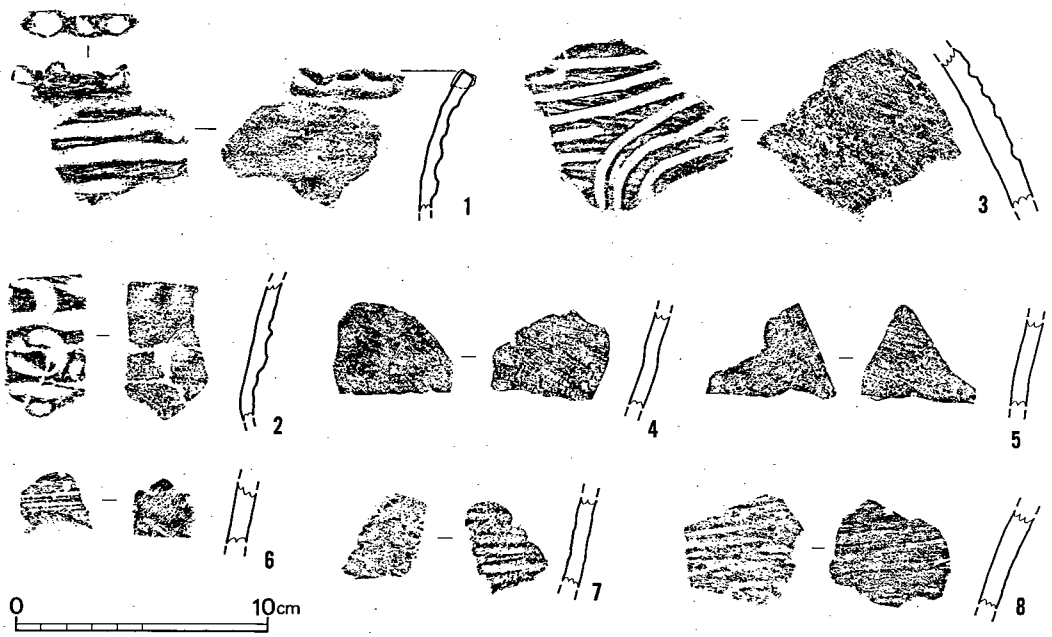
出土遺物から８世紀前半，奈良時代頃に開削され，９世紀前半頃に掘り直されたらしい。

（木下）

２．縄文時代の遺物

縄文土器（第29図）

本遺跡では，柱穴，竪穴住居跡の下層，包含層等から縄文土器が出土した。点数が少ないこともあり，便宜的に本項で説明を行なう。また石器については，確実に縄文時代のものと判別

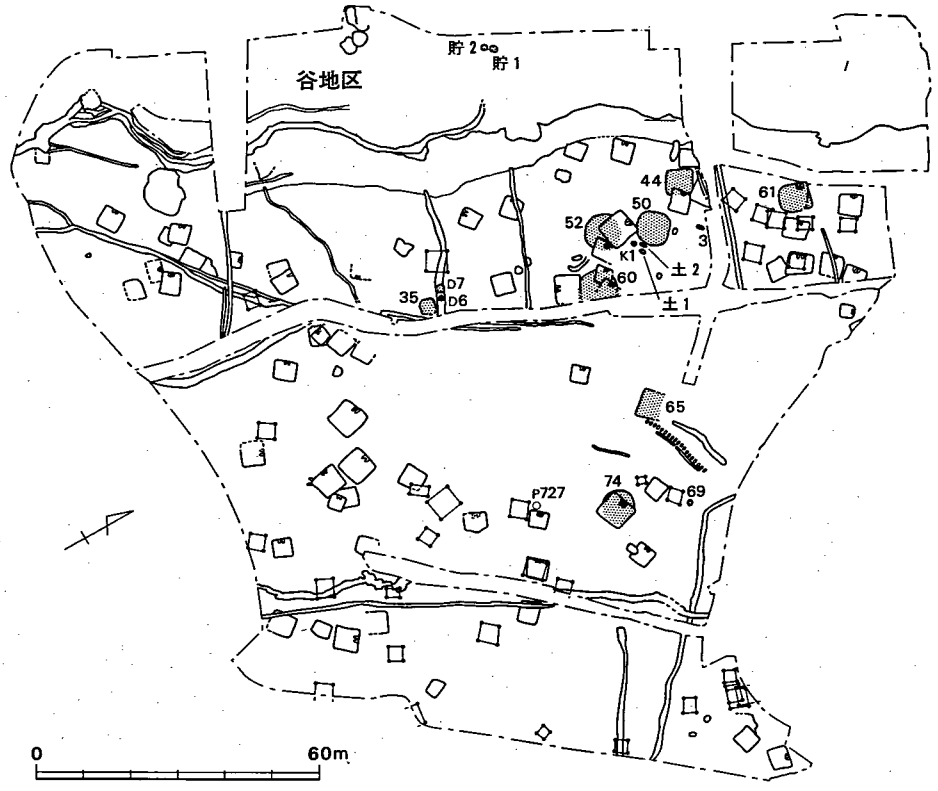


第 29 図　縄文土器拓影（1/3）

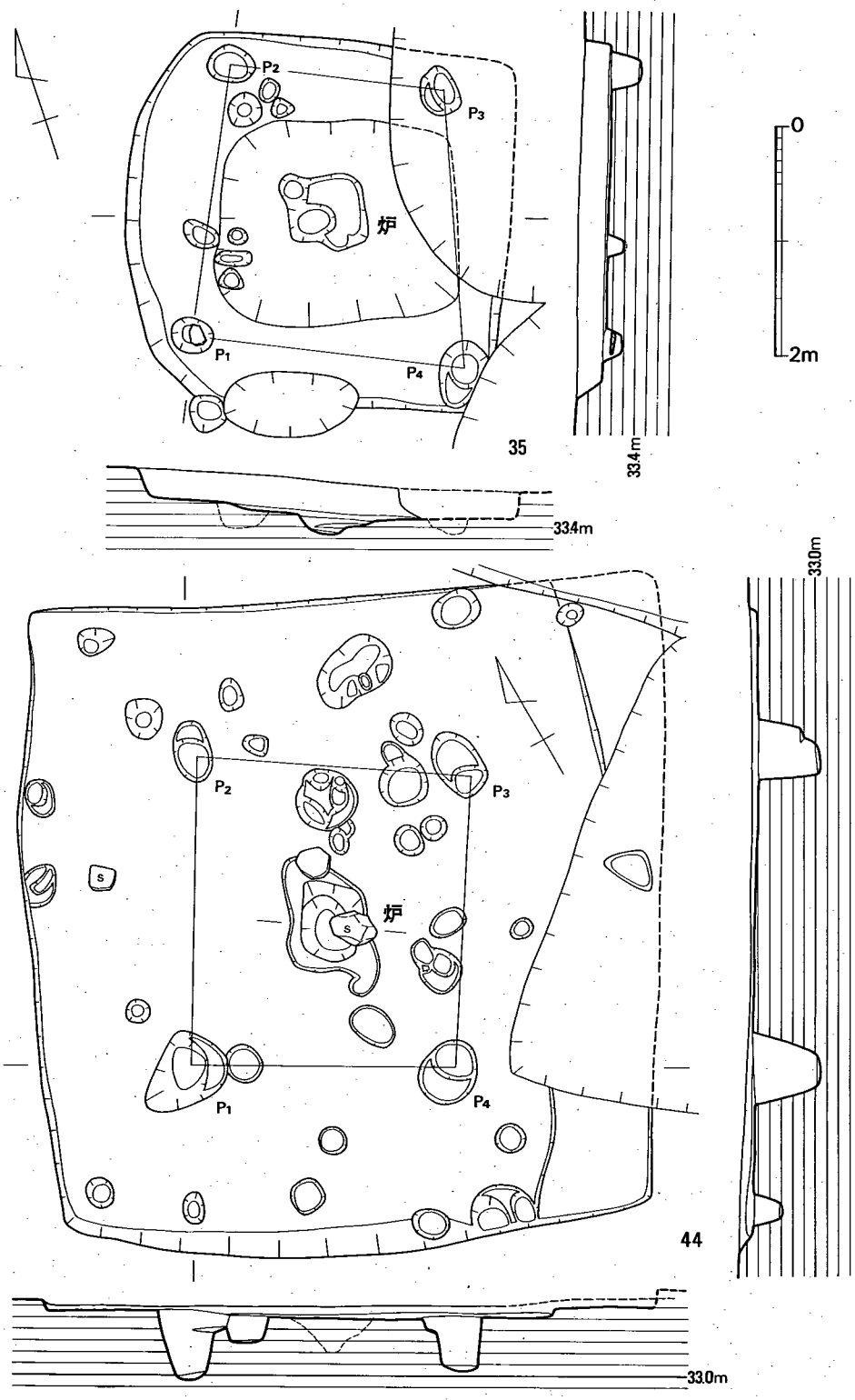
することが困難なため，それ以降の時代の石器とともに一括して扱う。なお，図示した以外に，縄文早期の条痕文土器と晩期初頭の鉢形土器が各一点ずつ包含層から出土したが現在行方不明であり，発見次第報告する予定である。1と2は同一個体で，P713から出土した。外面には凹線による直線状と巴状の文様が，口縁端部には凹点文が施される。内面調整はナデで，後期初頭に位置づけられる。3は谷地区17区粘土層からの出土。器面調整はナデで，後期前葉～中葉に位置づけられる。4・5は調査区北東端の80号住居の東側に拡がる包含層から出土した。外面はナデ，内面にはミガキが施される。6～8は調査区北西端の79号住居の下の包含層から出土した。6の外面，7の内面，8の内外面には貝殻条痕文が，その他にはナデが施される。4～8は胎土や器面調整から，いずれも縄文後・晩期に属するものと考えられる。　（水ノ江）

3．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構には竪穴住居跡9軒，土壙2基，貯蔵穴2基，甕棺墓1基，土壙墓3基の他に弥生土器のみを出土する柱穴群（P727など）があり（第30図），調査区の北西側に近接する



第 30 図　弥生時代遺構配置図（1/1,600）

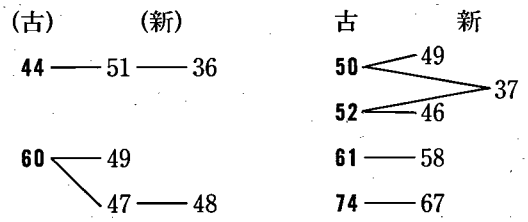


第 31 図　35・44号竪穴住居跡実測図 (1/60)

傾向が窺われる。貯蔵穴は谷地区18・20区より検出されたもので，谷中央部より西側に位置するので，あるいは安武・土井の内遺跡側から谷へ降りた箇所に所在したものなのかもしれない。土壙は35号住居跡の北側に，甕棺・土壙墓は50号住居跡のすぐ東に隣接して検出されている事は注意される。これら遺構とは別に，谷地区中央部から南側の砂層（第26図の３層）より纏って弥生土器が出土している。住居跡の形態，凹線文土器群と〝水鳥〟を描いた土器，分銅形土製品など瀬戸内系の影響が色濃く現われた遺跡である。

(1)　竪穴住居跡

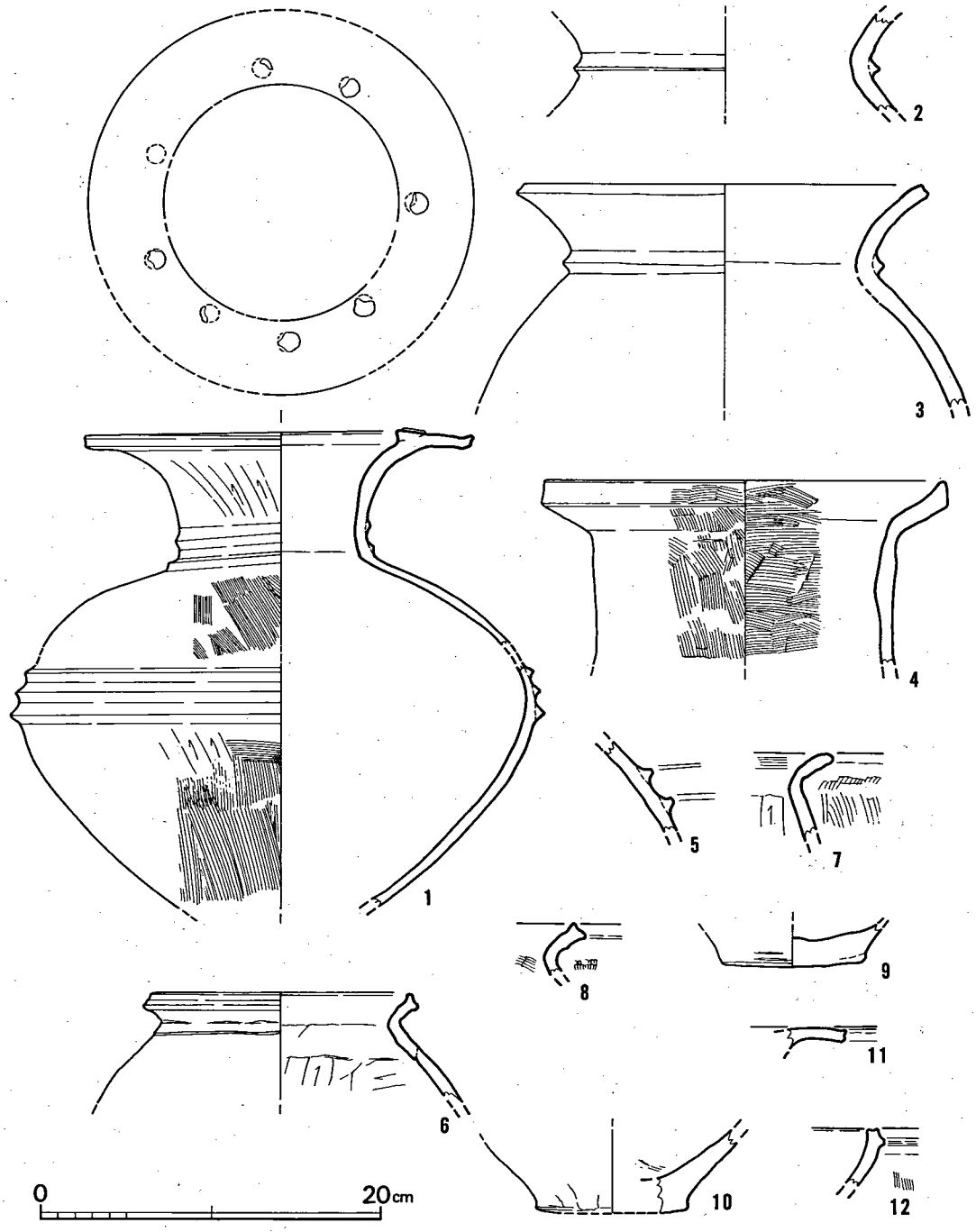
９軒検出された。そのうち69号住居跡は炉のみであり，65号住居跡は炉も無く，遺物の出土状況も不安定で確実とは言えない。プランは円形（52・60・74），円（方）形（50），方（円）形（61），方形（35･44号）と大まかに分けられる。重複関係については下の通りであるが，いずれも，古墳・奈良時代との遺構との重複である。



35号竪穴住居跡（図版10，第31図）

北西部中央の，11号溝の西側で６・７号土壙と共に位置する。隅丸正方形プランで，東側は削平され不明だが，一部残る壁により南北3.2ｍ，東西3.2ｍを測る。炉は住居跡の中央にあり，一辺35㎝ほどの方形で深さ15㎝。周囲に２ｍほどの段落ち部を有し，この内は特に固く踏み締められている。住居跡の四隅近くに主柱穴（Ｐ１～Ｐ4）があり，床面から40㎝ほど掘り込まれる。埋土は黒褐色土で，壺１・４が床面より出土した。

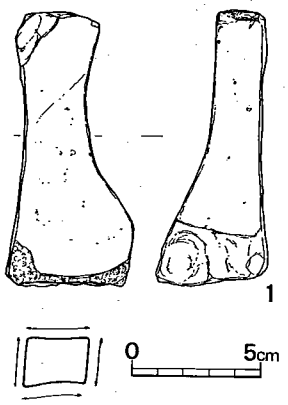
出土土器（第32図１～12）　１～５は広口壺だが口縁部の形態から鋤形口縁部を有すもの（１），素口縁のもの（２・３），太い頸部から口縁部へ広がる素口縁の壺だが口縁帯を持つもの（４）に分けられる。１は扁平に近い胴部から，やや外反ぎみに立ちあがり，若干垂れぎみの鋤形口縁部となる。胴部最大径には３条の三角凸帯が，頸部つけ根にも２条付ける。口縁部上面の内側に寄せて径１㎝，高1.5㎜の円形浮文が８箇所に配される。外面の凸帯上下は細かなハケ目調整を施す。内面はナデ。口縁部上面及び胴下半には黒斑がみられるが，色調は褐色を呈す。口径22.8㎝，最大径31.5㎝，残存高28㎝を測る。２は口縁部を欠き，頸部と胴部の境界に１条の三角凸帯。３は大きく外反する口縁部を持ち，やはり１条の三角凸帯を付す。口唇部は凹む。内外面ともヨコナデであり，外面のみに化粧土を塗布する。復原口径24.3㎝。４は太



第 32 図　35号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

く，ほぼ直行する長い頸部から外方に強く屈曲して口縁部に移行する特徴的な器形であるが，胴部以下を欠除する。口縁部が内弯し，外面に口縁帯を作り出すのも特徴の一つで，全体的なプロポーションは50号住居跡出土の25の凹線文系壺に似るのであろう。また，52号住居跡出土の58・59のように口縁部に凹線状の凹みを有すものもある。内外面とも口唇部付近から頸部全体に縦・横方向の丁寧なハケ目調整を施す。色調は灰褐色で，割合粒子の大きな長石や，雲母を含む。口径23.8cmを測る。５は胴部の「コ」字状の凸帯。

６～８は甕で，３種類ある。６は口縁部に２条の凹線文を有す甕である。「く」字状に外反し口唇部を跳ね上げる口縁部から張りのある胴部になる器形で，内面の頸部２cm以下はヘラケズリを施す。外面の頸部直下にはヘラ先のごく細い沈線が巡るようだ。色調はにぶい橙色で，外面は煤けて黒灰色を呈す。口径15.4cm。７は「く」字形口縁部の甕で，頸部に凸帯は持たない。外面の頸部以下，内口縁部にはハケ目を施す。８は跳ね上げ口縁の甕のうち，口縁部が「く」字状を呈すもの。９・10は底部で，９は若干レンズ底になる。底部近くまで平行タタキを施し，底部はケズリ。径8.2cm。10は壺かもしれない。外面はケズリを施す。11は丹塗りの鋤形口縁部の高坏片。12は半球状の胴部を持つ直口縁の高坏で，口縁部直下に「コ」字状凸帯を巡らすが，凸帯中央にヘラ先で沈線を入れ，M字状に近くなる。口唇部は凹む。



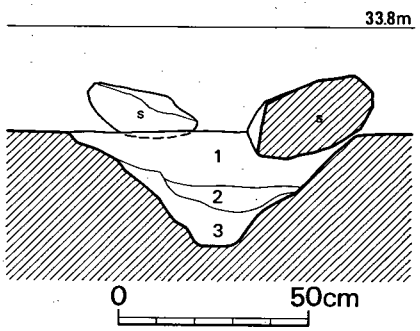
第 33 図　35号竪穴住居跡出土砥石実測図（1/3）

出土石器（第33図１）　研面４を持つ砥石で，かなり使い込まれている。長11cm，厚1.9cm。

44号竪穴住居跡（図版10・11，第31・34図）

調査区の北西に位置する弥生時代の遺構群のうち，50号住居跡の北西部に位置する。奈良時代の36号住居跡，古墳時代の51号住居跡に東側を切られている。南北5.7m，東西5.2～5.5mと若干南北に長いが正方形に近いプランで壁の残りは悪い。東側に幅80cmで８cmほど高いベットを有す。中央部には南北100cm，東西65cmほどの長円形プランの炉があり，上部には径30cm大の角礫が２つ見られる。炉中心はＶ字状に30cmの深さになる。

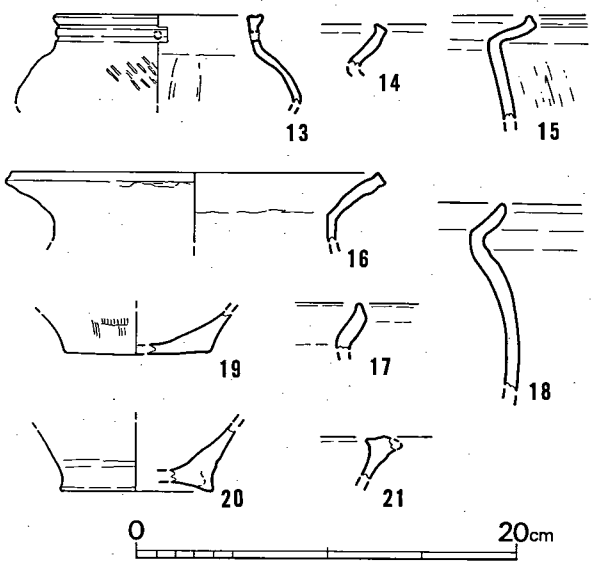
炉内の埋土は上位から１層が暗茶褐色砂質土，２層が炭化物を多く含んだ黒褐色粘質土，３層は砂と粘土ブロックが混ざった暗黄褐色である。この炉の周囲に４本の主柱穴（Ｐ１～Ｐ４）がある。



第 34 図　44号竪穴住居炉跡土層図（1/20）

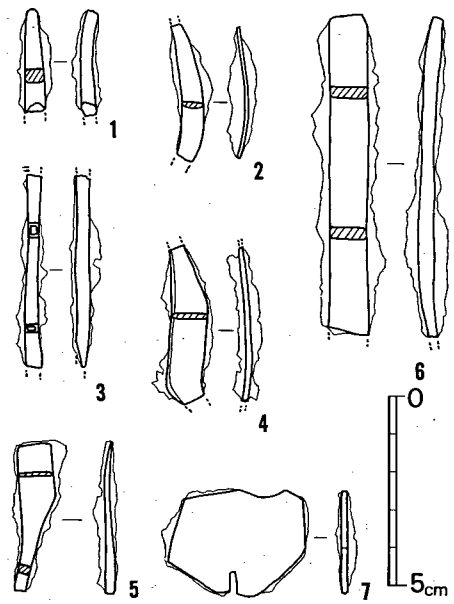
Ｐ１～Ｐ２間2.6m，Ｐ１～Ｐ４間2.3mを測り，２段掘りの掘方は深さ60cmに達する。出土遺物は少数の土器と鉄器で，21の高坏は炉内より出土した。

出土土器（第35図13～21）　13は極めて堅緻で薄手の直口縁壺。扁球の胴部から２cmほどの口縁部には２条の凹線文，口唇部にも凹線文を施す。２条の凹線文間には焼成前の円孔がある。胴部はタタキの後にナデ，内面もナデ。色調は茶褐色を呈し，胎土も良く精製されている。口径11cmを測る。14～18は甕の口縁部で，「く」字形口縁をなす16～18と，跳ね上げ口縁の14・15の２種類がある。跳ね上げ口縁をもつ両者とも，口縁部の内弯度が強いタイプのものである。「く」字口縁をなす16は煤が付着する。17・18は口縁部が内弯し，口唇部が尖りぎみになるもので，外面はケズリ。19・20は底部。19はわずかに底部が膨らみ，胴部に外開きに移行するので壺かもしれない。かすかにハケ目らしきものが観察され，底部外面はケズリのようだ。底径7.6cmを測る。20は上げ底で，外に張り出す。21は鋤先口縁をなす高坏で，外面は丹塗りの痕跡。　（木下）



第 35 図　44号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土鉄器（第36図）　全部で７点ほど出土したが，確実に製品といえるものは見当たらない。未製品や製品の製作段階で生じた剝片も含まれるのであろうか。２は残存長3.5cm，幅６mm，厚さ１mmの細長く扁平な鉄器である。形態的には４と類似しており，同じような形態の鉄器は50号住居跡から多量に出土した。５はこれで完形品で，刃などは作り出されていない。６は残存長8.5cm，幅1.0cm，厚さ３mmを測る。７には幅２mm，奥行き６mmの溝が付けられる。　（水ノ江）

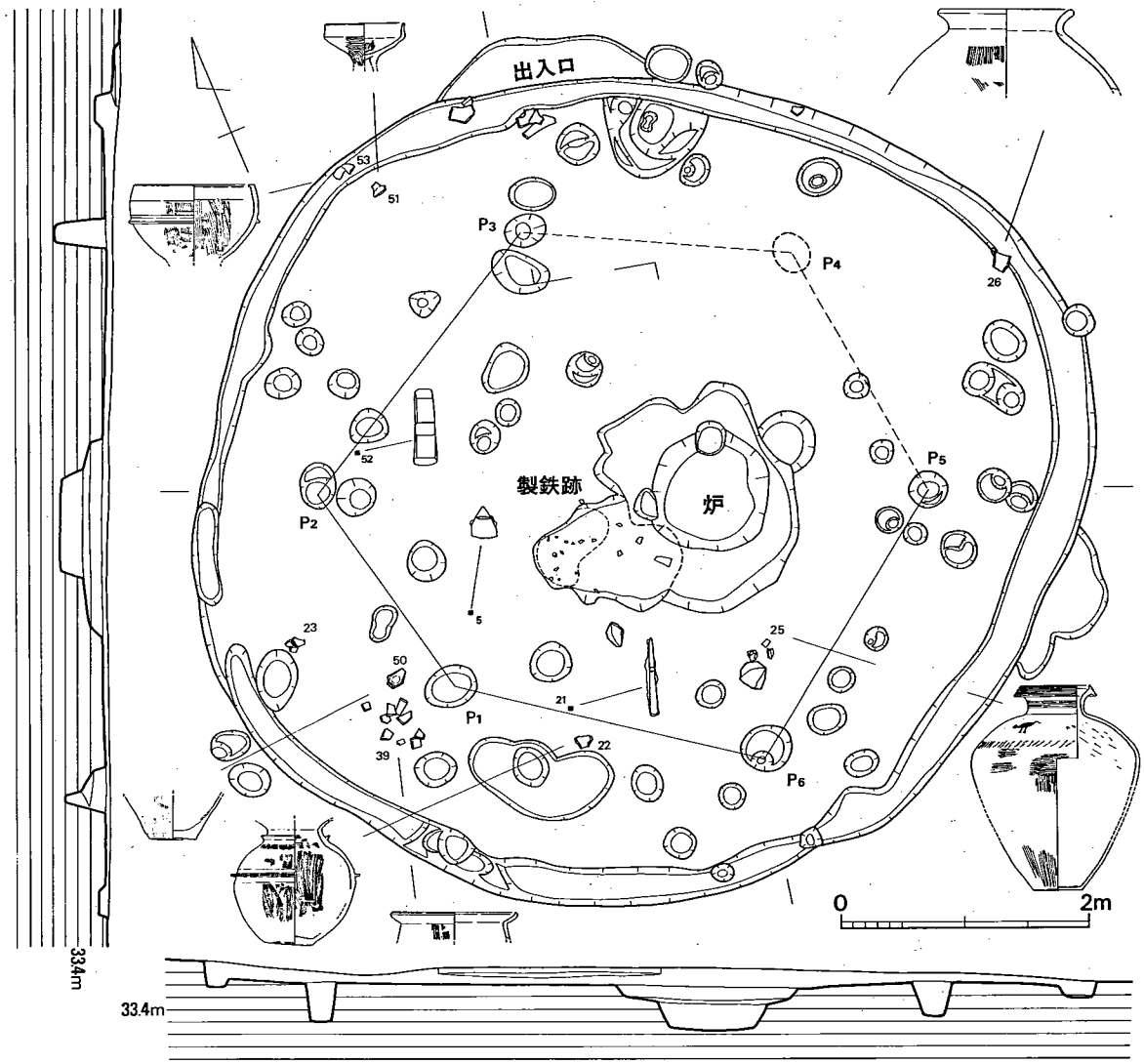


第 36 図　44号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）

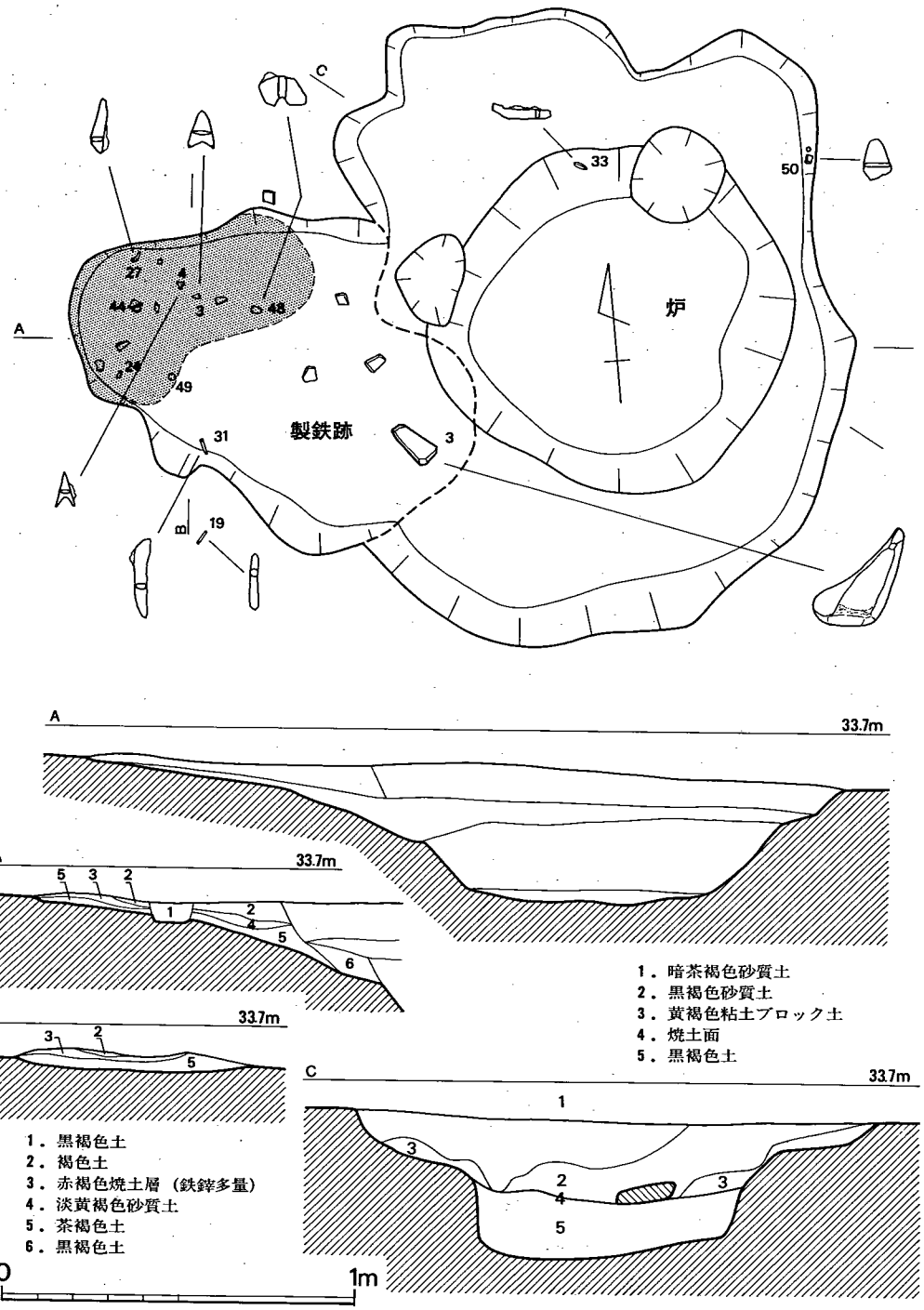
50号竪穴住居跡（図版12～16，第37～39図）

北西側に４軒が集中する弥生時代の住居跡の１つで，52号住居跡の北隣に位置する。全体を覆うように49号住居跡が，南の隅は37号住居跡が重複していたが，レベル差があったので全形を窺うことには支障がない。

プランは円形に近く，6.85～6.90ｍを測るが，正円ではなく，方形プランを意識した円形住居跡と言える。後述する61号住居跡が，まだ円形を意識した方形プランとなるのと微妙な差異がある。壁に沿っては幅20～30㎝，深さ10㎝内外の溝が，西側の一部を除いて巡る。北側には



第 37 図　50号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 38 図　50号竪穴住居炉跡・製鉄跡実測図 (1/20)

幅1.5m，奥行き0.4mのステップがあり，出入口となろう。主柱穴は壁の１mほど内側に建てられた６本柱であるが，Ｐ４は検出できていない。Ｐ１～Ｐ２間1.9m，Ｐ２～Ｐ３間2.6mを測り，平均2.41m。掘方は径30～35cmと小さく，25～40cmと比較的浅い。この柱穴間は固く締った床面で，その中心に炉跡と製鉄工房跡が並置される。

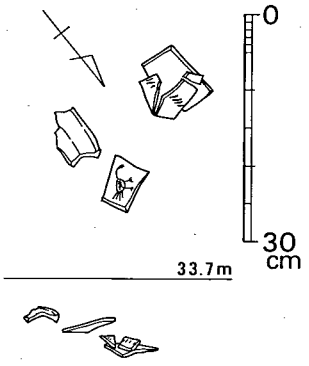
炉跡は２段掘りで，外側は長辺1.8m，短辺1.35mの長方形。内側は径0.97mの円形である。炉内では３・４層の間に強く焼けて固く締った面があり，その下の壁面全体も強く焼け，内は炭や粘土ブロックを含んだ黒褐色土となる。炉内より石鏃・敲石・不明鉄器（33・50）が出土した。

製鉄工房跡（第38図）　炉の西側に広がる不整形の落ち込みである。長辺１m，短辺0.85mの不整形プランで焼け面があり，徐々に炉に向って傾斜していく。特に土層図４層・５層，及び３層とした鉄滓を多量に含む土層も炉に向って傾斜して堆積しており，工房跡と炉跡が密接に係わっていた事が判る。アミで囲んだ焼土・鉄滓を含む範囲の土層は次の通りである。１層は新しいピット。２層は褐色土で微細な鉄滓，鉄サビを多く含むが焼けてはいない。３層は赤褐色土で，鉄滓，鉄片を多量に含む焼土層。厚さ１～２cm程度で，西側に堆積。４層は淡黄褐色砂質土でパサパサしており，灰層かもしれない。５層は茶褐色土で，若干の焼土を含んだ粘質の層。６層は黒褐色土で微細な鉄片と炭化物を少量含む。この工房跡西側３層の焼け面からは鉄鏃２点（３・４）や不明鉄器（24・27・31・44・48・49）が，東側の炉に近い箇所からは磨石（３）が出土した。

鉄器は工房跡を離れて床面にくい込む状況でも見られる。５の鉄鏃は工房跡西側70cmのところ，52の鑿は主柱穴Ｐ２の北側，他に■印（第37図）で不明鉄器が出土している。

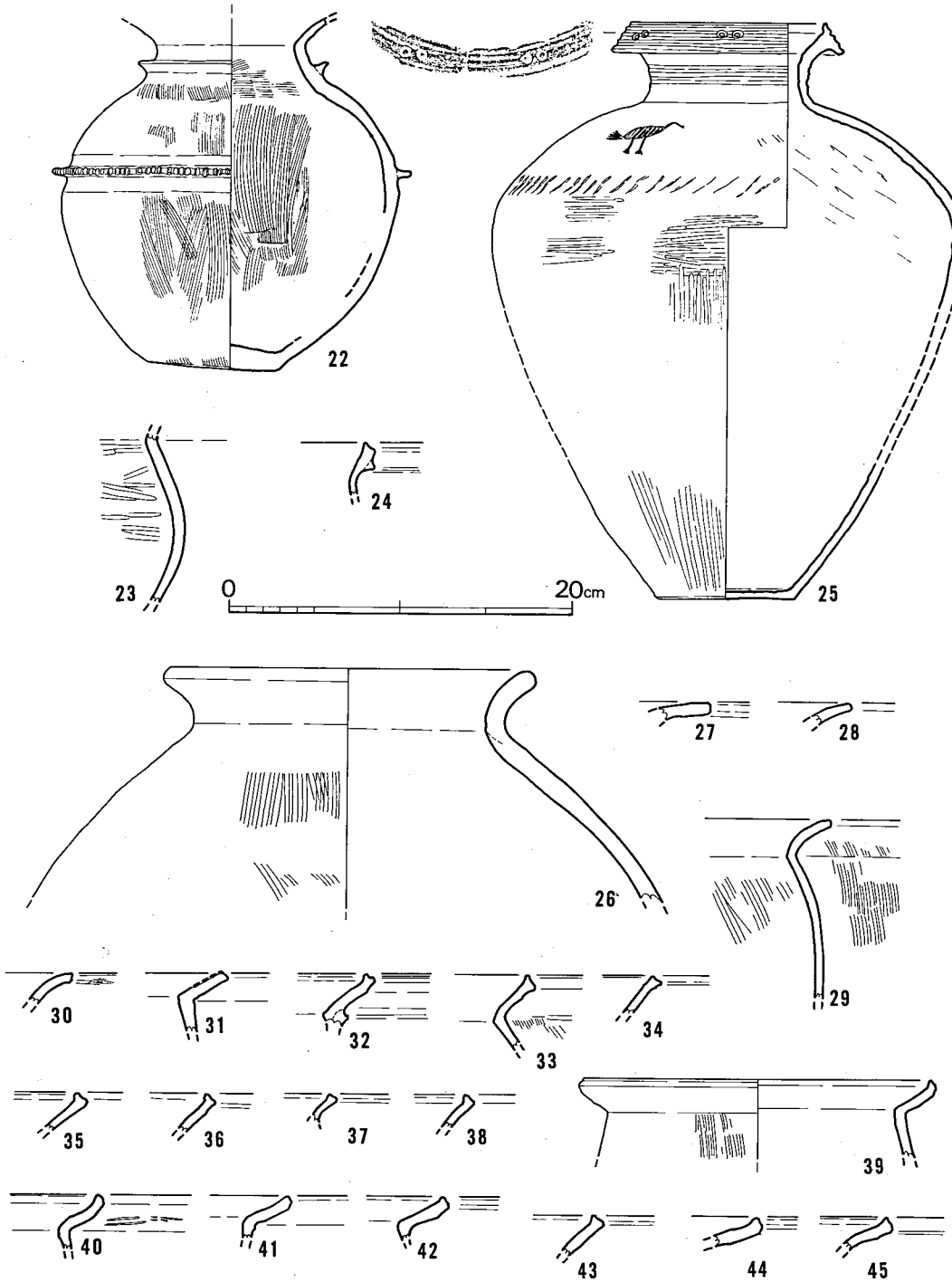
土器・石器の出土状況は，出入口の西側より51・53の高坏，東側で26の壺が出土した。炉の南西床面では23の壺，39の甕，50の甕底部が，Ｐ1とＰ6の中間地点では22の壺が出土した。

また，水鳥を描いた壺（25）は炉跡の南側40cmばかりの箇所から出土した(図版15)。土器は全形を留めない程に散逸した状況（第39図）ではあったが幸いにも復元することができた。この内に径３cmほどの破片に鉄片が錆着したものが見られ，実際に住居内で鍛冶が行なわれた事を実証した。



第 39 図　水鳥出土状況実測図 (1/10)

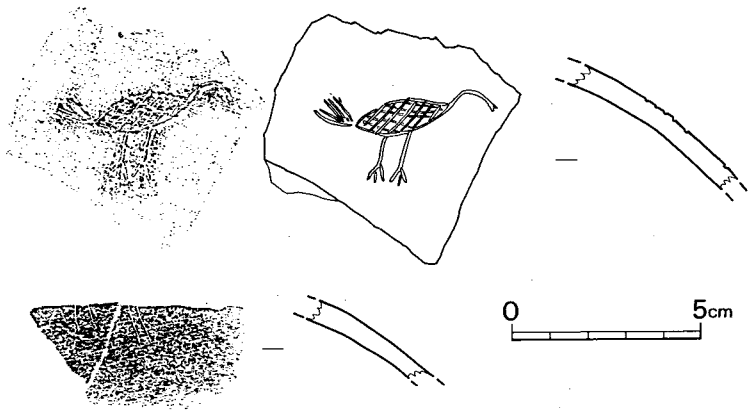
出土土器（第40・42図）　22～26は壺であるが各々別の器形をしている。22は口縁部を欠くが広口壺と思われる。頸部から大きく広がり，球形に近い胴部を持つ。頸部下と胴部最大径に８mmほどに達する高く細い凸帯を付す。胴部の凸帯には幅広の刻みを施す。底部は径８cmで若干突出する。外面は細かいハケ目調整を施し，一部は底部まで及んでいる。内面の頸部には横，そ



第 40 図　50号竪穴住居跡出土土器実測図 1　(1/4)

の下位は縦方向のハケ目を施す。なお，外面の凸帯上位にヘラ先による２条の細沈線が入るが，絵画では無さそうである。内面は黒灰色，外面暗赤褐色～黄褐色を呈す。胴部径21.1cm，残存高20.5cm。26は口径22cmだが胴部が大きく張る素口縁の広口壺。1.3cmと肉厚な「く」字形口縁部を持ち，端部は丸く納める。外面はハケ目の後にナデを，内面の頸部付近はケズリの後にナデ。以下は丁寧にナデ調整され，器面は平滑。23は無頸壺と思われる胴部片で，内面上部はミガキを，下面は擦過痕が残る。24は長頸壺の口縁部片で三角凸帯を付す。

25は口縁部に凹線文を，肩部に線刻で水鳥と鹿の足を描く壺形の絵画土器で，胴部の大半を欠く復原実測図である。直に立った頸部から外反し，上下に拡張した口縁部に４条の凹線文を施す。肩が張る胴上半部から徐々に窄まり，平底の底部に移行する。前述した口縁部の凹線文帯の中央に，２個を単位とする径６mmの円形竹管文を押圧するが，全周すれば６箇所に施文されていたらしい。頸部にも２条の凹線文がある。また，胴部最大径（28cm）のすぐ上位にヘラ先による細い「〜」状の刻みを横走させる。刻みは上下２回に分けて施され，長さ1.5～２cm前後である。通常は櫛ないしヘラ先による斜方向の刻みが，２回に分けて施文されているのは，後述する線刻絵画の水鳥を意識して「翼」をモチーフしたものであろうか。器面の調整について記す。外面の肩から頸部は縦方向のナデ。胴部上半は擦過の後に横方向のミガキ状の丁寧なナデ。底部付近は縦方向の荒いハケ目を施す。底部内外面ともケズリ。頸部以下もケズリで器壁を６～８mmほどに薄く仕上げる。頸部から口縁部にかけては丁寧なナデで，口縁部直下は沈線状になる。



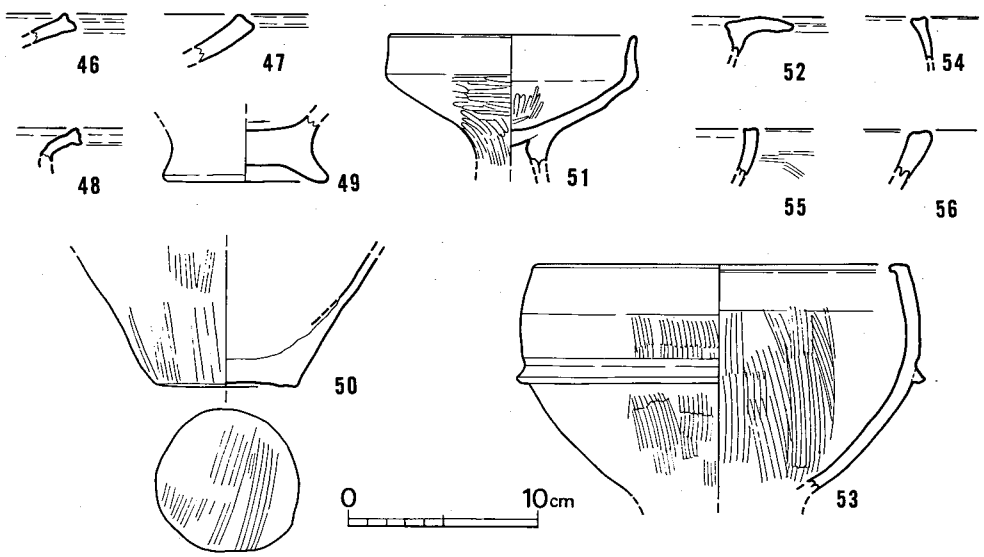
第 41 図　50号竪穴住居跡出土絵画(25)土器拓影（1/2)

第41図は肩部に描かれた水鳥と鹿の足である。両者の間隔は15cmほどあり，幅１mmほどの施文具による線刻である。右向きの水鳥は完全に遺存し，先割れした口嘴から５本に分かれた尾羽端まで4.9cm，体高2.3cmを測る。長めの首を中央から下に向け，卵形の胴部に，長い脚と３本に分れた指先を表現する。描き順は先ず，頭部→背部→腹部→胴部横線５条→胴部縦線７条の後に尾ないし足を描く。足は左側の指先まで一気に描き右→中央の順に施文する。なお，実測図には描いていないが，脚の中央を切って微細な沈線が横走し，それが水面を表現したので

はないかという指摘もあるが，沈線が水鳥・鹿のものと比べていかにも細いので絵画とは認めていない。しかし，全体の特徴は鷺など水鳥の姿を良く表現している。

一方，水鳥の頭の方向には2本1組で描かれた沈線が2組，計4本ある。両者の間隔は約1cmで，長さも1cm前後だが上部を描いた破片は残念ながら無かった。しかし既知の絵画土器から判断すれば鹿の足を表現したものに誤りなかろう。この土器の胎土には細砂と赤褐色粒を若干含み，色調は暗赤褐色を呈す。復原内口径12.9cm，外口径15.1cm，底径8cm，器高34.4cmを測る。

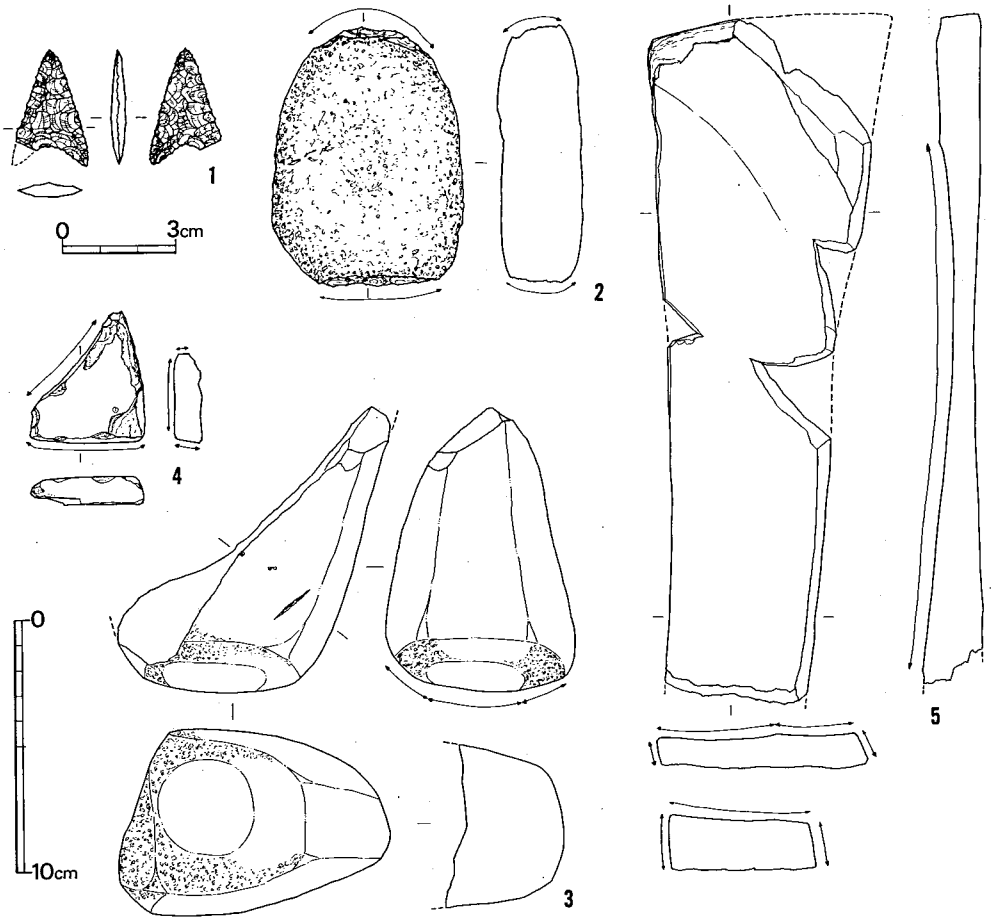
27～48は甕で5分類される。27は鋤形口縁と思われる。28～31は「く」字形口縁を呈すもので，外弯する口縁部の28～30と内頸部が強く屈曲する31に細分される。29は内外ともハケ目調整を施し，煤が付着する。33～38・48は「く」字形で跳ね上げ口縁部を有すもの。32のみは頸部に三角凸帯を持つ。いずれも口唇部が窪む。しかし，口唇部外端部が丸味を持つ32・35のタイプと下に若干張り出す33・34タイプに細分され，各々が別の系統を引く可能性がありそうだ。39～45は内弯する「く」字形の跳ね上げ口縁部である。39は口径20.3cmを測り，外面の頸部以下にハケ目を施す。口唇部がいずれも丸く納まるのが当類の特徴でもある。46・47は口縁部を若干広げて1ないし2条の凹線文を施す。46は跳ね上げ口縁の甕33・34と類似し，近い関係が窺われる。49・50は底部で，47は深い上げ底で，埋土より出土。跳ね上げ口縁をもつ甕の底部である。50は赤褐色を呈す若干上げ底の底部で，外面は荒いハケ目を底部まで施す。内面はヘラケズリされる。底部のハケ目は22の壺でも観察され，内面のヘラケズリは25の水鳥の壺にもある。底径7.7cmでやや大きめの石英粒多い。51・52は高坏である。51は坏部上部が若干外反するもののほぼ直立し，明瞭な稜線を有す。この稜線下1cmほどは面取り状に磨かれ，以下もへ



第 42 図　50号竪穴住居跡出土土器実測図2　(1/4)

ラミガキ。細身の脚部との境はしぼり痕が残り，ハケ目調整を施す。坏部上半から内面は丁寧にヨコナデ。口径13.2cmで白橙色を呈す。52は鋤形口縁部を有す。53は球形で深みのある鉢に近い器形だが，下端で反転し脚ないし台部が付くようだ。内弯する口縁部は短く内に突出し，口唇部は平坦に納める。中位に一条の凸帯を付けるが刻み等は入れない。内外面とも縦位のハケ目調整を施すが，口縁部下２cmはそれを丁寧なヨコナデで消しその境界が一種の文様効果として現われている。凸帯の形状は22の壺と類似している。赤褐色を呈し，内外とも化粧土を塗布する。口径20cm，残存高12.5cm。54～56は鉢でいずれも口唇部が窪む。

出土石器（第43図）　１は凹基無茎式の石鏃で両面とも丁寧な剝離を施す。長3.1cm，厚0.4cm，重1.6ｇを測り，乳白色の大分県姫島産の黒曜石で炉内より出土。２は上下端部に敲痕を有し，両側縁が若干抉れる敲石。体部中央部も若干敲打により凹む。炉内出土で凝灰岩製。長10.2cm，幅7.6cm，厚3.3cm。３は製鉄跡から出土した磨石状の石器で硬砂岩製。本来は方柱状を呈し，平坦な下端は細かな敲打痕と研磨痕が共伴するので，両方の機能を備えた石器であろう。他の

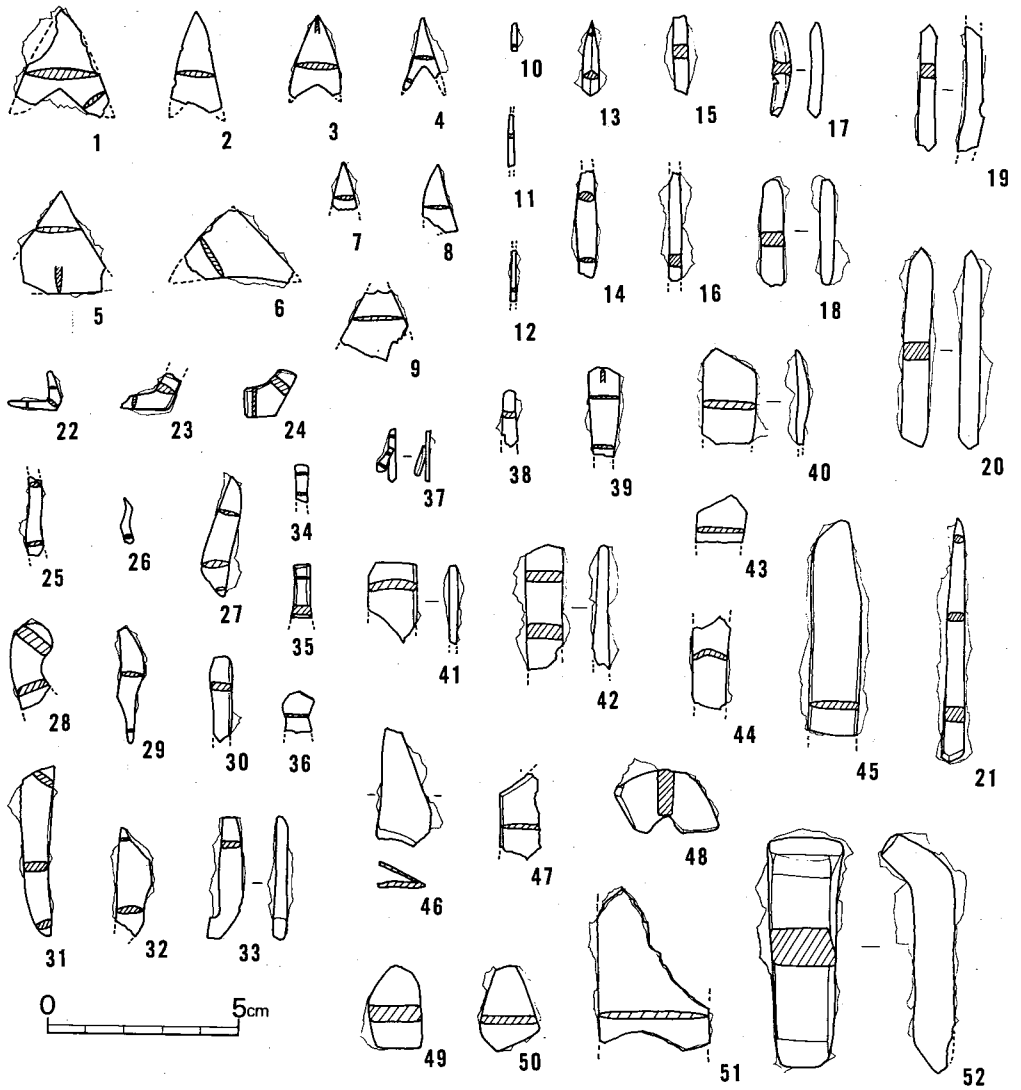


第 43 図　50号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3，１は1/2）

面はいずれも鏡面みたいにツルツルである。厚6.5cm。4・5は板状の砥石である。4は破損品を三角状に作り直し研面は1面。床面より出土し頁岩製。5は長27cmに及ぶ撥形の大型品で，中央部は厚さ9㎜で良く使い込まれている。出入口部前出土の砂質片岩製。　　(木下)

出土鉄器（第44図）　50号住居跡から出土した鉄器は数㎜程度の細片まで含めると120点余りに及ぶが，図示したのはその約4割にあたる52点である。確実に製品と言えるものは鉄鏃の数点だけで，大部分は器形や用途が判然としないものばかりである。ここでは，類似した形態のものごとに纏めて説明したい。なお，製鉄工房跡から出土したのは3・4・14～16・19・22・24・27・31・33・49・50である。

1～8は鉄鏃である。刃部は直線的で弯曲するものはない。基部は無茎で5のみ平基式であ



第 44 図　50号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)

るが他は凹基腸抉式である。長さに対して幅の大きいもの（1・5・8）と小さいもの（3・4・6・7）とに分かれるが，これは鉄鏃の大きさ自体にある程度関係しているようである。2は残存長2.6cm，最大幅1.4cm，厚さ2㎜。3は残存長1.9cm，最大幅1.4cm，厚さ2㎜。4は残存長1.9cm，厚さ2㎜。5は長さ2.5cm，厚さ2㎜。9は三角形を呈するが刃部を作り出しているわけではなく，鉄鏃ではない。39の先端部には刃部が作り出されているようであり，あるいは有茎の鉄鏃であろうか。

13・20・21は先端の尖った一群である。13は残存長2.0cm，断面は4×3㎜で三角形に近い。20は長さ5.3cm，断面は7×5㎜で方形を呈する。21は長さ6.5cm，基部の断面は5×4㎜の方形だが，先端部に近づくにつれて細く丸くなる。

10～12は針金のように極めて細長い一群である。径は1㎜程度で，断面形態には円形や方形がある。

14～19は断面形態が円形か方形で，細長く直線的に伸びる一群である。14の一端は丸くなる。残存長2.8cm，太さ5㎜。17・18の一端は丸く仕上げられるが，他の端部はいずれも欠損する。15は一辺4㎜，16は一辺3㎜の断面方形である。17の対峙する2面は窪み，断面は凹面形になる。残存長2.5cm。18の断面は7×4㎜の長方形。19は一辺4㎜の方形で残存長3.4cm。

22～24はL字状に曲がる一群。22はこれで完形。幅3㎜，厚さ1㎜。23は一端が欠ける。残存長1.6cm，幅4㎜，厚さ3㎜で断面は楕円形。24もこれで完形。最大幅9㎜，厚さは1～3㎜。

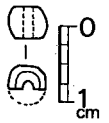
25～38は曲がったり歪んだりした一群である。端部が尖るものもあるがさほど鋭利でなく，意図的に作り出したような感じではない。25は残存長2.1cmで断面は4×1cmの扁平な楕円形。26も長さ1.2cmで断面3×1㎜のやはり扁平な楕円形。27・29・32の断面はいずれもレンズ状で，厚さは1～2㎜。28は幅1.0cm，厚さ3㎜。29の一端は細長くなる。30は残存長2.4cmで，断面は5×2㎜の扁平な楕円形。31は長さ5.5cmで断面はやはり扁平な楕円形。33は一端が大きく曲がる。長さ3.4cmで断面は4×2㎜の扁平な楕円形。34は一端が丸く仕上げられ残存長9㎜を測る。幅は4㎜だが中央部付近は若干狭くなる。35は一端が方形に仕上げられ，残存長は1.4cm。端部付近は5×1㎜とかなり薄いが，5×3㎜と次第に厚くなる。36も7×1㎜とかなり薄い。37は2×1㎜とかなり細くて薄い2本の棒状のものが接着した状態である。38は残存長1.5cm，断面は4×2㎜で弯曲している。

40～51は扁平である程度の幅を持った一群である。40は残存長2.5cm，幅1.5cm，厚さ2㎜で，端部は丸く仕上げられている。41は断面がわずかに弯曲する。42は幅1.0cm，残存長3.6cmで両端部は欠損するが，断面形態は場所によって方形であったり扁平な楕円形であったりする。43は幅1.2cm，厚さ1㎜。44は幅1.0cm，厚さ2㎜で断面は弯曲するが，側縁部は丸く仕上げられ鏃ではなさそう。45の一端は丸く仕上げられている。残存長5.7cm，幅1.4cm，厚さ2㎜。46は

V字状に折り返される。厚さは1～2㎜で幅は1.2cm。47は大きく欠損するが厚さは1㎜と薄い。48はこれで完形。大きく曲がり，幅1.2cm，厚さ4㎜で断面は方形。49・50はともに完形で，平面的には49が2.2×1.5cm，50が2.3×1.4cmの不整形。厚さは49が4㎜，50が2㎜を測る。51は残存長4.1cm，幅3.1cm，厚さ2㎜で両側縁には刃を作り出しているようである。

52の一端は大きく曲がり丸くなるが，もう一端は尖り片刃のような形態を呈する。鑿のようなものであろうか。長さ5.2cm，幅1.6cm，厚さ1.0cmで断面形態は長方形だが，曲がった先はやや丸みを帯びる。

出土玉類（第45図）　床面より出土した水晶製の小玉で半割品。長4.3㎜，幅5.3㎜，孔径1.1㎜，重0.1ｇ。上・下端部とも孔から1㎜ほどの幅で，平滑にされる。極めて透明度の高い良品。（水ノ江）



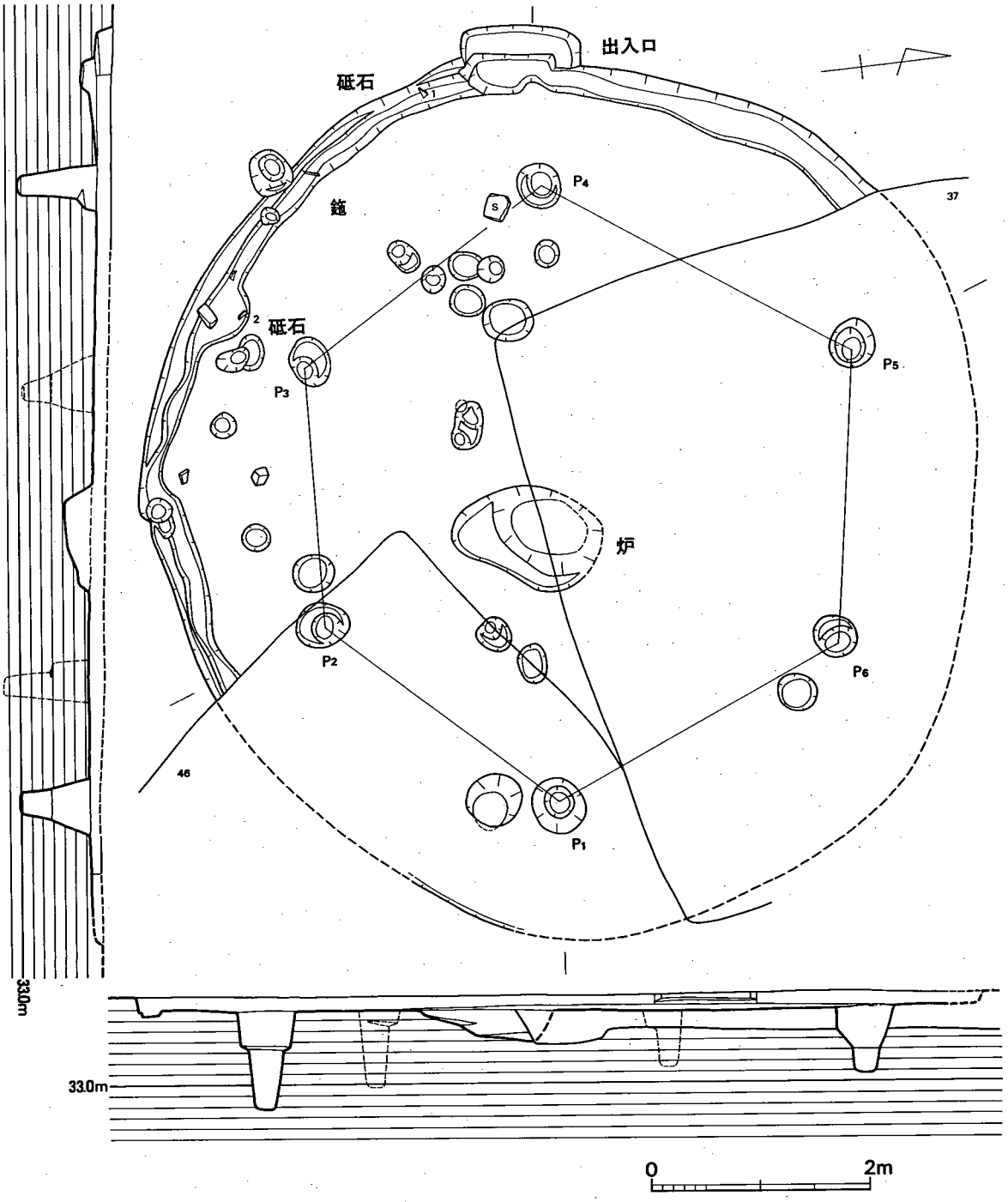
第45図
小玉実測図(1/1)

52号竪穴住居跡（図版17・18，第46・47図）

50号住居跡に南接する住居跡で，北半分を37号，東側を46号と2軒の古墳時代の住居跡によって切られている。残された東壁と炉・出入口を結ぶと径7.85ｍを測る円形プランを呈す住居跡で，50号住居跡と比べるとより円形に近い事が判る。壁に沿って幅20～25cm，深さ8～10cm内外の溝を巡らす。西側に2段目まで残る階段と出入口が設けられ，上段のステップは幅1.1ｍ，段差15cm，下段差は5～8cmで床面に達する。主柱穴は壁から1.2ｍほど内側に6本で構成され，その柱間はＰ2～Ｐ3間が最小で2.35ｍ，Ｐ4～Ｐ5間が最大で3.23ｍ，平均2.78ｍを測る。掘り方はいずれも2段掘りで深さ70～90cmと径が50cmに満たない割に深く掘り込まれている。この柱穴内空間の南に寄って190×85cmと長円形の2段掘りの炉がある。深さ25cmほどの炉内には炭化物が多量に認められ，炉壁は焼け締まっていた。

出土遺物は床面より57・58・60の壺，67の甕，鉄鏃・鉇が出土し，南側の壁溝内に砥石2，磨石，鉇が出土した。また，37号住居跡床面下層の調査で出土した土器は第49図に一括したが，土器の説明は一緒にする。

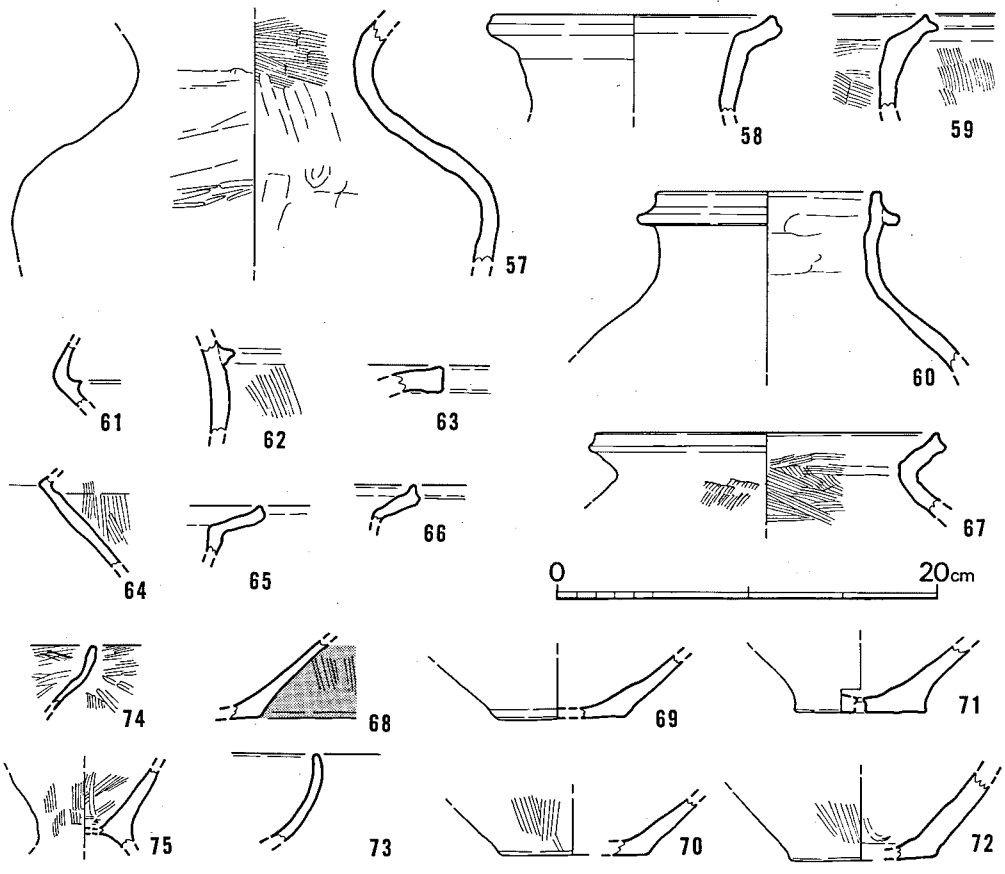
出土土器（第48・49図57～91）　57～63，76・89は壺。57は口縁部を欠損する資料で，肩が張り，扁平球状の胴部を持つ広口口縁の壺と思われる。頸部から肩部にかけては擦過しナデ，それ以下はヘラミガキを施す。内面の頸部は横方向のハケ目。頸部にはしぼり痕が見られ，以下は指押圧整形。58・59・76は内弯する口縁部と長い頸部を有す素口縁の広口壺で口唇部は丸味を持つ。内外面とも丁寧なヨコナデで，復原口径15cm。59は跳ね上げ口縁を呈し，口唇部の凹みは凹線文を施す技法による。内外面ともハケ目調整。76は口径16.6cmを測る。60は直口壺で口縁直下に一条の高く細身の貼り付け凸帯を巡らし，口唇部は平坦ないしわずかに凹む。5cmほどのびた頸部から大きく胴が張る器形。口径12cmを測る。61・62は胴部に一条の三角凸帯を持つ。89は円形浮文を持つ広口壺の広口部片。64～67，79～86は甕の口縁部で，「く」字形口縁



第 46 図　52号竪穴住居跡実測図（1/60）

の64・77・78,「く」字形の跳ね上げ口縁部を呈す65～67，79～84，口縁部の内弯度の強い跳ね上げ口縁を呈す85・86に分けられる。67は内外面ともハケ目を施し，復原口径18.2cmを測る。68～72，87は底部で，そのうち68～70は壺。68・90は丹塗り土器。74は75と接合しないが同一個体で小型の高坏。内弯する坏部に短い脚が付く。内外面ともヘラ先状の工具によるミガキか。73も埦形の坏部片で，丹塗り。90は鋤形口縁部を持つ高坏坏部。88は口縁部が内傾する

第 47 図　出入口部の階段

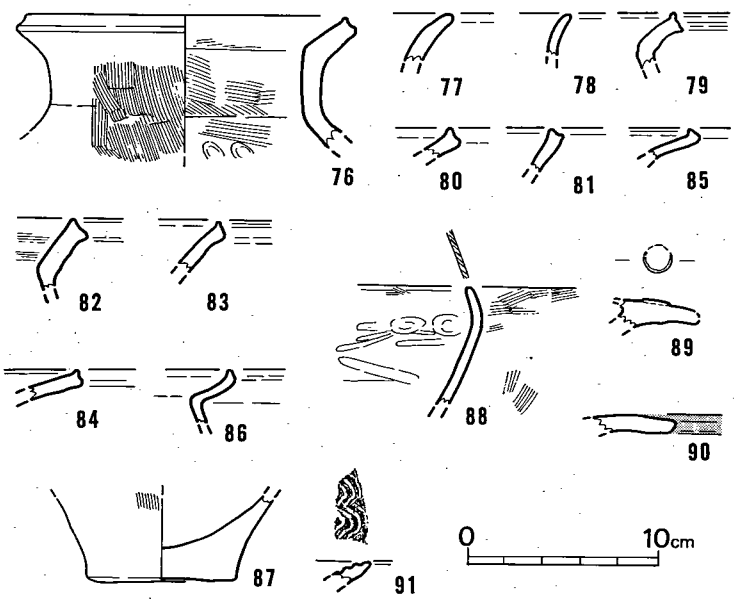


第 48 図　52号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4)

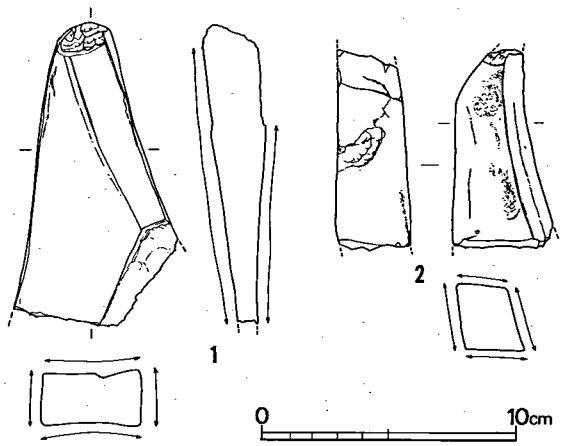
鉢と思われ，外面は密なハケ目，内面はミガキを施す。91は口縁部内面に４条の波状沈線文を描くが器形は不明。

出土石器（第50図）　１・２とも砥石で４面とも使用減りしている。１の右辺は凹状に近くなる。両者とも硬砂岩系の石材で，１は熱を受けている。（木下）

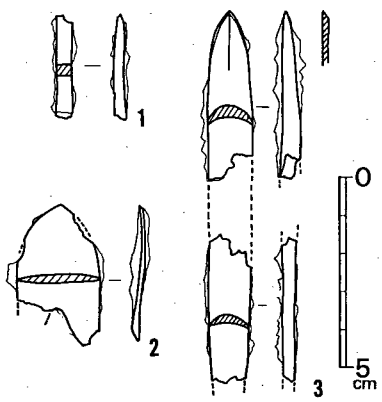
出土鉄器（第51図）　１は両端が欠ける。残存長2.7cmで，断面形態は４×３㎜の方形である。２の鉄鏃は残存長3.7cm，幅2.2cm，厚さ２㎜を測る。３は接合こそしないが同一個体の鉾である。先端部の残存長は4.5cmで，幅1.2cm，厚さ３㎜を測る。下部の残存長は4.0cmで，幅は1.0cmとやや細いが厚さは先端部と同じである。（水ノ江）



第 49 図　52号竪穴住居跡出土土器実測図２（1/4）

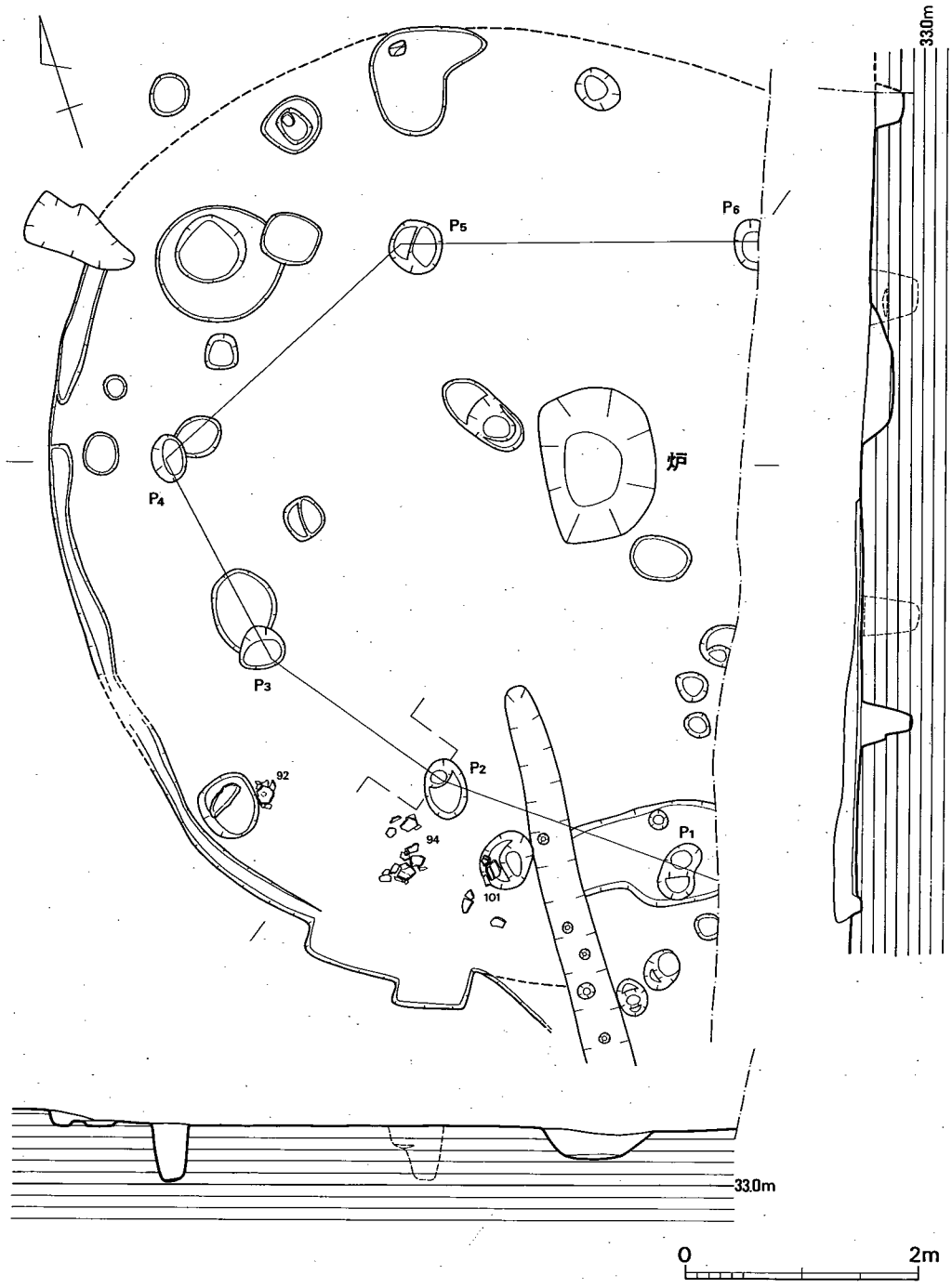


第 50 図　52号竪穴住居跡出土砥石実測図（1/3）

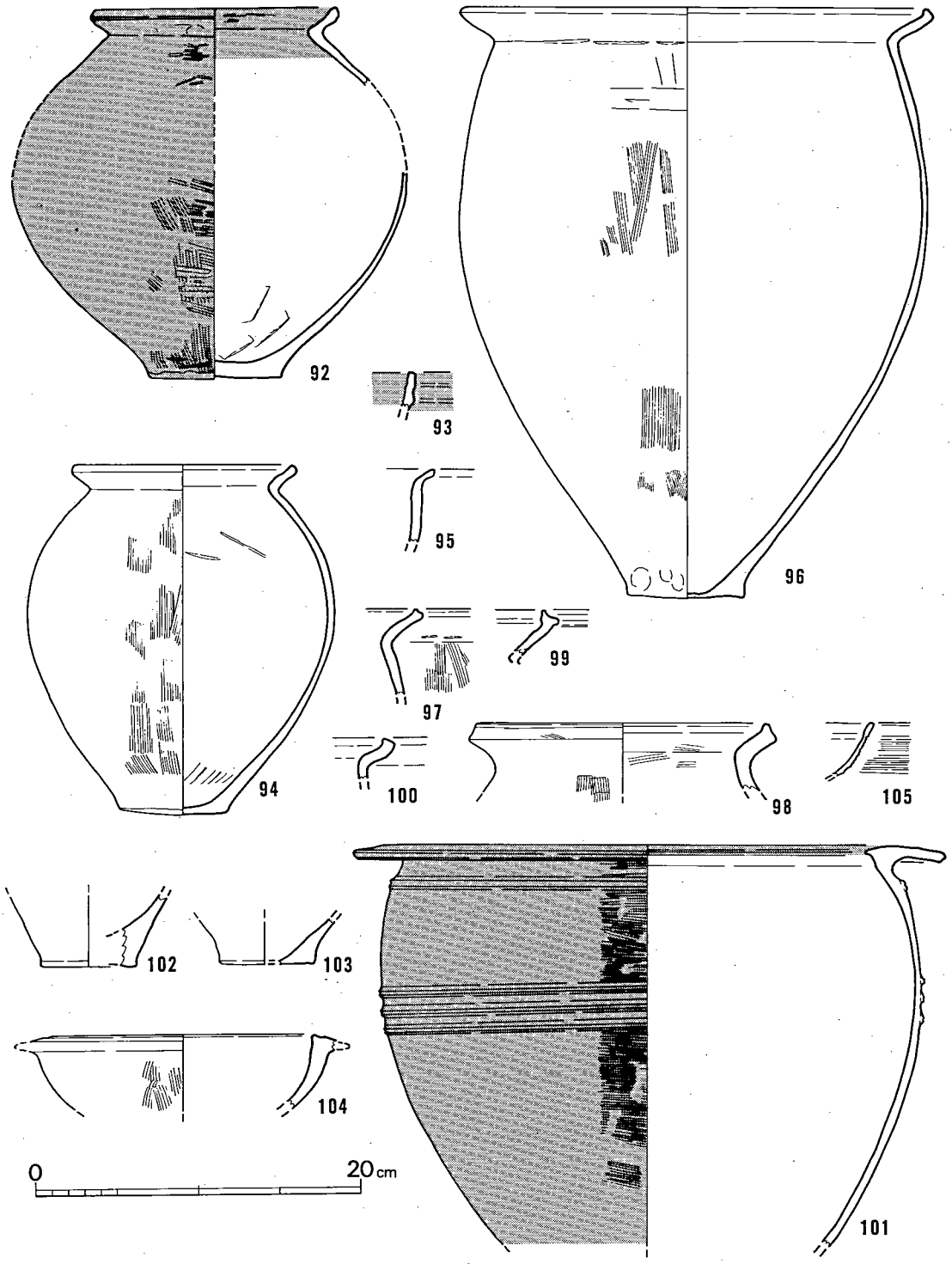


第 51 図　52号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）

60号竪穴住居跡（図版19，第52図）



第 52 図　60号竪穴住居跡実測図（1/60）

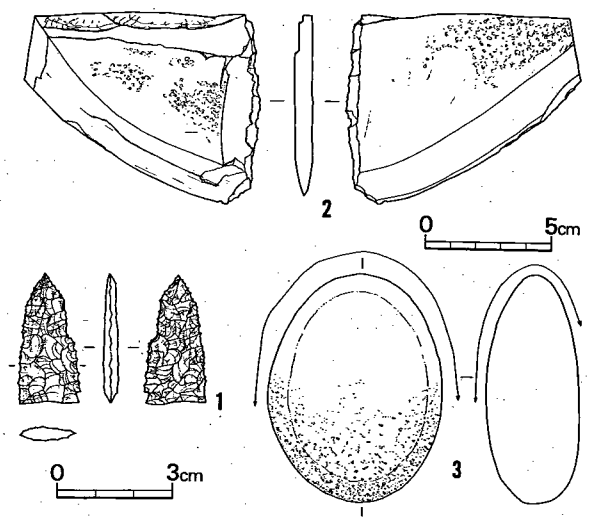


第 53 図　60号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

50・52号住居跡とグループを形成する住居跡で，52号住居跡の南東側４ｍの至近距離に位置する。北側を47・48号，南側を41号住居跡によって削平され，東側は水路があるために未調査であるが，径が約8.4ｍの円形住居跡になる。壁に沿って幅15cm，深さ５～10cmほどの溝を巡らすが，途切れる箇所もある。南側に幅1.4ｍ，奥行き30cmの突出部があり，出入口状を呈すが，レベルが床面と同じ点50・52号住居跡の出入口と構造的差異があるので出入口とするには問題がある。主柱穴は壁から1.1～1.4ｍほど内側に６本が確認されたが，最終的には８本柱となろう。間隔はＰ１～Ｐ２間2.2ｍ，Ｐ２～Ｐ３間1.9ｍ，Ｐ５～Ｐ６は広く2.8ｍの平均2.32ｍで，床面より45～60cmほど掘り込まれる。炉は住居跡のやや北寄りにある。南北1.3ｍ，東西0.95ｍの長円形で底面はほど平坦に近い。

出土遺物は床面より壺（92），甕（94・96・101），埋土中から石庖丁・石鏃・磨石・軽石が出土した。

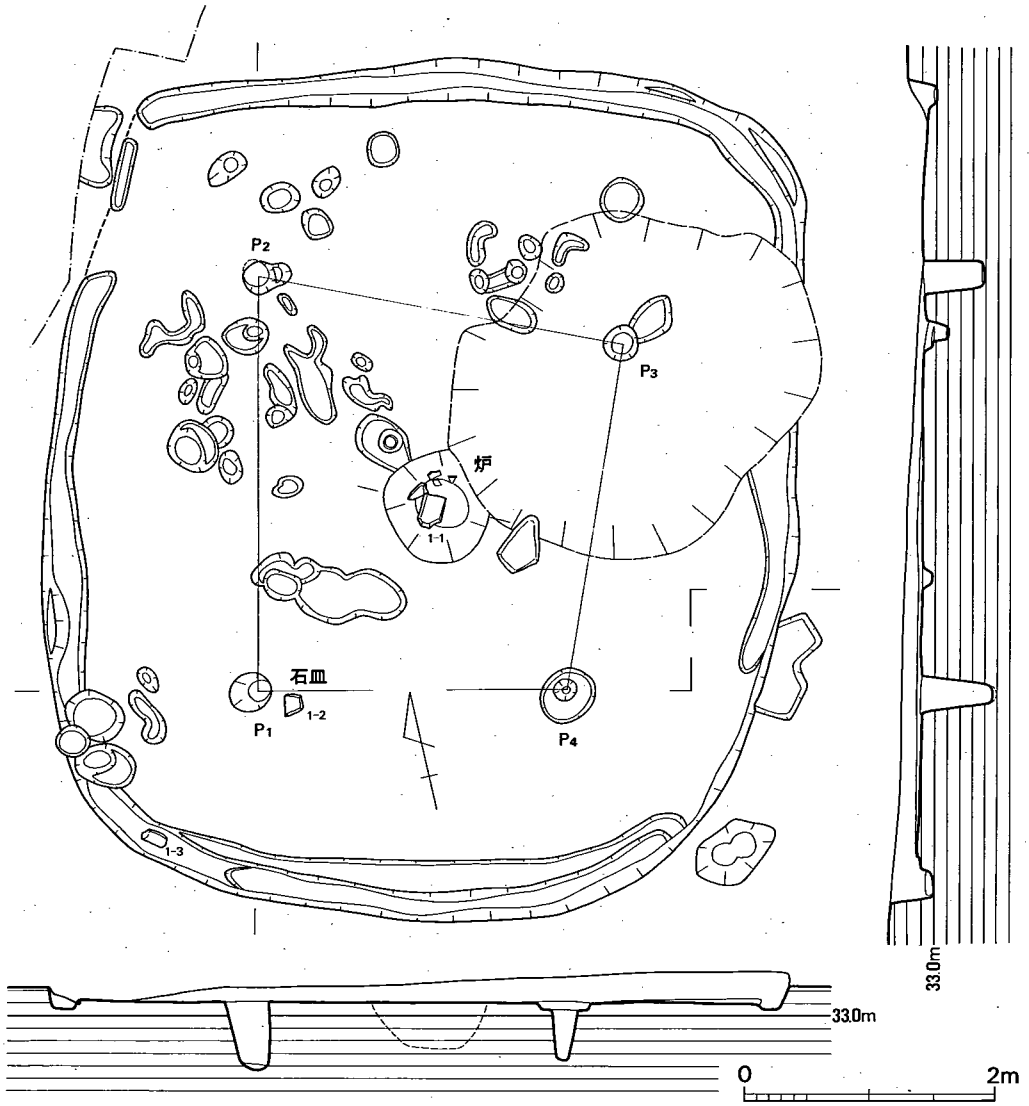
出土土器（第53図）　92は球状に近い胴部から直接短い「く」字状口縁を持つ短頸壺であるが，口縁部・胴上半部・同下半部は接合する訳では無く復原実測図。口縁部内面は内弯し，端部は丸く納める。底部は径8.1cmの平底で，ヘラケズリを施す。外面はハケ目の後にヘラミガキ，内面はナデ。口径14.8cm，胴部最大径24.5cm，器高22.7cmに復原できる。外面及び口縁部内側まで丹塗りである。93は長頸壺の口縁部破片で，Ｍ字状凸帯２条を付す。内外面とも丹塗り。94～101は甕で，口縁部の形態から５種類に分けられる。101は先端が垂れぎみの鋤形口縁の甕で，口縁部直下に１条，胴上半部に３条のＭ字状凸帯を巡らす。外面は丁寧にヘラミガキを施し，口縁部外面の頸部境にヘラ先状工具による「ノ」字状の短刻が部分的に見られる。内面はナデで，口縁部内側まで丹塗り。胎土は丹塗り土器特有の非常に良く精製されたもので色調は灰白色を呈す。口径は36.6cm，胴部最大径33.7cmを測る。94･95は「く」字形口縁の甕。94は胴部の張りが弱いので甕とした。胴下半は徐々に窄まり突出ぎみの底部となる。口縁端部はわずかに跳ね上げ状を呈す。外面はハケ目，内面はナデだが，部分的にヘラ先状工具痕がみられる。口径13.9cm，胴部径19cm，器高21.5cm，底径6.65cmを測る。95は口縁部が短く外反する。96～100は跳ね上げ口縁の甕で，100は内弯するタイプのもの。96は長胴で，最大径は口縁部。



第 54 図　60号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3，１は1/2）

胴部最大径は，上位⅓の所にある。平底の底部は径7.3cm。外面はヘラケズリの後に縦方向のハケ目調整。口径29cm，器高36.6cmを測る。98は肥厚した口縁部を有するもので，内外面頸部以下はハケ目。口唇部には１条の凹線文があり，他はナデを施す。復原口径18.1cm。102・103は甕の底部で平底。104は鋤形口縁の高坏で，脚部を欠く。半球状の坏部外面にはハケ目を施す。105は薄手の鉢だが混入品と思われる。

出土石器（第54図）　２は大型の石庖丁で鋭利で幅広な刃部を持つ。厚７㎜で粘板岩製。３は安山岩系の河原石を転用した磨石で，半分から上部に研磨痕が観察される。長径9.2cm，短径6.9cm，厚3.7cm，重350ｇ。１は黒曜石製で平基無茎式の石鏃で五角形に近い。両側縁は鋸歯状を

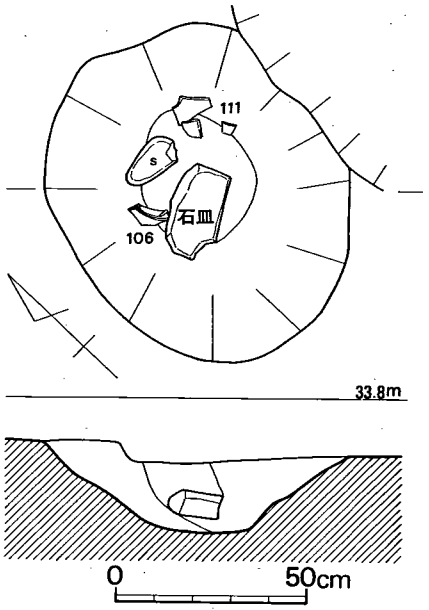


第 55 図　61号竪穴住居跡実測図（1/60）

呈す。長3.4cm，幅1.5cm，厚0.4cm，重1.8ｇ。

61号竪穴住居跡（図版20・21，第55・56図）

北西側の谷地区に近く位置し，古墳時代の58号住居跡に切られまた，上に建っていた家屋の基礎で東側の一部が破壊されている。各辺がやや弧状を呈す隅丸方形のプランで，南北6.9ｍ，東西６ｍを測る。床面まで５～25cmと削平されているが，床面の残りは良く踏み締まっている。東壁以外の三方には幅25cm，深さ10cm内外の溝を巡らす。主柱穴は４本で，各辺から1.6ｍほど内側に建てられ，掘方は径25～35cmと小さく，床面より45～60cm掘り込まれる。Ｐ１～Ｐ２間2.8ｍ，Ｐ１～Ｐ４間2.5ｍを測る。炉は住居跡の中央にある（第56図）。径90cmでＵ字状の底面まで17cm。炉内の土層は１層が褐色土で石皿が出土。２層は茶褐色土でパサパサした感じ。３層は黒褐色土で炭化物を含むが量的には多いものではない。



第 56 図　61号竪穴住居炉跡実測図（1/20）

出土遺物は少なく，炉内より甕106・111と石皿が出土した。なお石皿は炉（１—①）・床面（１—②）・壁溝（１—③）と３つに割れて出土した。

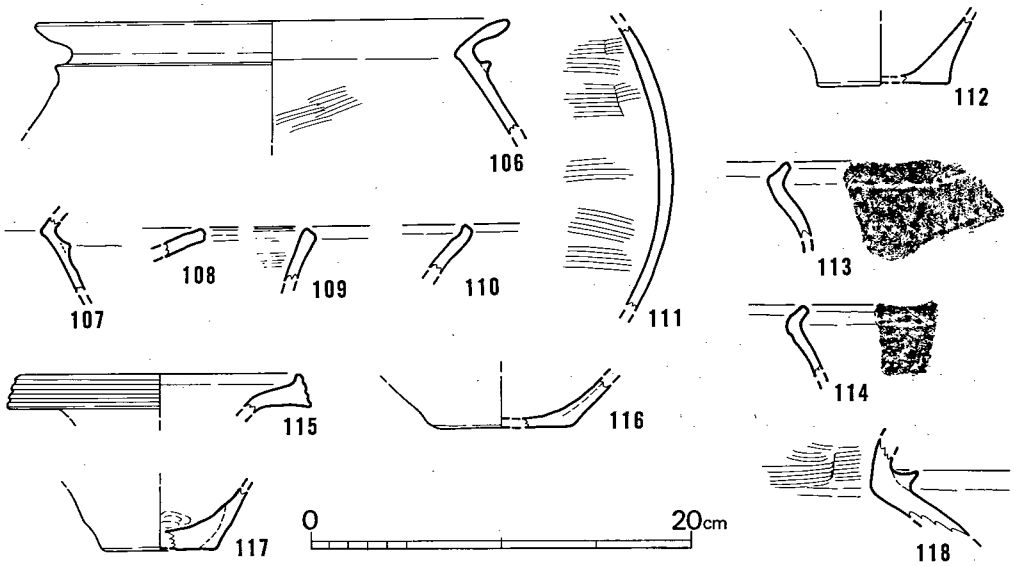
出土土器（第57図106～114）　106はやや肥厚する「く」字形口縁の甕で，頸部直下に三角凸帯を巡らす。内面はハケ目を施す。口径約25cm。111はその胴部破片であろう。107も同形で三角凸帯を付す。108・109は「く」字形口縁の甕。110は跳ね上げ口縁。112は底径７cmを測る甕の底部で，二次加熱を受けている。113・114は短い「く」字形口縁にやや胴部の張る器形の鉢ないし小型の壺で，頸部下に竹管によると思われる三角形の刺突文を施す。内面はヘラケズリ。

出土石器（第59図１）　長辺26.5cm，短辺24cm，厚9.4cmの石皿で，３つに割れて出土。上面が1.2cmほど磨り減る。輝石安山岩製で11.2kg。

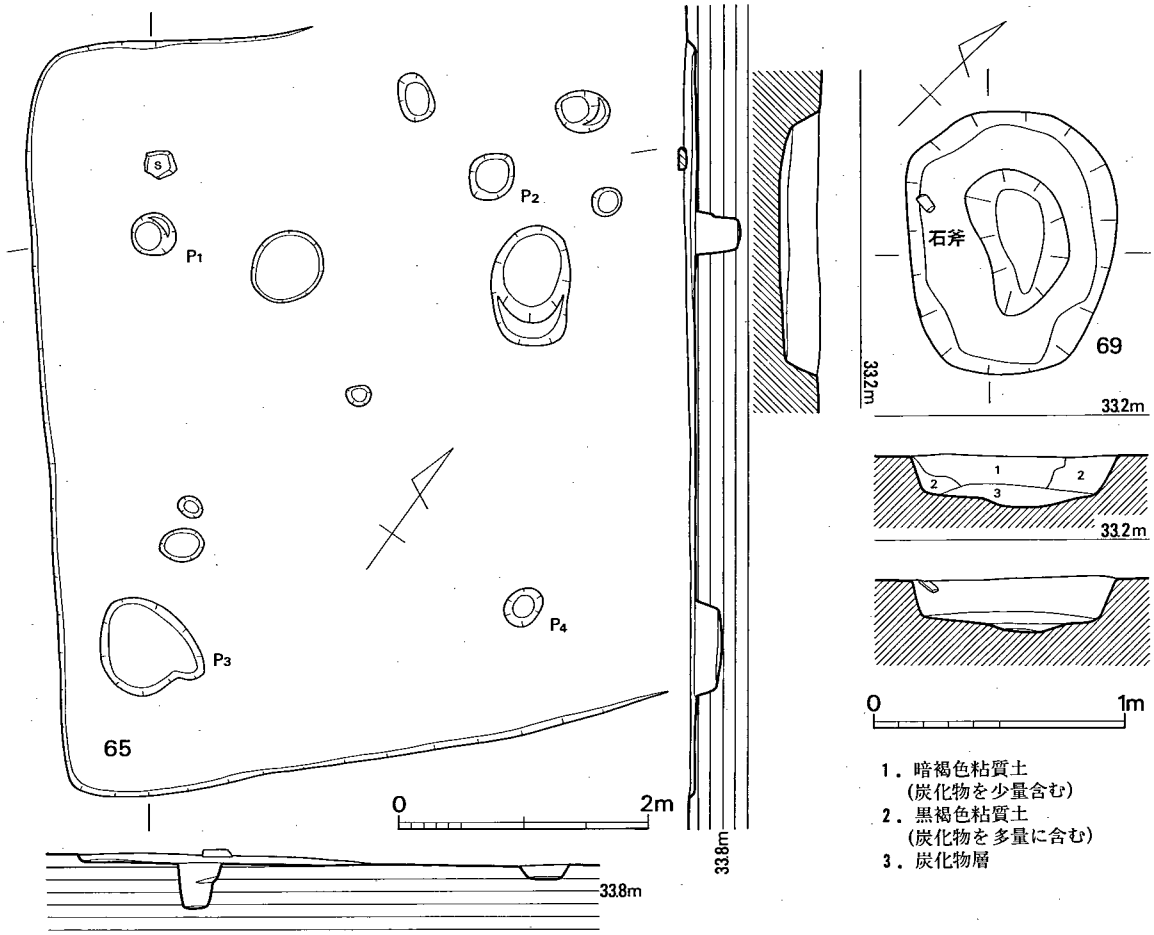
65号竪穴住居跡（図版21，第58図）

調査区の中央部北側に位置する住居跡である。この付近は旧谷が入り込み，湧水が著しく遺存度が悪い。長辺5.85ｍ，短辺4.7ｍの隅丸長方形プランを呈す。床面まで５cmにみたず，固く締まってもいない。柱穴は４本あるが，Ｐ１，Ｐ４以外は主柱穴らしくない。炉跡も存在しない。

出土土器（第57図115～117）　115は凹線文を施す壺の口縁部破片で，凹線文は３条。復原口径



第 57 図　61・65・69号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第 58 図　65・69号竪穴住居跡実測図（1/60，1/30）

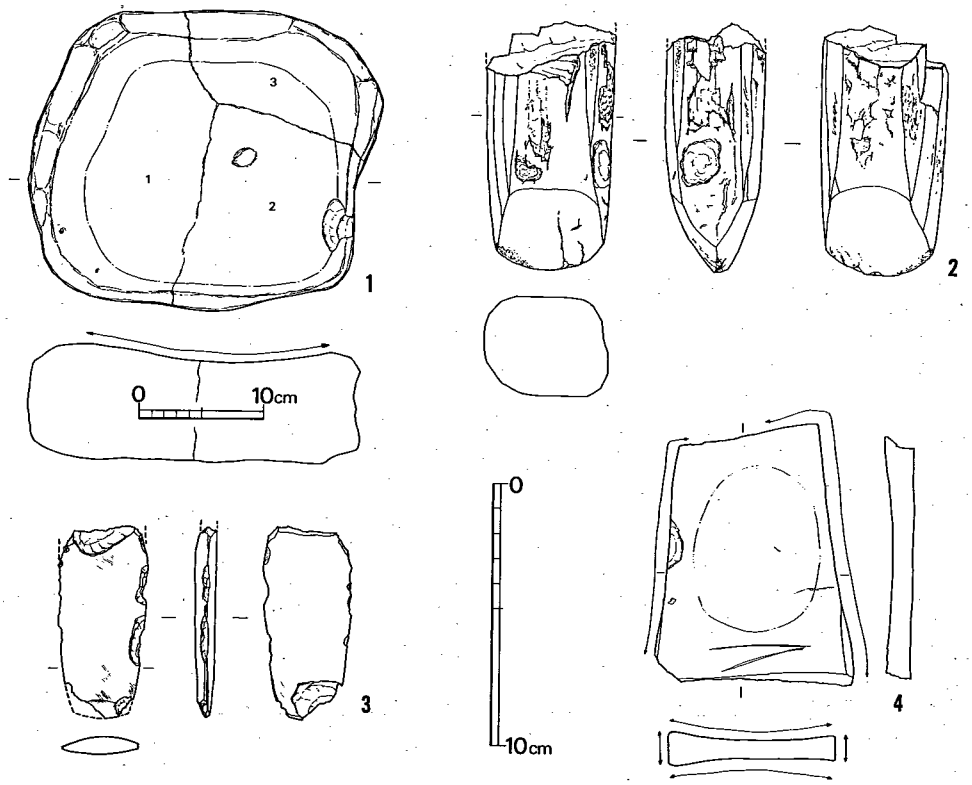
15.2cm。116は壺，117は甕の底部。

69号竪穴住居跡（図版21，第58図）

65号住居跡の東側に炉跡のみが検出され，一応住居跡番号を付した。長径1.05m，短径0.83mの長円形で2段掘り。炉内の埋土は1層が暗褐色粘質土で炭化物を少量含む。2層は黒褐色粘質土で，炭化物を多量に含む。炉底面の3層は純粋に近い炭化物層である。底面の中央部はやや窪み，深さ20cmになる。炉の周辺にはこれをとりまく柱穴等は無かった。炉内より壺の破片，磨製石斧が出土した。

出土土器（第57図118）　50号住居跡出土第40図22と似た壺の頸部片で，高い三角凸帯を頸部に付ける。内面はハケ目調整を施す。

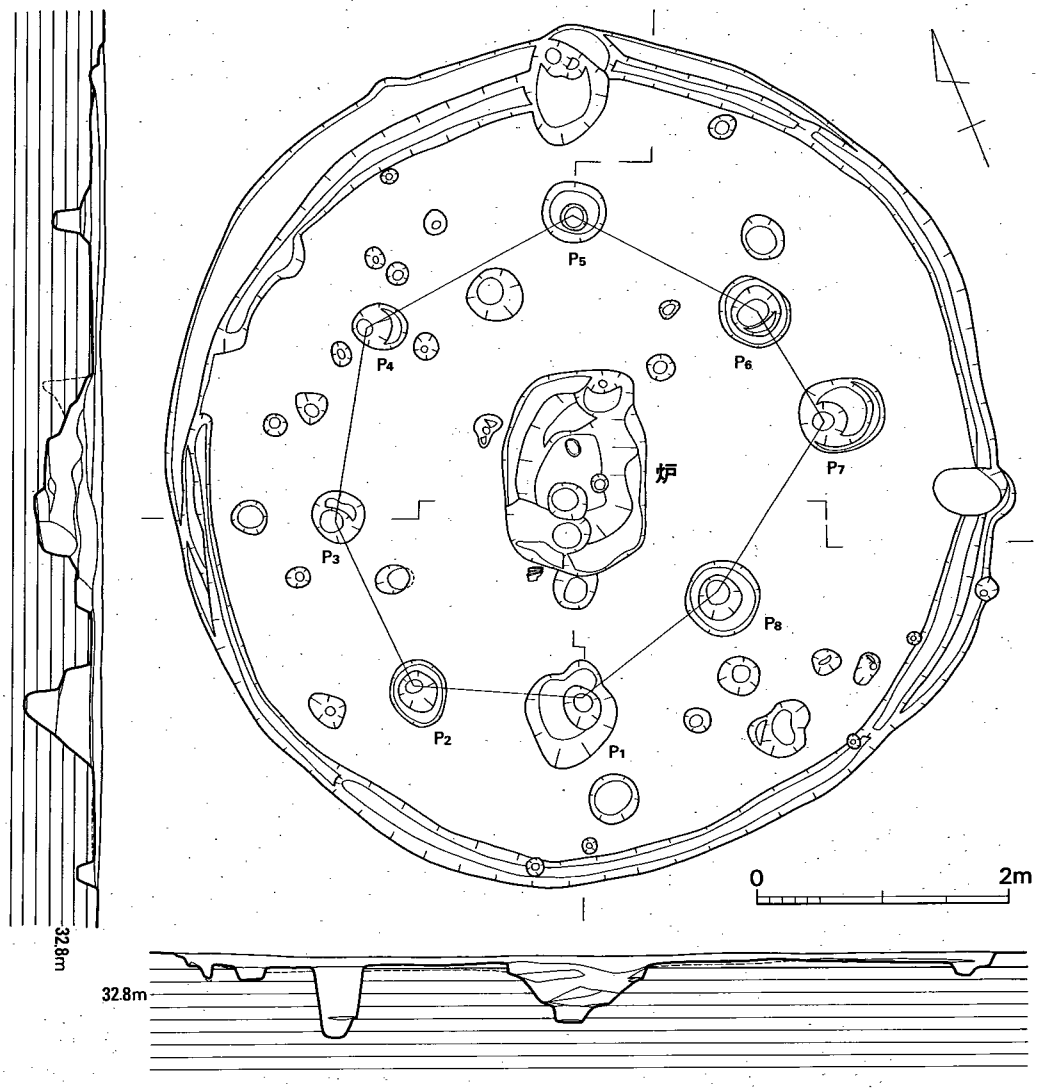
出土石器（第59図2）　蛤刃の磨製石斧で，体部は整形時の敲打凹みをそのまま残す。刃部全体にわたって刃がつぶれて，丸くなっている。炉内にあり，熱を受けたようで表面は剥離している。幅5.1cm，厚4cmで蛇紋岩製。



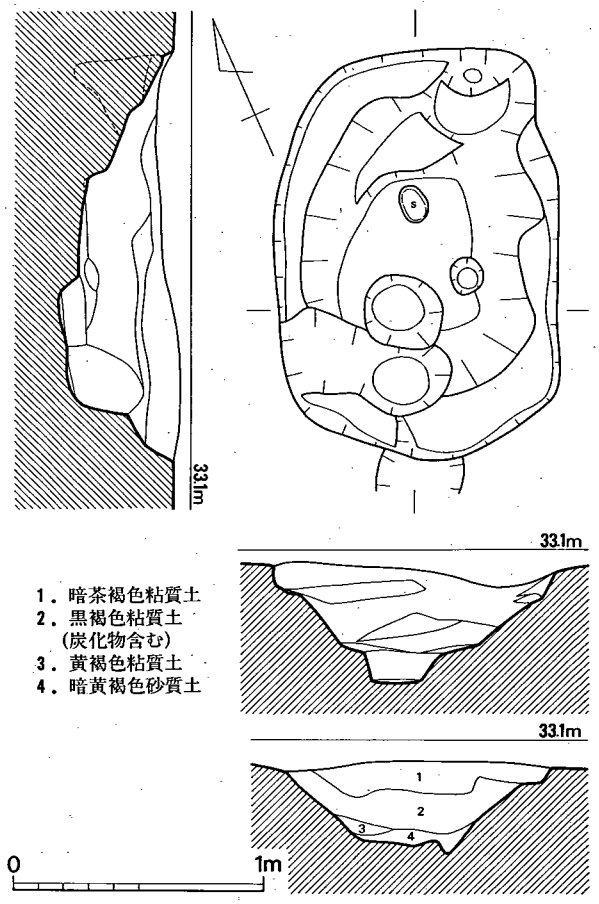
第 59 図　61・69・74号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3，1は1/6）

74号竪穴住居跡（図版22・23，第60・61図）

調査区の中央部北側に位置する住居跡で，その大半が67号住居跡と重複しているが，幸にも床面まで達しておらずその全容が判る。径6.65～6.8ｍのほぼ正円形プランを呈す。その壁に沿って幅15㎝，深さ10㎝の溝が巡るが，西側で途切れる箇所があり，その部分から東へ幅25～40㎝のテラスを持つ。床面まで10㎝もないが，特に炉周辺は固く締まる。主柱穴は炉の長軸に対応するＰ１・Ｐ５の両側に３本づつの計８本よりなる。壁より1.2～1.4ｍ内側で，その間隔はＰ１～Ｐ２間1.35ｍ，Ｐ４～Ｐ５間1.9ｍ，Ｐ６～Ｐ７間1.05ｍと不揃いで，平均は1.49ｍ。掘方は２段掘りが多く，床面より35～55㎝掘り込まれる。炉は住居跡の中央に置かれた長辺1.6



第 60 図　74号竪穴住居跡実測図（1/60）



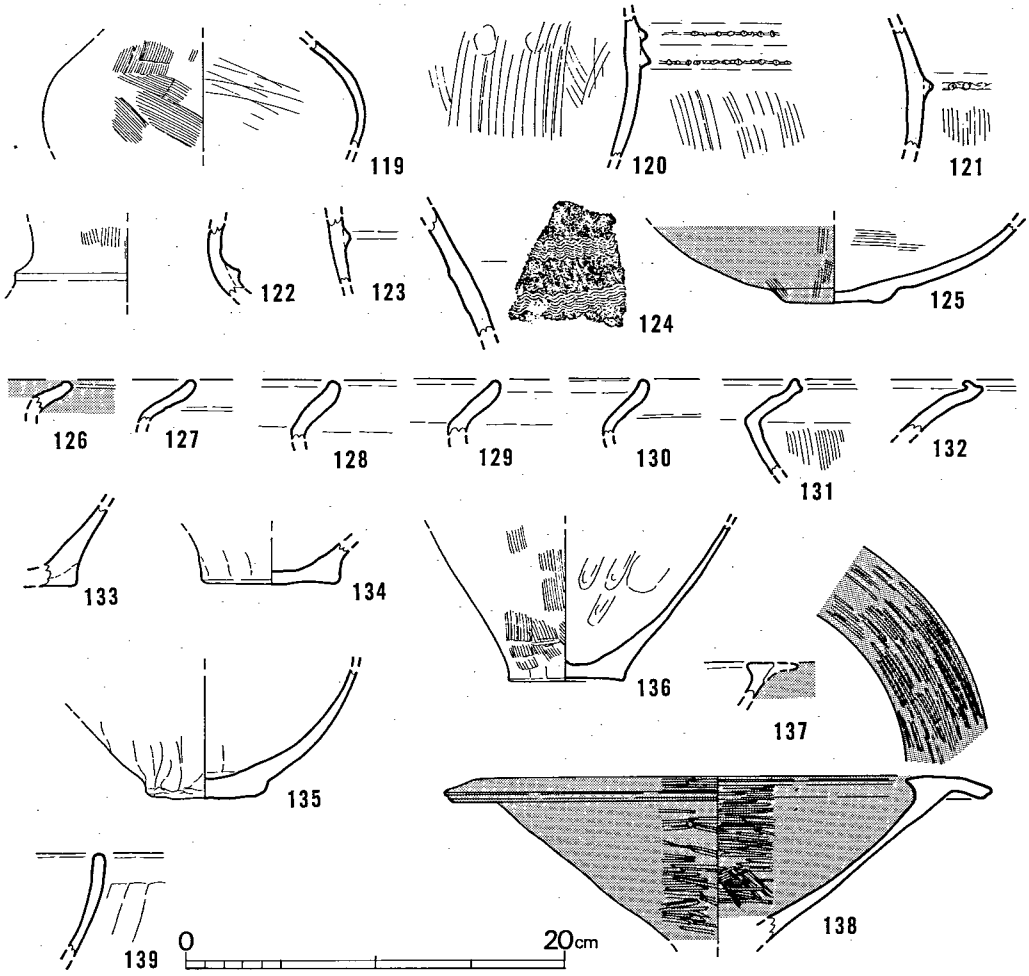
第 61 図　74号竪穴住居炉跡実測図 (1/30)

m，短辺1.15m，深さ0.47mの2段掘りの大きなもので，2層として分離した黒褐色土に多量の炭化物が含まれる。

出土遺物は床面より136の底部，138の丹塗り高坏や砥石が，炉内より119の壺が出土した。

出土土器（第62図）　119～125は壺。119は球状の胴部を有す。外面は細かなハケ目，内面は荒いハケ目を施す。120・121は三角凸帯に刻み目を施し，その他には荒いハケ目。122は頸部に三角凸帯をもつ広口壺で，頸部には縦方向のハケ目。123は「コ」字状凸帯を持つ。124は2段の櫛描波状文を描く。125は径7cmほどの突出した底部から胴下半部片で，底部近くには細かいハケ目を施す。外面は丹塗りされる。126～130は「く」字形口縁の甕で，口唇部を丸く納める。131・132は跳ね上げ口縁の甕で，132は鍵状になる。133～136は底部。135は突出する底部で，丸みのある胴部を持つので壺であろう。全体にひび割れが著しく，強い熱を受けている様だ。136は底径6.2cmを測るやや上げ底の底部。外面はハケ目調整，内面は指圧痕が見られる。137は鋤形口縁をなすと思われる高坏片で丹塗り。138も同形の高坏で，口縁端部は垂れ，口唇部は窪む。内・外面も丁寧なヘラミガキを施す。口径29cmを測り，丹塗り。139は口縁端部を丸く納め，内弯する器形の鉢で，胴部下半はケズリを施す。

出土石器（第59図3・4）　3は扁平な磨製石斧で，体部は綾杉状に研磨され，レンズ状の断面に仕上げる。頭部を欠損するが，残存長7.7cm，幅3.5cm，厚0.7cmを測り蛇紋岩製。4は厚さ1cm内外と扁平な砥石の完形品。形状は台形を呈し，長10.3cmで粘板岩製。



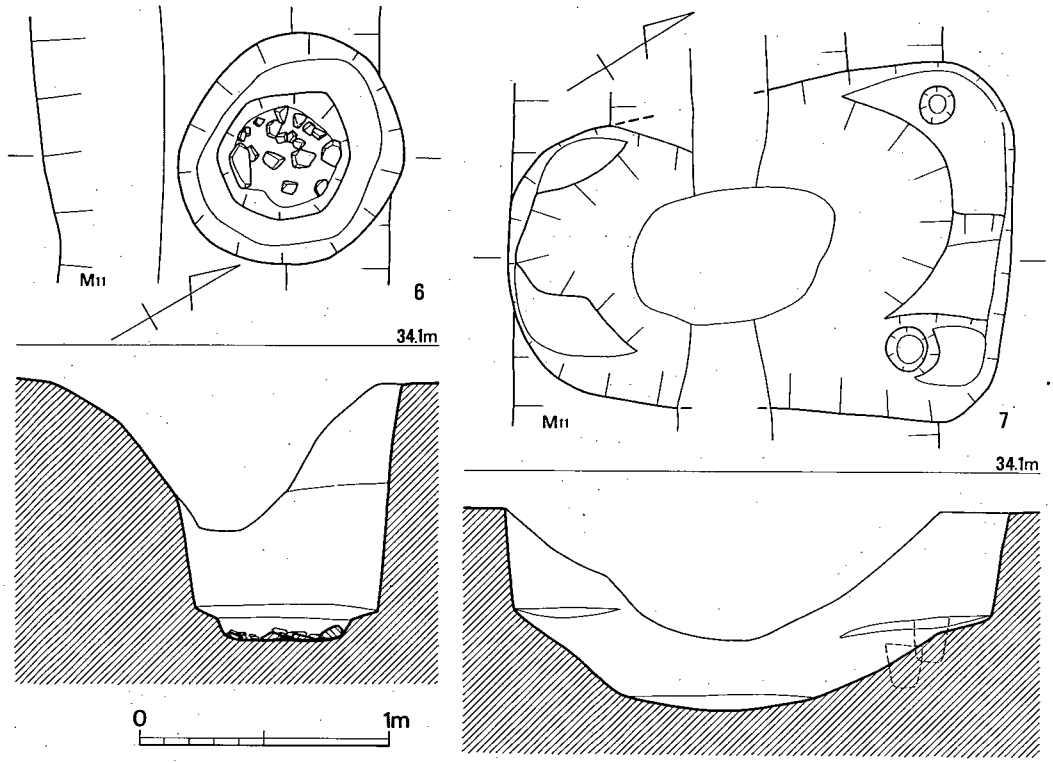
第 62 図　74号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

(2) 土　　壙

35号住居跡の北西に２基並んで位置するが，両者とも11号溝によって切られている。

6 号土壙（図版24，第63図）

35号住居跡と７号土壙の中間に位置する。底辺付近で一回り小さくなる２段掘りの土壙で，平面プランは南北0.95ｍ，東西0.85ｍの長円形を呈す。１段目はほぼ垂直に掘り込まれ，最下底は川原礫層に達する。埋土はわずかに粘質を帯びた黒褐色土。現在でも湧水面が礫層直上にあり，井戸の可能性がある。

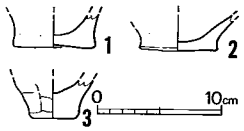


第 63 図　6・7号土壙実測図 (1/30)

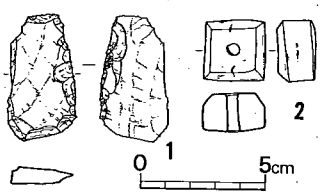
出土遺物は少なく弥生時代の甕と，スクレパー等が出土したに過ぎない。

出土土器（第64図）　いずれも甕の底部で，1は若干上げ底になる。2は反対にやや突出する底部で，径6.3cm。3は径4cmと小さく，2.1cmと厚手。

出土石器（第65図）　1は安山岩製のスクレパーで，片縁のみに調整を加える。2は1辺が2.4cmの正方形で，厚1.5cmの台形を呈する石材は，全面とも丁寧に研磨され，その中央に孔をもつ。孔径0.4cmを測る。滑石製で19.8g。用途不明の石器で，混入品であろう。出土遺物から，弥生時代中期末から後期頃の井戸状遺構と思われる。



第 64 図　6号土壙出土土器実測図 (1/4)



第 65 図　6号土壙出土石器実測図 (1/3)

7号土壙（図版24，第63図）

6号土壙の西に接して存在する。南北2.0m，東西は1.05～1.35mと北側に拡がる隅丸長方形

プランを呈す。その中央部を11号溝が東西方向に走る。南北辺とも，中位にテラスを持つが，それ以下は徐々に窄まり，深さ0.8mの「U」字状の底面となる。埋土は6号土壙と同じ粘質の黒褐色土で，遺物はないが弥生時代中期末頃であろう。

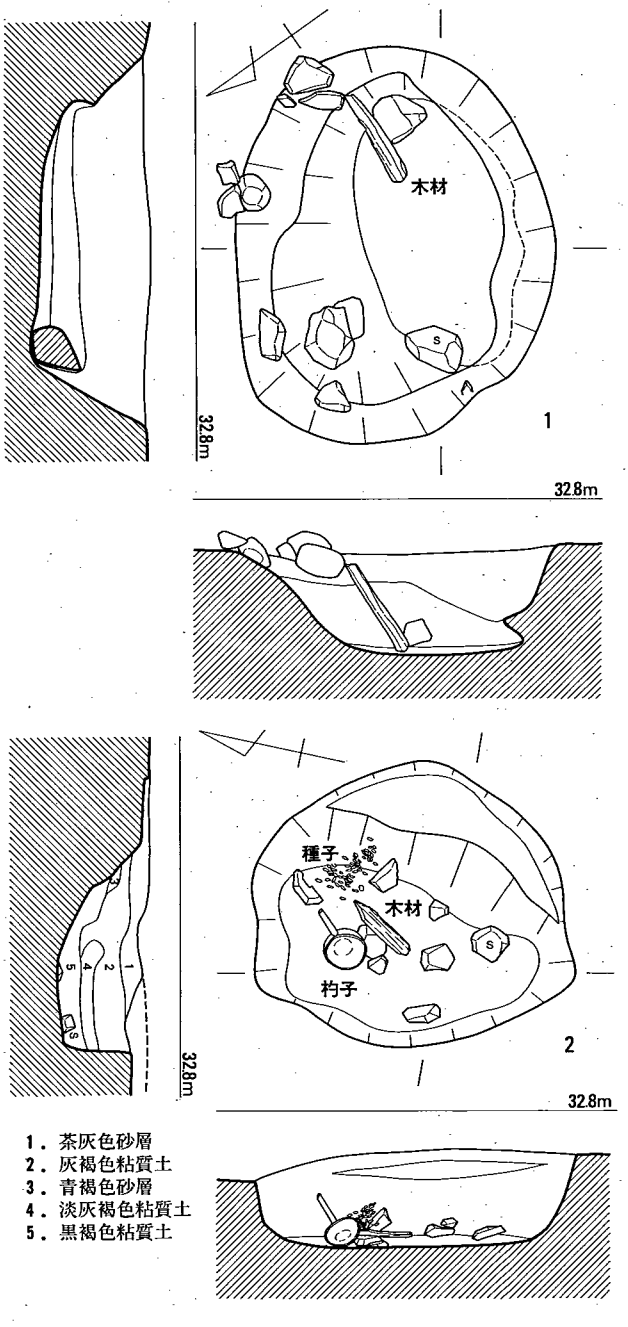
(3) 貯蔵穴

谷地区の18・20区西側に2基並列して位置する。標高32.75mの谷最下層の等高線に囲まれた中央部の最も低い箇所に検出された。両者とも木製品・種子・葉を多く出土したので貯蔵穴として機能していたのであろう。

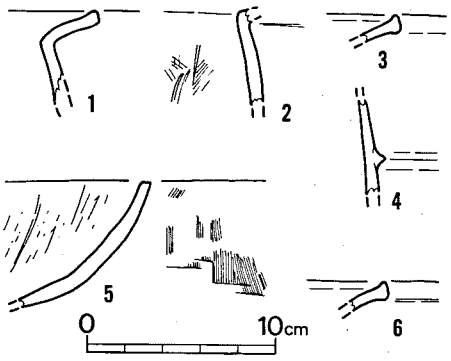
1号貯蔵穴（図版25，第66図）

北側に位置する貯蔵穴で，東西1.6m，南北1.28mの長円形に近いプランを呈す。深さ45cm内外のほぼ平坦な底面から緩やかに立ちあがる。貯蔵穴の上部は河原石で覆われていたが，蓋の重石という訳ではない。底面の15cm上部から木の葉やカヤの実が出土し始めたが，2号貯蔵穴と比べると量的に少ない。なお，底面から斜めに立て掛けた状況で長さ40cmの枝材が出土しているが，未加工である。

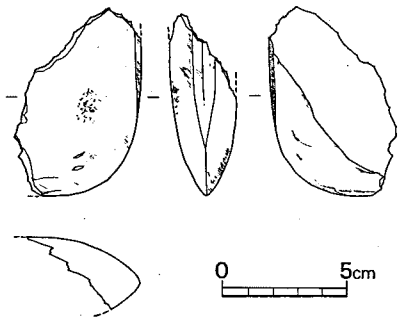
この貯蔵穴を覆うように第283図の田舟が出土しているが，田舟は粘土層下部，その下に河原石が現われ



第 66 図　1・2号貯蔵穴実測図（1/30）



第 67 図　1・2 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)



第 68 図　2 号貯蔵穴出土石斧実測図 (1/3)

第 69 図　2 号貯蔵穴の埋土

るので，田舟の時期は，貯蔵穴より新しく，古墳時代に入ろう。貯蔵穴内より甕・鉢の破片が若干出土した。

出土土器（第67図 1 ～ 5）　1・2 は「く」字形口縁の甕で，2 の内面はハケ目。3 は跳ね上げ口縁の甕。4 は胴部に 1 条の三角凸帯を有す。5 は浅鉢に近い器形と思われるもので，口唇部はやや凹む。外面は木目の密なハケ目，内面は擦過痕が見られる。

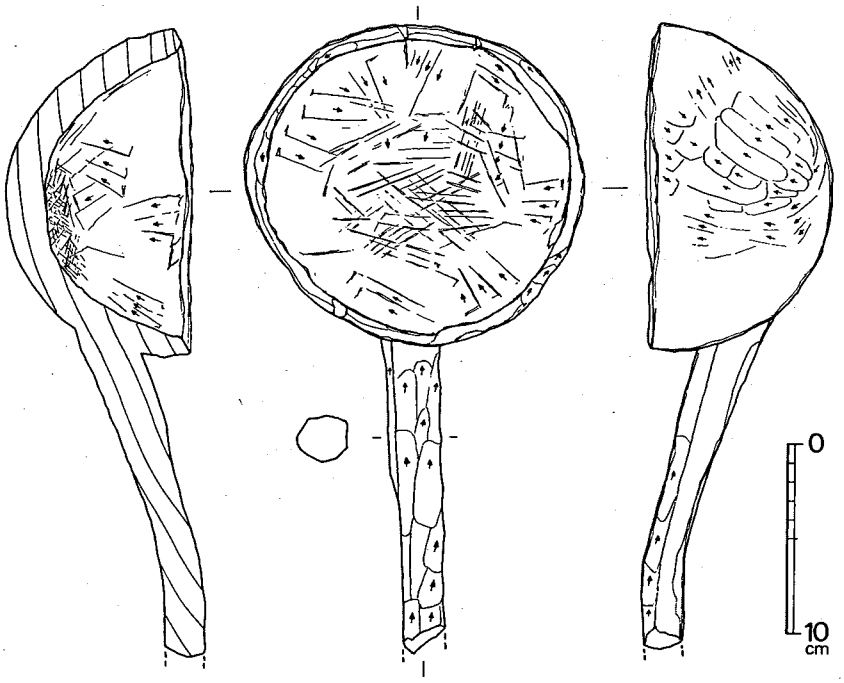
2 号貯蔵穴（図版25・26，第66・69図）

18区黒褐色粘土層の下に検出され，南北1.3m，東西1.18mの円形に近いプランを呈す。東側上位にテラスを有しているので，東は緩く，西・北に直に近く立ちあがる。底面は1.1m×0.6mの平坦な長円形で，1 号貯蔵穴と同じ規模を持つ。貯蔵穴内の埋土は 5 枚で，1 層の茶灰色砂層は谷部全体を覆う土層でもある。2 層は灰褐色粘質土で20cmほど堆積する。この層の下位では木の葉が出現し始め，若干の炭化物も含む。3 層の青褐色砂層は壁面が崩壊したもの。4 層は淡灰褐色粘質土で炭化物を多く含む。5 層は最下層の黒褐色粘質土。挙大の礫を若干含む締まりの良い粘土層中に炭化したカヤの実が多量に含まれ，その内に立て掛けた状況で杓子が出土した。また，未加工ではあるが，径 6 cm，長30cmほどの枝材も杓子と伴に出土している。この棒状の枝材は 1 号貯蔵穴でも見られ，貯蔵穴と何らかの関わりがあるのであろう。

出土土器（第67図 6）　跳ね上げ口縁の甕であるが，跳ね上げ部は丸味を帯びている。

出土石器（第68図）　蛇紋岩製の蛤刃石斧の刃部片。整形時の敲打痕をほとんど残さないほど丁寧な研磨を施す。刃部付近の幅2.8cm。　（木下）

出土木器（第70図）　この杓子は柄の先端部が欠損するものの，ほぼ完形に近い状態で出土した。残存長33.5cm，椀部径17.3cm，高さ9.8cm，厚さ2.0cm，柄先端部径2.1cmを測り，柄と椀部が繋がったクスノキの一木造である。椀部の口縁端部は面取りがなされ，内面の調整は口縁部から底部へ向けて下方に施される。底部は様々な方向から調整が加えられる。外面の調整も口縁部から底部へ向かうものであるが，若干斜めになる。（水ノ江）



第 70 図　2号貯蔵穴出土杓子実測図（1/4）

(4) 甕棺墓

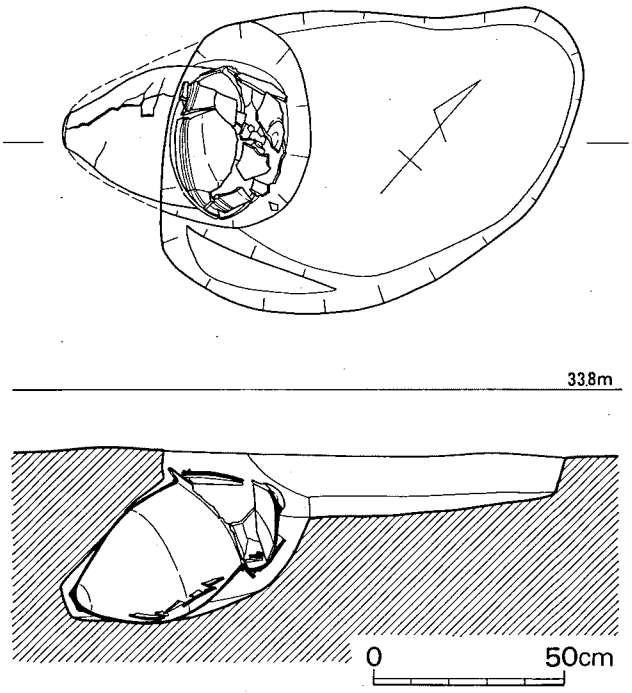
弥生時代の墓は，甕棺墓1と土壙墓3の4基が検出された。そのうち1号甕棺墓と1・2号土壙墓の3基は弥生時代の50・52号住居跡のすぐ東側に主軸を同じくするグループとして存在し，3号土壙墓は単独で存在する。グループをなす墓地は，円形住居跡群と無関係とは思われない。

1号甕棺墓（図版27，第71・72図）

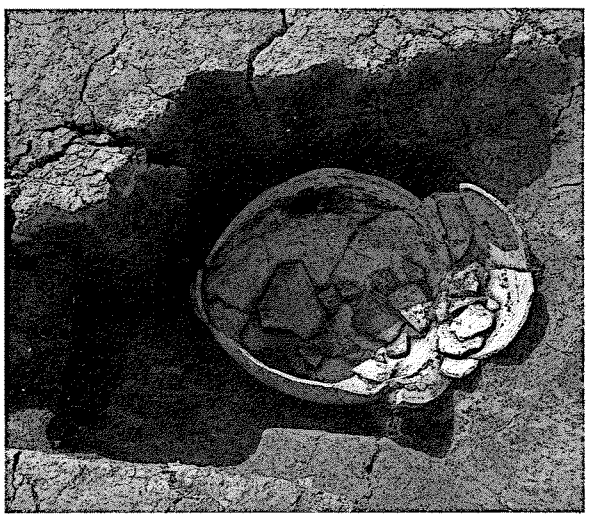
1・2号土壙墓と3基で一つのグループをなし，その南端に位置する。主軸をN—47°—Eにとる小児用甕棺墓で接口式。長辺1m，短辺0.8mの掘方の西側に横穴を穿ち29°の傾斜で甕を埋置する。

上甕は鉢，下甕は甕を用い，接口部には目貼り粘土を巻く。内法は約60cmで，内部には骨を含めて何ら遺存しなかった。

上　甕（第73図1）　半球上の胴部に若干上げ底の底部を持つ鉢で，口縁部直下に2条のM字形



第 71 図　1号甕棺墓実測図 (1/20)



第 72 図　1号甕棺埋置状態

凸帯を巡らす。口唇部内には凹線。外面は擦過後に部分的にはミガキ，ハケ目調整を施す。口径35cm，底部 9 cm，器高20.1cm。

下　甕（第73図 2）　「く」字形に外反し，跳ね上げ口縁の甕。概ね口縁部と同じ径の胴部最大径をその上位に持つので，球胴に近い印象を受ける。底部は平底で，0.8cmと薄手。頸部には 1 条の三角凸帯，口唇部は浅く窪む。内外面とも擦過状のケズリを下から上方向に施し，その後ナデ。煤が内外面に付着しており，日常容器からの転用。角閃石・石英をやや多く含む。口径38.3cm，底径10.3cm，器高42.1cmを測る。

この甕棺墓の時期は中期末頃である。

(5)　土 壙 墓

1号土壙墓(図版28，第74図)

甕棺墓の北東側に位置する 2 段掘りの土壙墓で，東側は 2 つの柱穴で壊されている。主軸をN—49°—Eにとり，1段目は1.3m×0.8mの隅丸長方形で深さ5cm内外，2段目は長辺1.05m，短辺0.56m，深さ0.25～0.35mの隅丸長方形で，西側に広い。底面は平坦で，東側へ下る。形態から西を頭部として埋置した

と思われる。

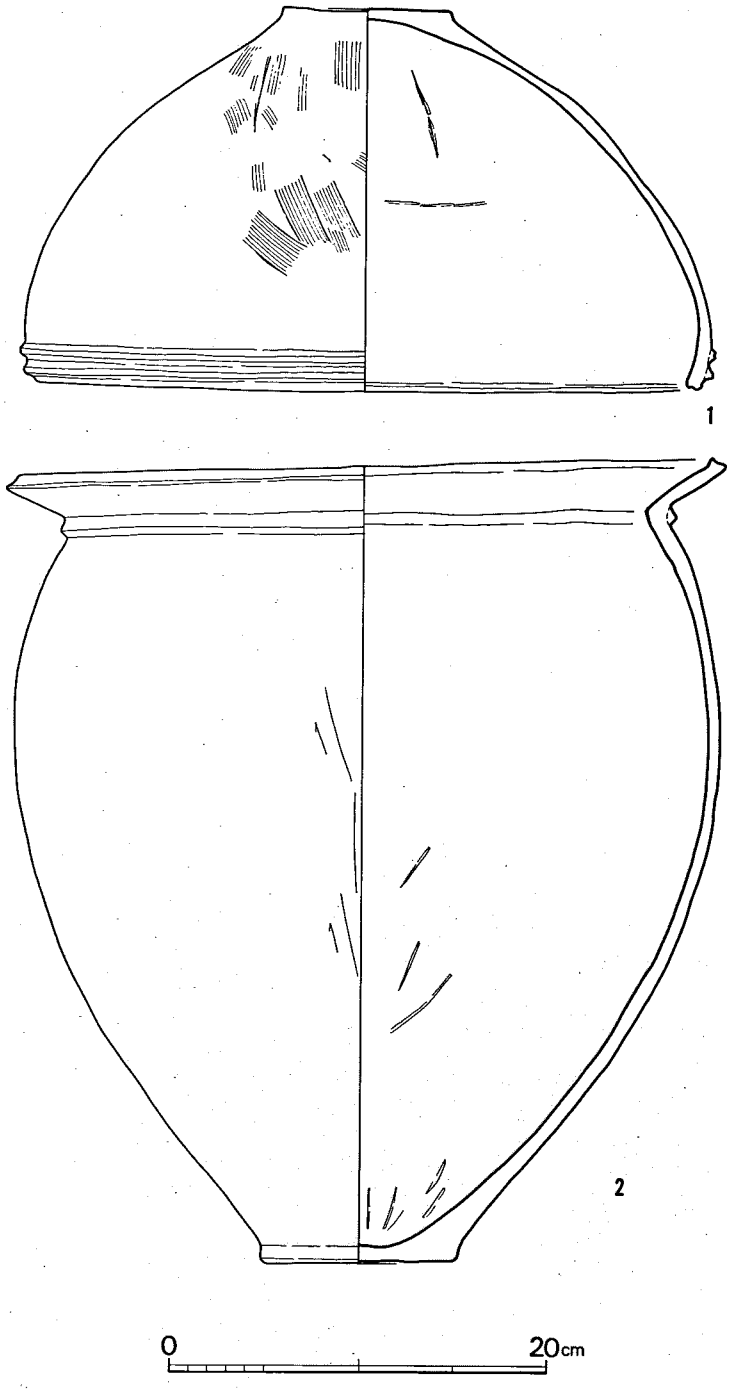
2号土壙墓（図版28，第74図）

1号土壙墓の西側に平行して位置する素掘りの土壙墓で，西側及び中央部は柱穴によって切られている。主軸をN—53°—Eにとり，長辺1.32m，短辺0.33～0.4mと西側に広い。底面は浅いU字形を呈し，東へ下がる。

1・2号土壙墓とも，何ら遺物は出土していないが，1号甕棺墓と主軸をほぼ同じくし，至近距離に埋葬される点からみて，甕棺墓と同じ中期末頃と考えられる。

3号土壙墓（図版28，第74図）

1基だけ北へ10mほど離れて検出された。西側を切られるが，長辺1.3m，短辺0.55mの隅丸長方形を呈す素掘りの土壙墓である。底面は中央部でやや窪み，深さは15～20cm内外。



第 73 図　1号甕棺墓出土土器実測図（1/4）

主軸がN—51°—Eと他の3基の墓と同一であり，埋土も近いので，弥生時代の所産であろう。

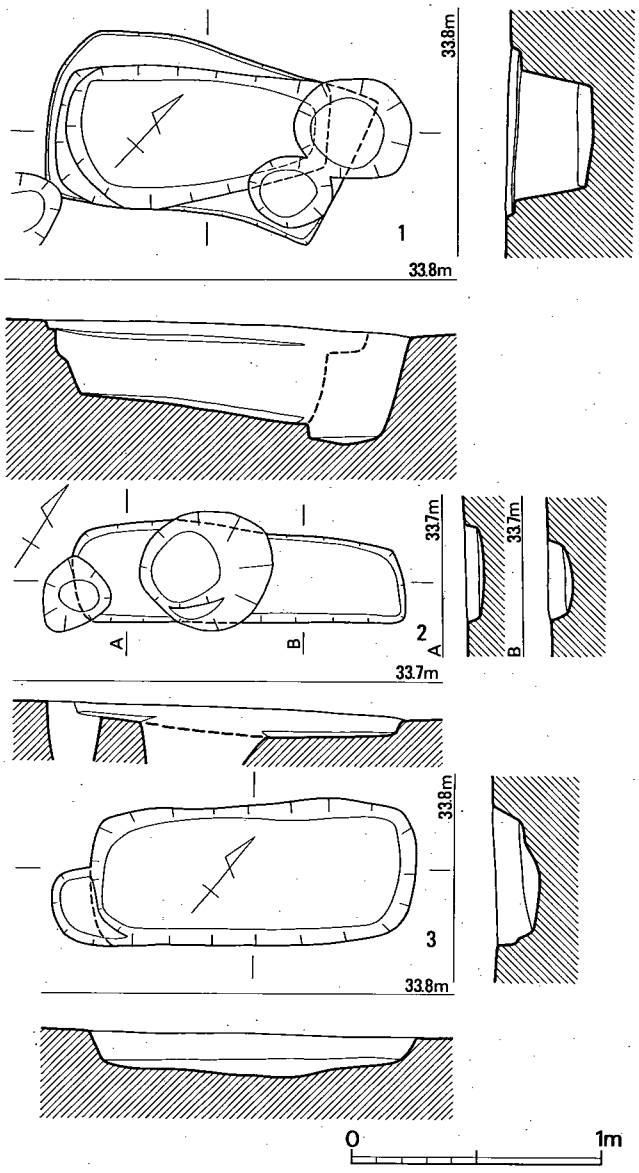
(6) 柱穴群

調査区内からは数千に及ぶ柱穴が検出されているが，弥生時代の土器を出す柱穴はわずかで，それも住居跡群の周囲に集中する。

P727遺構（図版29，第75図）

調査区のほぼ中央部，古墳時代の73号住居跡のすぐ西側に位置する。南・北の両側にテラスを持つ深さ65cmの柱穴で，その中位に完形品に近い甕が口縁部を上にした状態で出土した。出土遺物はこの甕1点のみで，遺構の性格についても不明である。

出土土器（第76図1） 逆L字状に近い口縁部端を広げて2条の凹線文を巡らす跳ね上げ口縁の甕で，最大径を胴部やや上位に持つ。底部付近で強く窄まり，上げ底の底部に移行する。外面頸部から胴部下半にかけては深めの平行タタキを施し，それ以下はケズリの後にハケ目調整。内面の頸部以下は底部から口縁部方向のヘラケズリ。内頸部から口縁部への移行部は平坦に近い。外面の胴中央部は煤が付着する。褐色から黒褐色の色調で，胎土も良く精製され薄手。口径15.6cm，底径6.5cm，器高24.9cmを測る。



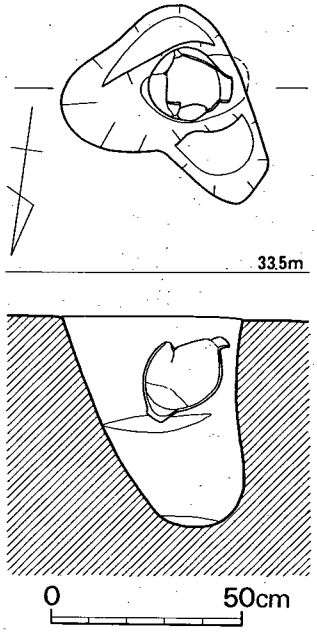
第 74 図 1～3号土壙墓実測図（1/30）

柱穴群出土遺物（図版30，第76・77図）

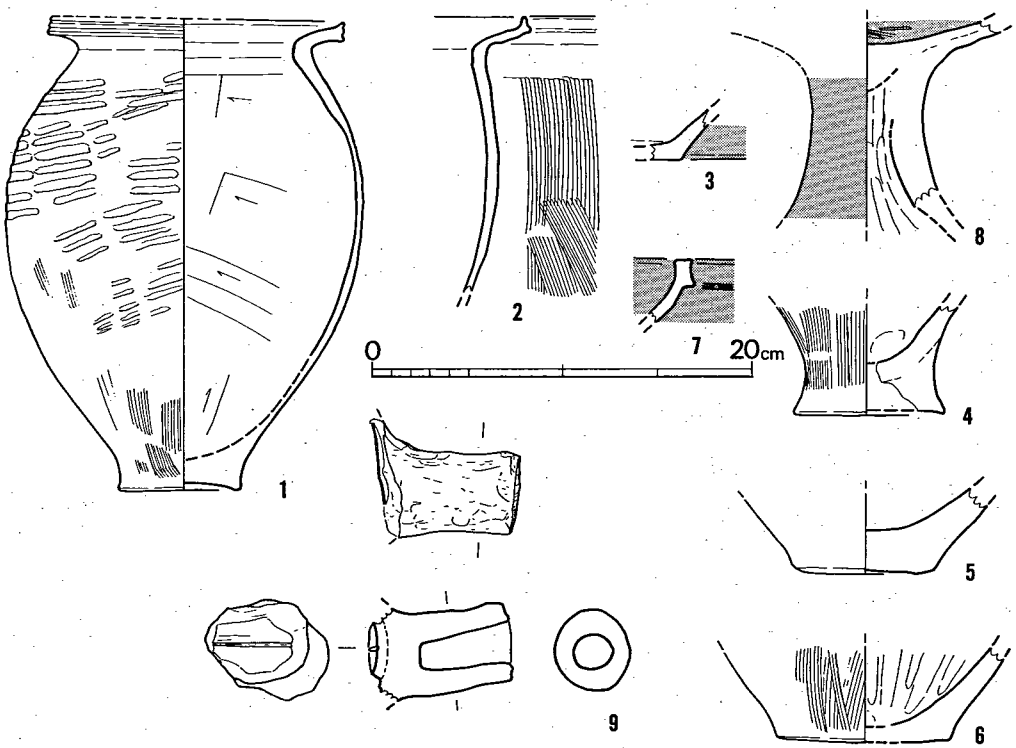
土器・石器が出土した。

出土土器（第76図２～９）　２は内弯する跳ね上げ口縁の甕で，口唇部は窪む。外面は縦方向のハケ目を施す。P214出土。３はP268出土の壺と思われる底部で，丹塗り土器。４～６は甕の底部。４はP726出土の部厚な底で，上げ底。荒いハケ目を施す。底径８cm。５はP719出土で，底径7.4cm。６はP378出土で，外面はハケ目。内面はナデ調整。７はP175出土の高坏で，口縁部を肥厚させる。内外面とも丹塗り。８は大型の高坏で，坏内面はミガキ，内・外面とも丹塗り。P654出土。９は円棒の内を５cmほどくり抜いた把手状の土器で，外径4.3cm。接合面の中央には１条の沈線が見られる。円孔は前面で2.05cm，奥が1.25cmで，内面は棒状工具による回転ナデ。P656出土。

出土石器（第77図）　１は蛤刃の磨製石斧の刃部片で良く研

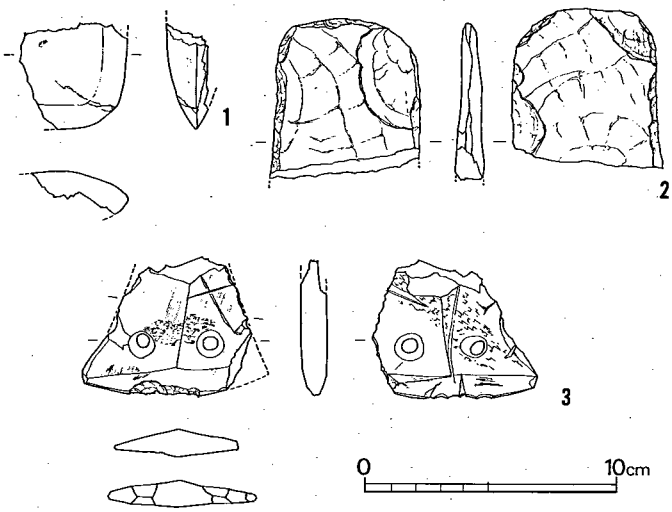


第 75 図　P727実測図（1/20）



第 76 図　柱穴出土弥生土器実測図（1/4）

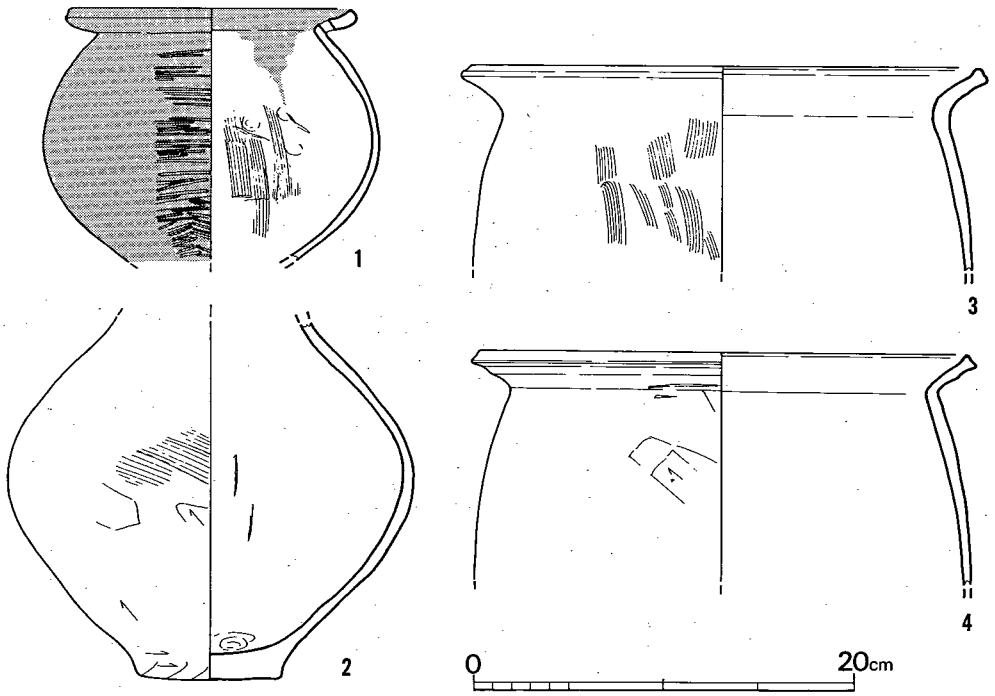
磨され，刃部・稜とも鋭い。P64出土で蛇紋岩製。2は結晶片岩製の打製石斧で，刃部を欠損する。周縁のみに剝離調整を施す。P235出土。3は44号住居跡西側の谷地区に近いP541より出土した石戈の基部片。整形時の敲打痕を消す丁寧な研磨を施し，鏑と基部の稜を研ぎ出す。孔間の鏑厚は1.1cm。関部幅は復原7.2cmで結晶片岩製。



第 77 図　柱穴出土石器実測図 (1/3)

(7)　包含層出土の遺物

遺構検出時や，古墳時代以降の遺構から出土した遺物のうち，弥生時代に属す土器・土製品について説明を加える。このうち，3号溝下部よりまとまって出土した土器についてのみ，一



第 78 図　3号溝下層一括出土土器実測図 (1/4)

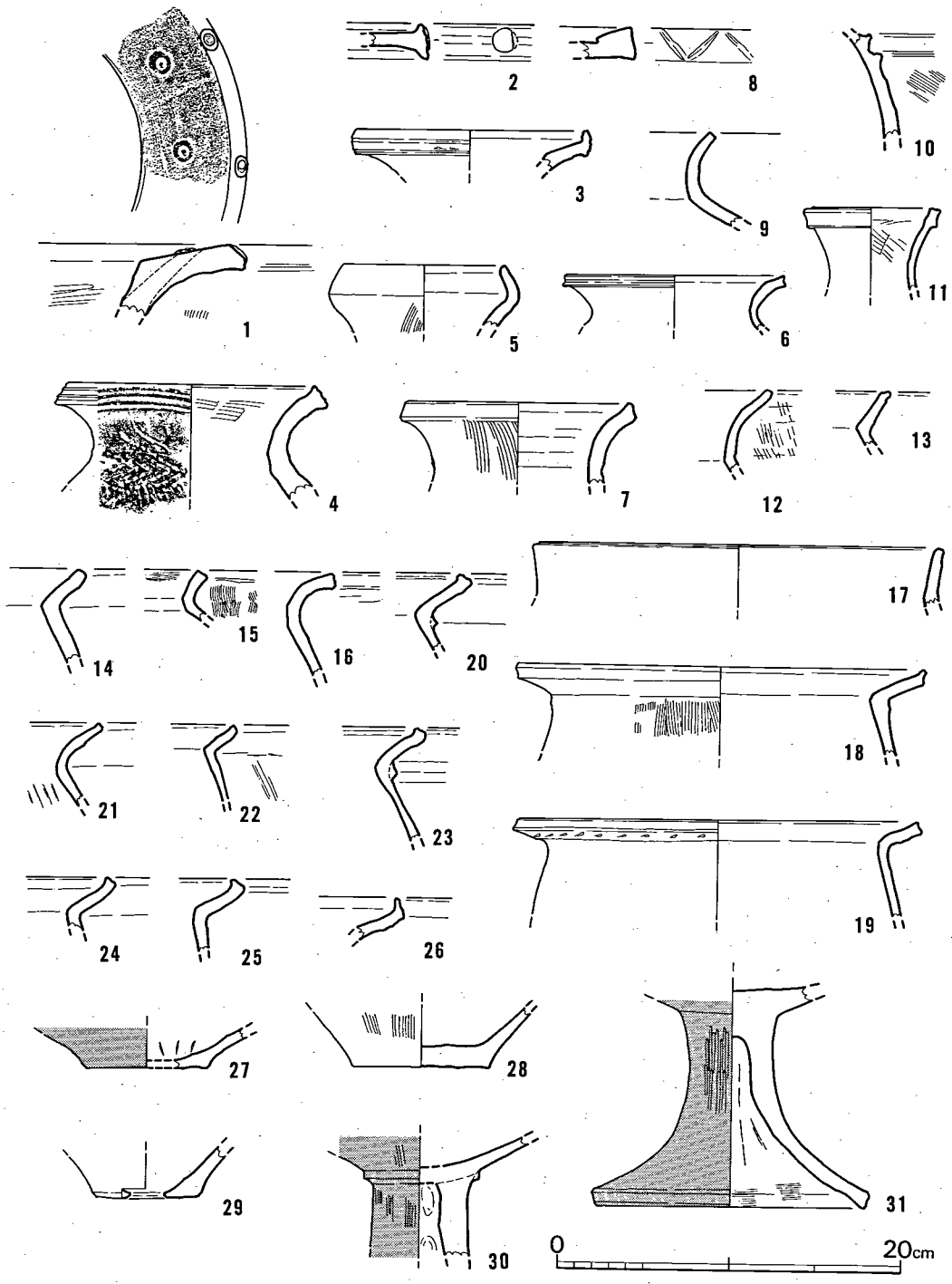
括して図示している。

3号溝下層出土土器（図版31，第78図）

壺と甕が出土した。1は「く」字形口縁部に球形の胴部が付く，短頸壺で60号住居跡出土の壺（第53図92）より胴部が球形に近い。口縁部を内弯して立ちあげ，端部は丸味を持つ。胴部が3～4㎜なのと比べて厚く作る。対面に2個づつ穿孔しているので，蓋付きの壺である。外面は細かなヘラミガキ，内面の胴下半にかけてはハケ目を施し，他は丁寧なナデ。外面から内面頸部まで丹塗り。口径15.5cm，胴部最大径18cm，残存高13.5cmを測る。2は頸部以上を欠損する壺で，やはり球形の胴部を持つが，1と比べるとやや扁平な感じである。底部はわずかに突出し，厚さ1.4cm。外面の胴中位はハケ目，それ以下はヘラケズリの後にナデ。内面はナデだが所々にヘラ先状工具の当り痕がある。胴下半から底部にかけては指圧痕。底径8.8cm，胴部最大径11.7cm。3・4は跳ね上げ口縁の甕で，胴下半以下を欠損する。3は口径28cmで，外面はハケ目。4はやや薄手で，口径26.8cm。外面はヘラケズリの後ナデだが，頸部に工具痕のあたりがある。

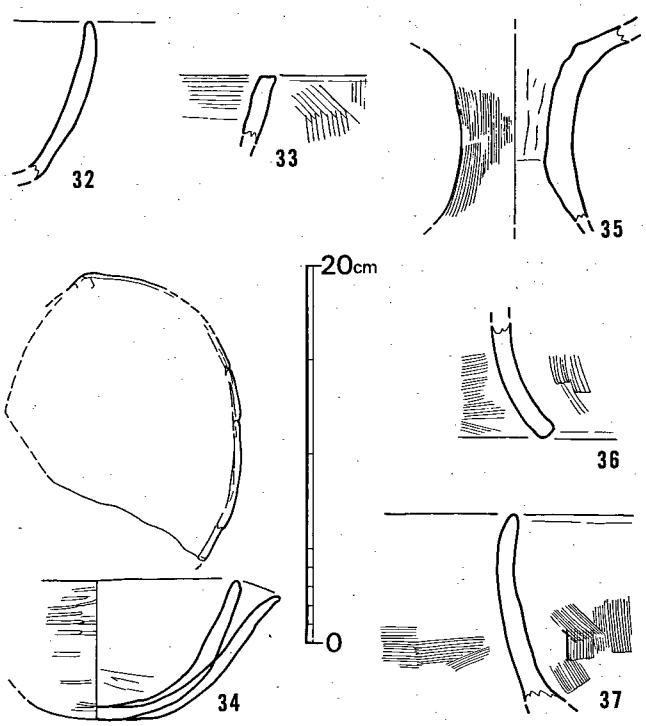
包含層出土土器（図版31，第79・80図）

1～12は壺である。1・2は円形浮文を持つ広口壺で，1は幅広の口縁内面と口唇部の両側の対に配置し，その中心に円形施文具によるスタンプを押す。26号溝下層出土。2は3条の凹線文を持つ口縁部上に貼付している。3・4は口縁部を肥厚させ凹線文を巡らす壺。3は2条で口唇部が高く立つ。復原口径13.6cmで，5号住居跡床面出土。4は3条の凹線文を持ち，頸部には押引による綾杉文を描く。施文順位は上位から下位で，接点部から外側へ引きながら押引して行く。その後にハケ目。内面も横方向のハケ目調整。黄褐色を呈し，石英粒を多く含む。26号溝上層出土で，復原口径14.8cm。5は袋状口縁を有す壺で，本遺跡からは一点のみ出土した。口径9.5cmを測り，頸部にはハケ目を施す。26号溝の北端部下層より出土。6は口唇部が凹線状になるもので薄手。口径9.8cm，10号住居跡埋土内出土。7はやや肥厚させた口縁部を持つもので，器形的には35号住居跡4の広口壺としたものに近い。外面はハケ目調整を施し，煤が付着する。復原口径13.4cm，40号住居跡床面出土。8は口縁部内面に段を持ち，その内面には山形の短線文を描く。9は大きく外反する口縁部を有する広口壺で，76号住居跡出土。10は胴部に2条の三角凸帯を持つ。11は長頸壺の口縁部で，口縁直下に1条の三角凸帯を付す。口唇部は沈線。外面はミガキ，内面は頸部下にしぼり痕があり，ハケ目調整。復原口径8cm，45号住居跡北側の撹乱土出土。12～26は甕で，「く」字形口縁（12～17）と跳ね上げ口縁（18～26）の二者がある。12は外反度の弱いもので口唇部を丸く納める。13は頸部内面に明瞭な稜を持つ。15は口唇部が平坦なもので28号溝下層出土。16は口唇部が若干窪む。17は口径24cmで口縁部は直に近く立つ。18～23は跳ね上げ口縁で，口縁部が内弯しないもの。18は口径24cmに復原され，



第 79 図　包含層出土土器実測図 1 (1/4)

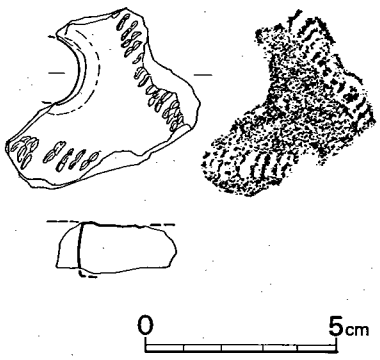
外面はハケ目。26号溝出土。19は頸部外面にヘラ先状工具痕が文様状に付けられる。復原口径24cm。20・23は頸部に三角凸帯を付けるもので，前者は10号，後者は57号住居跡出土。24～26は内弯する口縁を持つ。27～29は底部を一括した。27は口径7.4cmに復原される壺で丹塗り。7号住居跡埋土出土。28は14号住居跡出土の甕。29は17号建物跡P8出土の甑。30は丹塗り高坏で，坏部と脚部の境に三角凸帯を持つ。外面はハケ目調整。31も高坏の脚部で，なだらかに広がった脚径16.3cm。外面はヘラミガキの後に丹塗り。内面脚端部付近には密なハケ目が見られる。8号土壙出土。32～34は鉢。32は21号住居跡出土。33は内外面ともハケ目を施すもので，口縁部は若干窪む。34は片口を持つもので，外面はタタキ，内下面はケズリを施す。25号土壙出土。35は器台で，上部が平坦に大きく広がるようだ。外面はハケ目，内面はしぼり痕がある。10号土壙出土。36も器台の端部。37は器形不明の土器で，内傾する口縁部片。内外面とも細かなハケ目を施す。56号住居跡床面出土。



第 80 図　包含層出土土器実測図 2 (1/4)

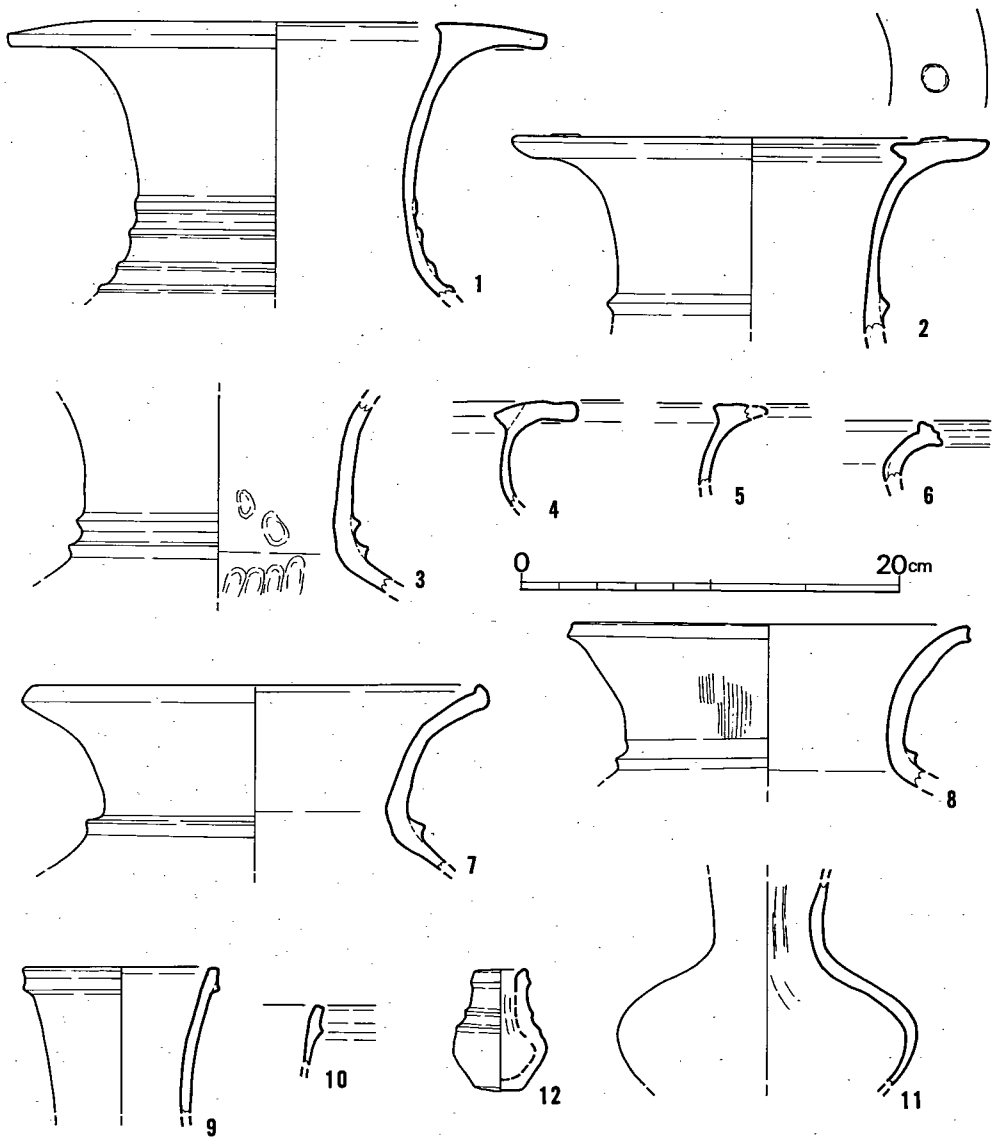
包含層出土土製品（図版30，第81図）

28号溝の北側下層より出土した分銅形土製品で，県内では北九州市小倉南区北方遺跡・カキ遺跡についで3例目の出土である。



第 81 図　包含層出土分銅形土製品実測図(1/2)

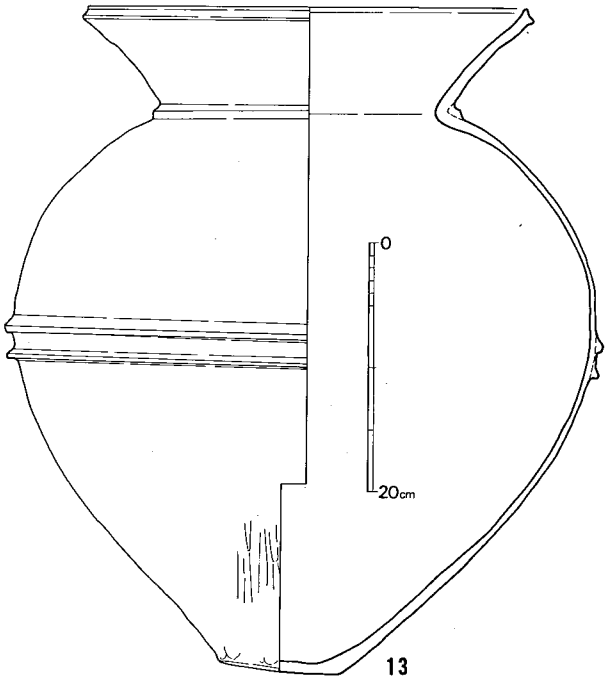
片側のくり込み部付近の破片で，裏面は剥落している。幅1.7cm，厚1.3cm以上，残存する最大幅は５cmであるが，右側のくり込み部が破片内で見られないので幅は10cm程度のものと思われる。文様は弧状の施文具による刺突文で，２個を１単位にして並列させるが土製品の縁に沿っての施文ではなく，右下で交差するようだ。なお，くり込み部の周縁は盛り上がっている。色調は灰白色を呈し，胎土の石英粒が目立つ。



第 82 図　谷地区出土弥生土器実測図１（1/4）

(8) 谷地区出土の遺物

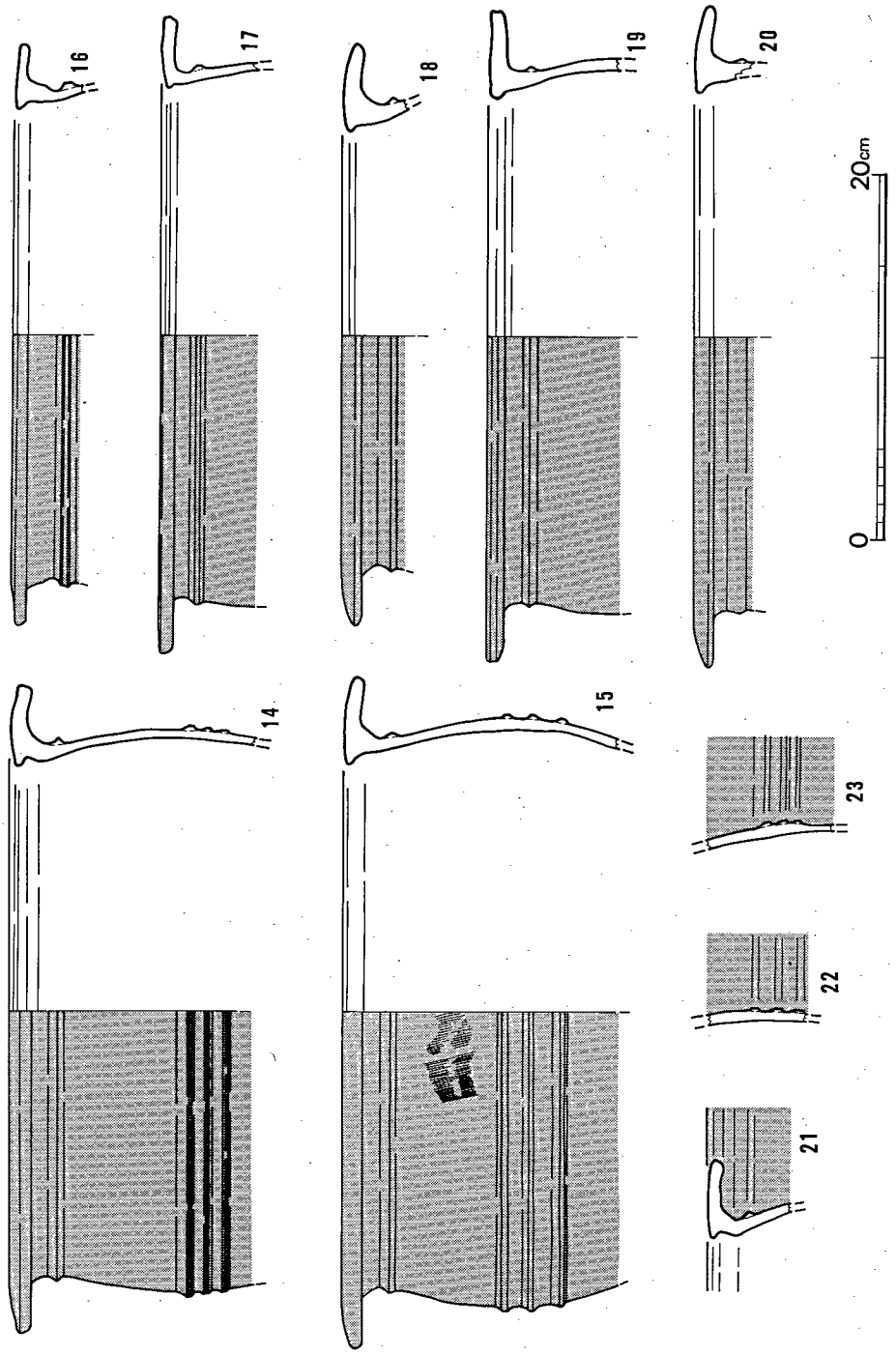
谷地区から出土した弥生土器は面積の割にそう多いものではない。層位的には第Ⅲ章４の層序の項で説明した通り，谷地区の砂層中より主体的に出土している。地域的には土壙９の周辺２・３区より丹塗り土器を含む一群（1・4～7・14～20・24～28・58～61等）が集中して出土した他，貯蔵穴が検出された17～20区にやや纏まる以外は散在している。なお，谷地区の石器については時期の特定できないものも多く，後節に谷地区出土の石器として説明する。



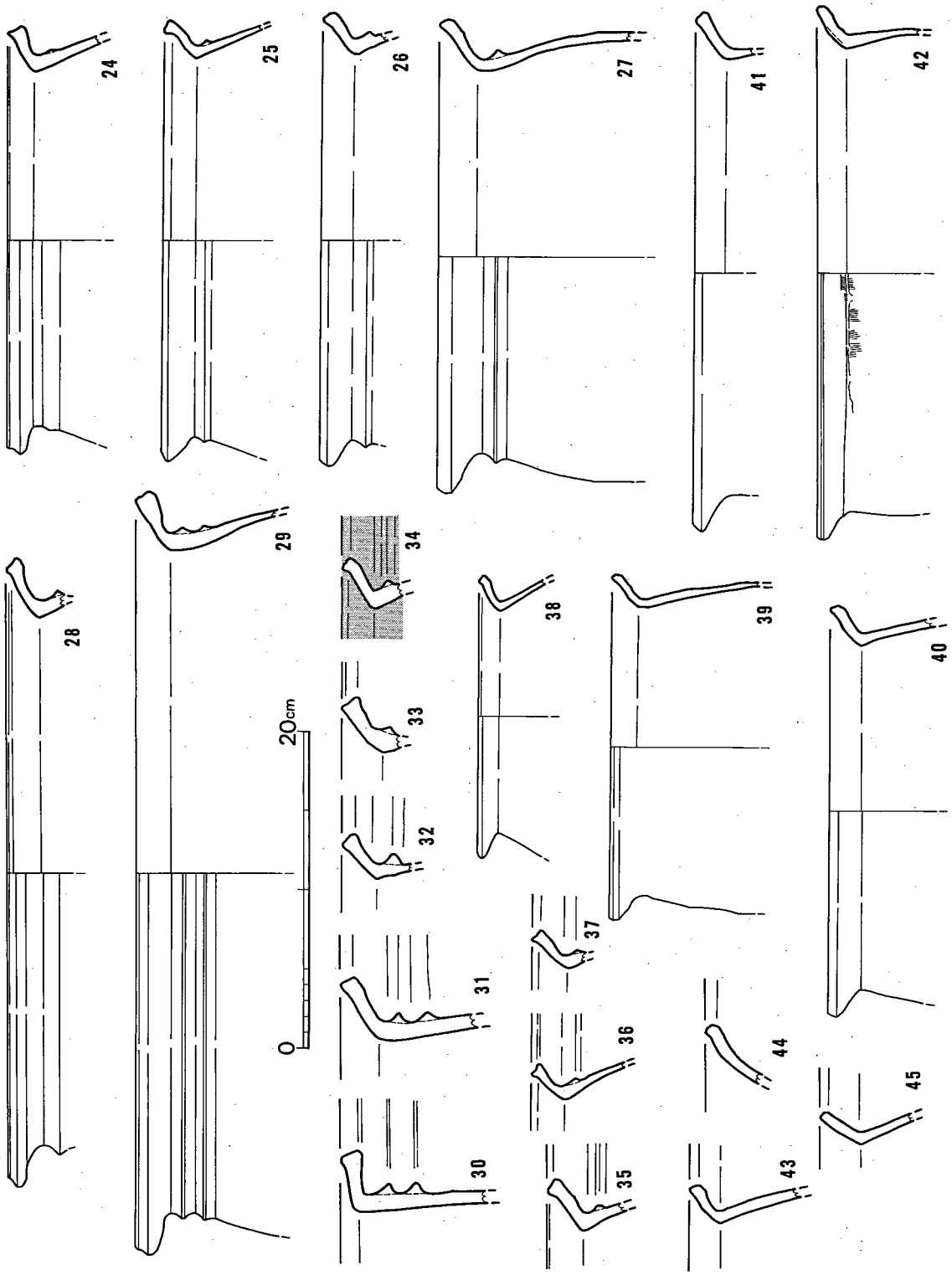
第 83 図　谷地区出土弥生土器実測図２（1/6）

出土土器（図版33･34，第82～86図１～70）

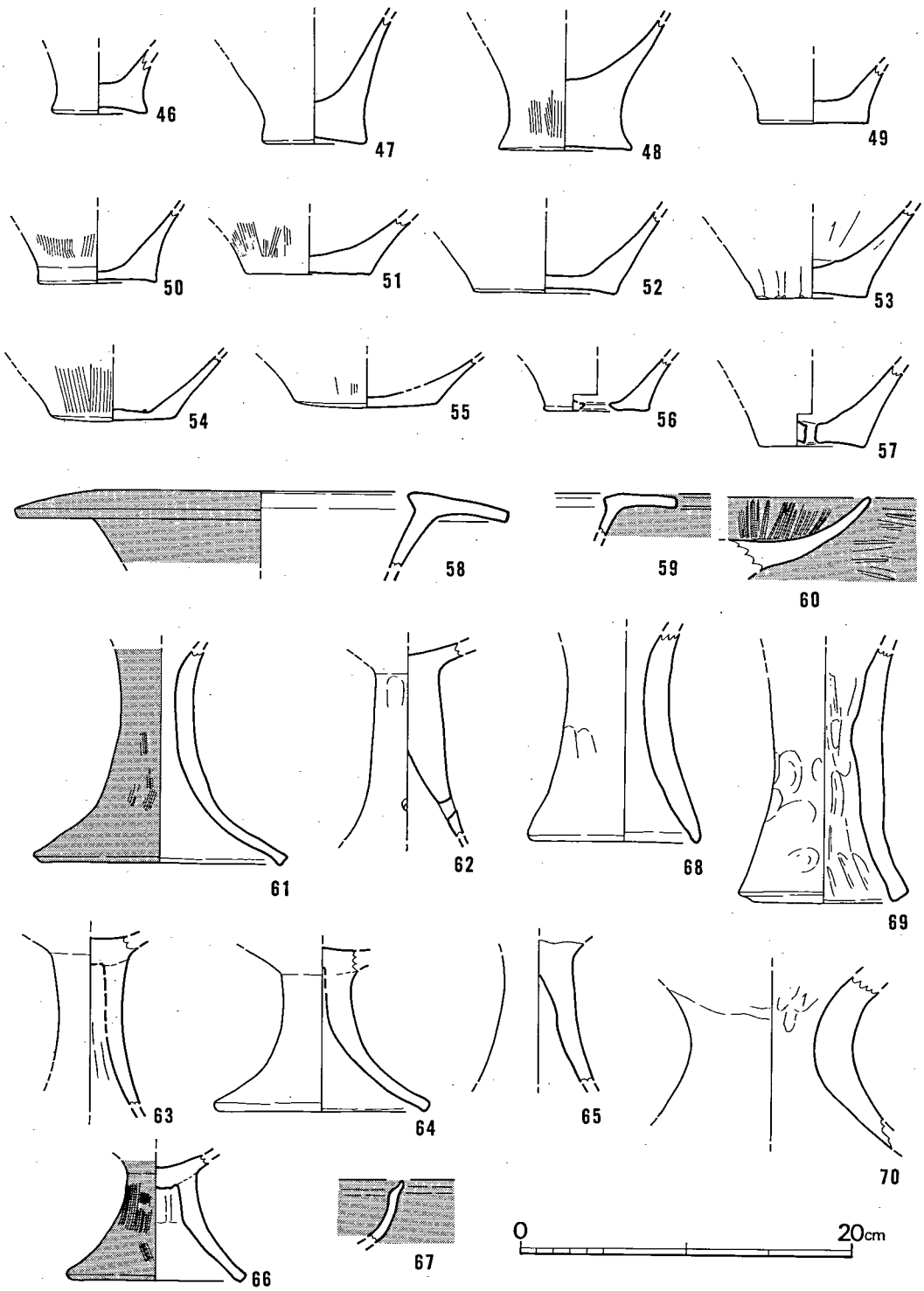
１～13は壺で，口縁部の形態等から５種類に分けられる。１～５は長い頸部に鋤形口縁部を持つ広口壺である。１は４条のだらけた台形状凸帯，２・３は２条の三角凸帯を有す。また，円形浮文を貼付するもの（２）もある。１は口径28cm，２は25.3cm。２が４区粘土層出土，３は５区砂層出土。６は凹線文３条を施す土器で，26区粘土層出土。７・８・13は素口縁の広口壺で，頸部に１条の三角凸帯を有す。13は大型の完形品で，胴部最大径をやや上位にもち，そのすぐ下位に２条の台形状凸帯を巡らす。口縁部は７・８と比べて直線的に大きく外方へ広がる。口唇部が窪むのは８と同じで，底部は突出する。風化して器面調整等不明。８は29区バフン層出土。13は５区砂層出土で，口径36.2cm，胴部最大径48.2cm，頸部径23.6cm，底径10cm，器高53cmを測り，色調は乳灰色を呈し，石英・角閃石等の大きめの粒子を含む。９～11は長頸壺。９・10とも口縁部直下に三角凸帯を持つ。９は口径10.4cmで５区砂層，10は14区砂層出土。11は頸部から胴部の破片で，胴部は扁平球状を呈す。頸部内面にはしぼり痕が見られる。胴部径16cmで19区粘土層出土。12はミニチュア土器で長頸の壺。口縁部に１条，胴部上半に２条の三角凸帯をつまみあげる。口径2.8cm，器高6.5cm，突出する底部は2.5cm。



第 84 図　谷地区出土弥生土器実測図 3 (1/4)



第 85 図　谷地区出土弥生土器実測図 4　(1/4)



第 86 図　谷地区出土弥生土器実測図 5 (1/4)

14～45は甕である。口縁部の形態から3種類に分けられるが，完形に復原できる資料はない。14～21は鋤形口縁を呈すもので，いずれも丹塗り土器。22・23は14・15と同じ器形の胴部破片。口縁部上端が平坦に近いもの（16・17・19）と，膨らみを有するもの（14・15・18）に細分される。凸帯は口縁部直下に1条，胴部に3条が基本らしく，胴部はM字形であるが，口縁直下のものは三角凸帯（14・15・18～21）とM字凸帯（16・17）に分かれる。口径は16が31.5cmで最小，15が37cmで最大。2区砂層からの一括出土。24～37は跳ね上げ口縁の甕で，頸部に1条ないし2条（29～31）の三角凸帯を付す。24のように「く」字状の口縁部を有し，口唇部を窪ませるものが多いが，25・27のように内弯する口縁部を持つものも多く，52号住居跡でも共伴して出土する。29は口縁部端部が肥厚するもので口径48.5cmと大きい。30は逆L字状の口縁部を持つ唯一の土器である。34は丹塗り土器。口径は24が26cm，27が29cm，28が38.5cmを測る。29が20区粘土層下部，34が5区砂層，36が11区砂層出土。38～41・43・44は「く」字形で若干跳ね上げ状の口縁を呈す土器だが，頸部の凸帯を持たず，口唇部を丸く納める。38は口径25.5cmを測り，5区砂層出土。42・45は単純な「く」字形口縁の甕で，42は口径34cm，頸部はハケ目，内面はケズリを施す。外面に煤が付着する。

46～57は底部を一括した。このうち壺と考えられるのはやや突出する底を持つ54・55で他は甕。56・57は焼成後の穿孔がある。46～48は締まりの強い底部で部厚い上げ底を呈す。49～53は平底ないし若干上げ底で，53の内面はケズリを施す。

58～66は高坏。58・59は鋤形口縁を有す坏部片で，58は口径30cmと大きい。60は内外面とも暗文を施す坏部で丹塗り。61～66は脚部片で，細身で下半近くから広がる器形が多い。66は短脚で，外面のハケ目が美しい。62には円孔があり25区砂層出土。60・66は20区粘土層下部出土。61・66の外面は丹塗りである。

67は小型の鉢と思われる土器で，口縁部が尖りぎみに立つ。内外面とも丹塗り。

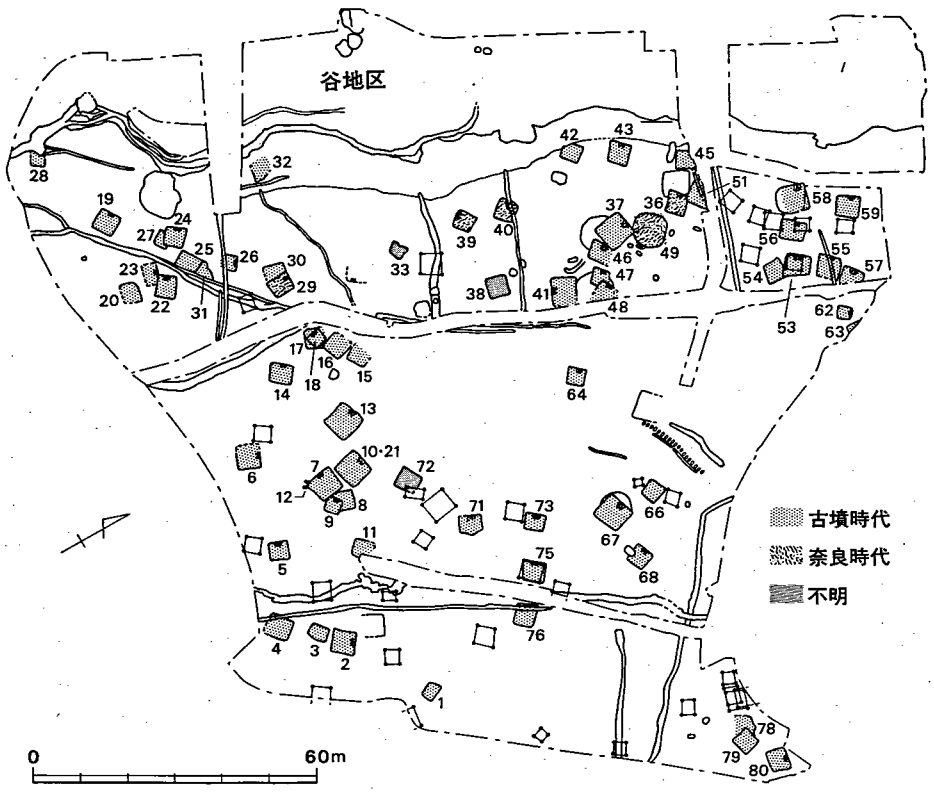
68～70は器台。69は全面に指圧痕が著しい。70は径が広く，片側の受け部を削る豊前タイプの器台。69は14区粘土層，70は16区砂層出土。（木下）

4．古墳時代以降の遺構と遺物

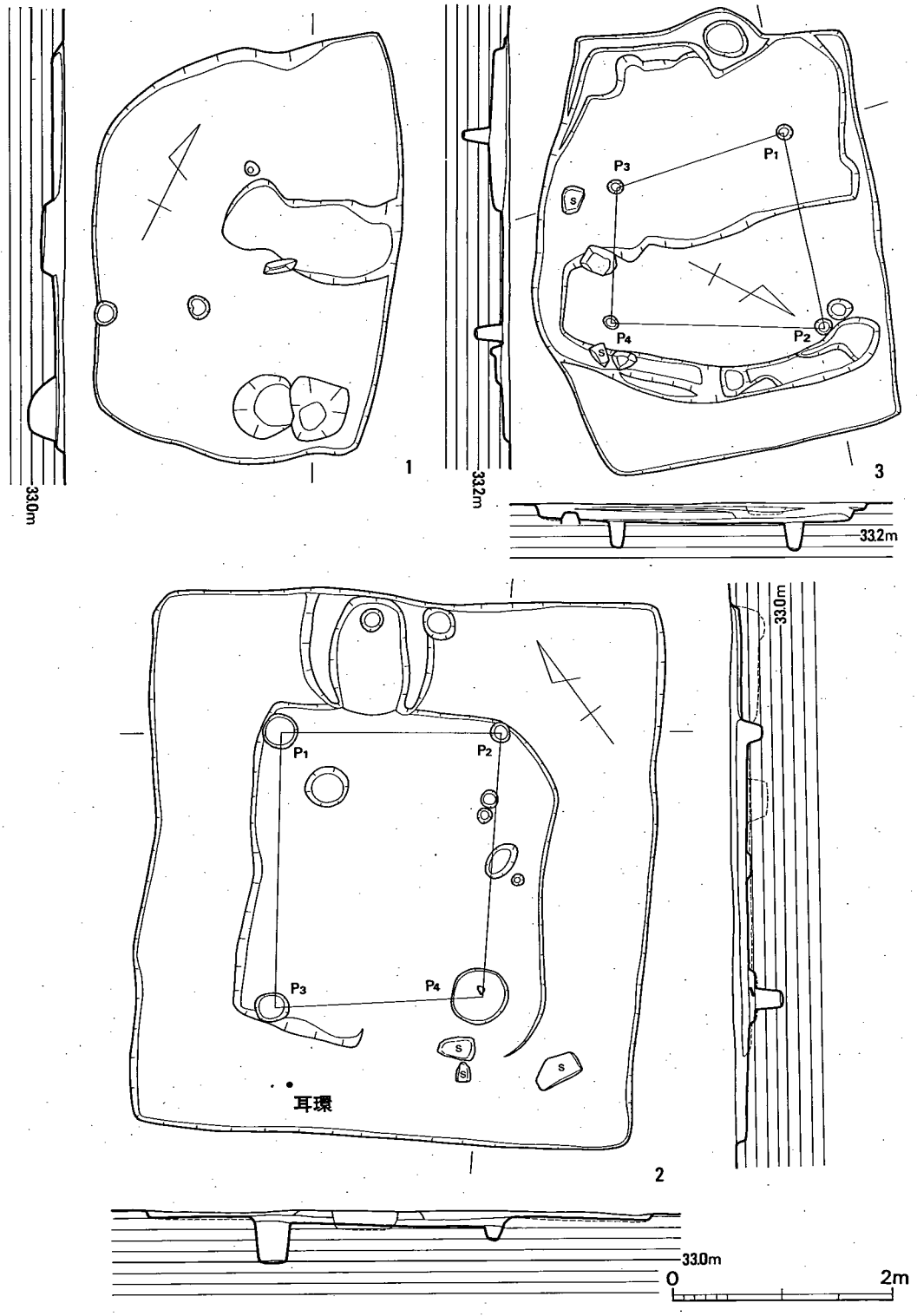
本遺跡で検出された古墳時代以降の主な遺構は，竪穴住居跡70軒，掘立柱建物跡32棟，土壙24基，落ち込み２基，溝29条，道路状遺構１本，土壙墓１基で，この他に多数の柱穴がある。これらの大部分は古墳時代に属し，奈良時代・中世の順に遺構数は減っていく。

古墳時代の遺構については，調査区中央からやや西側の地域（11号溝周辺）を除きほぼ全域に亘って分布する。奈良時代の遺構はこの古墳時代の少ない地域をはじめ，谷地区に沿って点在するほか，多くの溝状遺構がこれに属する。中世の遺構は４・５号土壙と２・３号溝に限られ，本遺跡では最も遺構数が少ない。遺構は谷地区の中にもいくつか見られるが，調査区中央部から北西方向に延びる浅くて幅の狭い谷部では，遺構の密度が極めて低い。以下，各種遺構の説明を行なう。

(1) 竪穴住居跡



第 87 図　古墳時代竪穴住居跡配置図（1/1,600）



第 88 図　1～3 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

本遺跡から検出された古墳時代以降の竪穴住居跡70軒のうち，古墳時代は41軒，奈良時代は7軒で，不明のものが22軒ある。古墳時代の住居は調査区中央部からやや西側の地域（11号溝周辺）を除いてほぼ全域に分布するが，中でも調査区の北部（56号住居周辺），北西部（37号住居周辺），南西部（25・26号住居周辺）では7・8軒の住居が集中する傾向にあり（以下，それぞれを「北部住居群」，「北西部住居群」，「南西部住居群」と呼称する），細かい時間差や同時期の掘立柱建物・溝との関連性が問題となる。奈良時代の住居は，古墳時代の住居が見られない調査区中央部のやや西側をはじめ谷地区に沿って点在する。

概して，竪穴住居跡は正方形や長方形もしくはそれに近い台形の平面プランで，4本柱を基本とする。削平が著しいためか遺存状態は全体的に悪く，壁高は5～25cm程度と浅い。カマドはおおよそ住居北側の壁中央部に付設され，住居の外に突出するものはなく，著しい削平のためか煙道も検出されなかった。カマドと反対側の壁際には黄褐色粘土の塊がしばしば検出されるが，これは出入口的機能を有すものと考えられる。（水ノ江）

1号竪穴住居跡（図版36，第88図）

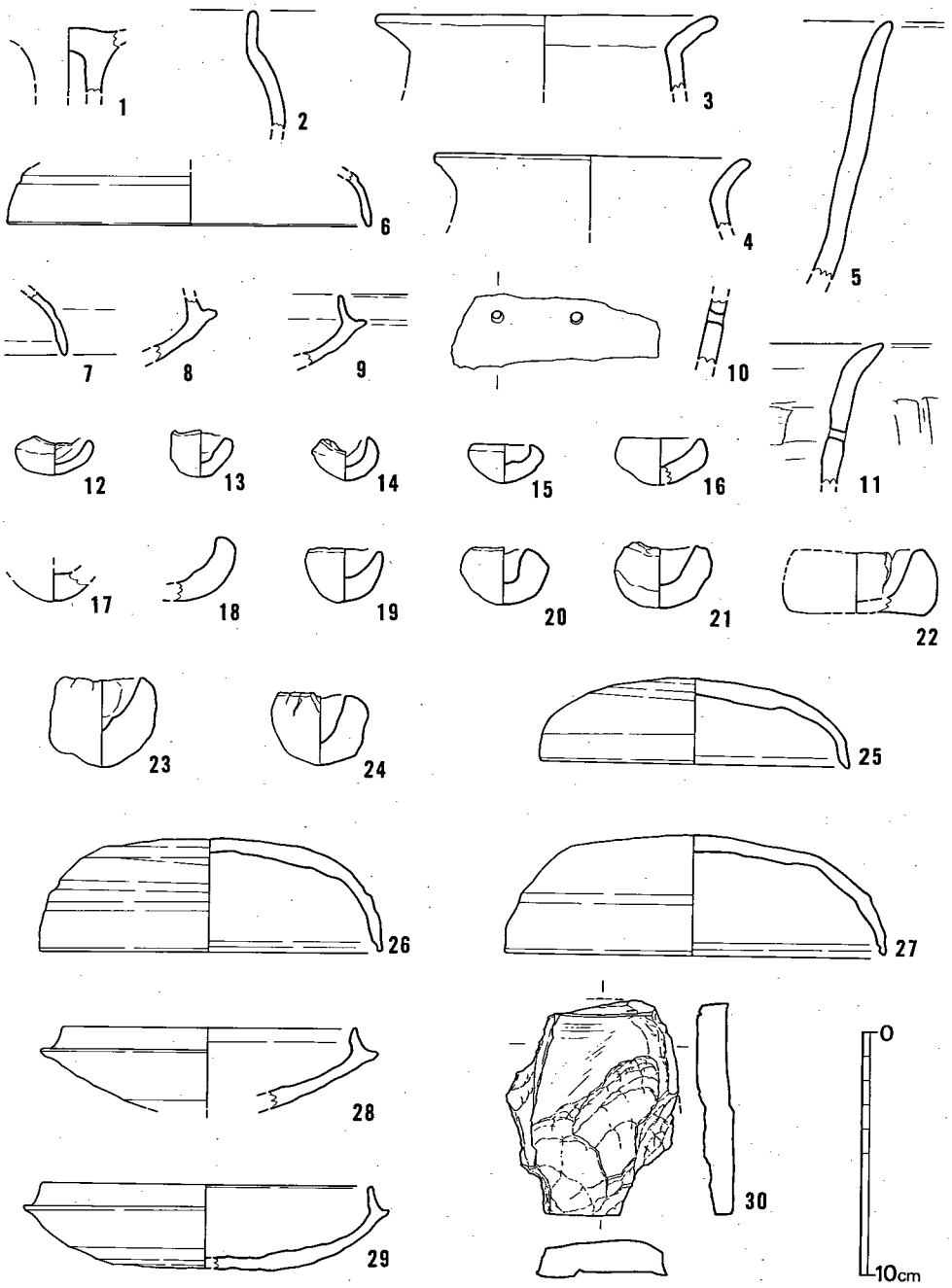
調査区の東端中程に位置する。辺4.0×2.9mのやや歪んだ長方形プランを有し，深さも0.1mに満たない。東辺に接して長軸1.6m，短軸0.8m，深さ0.1mの不整土壙があり，南東隅にも径0.6m，深さ0.15mの円形土壙がある。柱穴が3個あるもののいずれも深さ0.1mほどの浅いもので，配置をみてもいわゆる主柱穴とは見做しがたい。遺物は3～5が床面から，その他は覆土中から出土した。いずれも小片ののため確実に住居跡に伴うものか問題である。良好な遺物の出土をみなかったが，6世紀中葉～後半に時期比定して大過なかろう。

土師器（第89図1～5）　高坏（1），壺（2），甕（3・4），甑（5）であるが，小片であり，かつ器表の摩滅が著しい。

須恵器（第89図6～9）　蓋坏の蓋（6・7），身（8・9）である。6の口縁部は丸くおさめられ，天井部との境は甘い凹線で画している。1/4弱の残片。7も同様の形態を示す。

2号竪穴住居跡（図版37・38，第88図）

調査区の東南隅にある，一辺4.6～5.0mの正方形に近い平面プランを有す。深度は最大0.2mほどであるが，主柱穴の外周はベット状に0.1m弱高くなっている。主柱穴は通常の4本柱で，2～2.5mの距離をおいて配置される。カマドは北東辺の中央より西に偏してある。遺存状態は悪く奥よりの床に支脚を抜き取ったと思われる跡がある。出土遺物のうち，12～16，19～22はカマド内部の床面から，他の手捏ね土器も床面から出土しており，おそらくカマドに伴うものであったと考えられる。10が覆土中より出土した以外はすべて床面で検出したものである。また，耳環は南西辺の上段，床より6cmほど浮いて出土した。本遺構は6世紀中葉前後に廃絶さ



第 89 図　1・2号竪穴住居跡出土土器・石器実測図 (1/3)

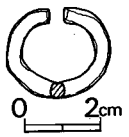
れたと考えられる。

土師器（第89図10～24）　10は小片で器形はわからないが，焼成前に穿った径５㎜の孔が２箇所にある。内面をヘラケズリ，外面をナデて仕上げる。手捏ね土器は通有の粗製品。

須恵器（第89図25～29）　坏蓋はいずれも完形もしくはそれに近い状態で遺存する。25は天井部が低く，口縁部は小さく屈曲して端部に内傾する面を持つ。天井・口縁部の境は屈曲部の甘い稜線のみである。26・27は天井部が高い。26は全体に摩滅が進み調整痕は不明瞭である。口縁端部は匙面状に凹み，天井部との境には浅い凹線を巡らして区別する。27は口縁部内面に沈線文を刻む。天井部外面は不定方向のナデで仕上げ，口縁部との境には弱い段をつける。28は小片。29は約1/3が残存する。

砥　石（第89図30）　片岩系と思われる石材を用いた有溝砥石。欠損が著しく，厚さは９～13㎜。幅１㎜，深さ２㎜の断面「V」字状の溝が端部付近にある。

耳　環（第90図）　耳環は径2.4～2.8㎝の扁円形を呈する。環体は径４㎜である。鍍金しているようだが光沢を失い，大部分が銅の地金を露出する。重さは７ｇ強と重く，中実である。



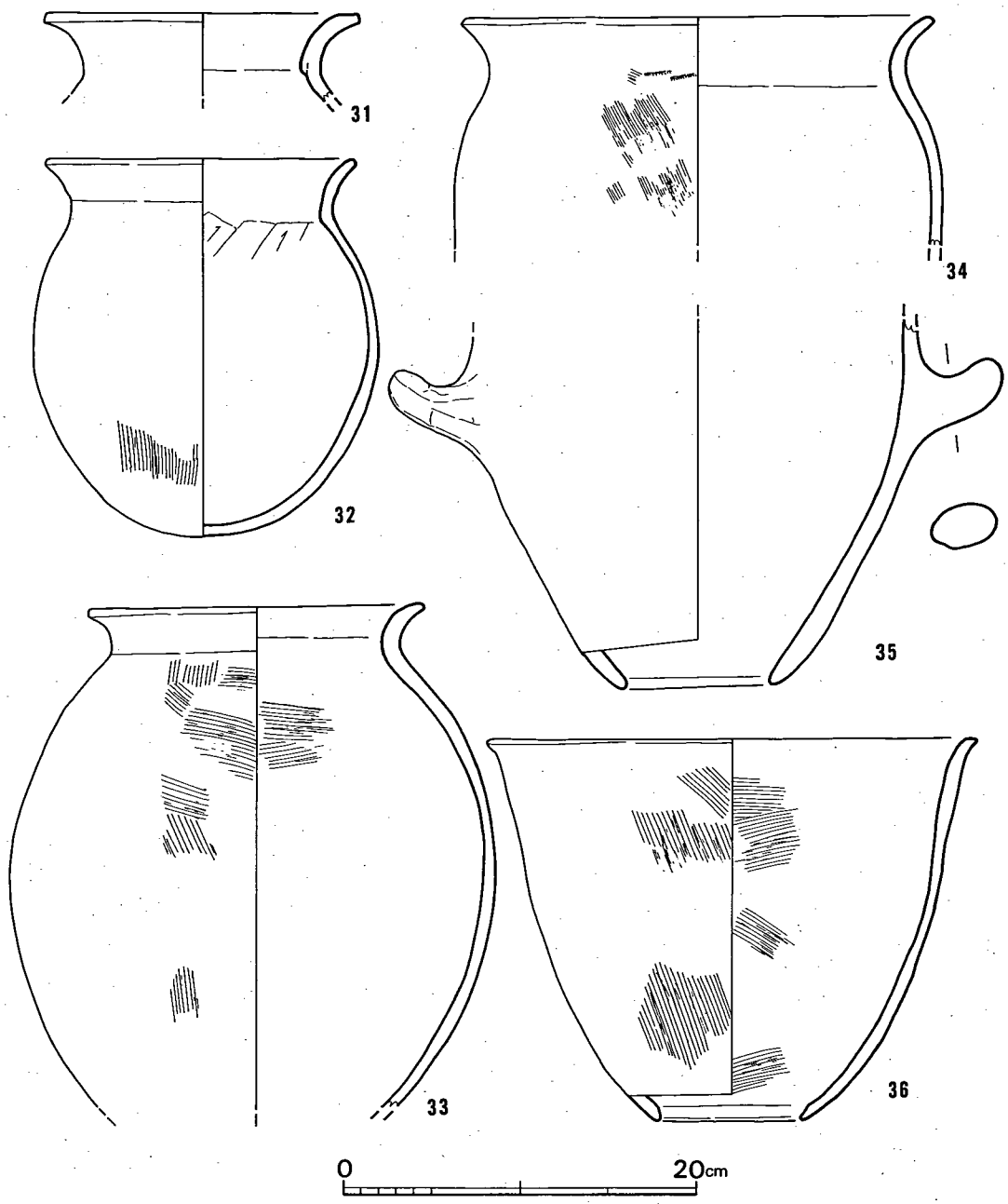
第 90 図
２号竪穴住居跡出土耳環実測図（1/2）

３号竪穴住居跡（図版37・38，第88図）

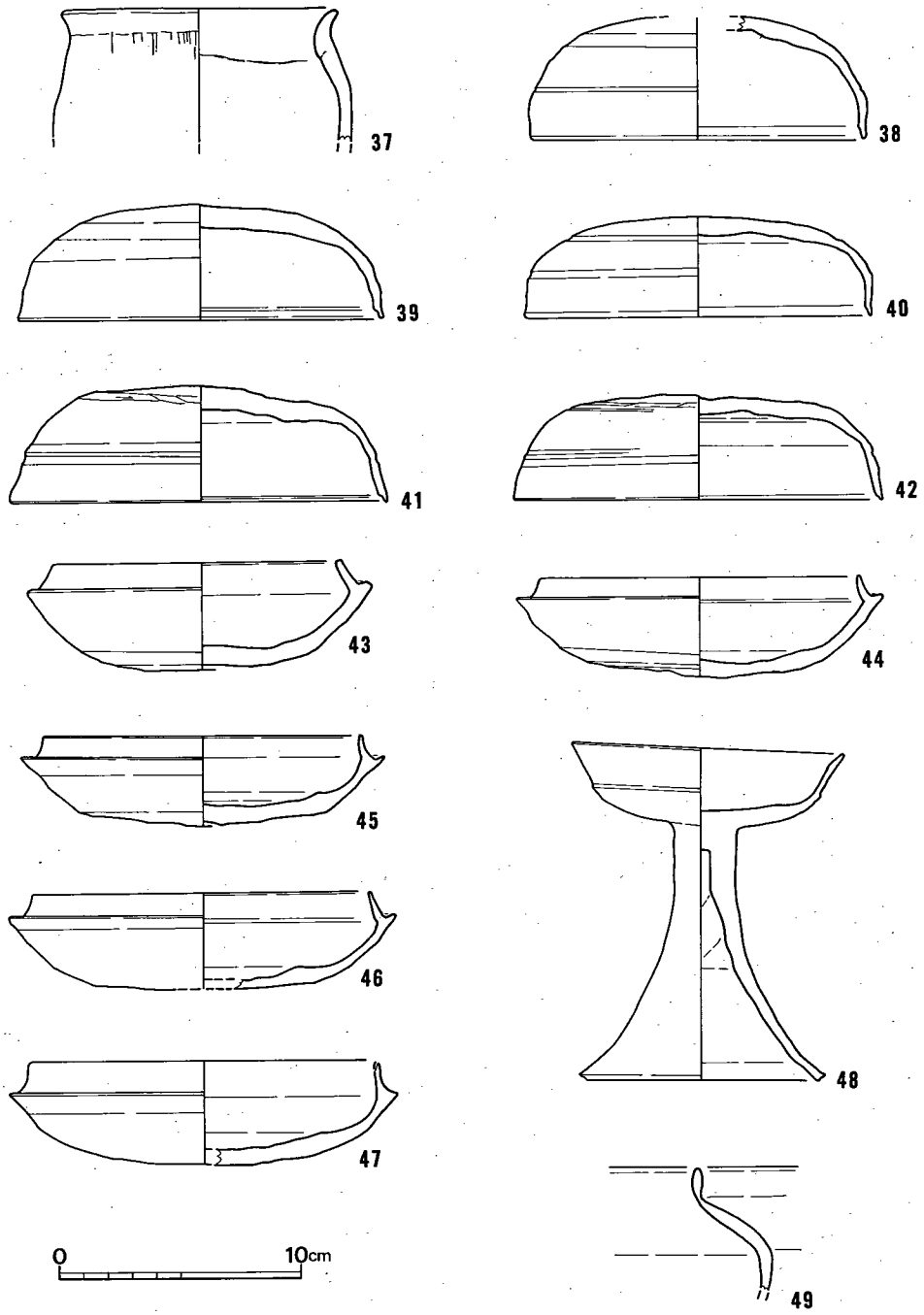
２号住居跡の南西に隣接する，一辺2.6～4.0ｍのほぼ長方形プランを有する小型の住居跡。深さは最大0.2ｍで，中央部に貼床を確認できた。主柱穴は４本と思われるが，その配列は整然としない。深さは0.2ｍ強となる。カマドは検出できなかった。出土遺物としてはかなりの量がある。大部分は覆土中で検出したものであるが，39・42・46は貼床中から，38・40・48は住居跡中央付近で纏まって出土したものである。須恵器では６世紀中葉を前後するやや幅広い時期の遺物を含むが，貼床中出土遺物を重視すれば，６世紀中葉を下る，後半に住居跡は廃絶されたと考えられる。

土師器（第91・92図31～36・37）　31は約1/3が残る。口縁部は強く反転し，端部上面が少さく凹む。32は全体が窺える資料で，約1/2が残存する。口縁部は「く」の字に反転し，端部は断面方形に近く成形する。下半が外方に小さく膨らむ点特徴的である。器表の摩滅が著しいが，体部内面は全体をヘラケズリ調整する。33は口径19㎝を測る甕で，口縁部は短いが強く反転し，端部が丸く終わる。これも器表の風化が甚だしいが，体部内面にはヘラケズリ痕とハケ目が一部に観察できる。34は頸部の締まりが弱く，口縁部の外反も度合が小さい。器表の摩滅が著しい約1/3の残片である。35の甑も器表が荒れる。36の甑は口縁部の外反が弱く，体部との境が不明瞭となる。把手部分を欠失するが，全体にハケ目が観察できる。37は口縁部が小さく作られ，頸部の締まりも弱い。頸部の下内面に粘土紐の継ぎ目が見えるが，細部の調整痕は残らない。

須恵器（第92図38～49）　蓋坏を主体とし，高坏，短頸壺の小片もある。坏蓋は口径13.5～15.5



第 91 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4)



第 92 図　3 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3)

cm，器高4～5cmの大きさであるが，38はその中で最も口径が小さく，天井部の丸みが強くなる。天井・口縁部界は沈線(38)，弱い凹線(40～42)を刻むものと，特に意識していない例(39)等がある。天井部外面は主としてナデ（38・40）あるいは未調整（39・41・42）のまま終わっているようである。38が約1/4残存するほかはいずれも1/2ないし3/4が遺存する。坏身は43とその他では若干の型式差が窺える。43は立ち上がりが直線的に内傾し，器肉が厚く，口径12cmとこの住居跡出土例では最も小さく，古相を示す。他の3例は立ち上がりがカーブを描いて内傾し，薄くなって終わる。口径は13～14.5cmとやや大型化する。底部外面の調整手法も43が回転ヘラケズリを用いているのに対し，44は未調整で終わり，他の2例はヨコナデを多用する等異なる様相を見せる。ただし，47は調整痕を観察できない。48は脚部の大きな高坏。坏部は外面中位にシャープな段を有し，口縁部は内面に稜線をもって外折するように見える。脚部は長く，開きが小さい。外傾する匙面状に小さく凹む面を端部に作る。

4号竪穴住居跡（図版40，第93図）

調査区の東南隅にあり，1号溝に切られる。削平が著しく，かろうじて5cm程度の深さが残るのみ。一辺4.8～5.3mのやや胴張りとなるほぼ方形の平面プランを有し，南辺にあるカマドは焼けて硬化した火床と倒れた石製支脚を残すのみである。なお，カマドの西側に貼り床の一部が遺存していた。中央にある土壙は深さ0.3m弱，径0.7mを測る。主柱穴はほぼ方形に配列された4本で，柱間距離は1.9～2.4mとなる。土器は60・62が中央の土壙から，50・53・64・67～69を床面で検出し，58・66は覆土中，その他は貼り床中より出土したものである。床面直上から出土した比較的遺存状況の良好な須恵器（67～69）を重視すれば，本住居の廃絶は6世紀中葉頃と考えられる。

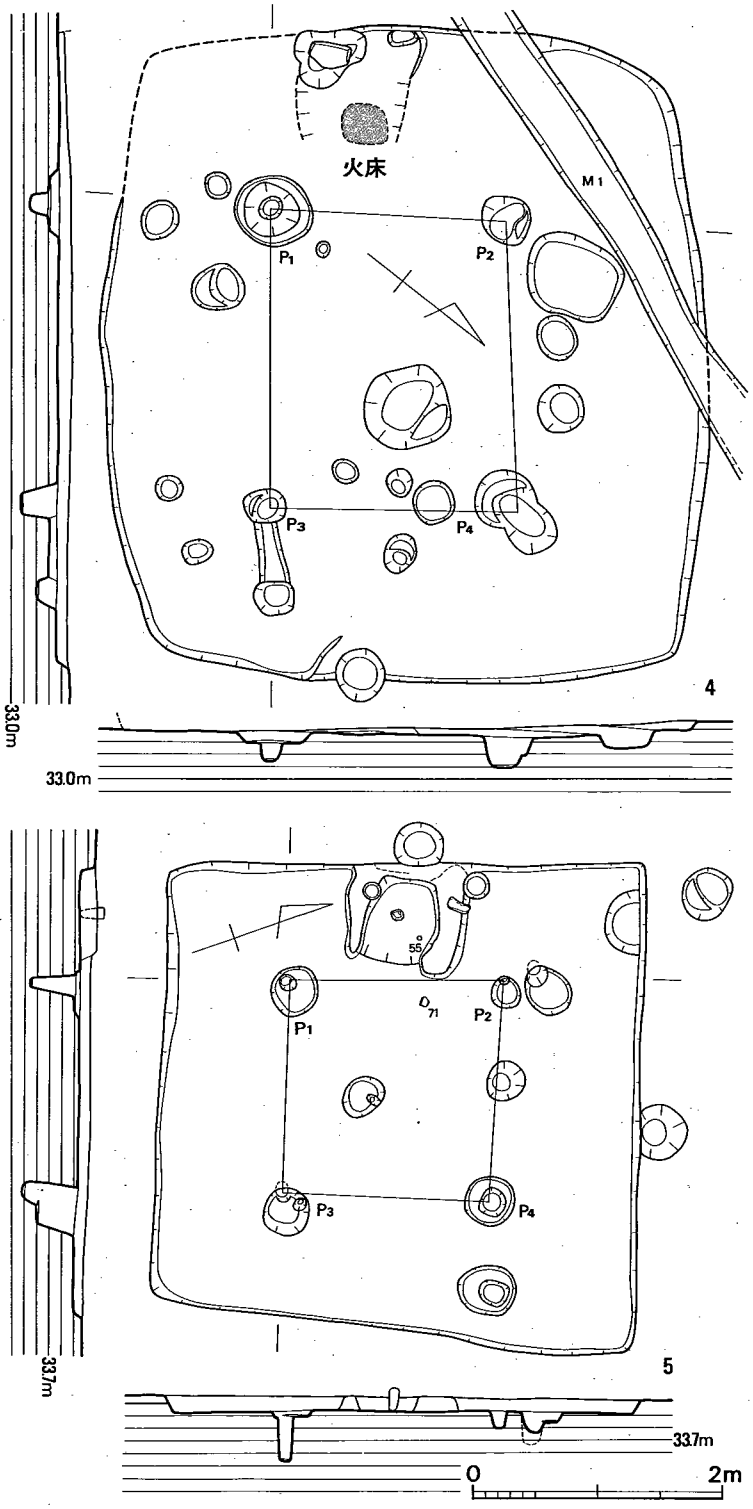
土師器（第94・96図50～54・58～65）　高坏（59）・甑（54）・鉢（58・60）・甕（50～53）等がある。59は脚部が太く，器高が低くなるのであろう。器表のほとんどが剝落している。54は把手部分を欠くが，形状・大きさからみて，甑としてよかろう。口縁部が小さく外反する。60は一見甑の形態に似るが，法量が小さいことから鉢とした。口縁部はわずかに外反し，端部は丸く終わる。器表の摩滅が進んでいるが，体部内面はヘラケズリで仕上げているようである。内面は黒ずみ，外面は二次的火熱により赤変する。図示した部分の約2/3が残る。50は口縁部が強く反転し，頸部内面に稜を持つ。これも二次的火熱を受ける。51・52は口縁部が緩やかに反転し，端部を丸くおさめる相似た個体である。

須恵器（第96図66～69）　蓋坏（66～68）および甕（69）である。66は器高が低く，器肉が厚い。口縁部に内傾する面を持つが，天井・口縁部界は幅広くヨコナデして凹ませている。約2/5の残片。立ち上がりは直線的に内傾する。69も全体が窺える。口縁端部は外傾する面を有し，屈曲部に段を刻んで装飾する。櫛描き文等は一切なく，頸部から肩部にかけてをヨコナデで，

最大径部には一部にカキ目が残るが以下をヘラケズリで仕上げる。

5号竪穴住居跡（図版40，第93・95図）

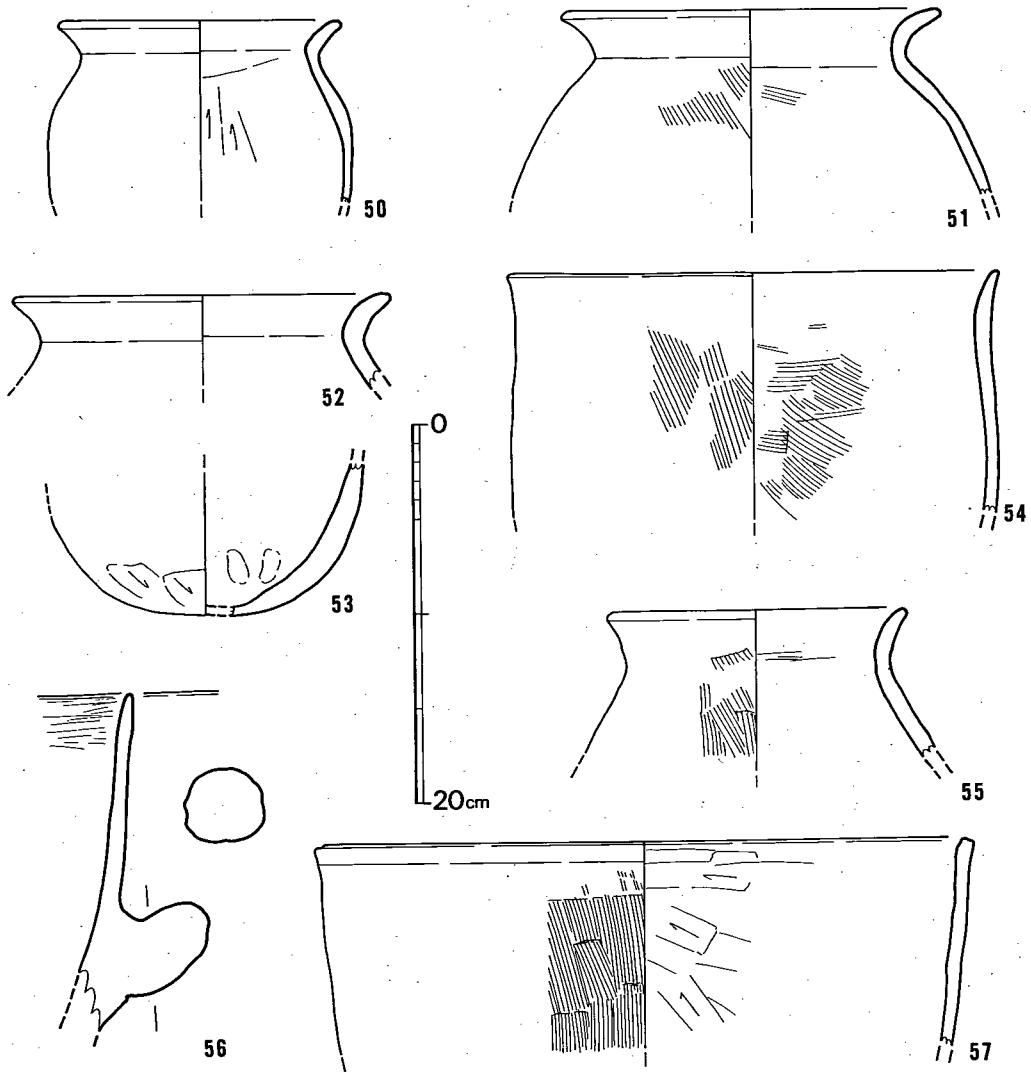
調査区の南端，4号住居跡の西に近く位置し，一辺3.7～3.9mの正方形プランを有する。深さは10cm強が遺存する。西辺近くにかなりの粘土が広がっていたが，性格は解からない。主柱穴は1.7～1.8mの距離をおいてこれも方形に配列された4本で，深さは0.4mに近い。カマドは西辺中央にあり，径8cm，長さ20cmの石製支脚が立っていた。袖は黄灰色粘土を用いて作り，壁から0.9m張り出し，幅は0.6mである。カマド内では焼土・炭化物の堆積の上を袖と同じ黄灰色粘土が覆っていた。なお，カマド内より手捏ね土器が1点出土している。遺物は少ない。56・70は上記したカマド内出土。71はカマド付近の



第93図　4・5号竪穴住居跡実測図（1/60）

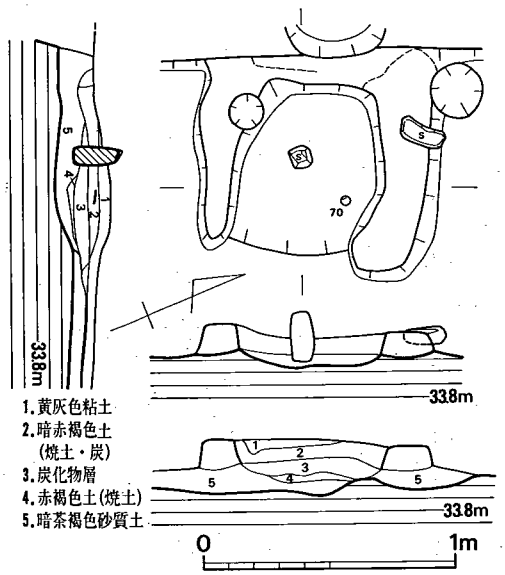
床面から，他は覆土中より出土したものである。年代を推測する資料を欠くが，おおむね他の方形住居跡と同時期のものであろう。

土師器（第96図56・57・70・71）　56・57は甕の小片。56の口縁部は体部から連続したまま直行して丸く終わる。外面をヨコナデし，内面に横位のハケ目を施して区別するのみである。57も口縁部は体部から直行し，端部に面を作って終わる。これもヨコナデを用い，あるいはヘラケズリの方向を違えることで口縁部を区別する。55は約1/3が残る。口縁部の開きが小さく，体部内面をナデで仕上げる。70は完形の手捏ね土器で，外面に煤が付着する。71は小型鉢。口縁部は小さく外折し，端部を丸くおさめる。体部内面上半にはヘラケズリ状の調整痕が残るが，以

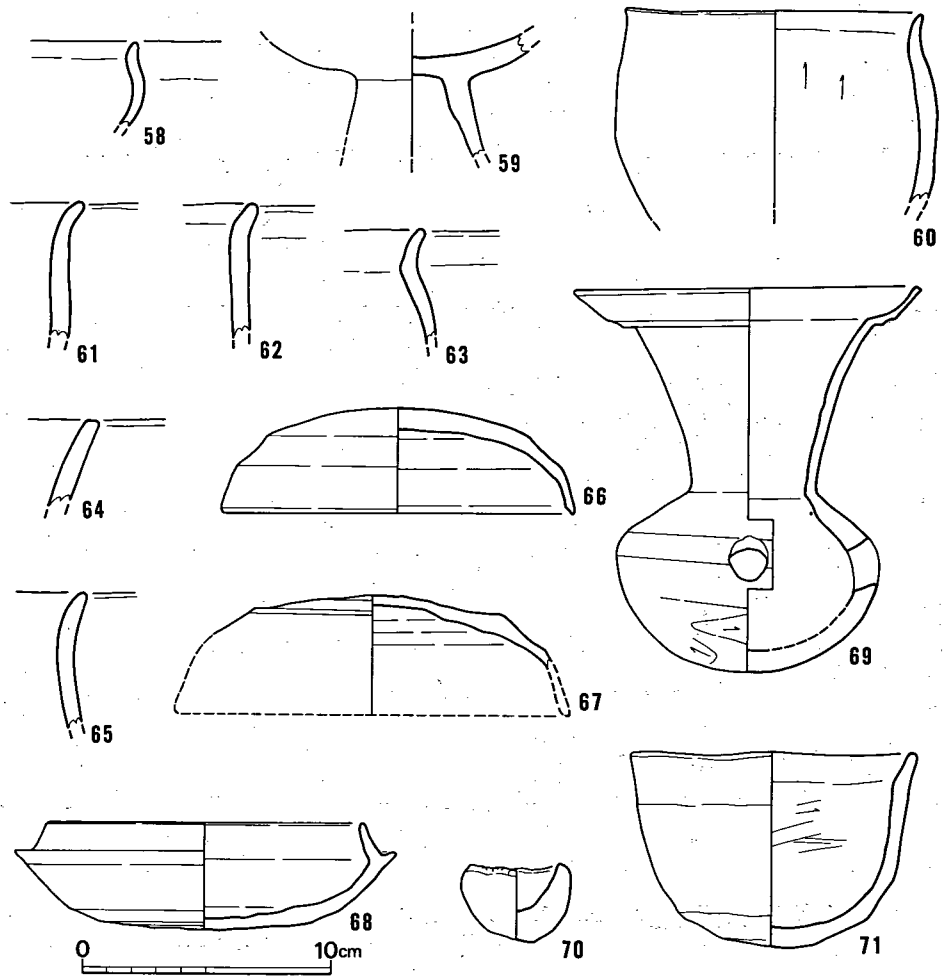


第 94 図　4・5号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/4)

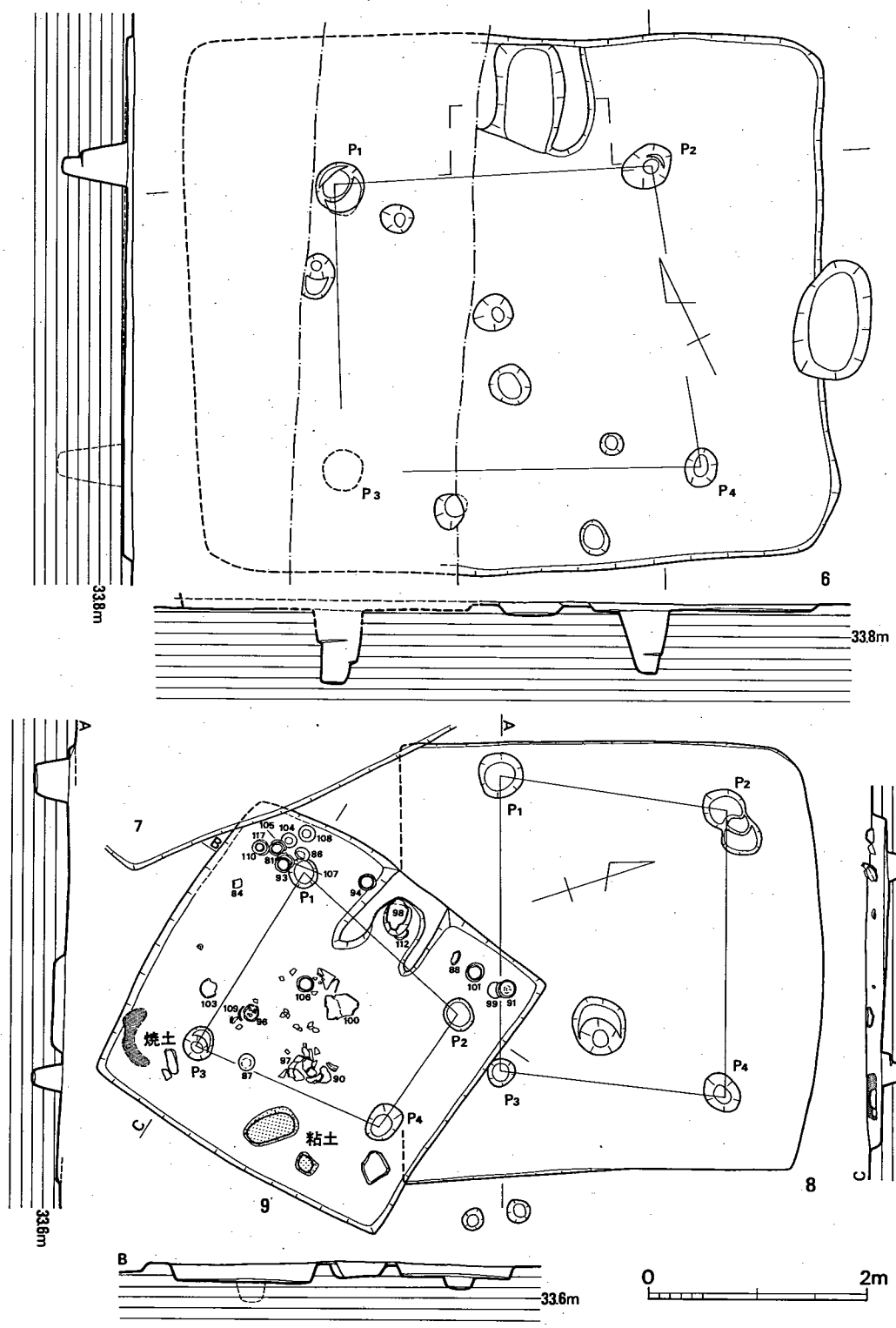
下はナデて仕上げる。外面は全体をナデるが，底部付近には指頭圧痕が観察できる。また，二次的火熱を受けて赤変し，内面には煤が付着する。年代を推測できる資料を欠くが，おおむね他の方形住居跡と同時期のものであろう。



第 95 図　5 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第 96 図　4・5 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3)

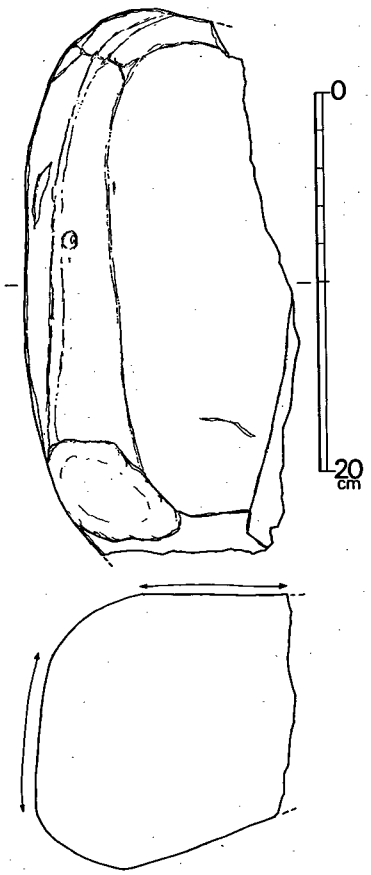


第 97 図　6・8・9 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

6号竪穴住居跡（図版41，第97図）

調査区の南端，5号住居跡の西にある。この辺りは遺構検出が困難であり，トレンチでようやく確認できたものである。そのため西辺は確認できないままで終わった。南北長4.9m，東西長4.8m以上の長方形平面プランを有し，北辺に接してカマドを付設する。主柱穴は4本柱であろうが，すべてを確認できなかった。カマドも高さ3cm程度が遺存するのみであった。出土遺物は覆土中から出土した石皿のみである。

石　皿（第98図）　残存長28.5cm，残存幅14.6cm，厚さ14.8cmを測る，凝灰炭岩製の石皿である。上面は比較的良く，側面はわずかに擦られた痕跡がある。



第 98 図　6号竪穴住居跡出土石皿実測図（1/4）

7号竪穴住居跡（図版41，第99図）

調査区の南端近くにあり，8・9・12号の各住居跡を切る。一辺5.2～5.8mのほぼ方形プランを呈し，深さは0.1～0.2m前後を測る。主柱穴は約2.8mの距離をおいて方形に並ぶ4本で，深さは0.4～0.6mとなる。カマドは西辺中央付近にあり，幅1m，長さ0.8mの規模を有する。

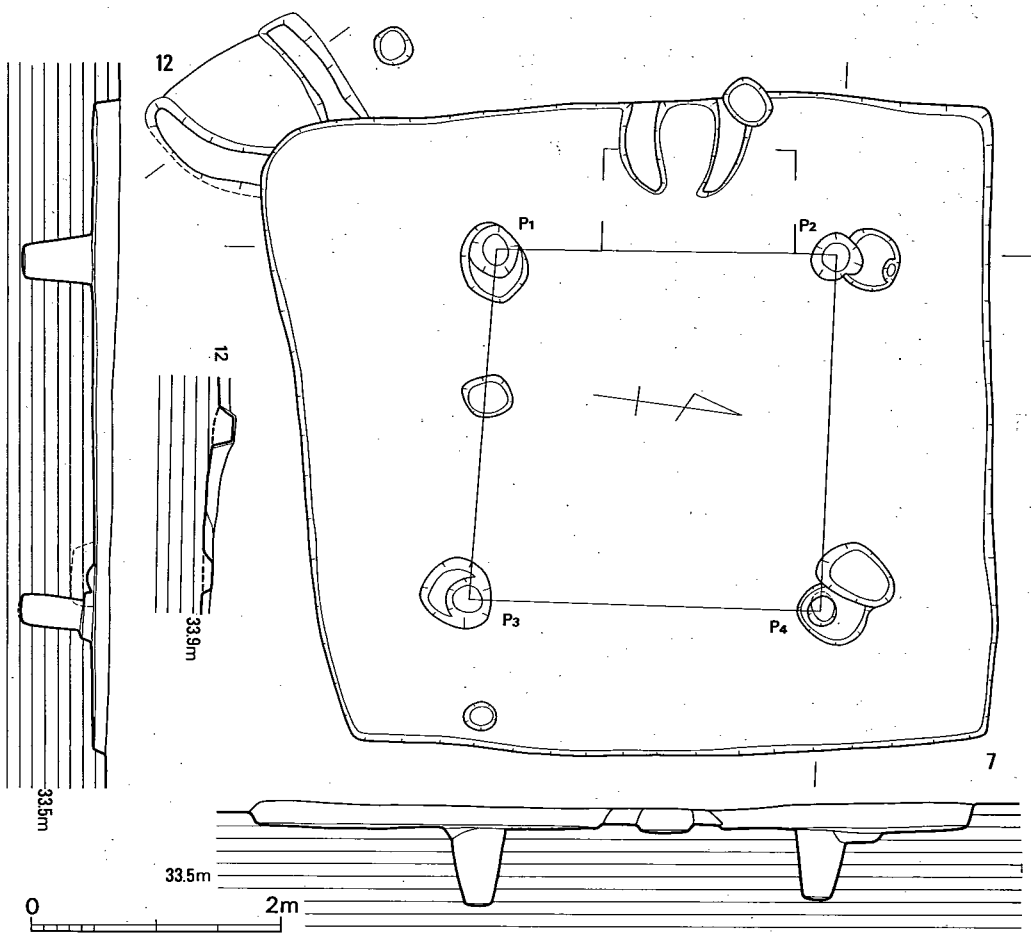
出土遺物は乏しく，72～74が主柱穴内で，75を床面で検出した。後述する9号住居跡を切ることから6世紀中葉以降に使用されたことが解かるが，該当する遺物は識別できない。したがって廃棄年代は不明である。

土師器（第100図72～74）　72は埦の小片。口縁部は小さく外反し，内外面にヘラミガキを多用して丁寧に仕上げるが，底部外面はヘラケズリを用いるようである。73も小片である。口縁部はわずかに外反して内面に稜を有する。体部内外面はナデたようなさまを呈する。74は手捏ね土器。

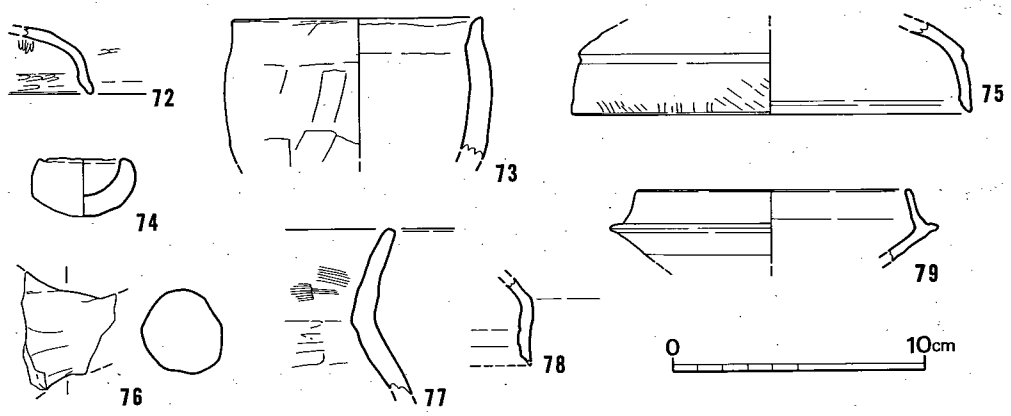
須恵器（第100図75）　1/4弱が残存する。口縁部は端部に内傾する面を持ち，その上端に沈線を刻む。天井部との境の段も比較的シャープに仕上げている。

8号竪穴住居跡（図版41，第97図）

7・9号住居跡に切られ，床面の一部と柱穴を検出できたのみである。一辺4m前後の方形プランを有するが，図での主柱穴と壁の配置には問題があり，西辺はもう少し広がっていたの



第 99 図　7・12号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 100 図　7・8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

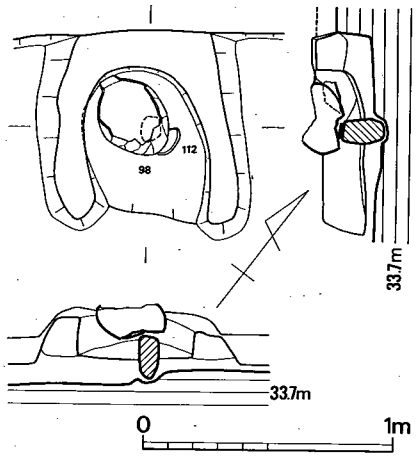
であろう。主柱穴は2.0～2.7mの距離を有し，平行四辺形の配置をとる。カマドは検出できなかった。火床も未確認である。9号住居跡に切られていることから6世紀前半以前に使用されていたものであろうが，詳細は不明。

土師器（第100図76・77）　甑把手と甕の破片である。

須恵器（第100図78・79）　坏蓋と坏身の小片。78は口縁端部に面を作るが，天井部との境は弱い稜で区別するのみである。79は1/8の残片であり，復原口径には問題があろう。

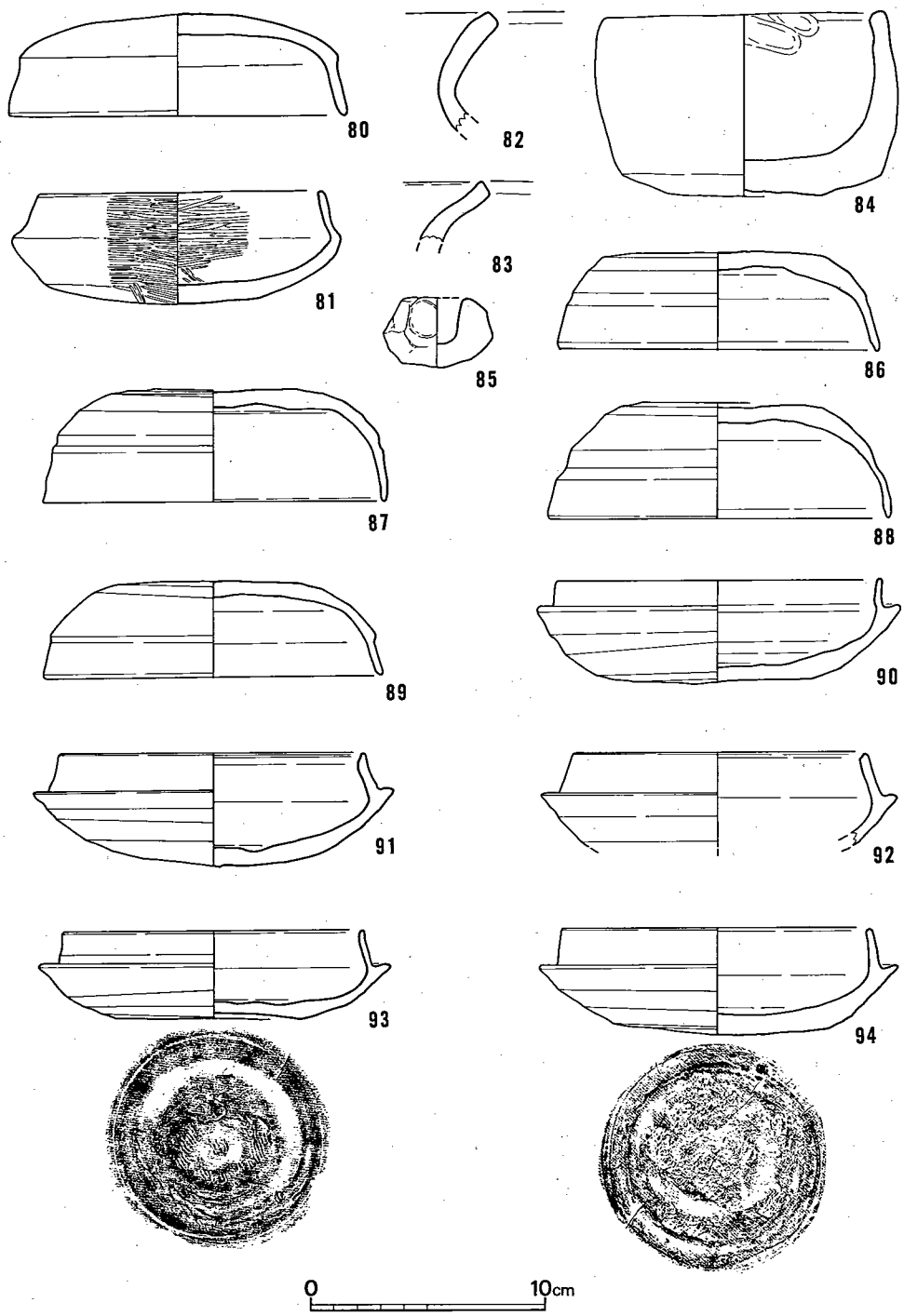
9号竪穴住居跡（図版42～44，第97・101図）

8号住居跡を切り，7号住居跡に切られる。一辺3.1～3.2mの方形プランを有し，深さは0.1～0.2mが遺存する。南東辺近くで粘土塊を検出しているが，カマドと対峙する位置のものは出入口の痕跡を示すものかもしれない。主柱穴は3辺が1.9mの距離を置き，一辺のみ1.3mとなって台形状の配置となる。カマドは北西辺に接して設けられ，幅75cm，長さ85cm，高さ20cmの規模で残存していた。内部には径10cm，長さ20cmの石製支脚が立っていた。図示したような土器が床面からやや浮いて出土している。その状況はカマドの左右，および住居跡中心付近に分けられる。カマドの左側では，86・104・108が伏せてあり，107の上に93，105の上に81，111の上に110を重ね，それらを並べた状態で検出した。94はカマドの袖に接していた。カマドの右側は，88・89・101・99・91が纏まって出土した。そして中心付近では，97・100が割れた状態で，85・90・106・96・109・87・103等がその周辺に散在していた。なお，98はカマド内の支脚上で斜めに傾いた状態にあり，その下に102・112があった。80もカマド内出土。土器群は6世紀前半ないし中葉に比定できるものであり，出土状況は使用時に近いと考えられる。火災の痕跡は見られないが突発的な要因で廃棄されたものであろう。

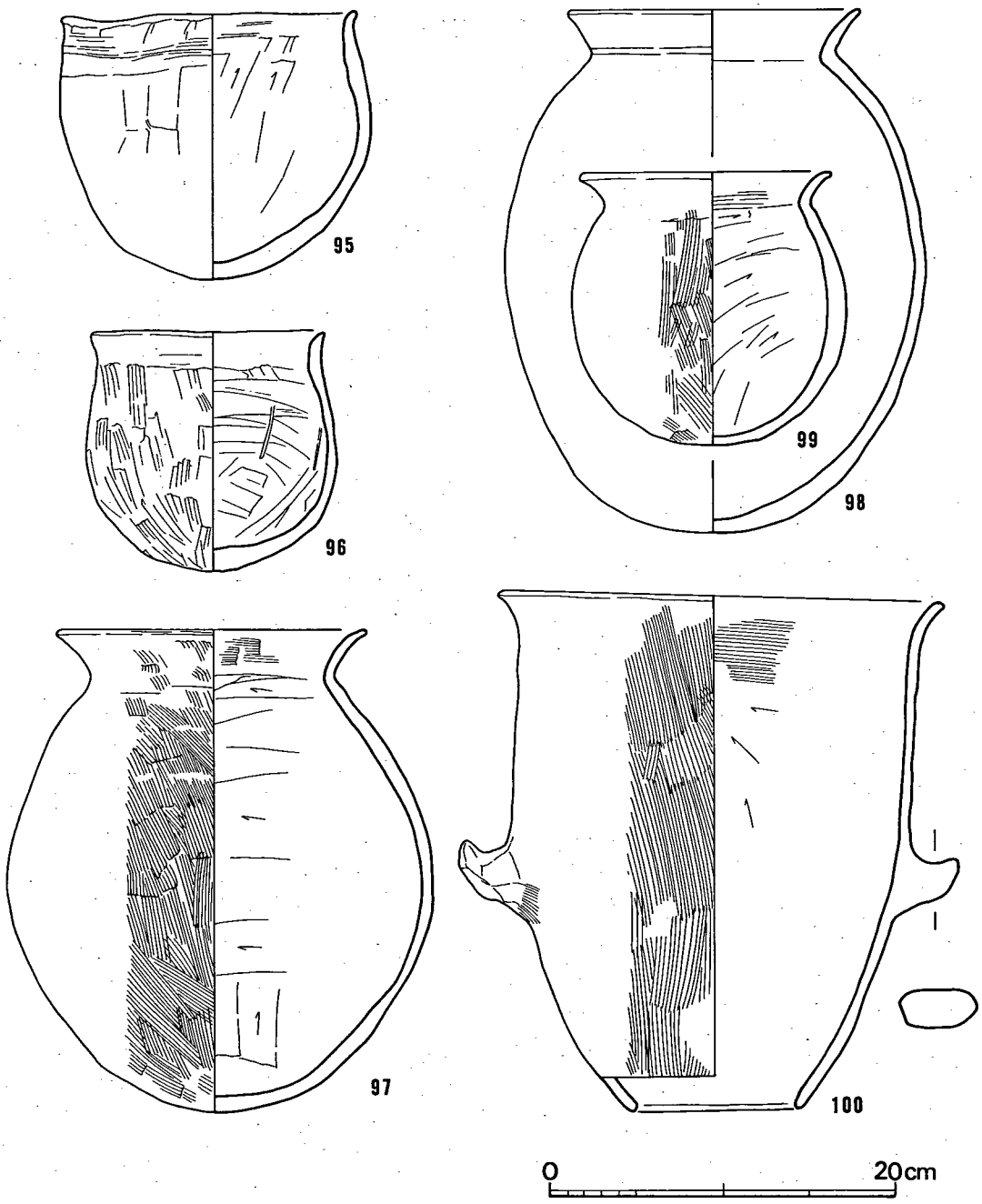


第101図　9号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

土師器（第102・103図80～85・95～100）　80・81は須恵器の器形を模倣した土師器の蓋坏。80は器表が摩滅して調整痕の細部は不明であるが，外面に黒漆を塗布した痕跡がある。81は全体を丁寧なヘラミガキで仕上げる。89は円筒形に近い鉢で，口縁部の約1/2を欠く。これも器表摩滅が進行し，口縁部内の指押さえ痕の他は観察できない。85は手捏ね土器の粗製品。95は口縁部を小さく外反させる鉢で外面に煤が付着する。96も口縁部が小さい。体部内外面はヘラケズリを多用し，外面では粗いヘラミガキも用いる。97はやや胴長で口縁部が大きく反転する。一見古相を示すが遺構の在り方や出土状態から見て他の土器に伴うものとしてよい。98も胴長で



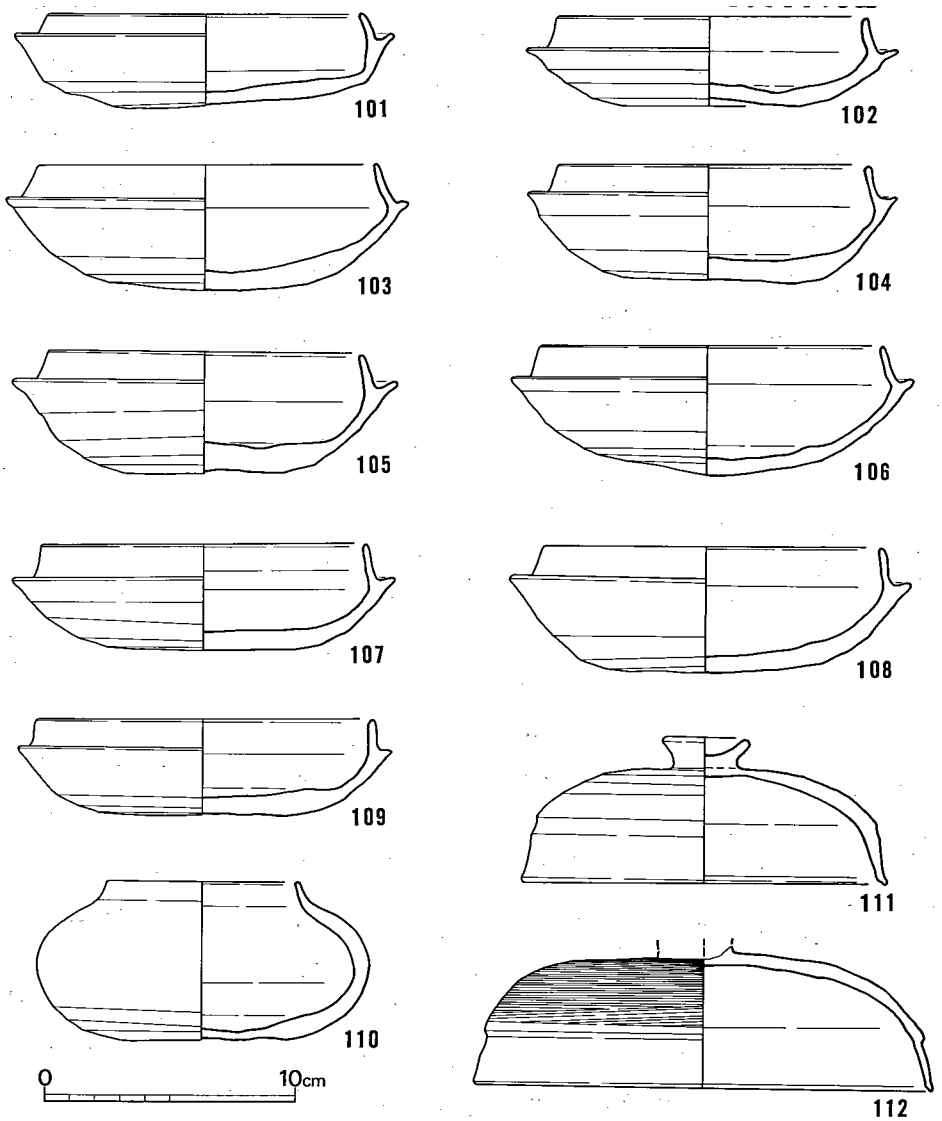
第 102 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図 1　(1/3)



第 103 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)

あるが97に比べて張りを欠く。口縁部は強く屈曲反転する。器表の摩滅が著しい。99も外面に煤が付着する。100の甑は口縁部が外反して明瞭に区別され約2/3が遺存する。

須恵器（第102・104図86～94・101～112）　86はやや特異な形態を見せるが，口縁部・天井部の境を小さく凹ませる点を重視して坏蓋としておく。これと84・88は天井が高く，口縁部界に明瞭な段をつける等で他の3点と異なる。いずれも口縁端部はほぼ丸くおさめている。坏身は個体数が多く，かつ出土状況からしてもほぼ同時期に廃棄されたとできるものである。中でも90・109の2点は体部が浅く，立ち上がりが直立するなど他と異なるが，これのみがいわゆる「赤焼き土器」であり，形態の相違も首肯される。また，93・94の内面には同心円の当具痕が残る。

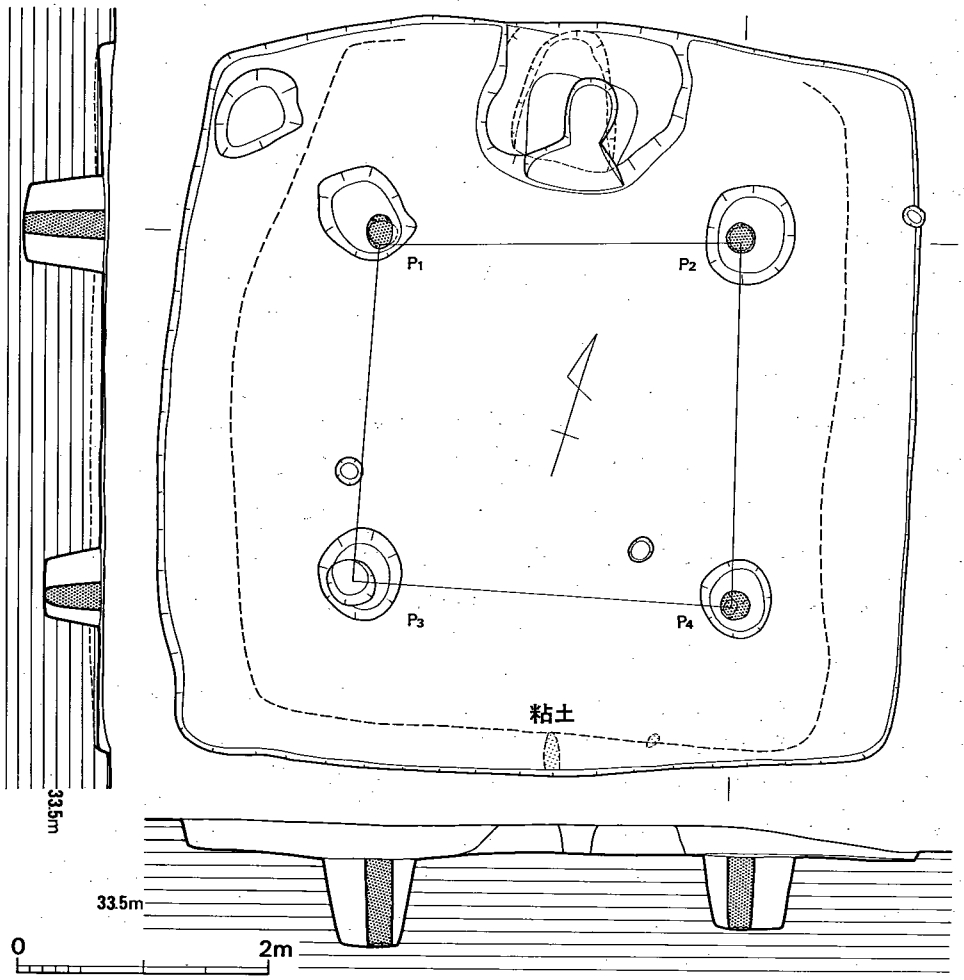


第 104 図　9号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

110は短頸壺で，胴張りが強く扁平な感を受ける。底部外面は未調整で終わる。111・112は高坏の蓋。天井・口縁部界に弱い凹線あるいは段を付し，口縁端部に内傾する面を形成する。112は天井部外面にカキ目が顕著である。 (飛野)

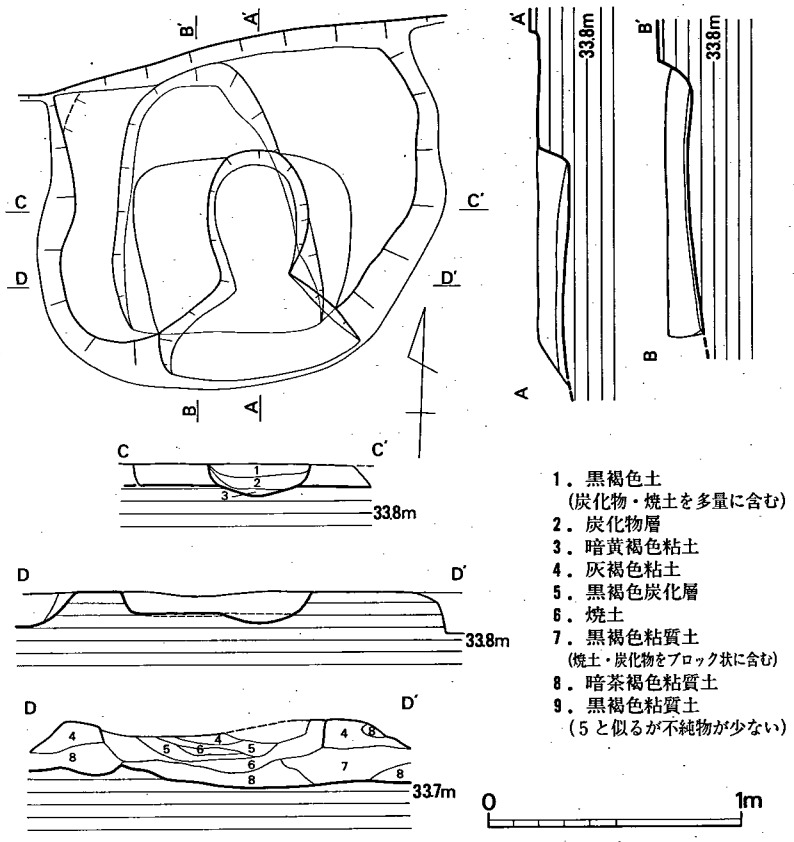
10号竪穴住居跡（図版41・45，第105・106図）

調査区の中央南側にあり，7～9号住居跡のすぐ北に位置する。この住居跡の下層に21号住居跡が辺を同じくして納まる。一辺が6mの隅丸正方形のプランを呈し，4本の主柱穴（P1～P4）とも径15～20cmほどの柱痕を検出できた。P1～P2間2.85m，P1～P3間2.7mを測り，床面より40～70cmほど掘削される。南壁中央部付近に黄褐色粘土塊が2箇所認められるのは出入口の階段の痕跡であろう。カマドは北壁中央部に新旧2つ存在する。新カマドは検出した壁より45cmほど内側に築かれ焚口と燃焼部間が20cmほどに狭まる。旧カマドは袖長1mに



第 105 図 10号竪穴住居跡実測図 (1/60)

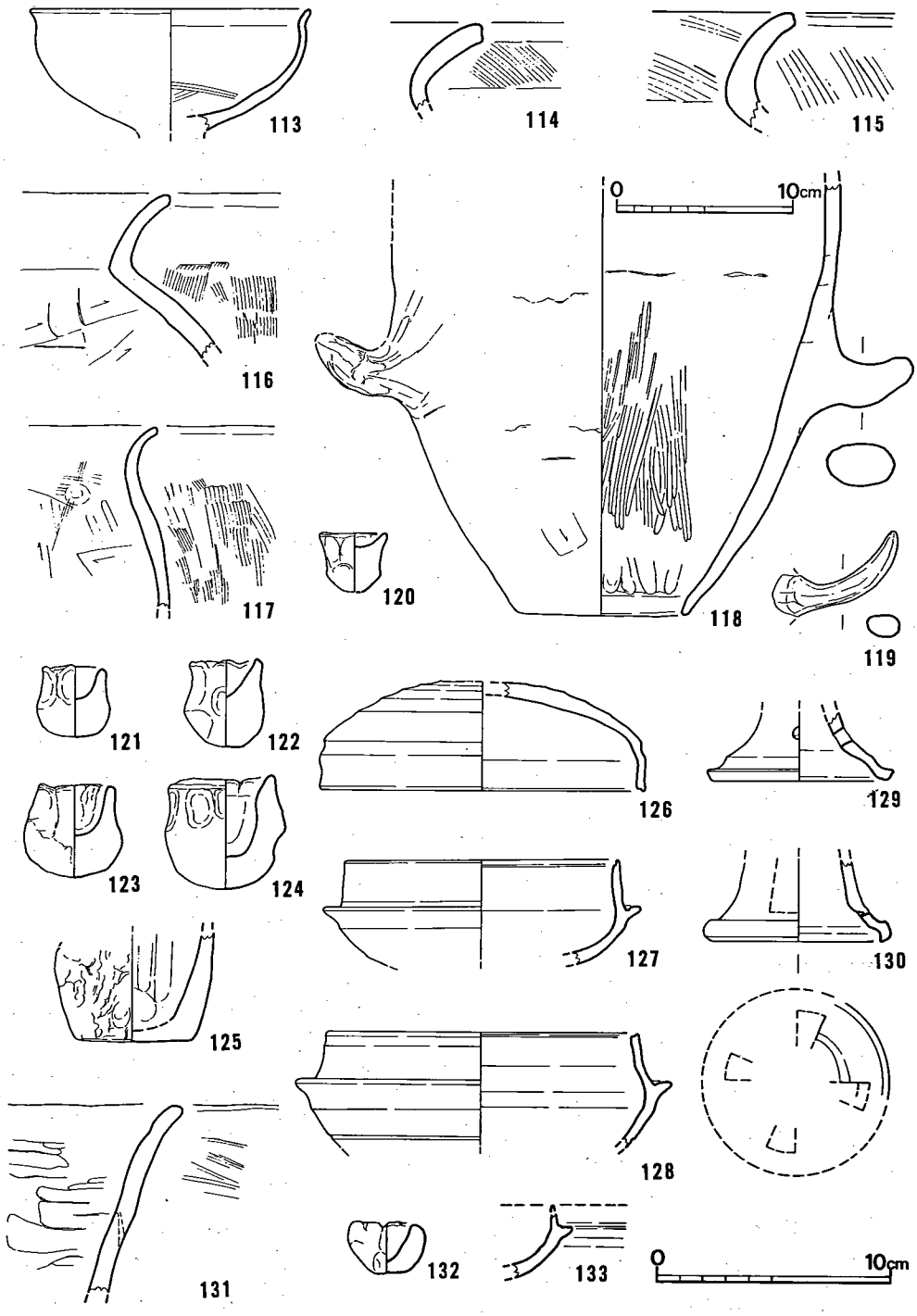
達する大きなもので，焚口幅75cmを測る。従って住居跡のプランは旧カマドの時期であり，縮小して建て替えられているが，柱跡の位置は変化していない。出土遺物は床面より116の甕，126～128の須恵器坏蓋・身のセット，129の高坏が出土した。出土遺物は6世紀初頭から前葉の時期で，古墳時代の住居群では最も古く位置づけられる。



第106図　10号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

土師器（第107図113～125）　113は高坏の坏部片で短く外反する口縁部を持つ。内面はヘラミガキ。復原口径12cm。114～116は甕の口縁部片で115は内外面ともハケ目調整を施す。117・118は甑で薄手の作り。117の内面は先端の尖った工具によるケズリを，118の下半は縦方向のミガキを施し，その下は指頭圧痕がある。細身の把手の下部はタタキ痕が若干見られる。119は把手付鉢の把手部で，非常に精製された胎土を用いヘラ状工具で磨かれる。120～125は手捏ね土器で器高2.5～4.6cmまで種々である。125は平底を呈し，外面のひび割れが著しい。鉢なのであろうか。

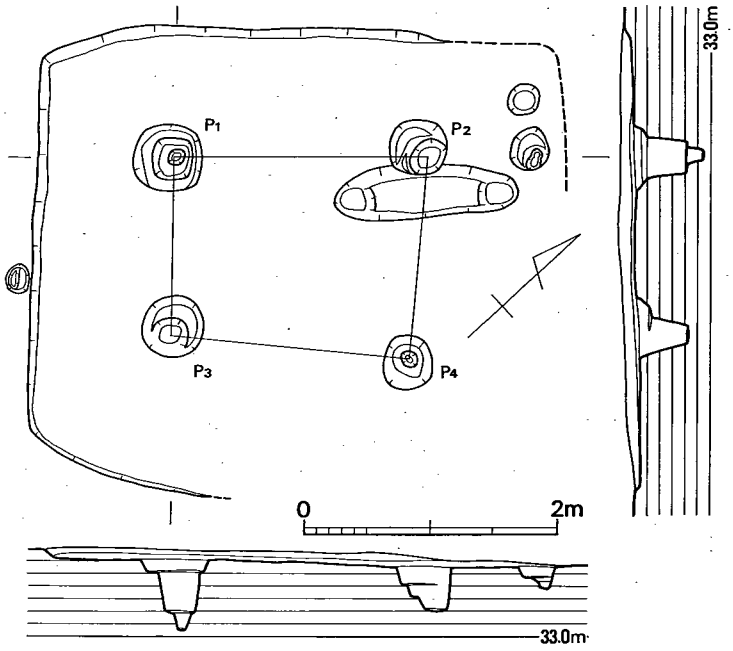
須恵器（第107図126～130）　126は蓋の破片で，器高の1/2に達する高く直立する口縁部を有す。屈折部は凹線状を呈し，口唇部面に納まる凹線が特徴的である。天井部から約1/3までが回転ヘラケズリ，復原口径14cm。127・128は蓋に伴う身で，小さな蓋受けから若干内方に高く立ち上がり，その立ち上がりの中位がやや膨らみを持つ。口唇部の凹みは127では口縁端部に，128は口唇部内にある。両者とも底部から1/3まで回転ヘラケズリを施す。口径は11.8cmと13.3cmの大小2種類ある。129・130は高坏の脚部片。畳付けは両者とも内脚端部であるが130はキャリパー状になる。円孔と長方形の透孔を持つ。



第 107 図　10～12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3，118は1/4）

11号竪穴住居跡（図版46，第108図）

調査区の南東側に検出され，東壁は現代の水路，北壁は削平により不明。床面までわずか10cmほどしか遺存しない。主柱穴から復原して南北4.15m，東西3.7mほどの隅丸長方形プランであるが，カマドの存否はわからない。主柱穴のＰ１～Ｐ２間２m，Ｐ１～Ｐ３間1.5mを測り，２段掘りの掘方は深さ40～60cm。遺物の残りは悪く，わずかに甑片，手捏ね土器が埋土中より出土したにすぎない。出土遺物から時期を決定することは困難であるが，大概６世紀中～後半頃であろう。



第 108 図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）

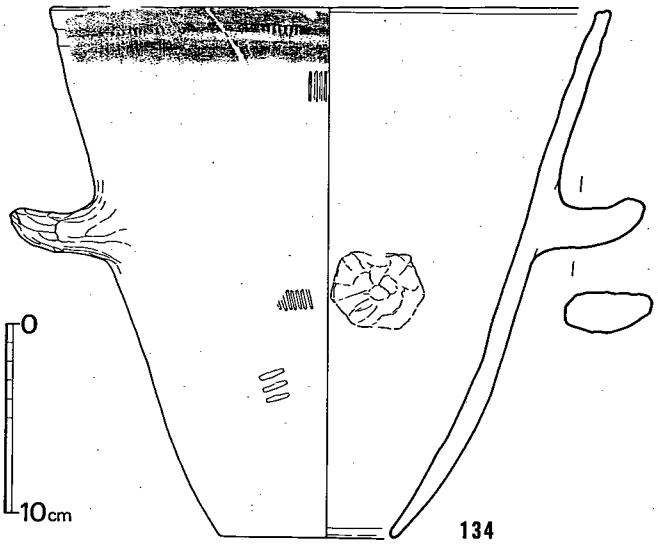
土師器（第107図131・132）

131は甑の口縁部片で，胴部からそのまま広がる器形。内面は横方向のミガキ，外面上半はハケ目状で下は擦過痕がある。132は手捏ね土器で口径3.1cm，器高2.1cm，外面に黒斑がある。

12号竪穴住居跡（図版41・46，第99図）

７号住居跡の南西コーナーに切られて，カマドのみが遺存した。周辺を精査したが，主柱穴等は見つからず，確実に住居跡であるとは言い難いがカマドを尊重して番号を付けた。カマドは焚口幅85cmと広く，袖は長さ95cm，幅30cmほどの粘土帯が残るが，あまり使い込まれた痕跡はない。内より土師器甑，須恵器坏身が出土した。時期はカマド内に遺存した土器から６世紀後半から終末であろう。

土師器（第109図）　カマドの上部より出土した甑。若干内弯ぎみの底部からそのまま外方に広がる器形で，胴部中央やや上位に細身の把手を付ける。口縁部直下に平行のタタキ痕が残る。胴部にもわずかではあるが平行のタタキ痕が認められる。内面は青海波のタタキで，中央部に円形の剝落痕が残るが，何であるかは不明。口径30cm，器高28cm，底径9.3cmで，把手部以下に



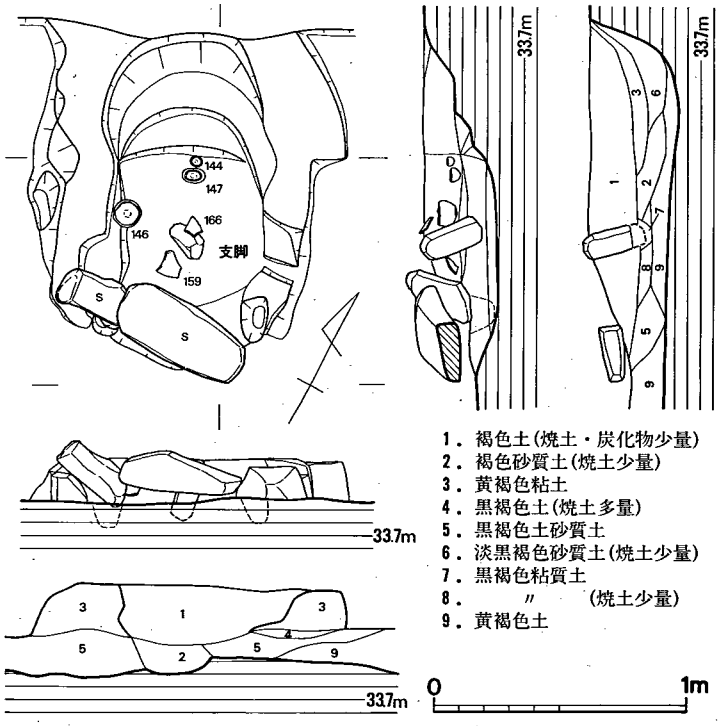
第 109 図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

煤が付着する。

須恵器（第107図133）　口縁部を欠く坏身片だが，立ち上がりはそう高いものではない。

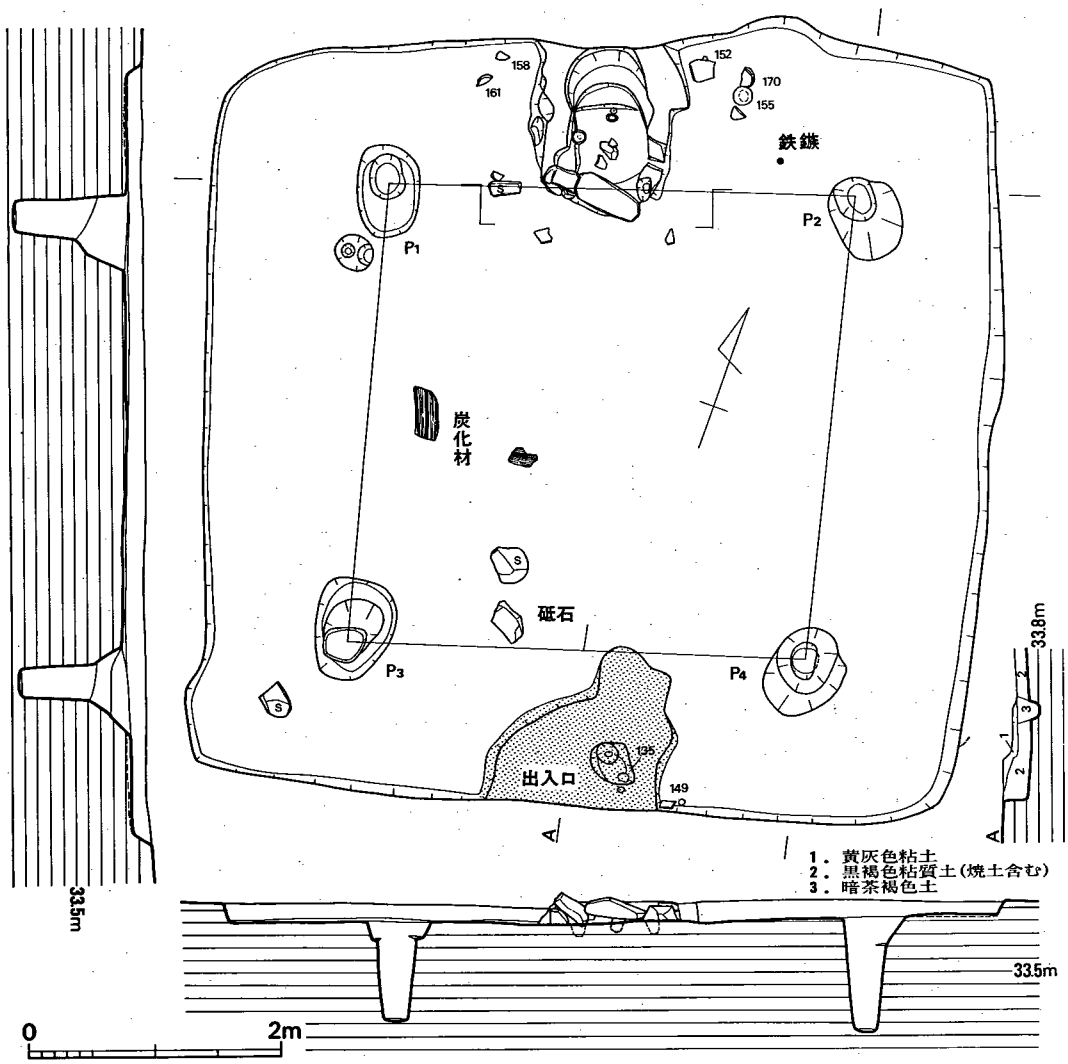
13号竪穴住居跡（図版47・48，第110・111図）

調査区の中央南側で検出された住居跡で，南北6.05m，東西6.23mとほぼ隅丸の正方形を呈する。床面まで10～15cmほどしか残らないが，カマド前面から中央部の床面は，良く踏み締められている。カマドの前面壁，つまり南壁には出入口階段と思われる黄灰色粘土の広がりが見られる。幅1.2mほどの粘土は厚さ5cm内外で，その下には焼土を含む黒褐色粘質土を10～15cm充て固める。主柱穴はP1～P4で，3.6mの間隔がある。カマドは北壁中央部に付設され，遺存状態は極めて良好である。袖は両方とも長さ1.2mほど残り，その先端には焚口をなしていた2個の自然石（長さ30cmと50cm）が倒壊した状態で検出された。本来は両袖の先端に各々1個ずつ石が立て



第 110 図　13号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

られ，その２つの石を架け渡すかのように横長の石が置かれ，粘土で固めることにより焚口を構築していたと考えられる。検出時点ではその東側の石がなく，抜き取りの穴のみが確認された。カマド内中央では自然石を利用した長さ25cmの支脚がほぼ据えられたままの状態で検出され，またその周辺の火床面上からは手捏ね土器144～147や二次火熱を受けた甕148等が出土した。カマド構築にあたっては，住居の床面を15cmほど掘り下げそこに黒褐色砂質土を置くことにより，カマドの基礎としている。出土遺物は割合豊富で，床面より138の甕，155・158・161の須恵器坏蓋，170の坏身の他に砥石，鉄鏃，出入口より135・137の土師器椀・甕と173の須恵器高坏蓋等が出土した。出土遺物より10号竪穴住居跡より若干後出する６世紀前半の時期であ

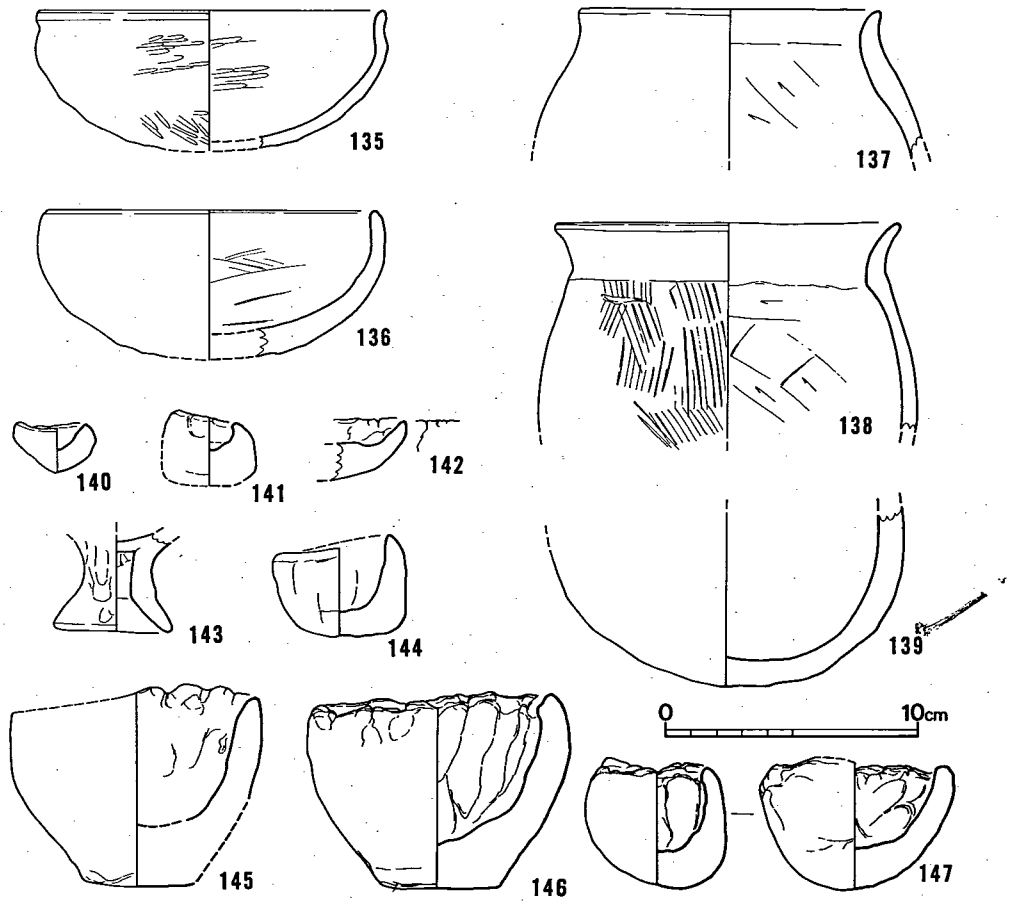


第 111 図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）

ろう。

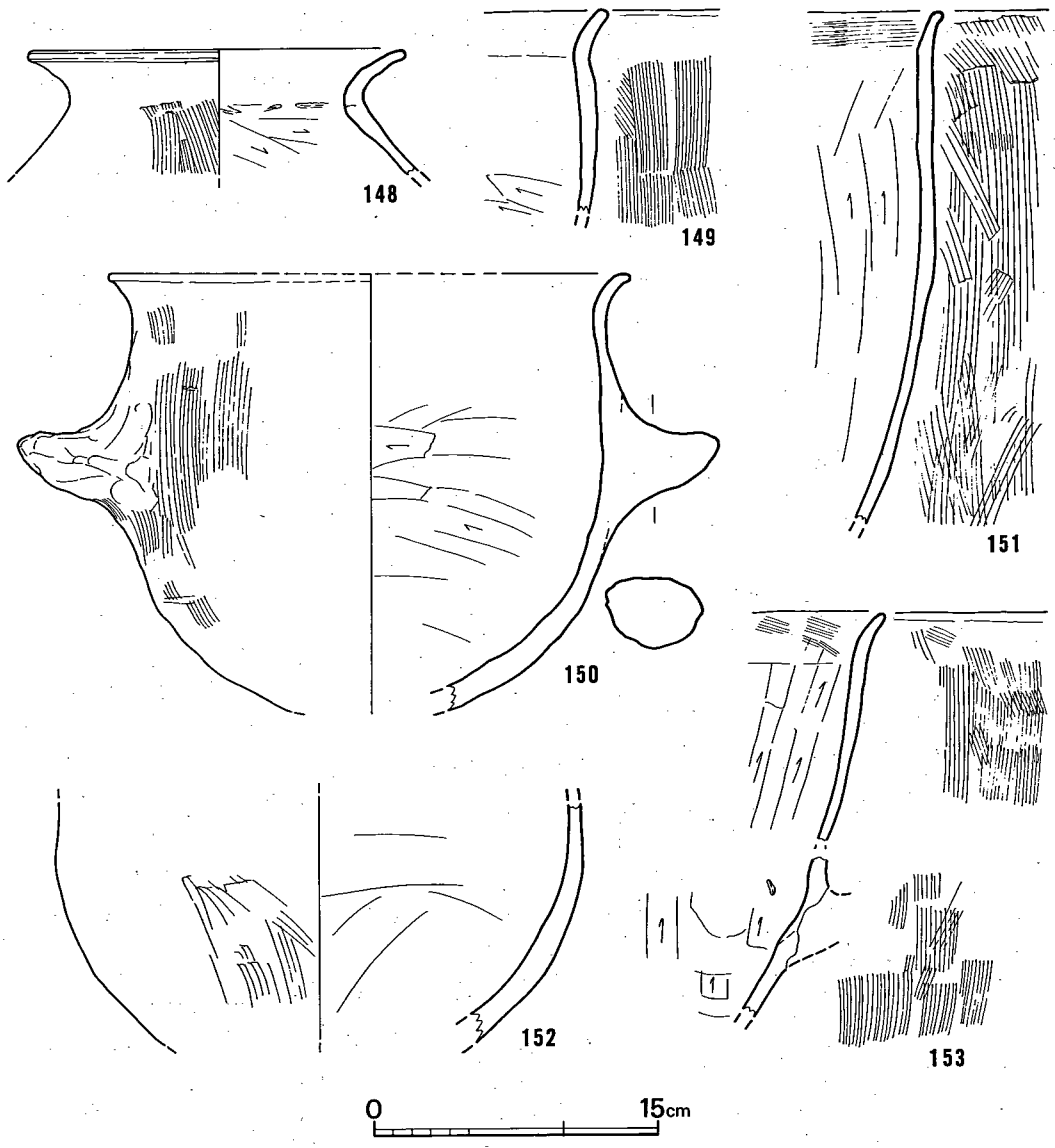
土師器（第112・113図135～153）　135・136は深みのある埦。135は口縁部が外反する器形で，内外面ともヘラミガキを施す。136は内弯する厚手の土器で復原口径13.4cm，137～139・148は甕である。137は口縁部の外反度が弱く，138は頸部内面の屈折を強く意識している。内面は両者ともヘラケズリ。口径13.6cm。148は接合面をなす頸部から強く外反する口縁部に移行する。口径19.8cmで，内外面は二次火熱を受ける。140～147は手捏ね土器で，143の高坏以外は埦形を呈する。140が器高2cm，146は7.5cmとバラエティーに富む。144～147がカマド内より出土しており，祭祀行為に伴うものであろう。149～153は甑。150は外弯度が大きく，他は小さい。外面は縦方向のハケ目，内面はヘラケズリを施す。150は復原口径28cm，残存高23cmを測り，内外面とも二次火熱を受ける。

須恵器（第114図154～175）　154～164は坏蓋である。天井部から口縁部の移行部に明瞭な段を持ったり，段にならないまでもその屈曲を持つ古式の須恵器で，いずれも屈折部付近まで回転

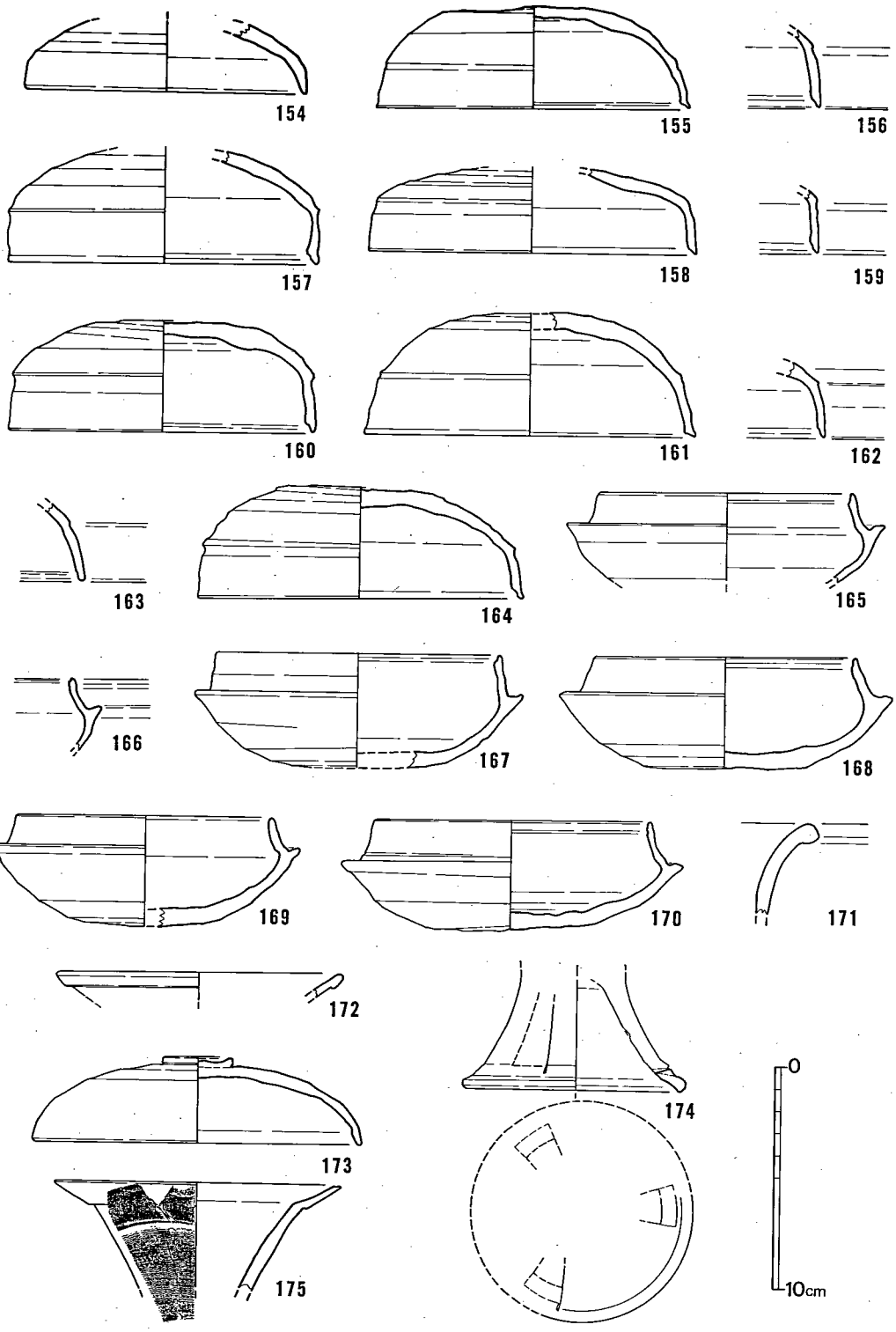


第 112 図　13号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)

ヘラケズリを施す。前者は157・159・160・162・164が上げられよう。後者には155・161・163が該当しよう。口唇部内側は凹線により「爪先」状になり，10号住居跡出土の126のように口唇部内凹線でないのは，時期差なのであろう。154は小型で器壁・器形等時期的に下がる資料。158は他と比べて偏平な蓋であるが，整形・調整技法等は他と同じである。155は口径14.2cm，器高4.5cm，156は口径13.8cm，器高5cmで主柱穴P3の出土。164は口径14.6cm，器高5.1cm。163～170は坏身で，蓋受け部からやや内傾して直に立つ口縁部（165・167・168・170）と内弯してやや



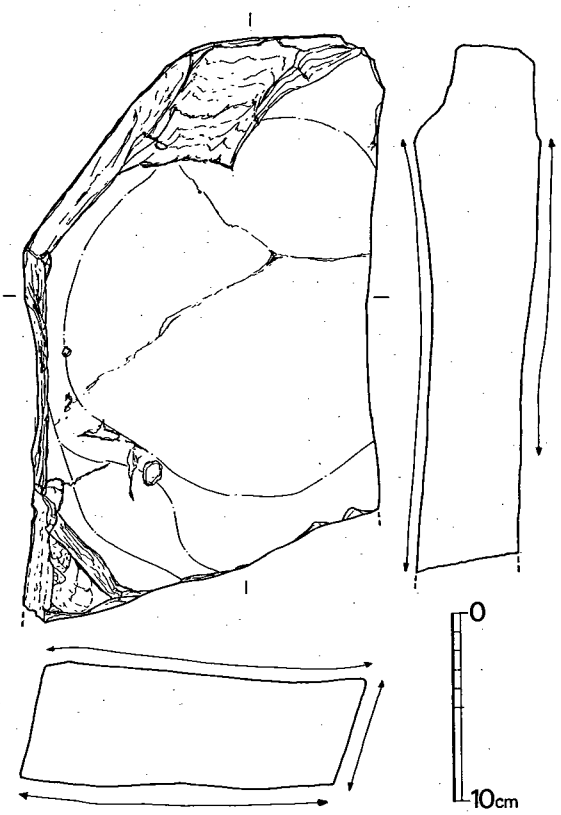
第 113 図　13号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/4）



第 114 図　13号竪穴住居跡出土土器実測図 3　(1/3)

短い立ち上がり（166・169）の二者がある。前者は坏蓋157・160・163等とセットをなす。170は口縁部内側に沈線がみられ，口唇部が「爪先」状にならず，底部のヘラケズリを受け部下２～３cmまで施すなど，新しい要素が見られる。168は復原口径11.8cm，器高５cm，169は口径11.5cm，器高5.1cm，171は口径12.4cm，器高4.9cmを測る。171は壺の口縁部片で端部は丸く納める。172も壺の口縁部らしいが，薄手で口縁部は玉縁状をなす。173は高坏の蓋で偏平な撮が付く。口径15cm，器高3.9cm。174は高坏の脚部で三角形の透孔が入る。脚径9.5cm。175は段を持ち外反する口縁部が逆八字状に広がる壺で，口縁部から頸部にかけて緻密な波状文を巡らす。口縁部径12.9cm。

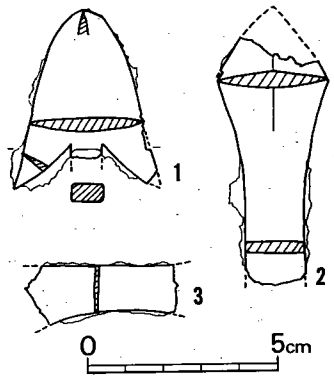
砥　石（第115図）　厚さ5.5cm～6.5cm，幅17cmに達する大きな砥石で，１cmほど使用減りしている。ただ磨痕に特定な方向は認められない。粘板岩製。（木下）



第 115 図　13号竪穴住居跡出土砥石実測図（1/4）

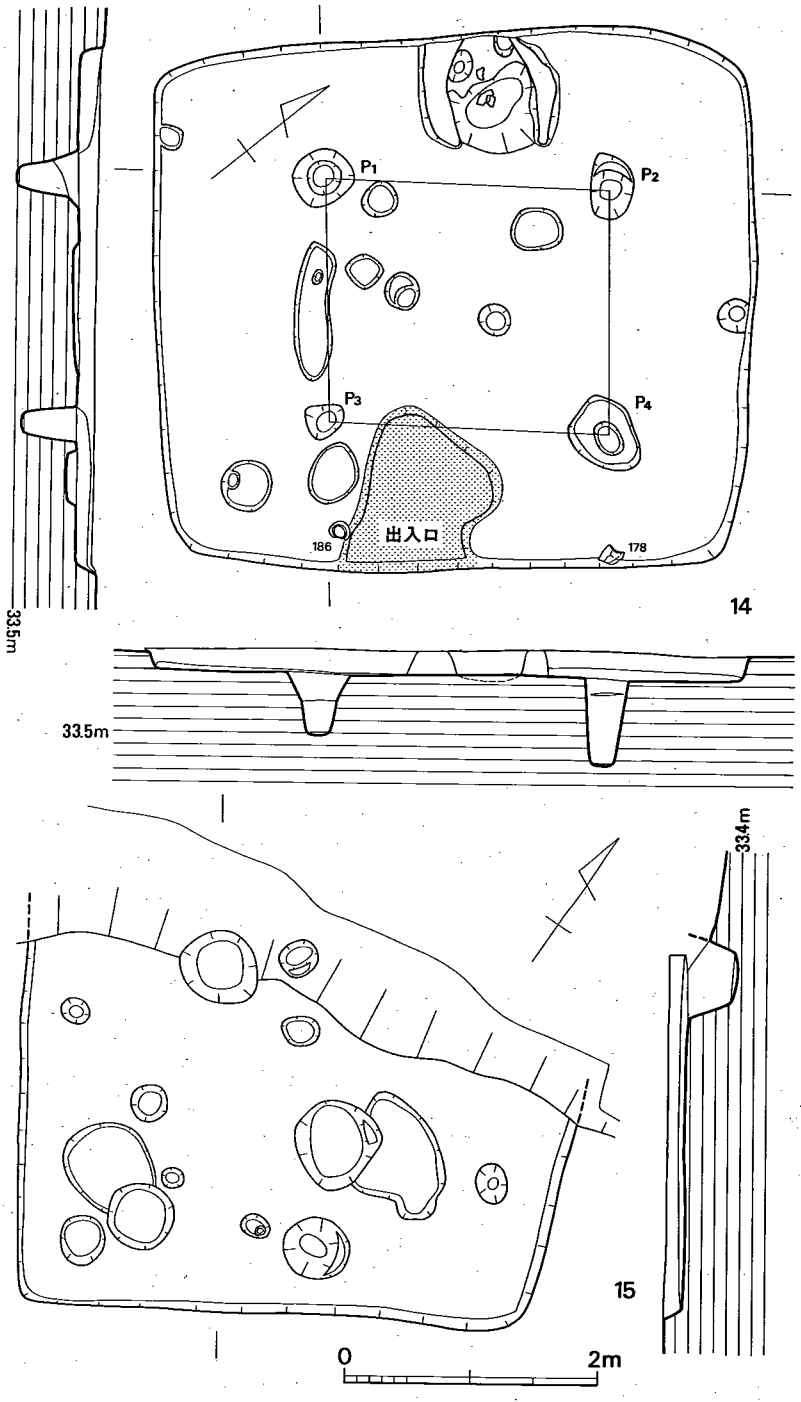
鉄　器（第116図）　鉄鏃１・３の鏃身はいずれも欠損し，１は最大幅3.9cm，現存長4.8cm，厚さ３mm，３は最大幅2.9cm，現存長7.5cm，厚さ４mmを測る。先端付近の断面形態はレンズ状を呈するのに対し，鏃身部は方形を呈する。２は厚さ１mmと薄い板状の鉄器であるが，両端が欠損しているため全体の形態は不明。

（水ノ江）



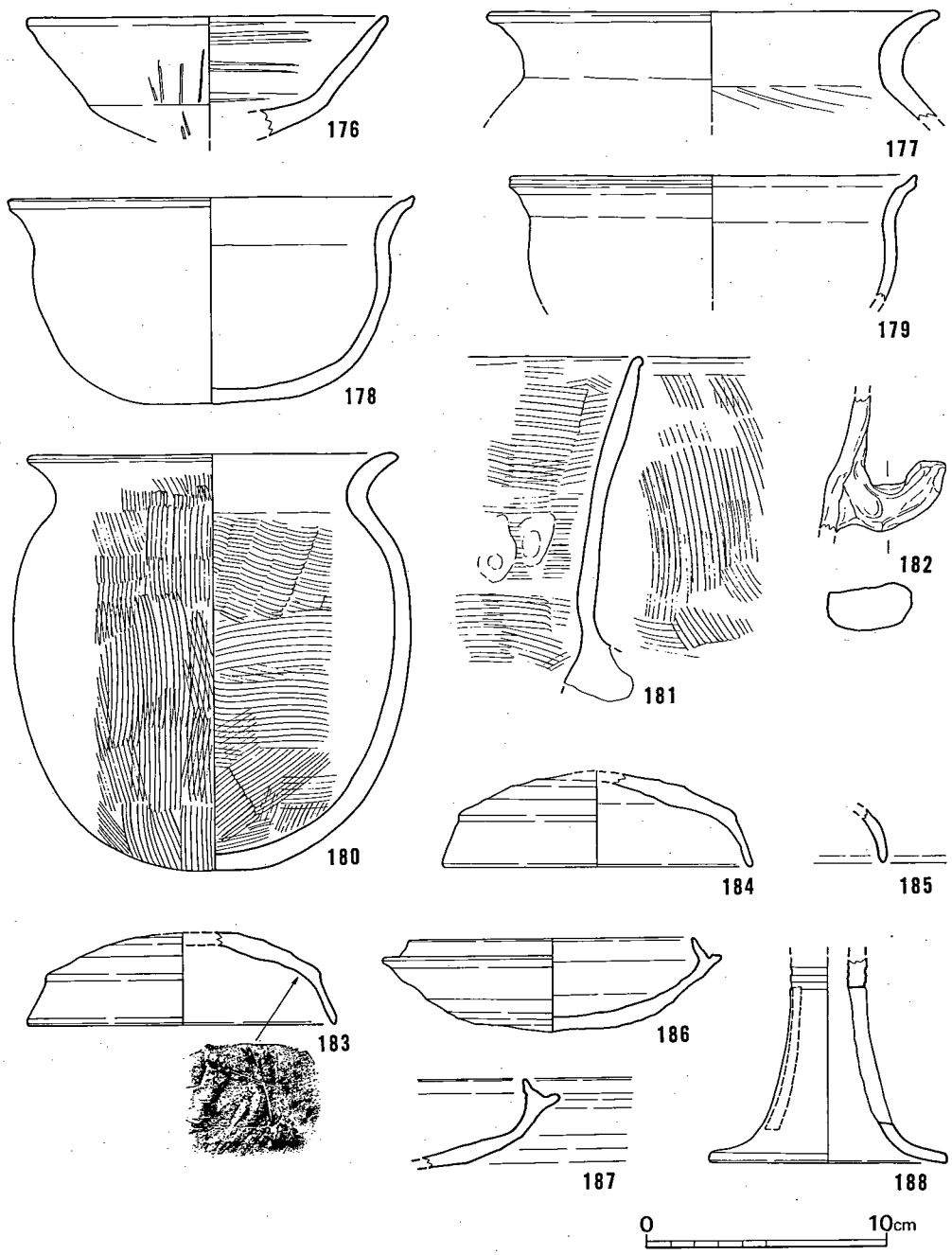
第 116 図　13号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）

14号竪穴住居跡（図版50・51，第117・119図）



第 117 図　14・15号竪穴住居跡実測図（1/60）

14号竪穴住居跡は調査区南側の比較的住居の少ない地域で，15～18号住居群の南6ｍに位置する。辺長は4.8×4.3ｍの方形プランで，壁高は最高で20cmを測る。主柱穴の深さはいずれも50cm程度だが，主柱穴Ｐ２だけは70cmと深い。カマドは北西壁の中央からわずか北寄りに付設され，二次火熱を受けた甑（第118図181）が出土した。火床面は住居貼り床上面とほぼ同じレベルだが，その下部の地山は凹凸が目立つ。袖に沿うように深さ10cmほどの浅い溝が掘られ，その中に黄褐色の粘土が敷かれ袖の土台となっている。カマドと対峙するように南東壁中央には1.3×1.1ｍの

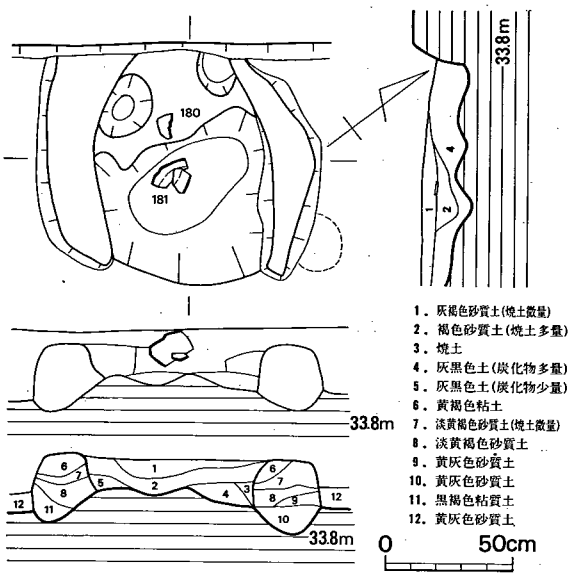


第 118 図　14号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

範囲で黄褐色の粘土が広がるが，これは出入口的機能を有するものと考えられる。第118図186の須恵器坏は，この粘土に食い込むような状態で出土した。

土師器（第118図176～182）　高坏176の内面にはナデ，外面にはミガキが施される。178・179の鉢の器面調整はナデで，いずれも二次火熱を受ける。甕177の外面はハケ，内面はナデで，甕180と甑181の器面調整にはすべてハケが施される。

須恵器（第118図183～188）　183・184の天井部外面および186・187の底部外面の調整は回転ヘラケズリで，183天井部内面には「×」字のヘラ記号がある。高坏188の器面調整はナデで，透孔と2条の沈線文が施される。坏身の口縁端部の立ち上がりは比較的低い。



第 119 図　14号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

15号竪穴住居跡（図版52，第117図）

15号竪穴住居跡は調査区中央部やや南寄りで，密集する16～18号住居群の東端16号住居跡に近接する。住居の北側1/3を大きく削平されるが，壁高は最高で15cmほどを測る。残存する辺長は4.4×3.0mで，本来は方形プランを呈していたと考えられる。主柱穴やカマドは確認できなかったが，カマドは北側の壁に付設されるという本遺跡の性格から考えて，削平され遺存していないのであろう。遺物には須恵器等も含まれるが量的に極めて少なく，図示できるものは第121図189だけである。

土師器（第121図189）　甑の把手で，指頭圧痕がかすかに残る。

16号竪穴住居跡（図版52，第120図）

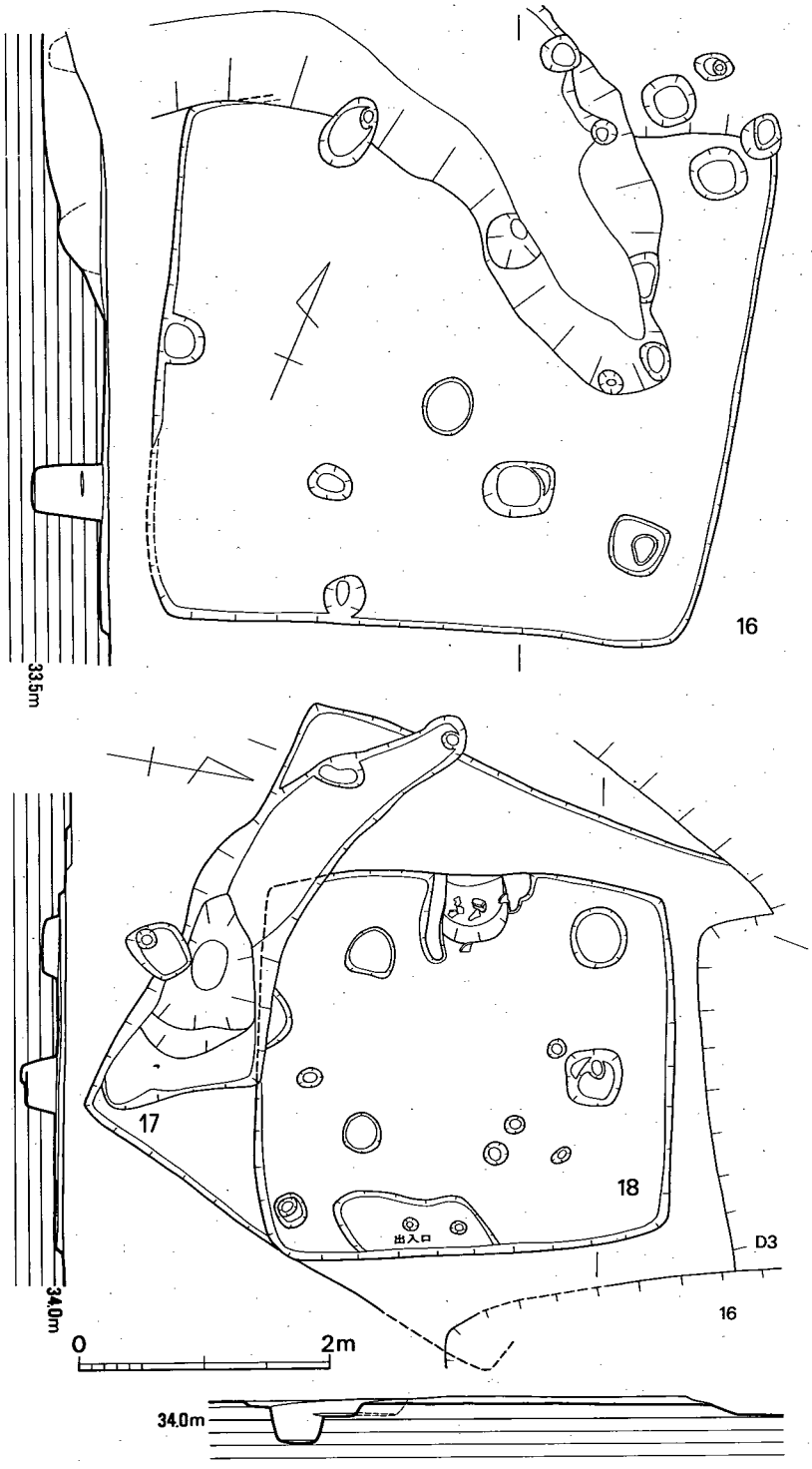
16号竪穴住居跡は調査区中央部やや南寄りに位置し，15号住居跡と17・18号住居跡との中間に位置する。住居の北壁付近を削平されカマドは遺存せず，主柱穴は確認されていない。残存部分の辺長は4.7×4.1m，壁高5cmで，本来は方形プランを呈していたようである。遺物は小破片で少ないが，須恵器が含まれる。図示できるのは第121図190だけである。

土師器（第121図190）　190は手捏ね土器で，指頭圧痕が窺える。

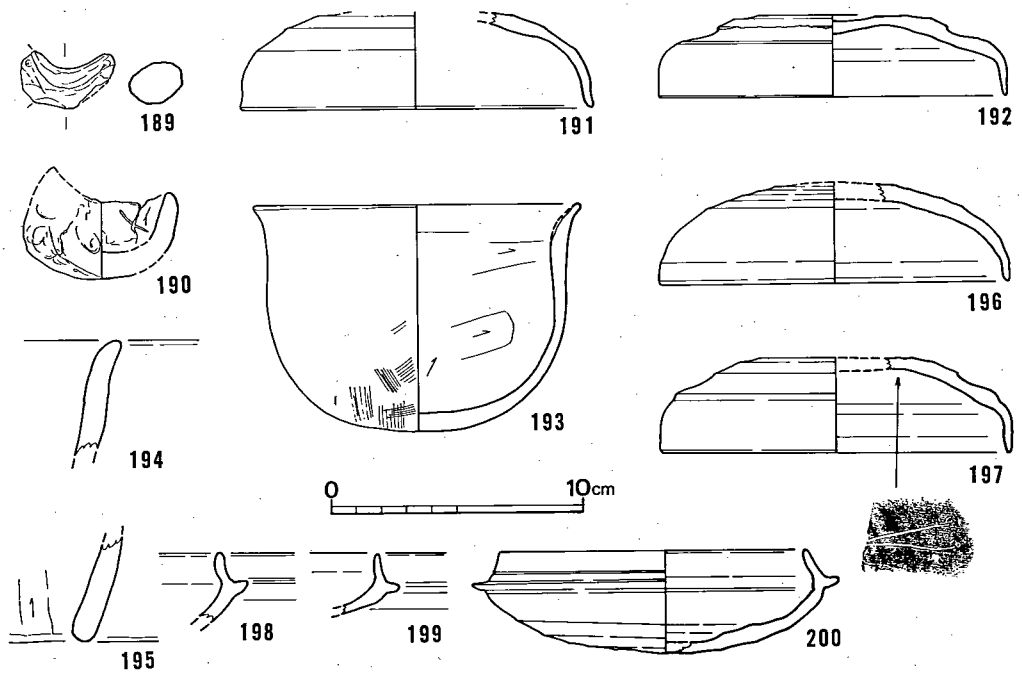
17号竪穴住居跡（図版50，第120図）

17号竪穴住居跡は調査区中央部のやや南寄りで16号住居跡の西に近接し，18号住居跡に切られる。カマドや主柱穴は確認できていないが，残存する辺長は4.3×3.4mで方形プランを呈していたようである。全体的に遺存状態は悪く壁高もわずか4cm，北壁は残らず3号土壙との切り合い（先後関係）も明確でない。出土遺物は少なく，破片も小さい。

須恵器　（第121図191・192）　191・192はともに坏蓋で，天井部外面には回転ヘラケズリが施される。



第 120 図　16～18号竪穴住居跡実測図（1/60）

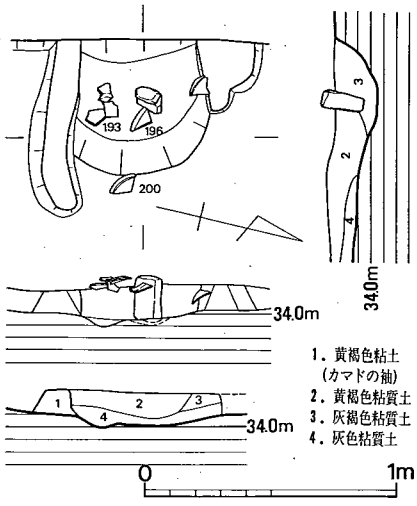


第 121 図　15～18号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

18号竪穴住居跡（図版53，第120・122図）

18号竪穴住居跡は調査区中央部のやや南寄りに位置し，16号住居跡の西に近接して17号住居跡を切る。平面プランは方形で，辺長3.0×3.4mという規模は本遺跡において62号住居跡に次ぎ2番目に小さい。柱穴はいずれも浅く，また位置も整然と配されておらず，確実に主柱穴といえるものはなかった。カマドは西壁中央に付設され，北側の袖はわずかにしか残らないものの自然石を利用した支脚が立てられたままの状態で検出され，全体的には比較的良好な遺存状態をみせる。火床面は住居の床面とほぼ同じレベルだが，カマドが付設される際にはその下部が住居の床面より10cmほど深く掘り込まれている。カマドからは第121図193・195～197・200が出土した。

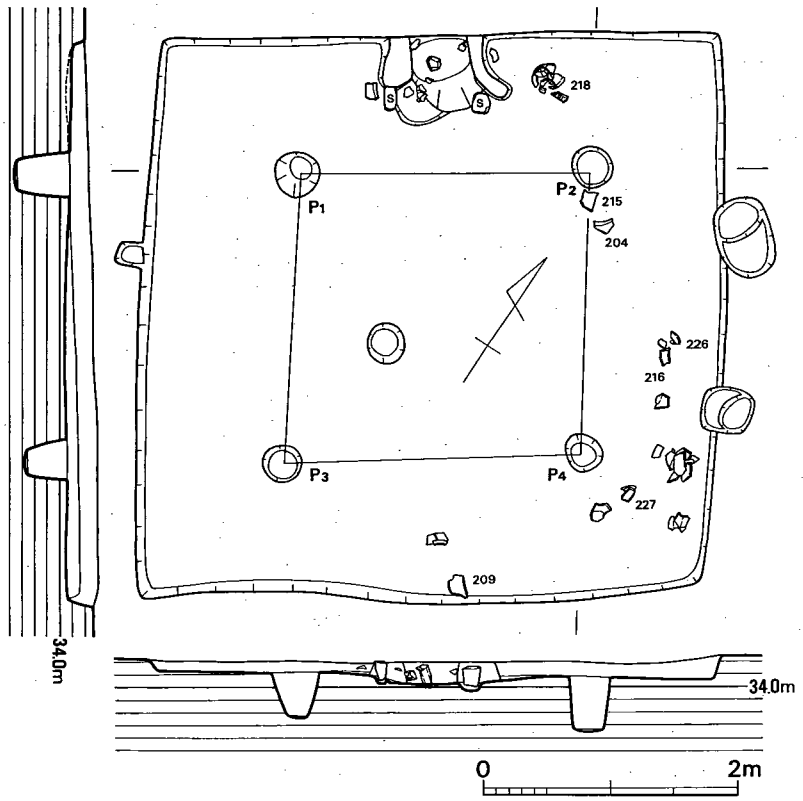
土師器（第121図193～195）　鉢193の外面はハケ，内面はケズリが施され，全体的に二次火熱を受ける。



第 122 図　18号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

194と195はそれぞれ甑の口縁部と底部で，195の内面調整はケズリである。

須恵器　(第121図196～200)　坏蓋196・197の天井部外面と坏身199・200の底部外面には，器面調整として回転ヘラケズリが施される。197の天井部内面には，おそらく「×」状になるヘラ記号が見える。坏身口縁端部の立ち上がりは比較的高い。

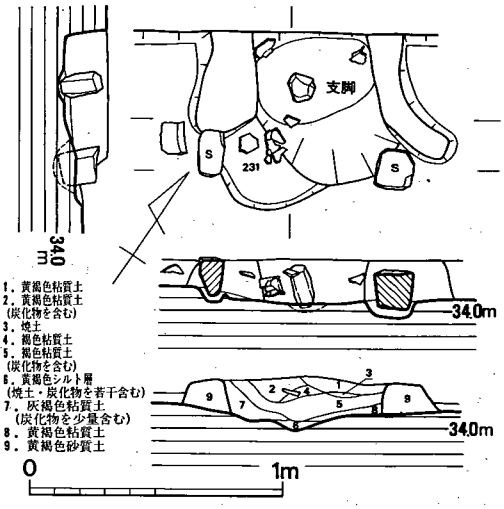


第 123 図　19号竪穴住居跡実測図 (1/60)

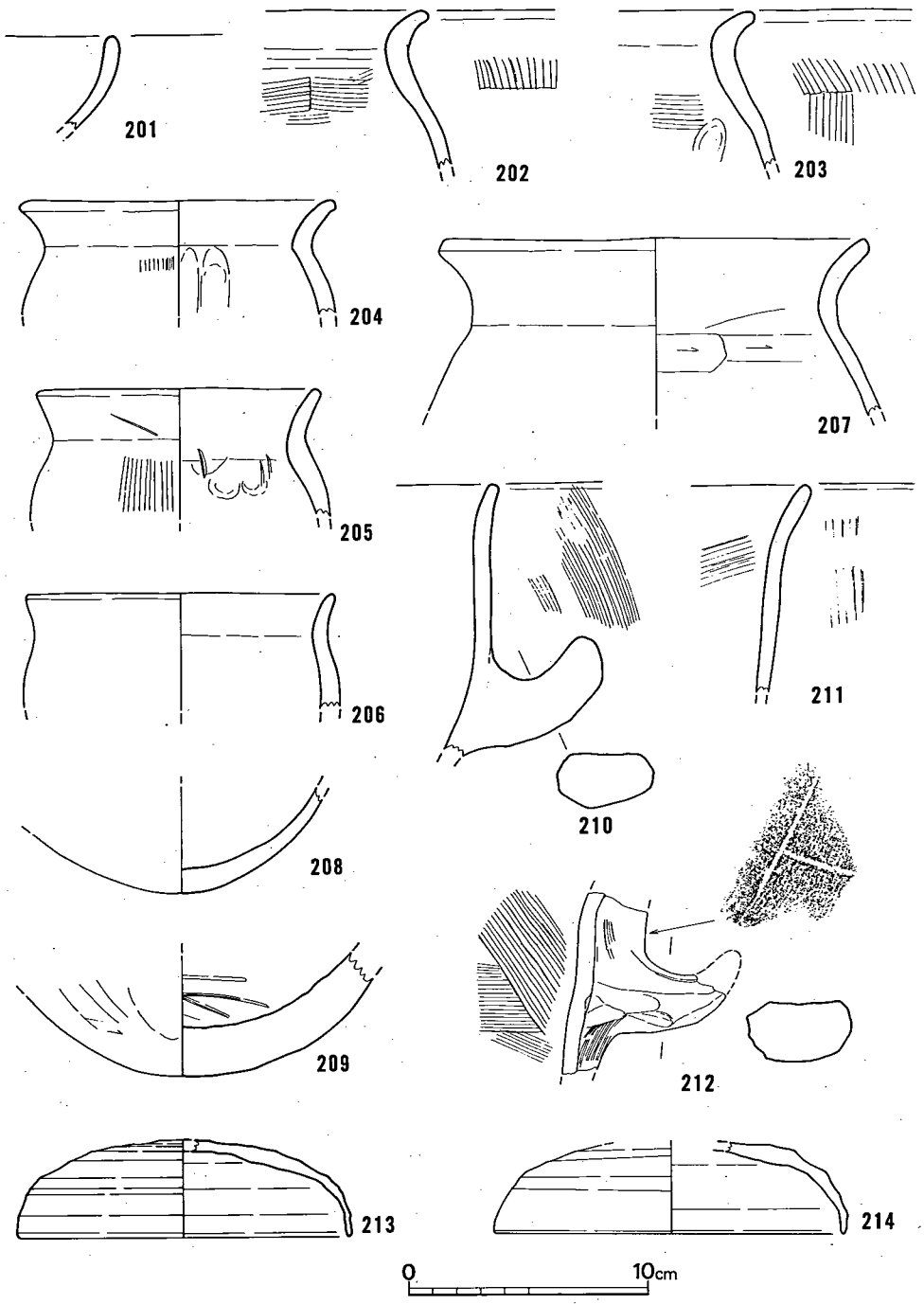
19号竪穴住居跡

(図版54・55，第123・124図)

19号竪穴住居跡は調査区南西部住居群の中でも西端に位置し，1号落ち込みの南6mにある。平面プランは辺長4.5×4.5mの正方形で，主柱穴も整然と配置され，壁高は最高で20cmを測る。遺物の遺存状態は良好で，多くの土器が床面から出土した。カマドの遺存状態も良く，両袖の先端で焚口に当たる部分には自然石が1個ずつ設置され，またカマド中央部のわずか西寄りにはやはり自然石を利用した支脚が立てられたままの状態で検出された。カマドの内部は住居の床面よりも10cmほど掘り窪められているが，火床面自体は住居床面とほぼ同じレベルである。



第 124 図　19号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

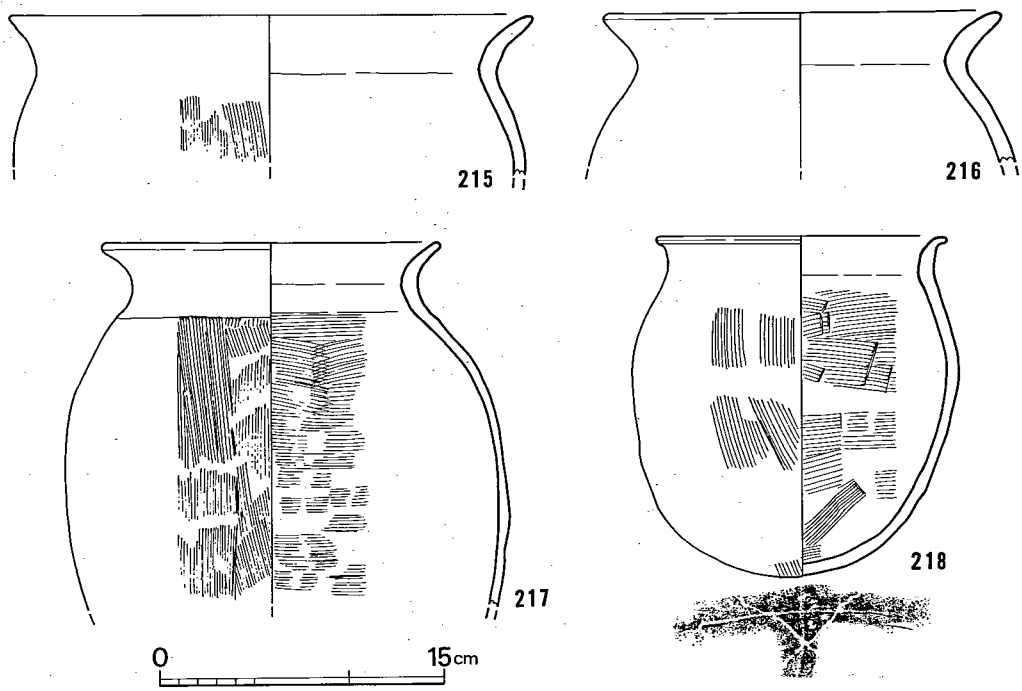


第 125 図　19号竪穴住居跡出土土器実測図 1　(1/3)

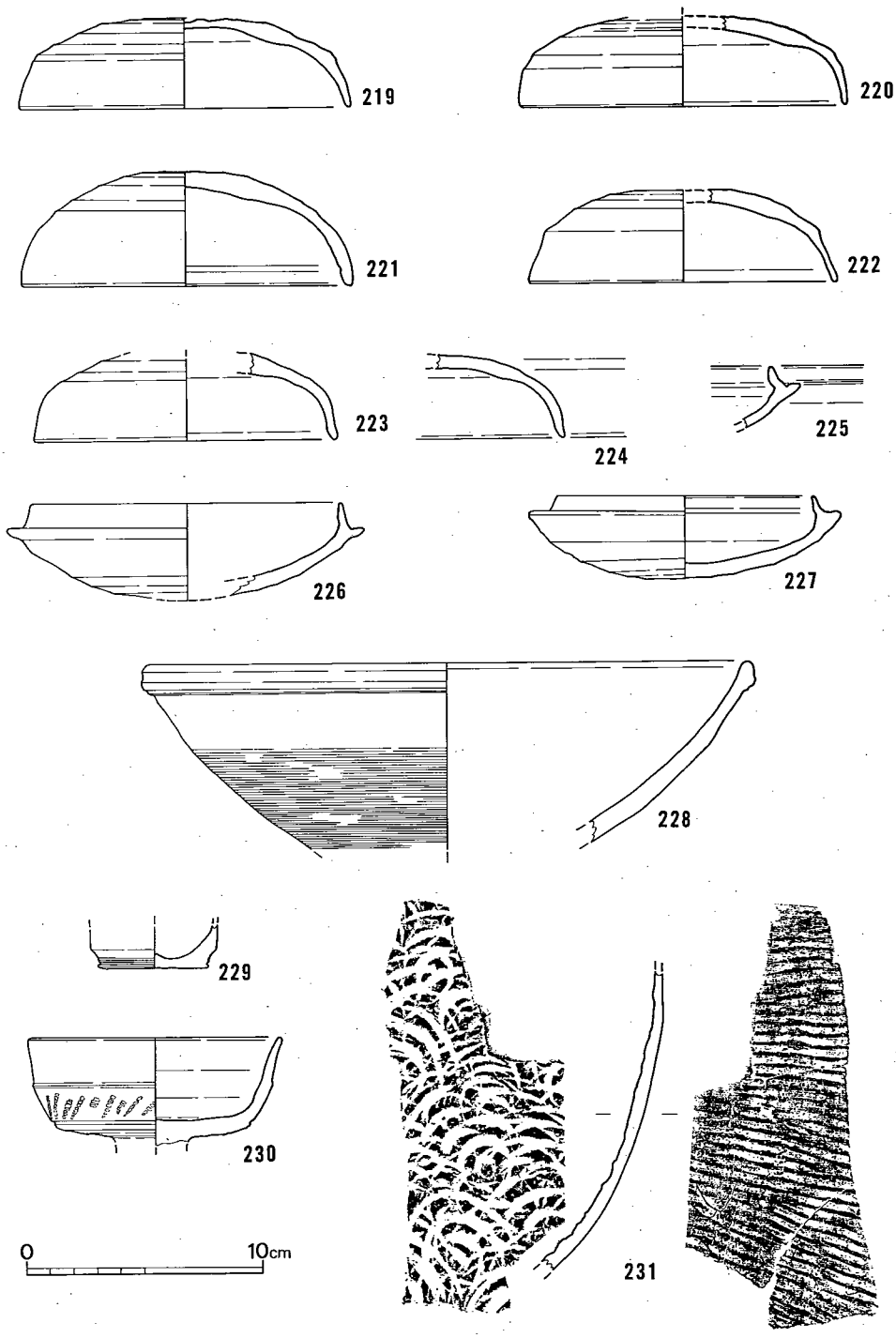
第125図201や第127図222・231はカマドから出土した。なお，焚口の両脇に据えられた2つの自然礫は接合し，本来1つの礫を2つに割って使用していたと考えられる。

土師器（第125・126図201～212・215～218）　坏201は摩滅が著しく調整不明。202～209・215～218は甕で，法量から口径10～15cmの小型と口径15～20cmの大型とに大きく分れる。器面調整は外面に関してはいずれもハケ調整で統一されるが，内面はまちまちで202・203・217・218にはハケが，207・209にはケズリが施される。206は頸部がほとんどくびれず口縁部はほぼまっすぐに立ち上がる特徴を有し，二次火熱を受ける。210～212は甑で，内外面ともに器面調整はハケである。212の把手の上部には「人」字状のヘラ記号が見える。218の底部外面には「×」字のヘラ記号が記され，二次火熱を受ける。

須恵器（第125・127図213・214・219～231）　坏蓋213・214・219～224の天井部外面と坏身226・227の底部外面には器面調整としての回転ヘラケズリが施される。坏身口縁部の立ち上がりは，比較的低い。鉢228の下半部にはカキ目が，高坏坏部230の底部外面には回転ヘラケズリが施される。



第 126 図　19号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/4）



第 127 図　19号竪穴住居跡出土土器実測図 3　(1/3)

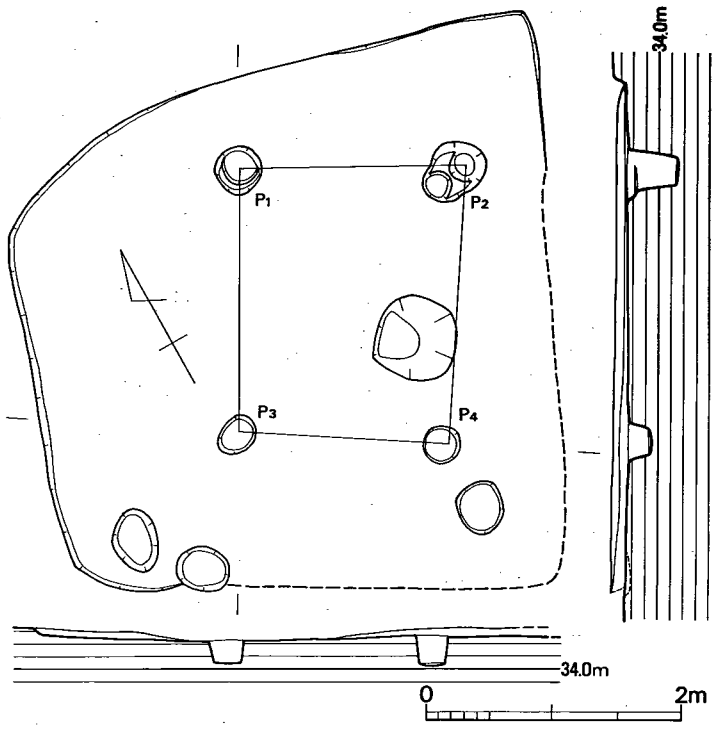
20号竪穴住居跡（図版56，第128図）

20号竪穴住居跡は調査区南西部住居群の中でも最も南に位置し，22・23号住居跡の南２ｍに位置する。壁高は最高で７cmと削平が著しく，カマドや住居の南側1/3は残らない。残存する部分や主柱穴の位置関係等から，辺長約4.5×5.0ｍ程度の方形プランを呈していたと考えられる。遺物は少なく小破片で，図示できるのは２点だけである。

土師器（第132図232）　甕の口縁部で調整はナデ。

須恵器（第132図233）　坏蓋の口縁部で調整はナデ。

（水ノ江）



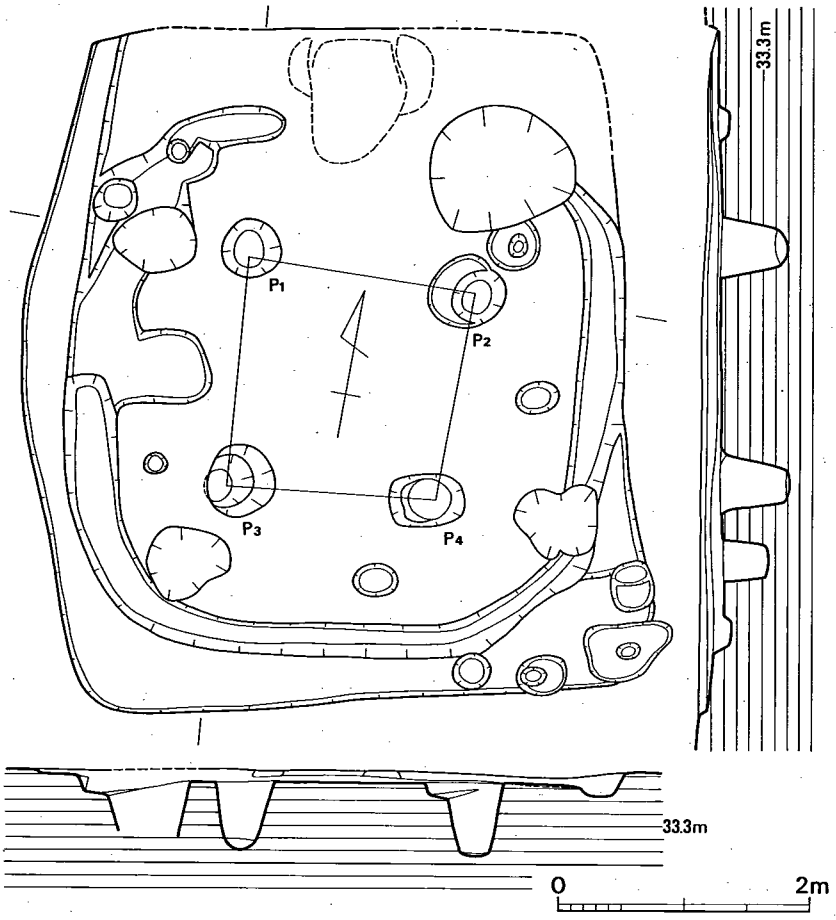
第 128 図　20号竪穴住居跡実測図（1/60）

21号竪穴住居跡（図版56，第129図）

調査区の中央南側で，７～９号住居跡の北に位置する。10号住居跡の床面下層の調査において新たな住居跡のプランを検出した。床面は10号住居跡の30cmほど下に位置し，10号住居内にそのまま納まる。周囲に壁溝を巡らす南北5.35ｍ，東西4.96ｍの隅丸長方形プランを呈する。柱穴はＰ１～Ｐ４で，間隔は1.7ｍを測り，床面から60cmと深く掘り込まれている。カマドは北壁中央に付設されるが，袖の粘土が若干判る程度である。出土遺物は床面より235～237の手捏ね土器，238の高坏脚部片が出土した。出土遺物では時期の決定ができないが，10号住居跡との切り合い関係から，６世紀初頭から前葉の住居跡であろう。

土師器（第132図234～237）　234は外方へ広がる口縁部片で，内面はハケ目。器形は甕か。235～237は手捏ね土器で埦形を呈する。237は分厚く，口径3.7cm，器高3.4cmで，いずれも茶褐色を呈する。

須恵器（第132図238）　長方形透孔を有する高坏脚部片で，底径９cm。　（木下）

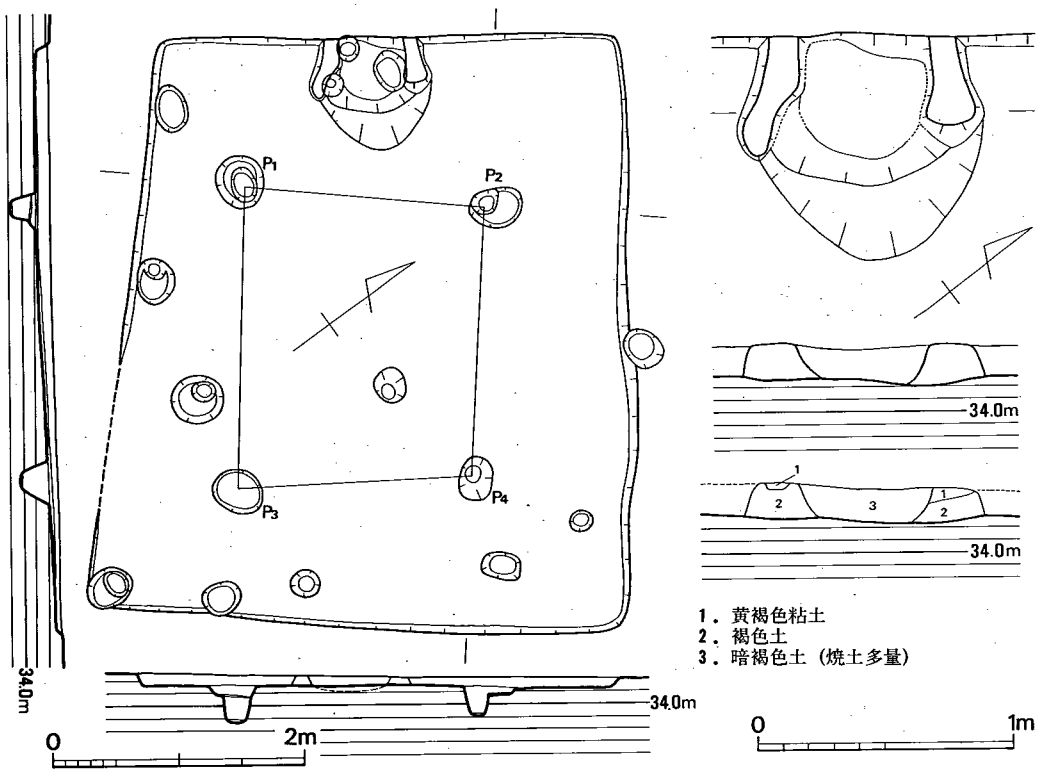


第 129 図　21号竪穴住居跡実測図（1/60）

22号竪穴住居跡（図版57，第130図）

22号竪穴住居跡は調査区南西部住居群の中の１軒で，20号住居跡の北２ｍに位置し23号住居跡を切る。辺長4.2×4.7ｍの長方形に近いプランを呈するが，主柱穴は北側２本の間隔が南側より30㎝ほど狭く台形状を呈する。カマドは北西壁中央の貼り床の上に付設されたようであるが，遺存状態はあまり良くない。カマドの下からは，このカマドに切られた柱穴が３つ確認された。出土遺物は少なく，図示できるのは１点だけである。

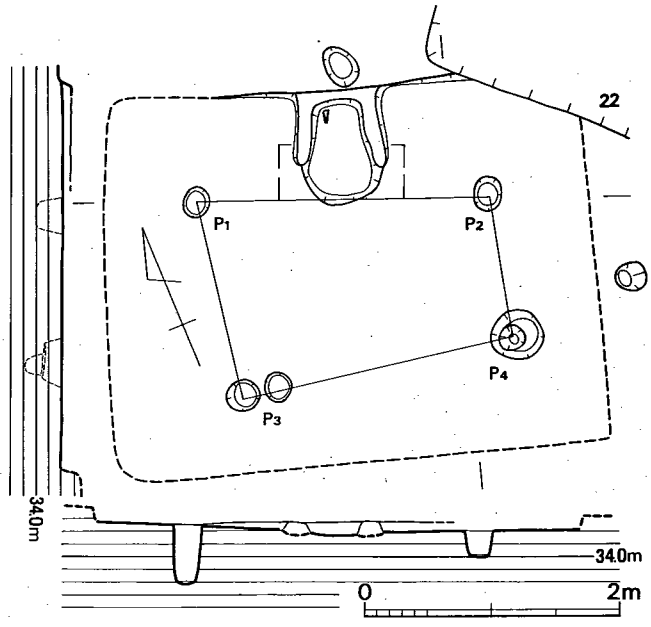
須恵器（第132図239）　坏身で底部外面には回転ヘラケズリが施される。口縁部の立ち上がりは比較的低い。



第 130 図　22号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60，1/30）

23号竪穴住居跡（図版56，第131図）

23号竪穴住居跡は調査区南西部住居群の中の１軒で，その北東隅を22号住居跡に切られる。削平が著しく壁の立ち上がりはカマド周辺にしか遺存しなかったが，カマドや主柱穴の配置のほかに部分的に残った貼り床の拡がりから，およそ3.0×4.0m程度の長方形プランを呈していたと考えられる。カマドの遺存状態も悪く黄褐色粘土の袖がわずかに残るだけだが，第132図240



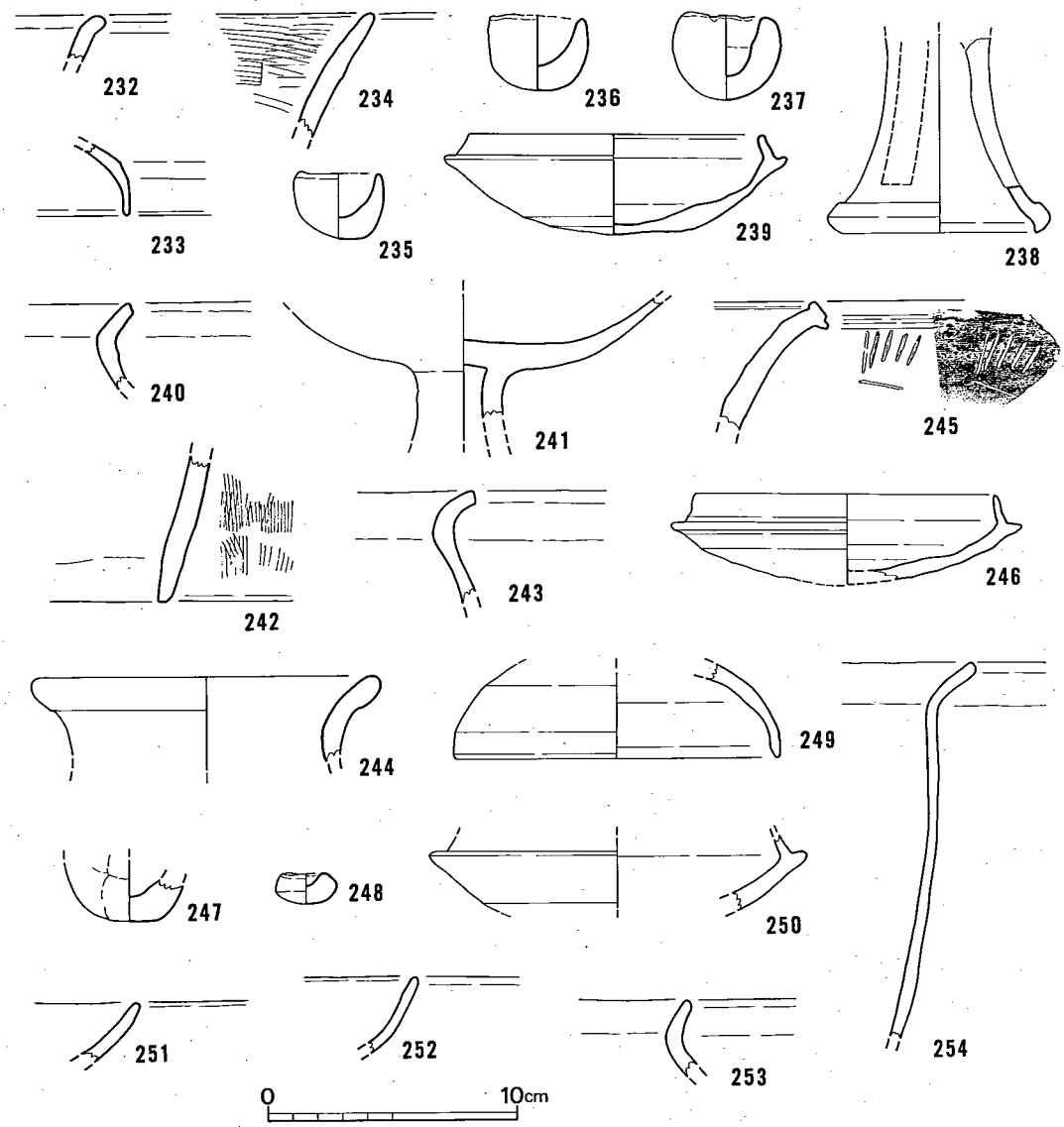
第 131 図　23号竪穴住居跡実測図（1/60）

が内部より出土した。

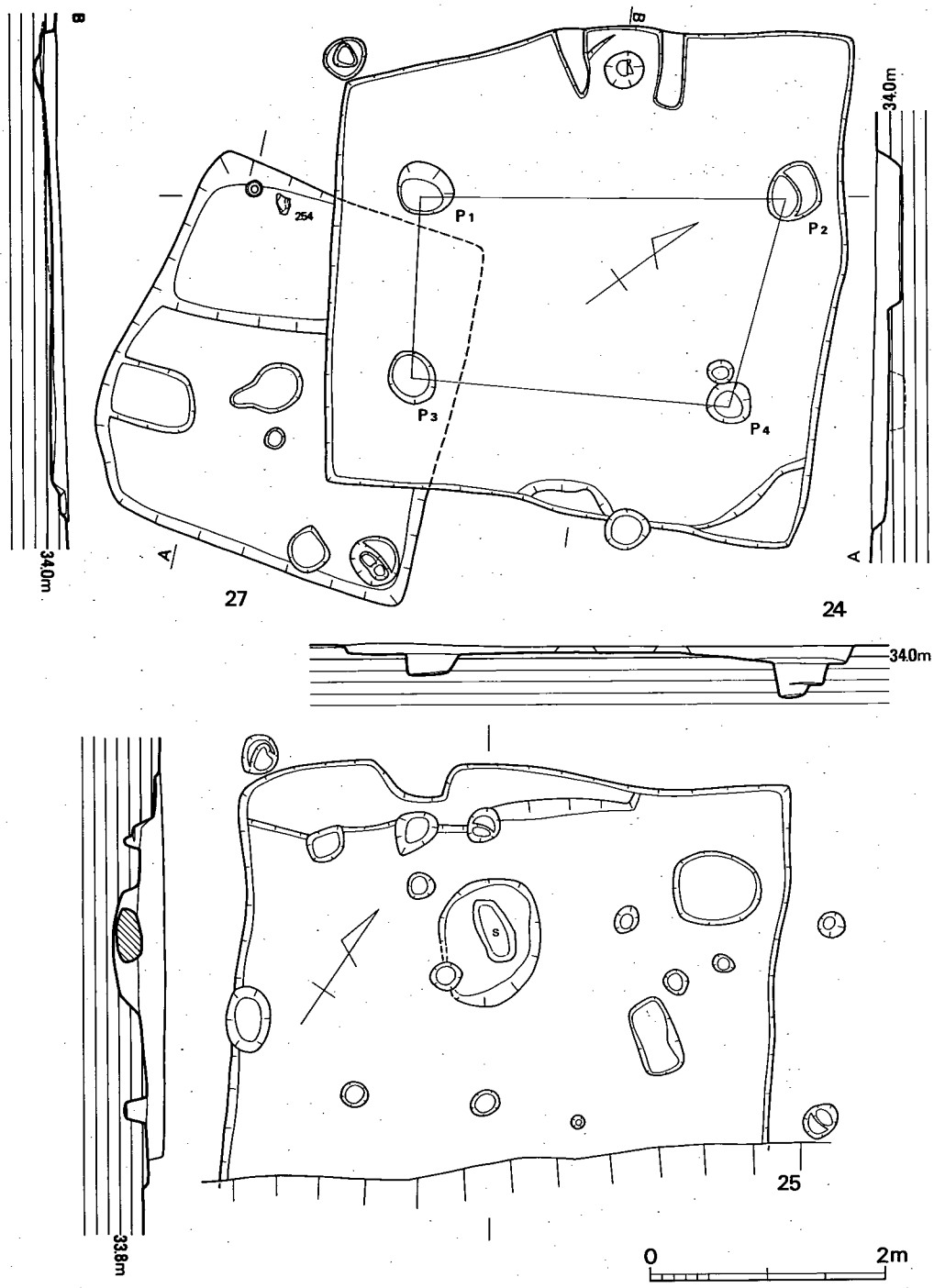
土師器（第132図240）　甕の口縁部で，器面調整にはナデが施される。

24号竪穴住居跡（図版57，第133図）

24号竪穴住居跡は調査区南西部住居群の中の１軒で，25号住居跡の西１ｍに近接しその南隅で27号住居跡を切る。辺長4.3×4.2ｍの若干歪んだ方形プランを呈するが，主柱穴は確認でき



第 132 図　20～27号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 133 図　24・25・27号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ていない。壁高は8㎝と低く，北西壁中央に付設されたカマドも黄褐色粘土がわずかに残るだけであるが，カマド内からは第132図241が出土している。カマドと対峙する南東壁の中央には60×25㎝で高さ10㎝の高まりが作出されており，出入口としての段階的機能を果たしていたようである。

土師器（第132図241～243）　高坏241や甕243は摩滅が著しく器面調整不明。甑242の外面にはハケが，内面にはヘラケズリの後にナデられた痕跡が窺える。

須恵器（第132図244～246）　244・245ともに器面調整はナデで，245の外面には5本の短沈線文を並列させその下に横位の沈線文を施す記号文が見られる。坏身246の底部外面には回転ヘラケズリが施され，口縁部の立ち上がりは比較的高い。

25号竪穴住居跡（図版57，第133図）

25号竪穴住居跡は調査区南西部住居群のほぼ中央部で24号住居跡の東1ｍに位置し，31号住居跡を切るが奈良時代の6号溝に切られる。主柱穴やカマドは確認できなかったが，現存する辺長は4.5×3.5ｍで本来方形プランを呈していたようである。住居の西隅には，0.3×0.6ｍの突出部と3.5×0.5ｍのテラスが作り出され，中央部には50×25㎝の自然礫が置かれた屋内土壙らしきものが存在するが，いずれも性格は不明である。

土師器（第132図247・248）　いずれも手捏ね土器で，指頭圧痕が残る。

須恵器（第132図249・250）　2点とも破片資料である。249の天井部外面ならびに250の底部外面には，器面調整として回転ヘラケズリが施される。口縁部の立ち上がりは，いずれもさほど高くない。

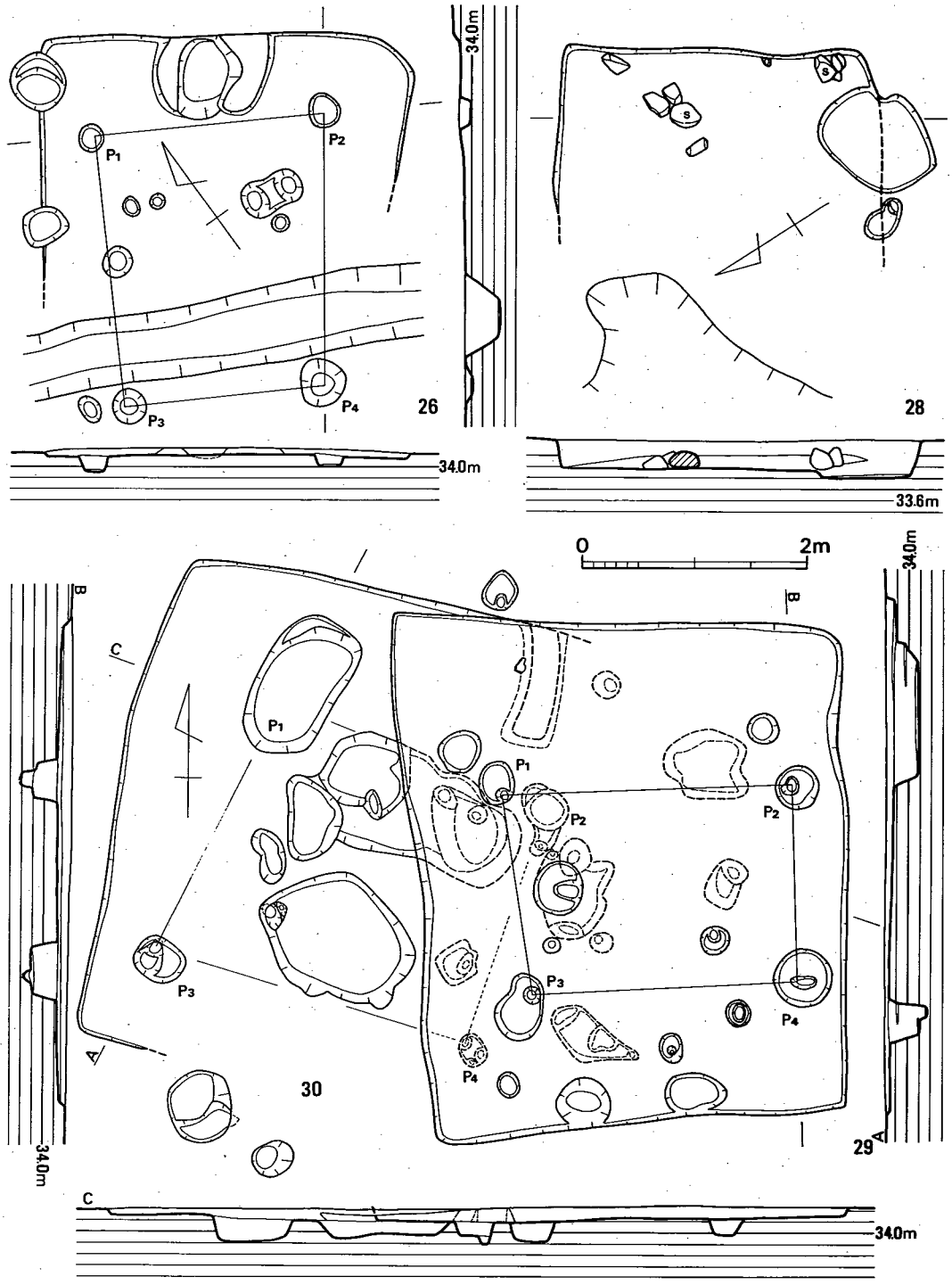
26号竪穴住居跡（第134図）

26号竪穴住居跡は調査区南西部住居群のほぼ中央に位置し，29・30号住居跡の南西6ｍで5号溝に切られる。住居の南側半分は5号溝と現代の削平により主柱穴しか遺存しない。従って，正確な規模や平面プランははっきりしないが，主柱穴の位置関係や遺存する北側半分の状況から判断して，辺長3.2×4.0ｍ程度の方形プランを呈していたと推定される。主柱穴は位置的には問題ないが，いずれも10～15㎝と浅い。壁高は最も残りの良いカマド周辺で6㎝しかなく，本住居の遺存状態の悪さを物語る。カマドも袖に相当する黄褐色粘土と中央部の焼土をわずかに残すだけである。遺物も少なく図示できたのは土師器1点だけで，須恵器は見当たらない。

土師器（第132図251）　坏の口縁部で，摩滅が著しく調整不明。

27号竪穴住居跡（第133図）

27号竪穴住居跡は調査区南西部住居群の中央部に位置し，24号住居跡に北側の1/4を切られ



第 134 図　26・28～30号竪穴住居跡実測図（1/60）

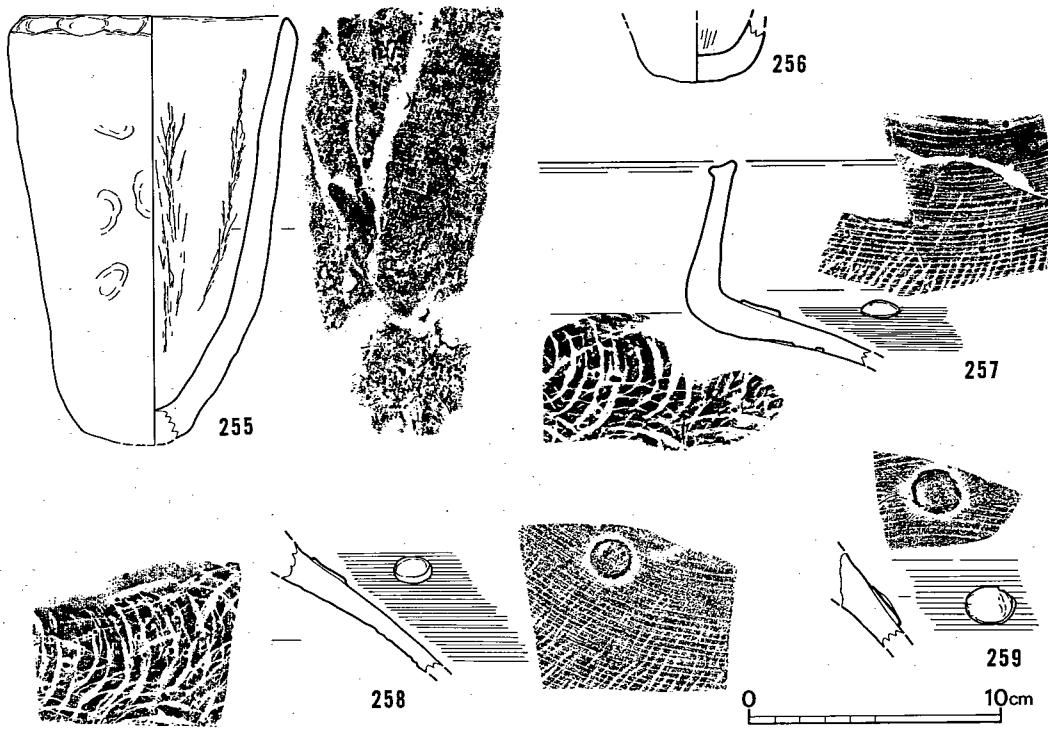
る。辺長3.2×2.9mのかなり小さな長方形プランを呈し，西側1/3は15cmほど下がった平坦な面を有する。主柱穴やカマドは確認できなかったが，住居の規模等から考えてもそれらは本来この住居に伴わないのかもしれない。出土遺物として図示しえた4点はいずれも土師器だが，図示しえなかったものには須恵器も含まれる。

土師器（第132図251～254）　坏251・252，甕253・254はいずれも摩滅が著しく，器面調整は不明。

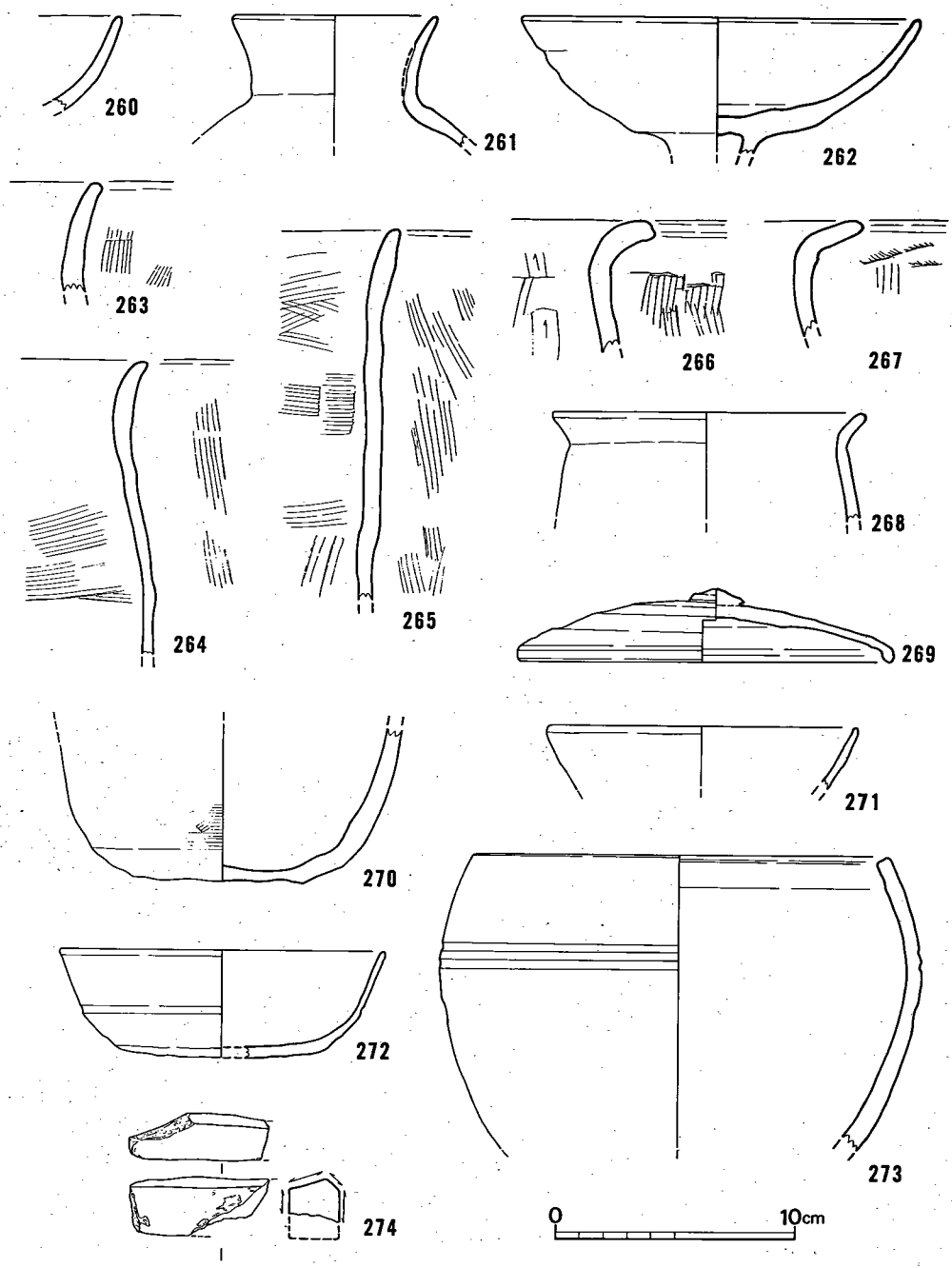
28号竪穴住居跡（図版58，第134図）

28号竪穴住居跡は調査区の最南西端に位置し，その西側を谷地区流入口に切られる。辺長は南北が2.8m，東西1.5m以上で，もともとは方形を呈していたと推定される。東壁は最高で22cmを測る。床面は平坦であるものの，東から西へ緩やかに傾斜し，20cm前後の礫が散在する。主柱穴やカマドは検出されずまた住居自体は規模的にも小さいこと等から，他の住居とは異なった性格を有していた可能性もある。出土遺物は比較的多かったが，図示できたのは5点(このうち3点は同一個体）である。

土師器（第135図255・256）　255は製塩土器で，口径11.2cm，器高17.0cmを測り全体の1/2ほど



第 135 図　28号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 136 図　29号竪穴住居跡出土土器・石器実測図 (1/3)

残存。外面の調整はナデで指頭圧痕が多く，内面にはしぼり痕と布目圧痕がはっきりと残る。口縁部はわずかに開きながらも，ほぼ直線的に立ち上がる。端部は指で摘まれ，内面はまっすぐに，外面は丸くなるように仕上げられる。器面は淡黄褐色を呈するが，胴下半部は二次的な火熱を受け淡赤褐色に変色する。256はタコ壺の底部で，内外面にはナデが施される。

須恵器（第135図257～259）　257～259は甕の口縁部から胴部にかけての破片で，同一個体である。口縁部の器面調整はナデだが，胴部については外面には平行タタキの後にカキ目，内面には青海波のタタキが施される。口縁端部は受け口状に窪み，粘土は両側に押し出される。なお，胴部の外面にはカキ目が施された後に円形浮文が貼り付けられる。

29号竪穴住居跡（図版58，第134図）

29号竪穴住居跡は調査区南西部の住居群の中でも最も北に位置し，30号住居跡を切る。平面プランは辺長3.9×4.5ｍの長方形を呈し，壁高は最高で11cmを測る。主柱穴は４本だが，住居の平面プランに対し30cmほど南に寄っている。北壁中央のやや西寄りにはカマドの袖にあたる黄褐色の粘土およびその両側に焼土が検出されたが，付設された位置や袖の延びる方向から判断して，このカマドは30号住居に付設されたものと考えられる。なお南壁中央部の壁際には，径50cm，深さ30cmの柱穴が２つ掘られており，出入口に関連したものかもしれない。出土遺物は多く，砥石も１点見られる。須恵器の持つ特徴から判断して，本住居は奈良時代に属するものと考えられる。

土師器（第136図260～270）　坏260の内面はミガキ，外面はナデ。短頸壺261の口径は8.5cmで，器面調整は摩滅のため不明。262は高坏の脚部で復原口径は16.5cm，器面調整は外面にナデ，内面にナデが施される。263～265は甑で，器面調整には内外面ともハケが施され，直線的に立ち上がり端部に軽く面を作る口縁部が特徴的である。甕266～268の外面にはいずれもハケが施されるが，内面については266がケズリ，267・268はナデである。270は甕もしくは鉢の胴下半部で，底部は潰れ平底のようになる。外面にはハケ，内面にはナデが施される。

須恵器（第136図269～273）　口径15.4cmの坏蓋269の天井部外面には，回転ヘラケズリが施される。坏身271・272の調整はナデで，272の外面には１条の沈線文が入る。鉢273の底部付近には回転ヘラケズリが施されるが，それ以外の調整は内外面ともナデである。外面には２条の沈線文が施される。

砥　石（第136図274）　頁岩製の砥石で，端面以外はすべて研磨されている。

30号竪穴住居跡（第134図）

30号竪穴住居跡は調査区南西部の住居群の中でも最も北に位置し，29号住居跡に住居の東側半分を切られる。主柱穴Ｐ１は確認できなかったが，他の３本の主柱穴の位置関係から，東西

4.5m程度，南北4.4mの方形プランを呈していたようである。29号住居の項でも述べたように，位置や方向から考えて29号住居内で検出されたカマドが，本来本住居に付設されたカマドのようである。床面下は平坦でなく凹凸が目立ち柱穴や浅い土壙も検出されたが，屋内土壙といえるほどのものはない。しかし，遺物の多くはこの凹凸からの出土である。

土師器（第139図275）　復原口径17.1cmの甕275の外面および口縁部内面にはハケが，胴部内面にはケズリが施される。

須恵器（第139図276～278）坏蓋276の天井部外面には，回転ヘラケズリが施される。坏身277の口縁部の立ち上がりは比較的低い。碗278の調整は内外面ともナデで，口径は10.5cmを測る。

31号竪穴住居跡（第138図）

31号竪穴住居跡は調査区南西部の住居群のほぼ中央に位置し，25号住居跡と4号溝に切られる。当初，竪穴住居跡という認識で遺構番号を付け掘り進めたが，平面プラン・主柱穴・カマドが確認できないことをはじめ壁も揃わず，住居としての可能性は極めて低い。遺物は少なく，図示できたのは須恵器5点と紡錘車1点である。6世紀後半代に属する住居であろう。

須恵器（第139図279～283）　坏蓋279・280の天井部外面には回転ヘラケズリが施される。坏身281・282の器面調整はナデである。280と282の口縁端部の立ち上がりは低い。甕283の胴部内面には青海波のタタキが，外面にはナデが施される。

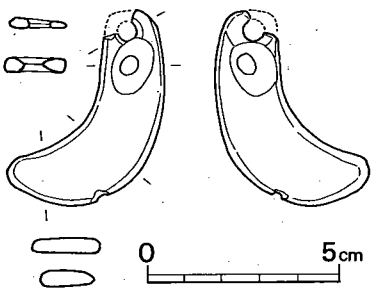
紡錘車（第139図292）　蛇紋岩製で，径3.9cm，厚1.85cm。

32号竪穴住居跡（図版58，第138図）

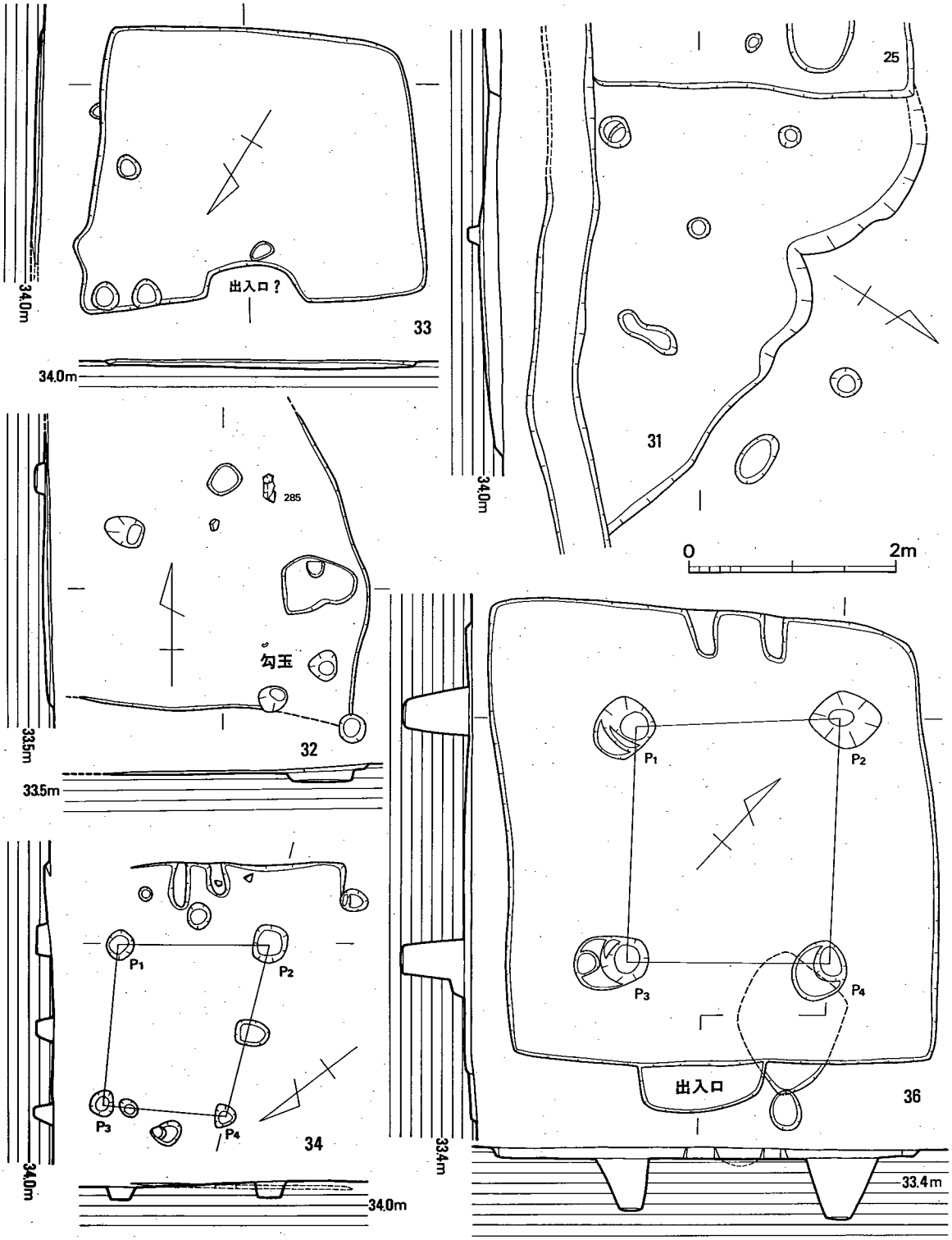
32号竪穴住居跡は調査区南西部の住居群の北方で谷地区7区の東側，10号溝と14号溝の間に位置する。相当に削平され床面が3cm程度残るだけで，主柱穴やカマドも検出されてなく遺存状態は極めて悪い。現存する部分は最大で南北に2.85m，東西に2.90mを測るが，平面プランは不明である。しかし，意外にも出土する遺物の残りは比較的良く，須恵器の他に偏平な勾玉（第137図）が出土した。

須恵器（第139図284・285）　284は壺に付いた脚，285は鉢もしくは長頸壺の底部であろうか。器面調整はいずれもナデで，285の底部外面には多くの指頭圧痕が残る。

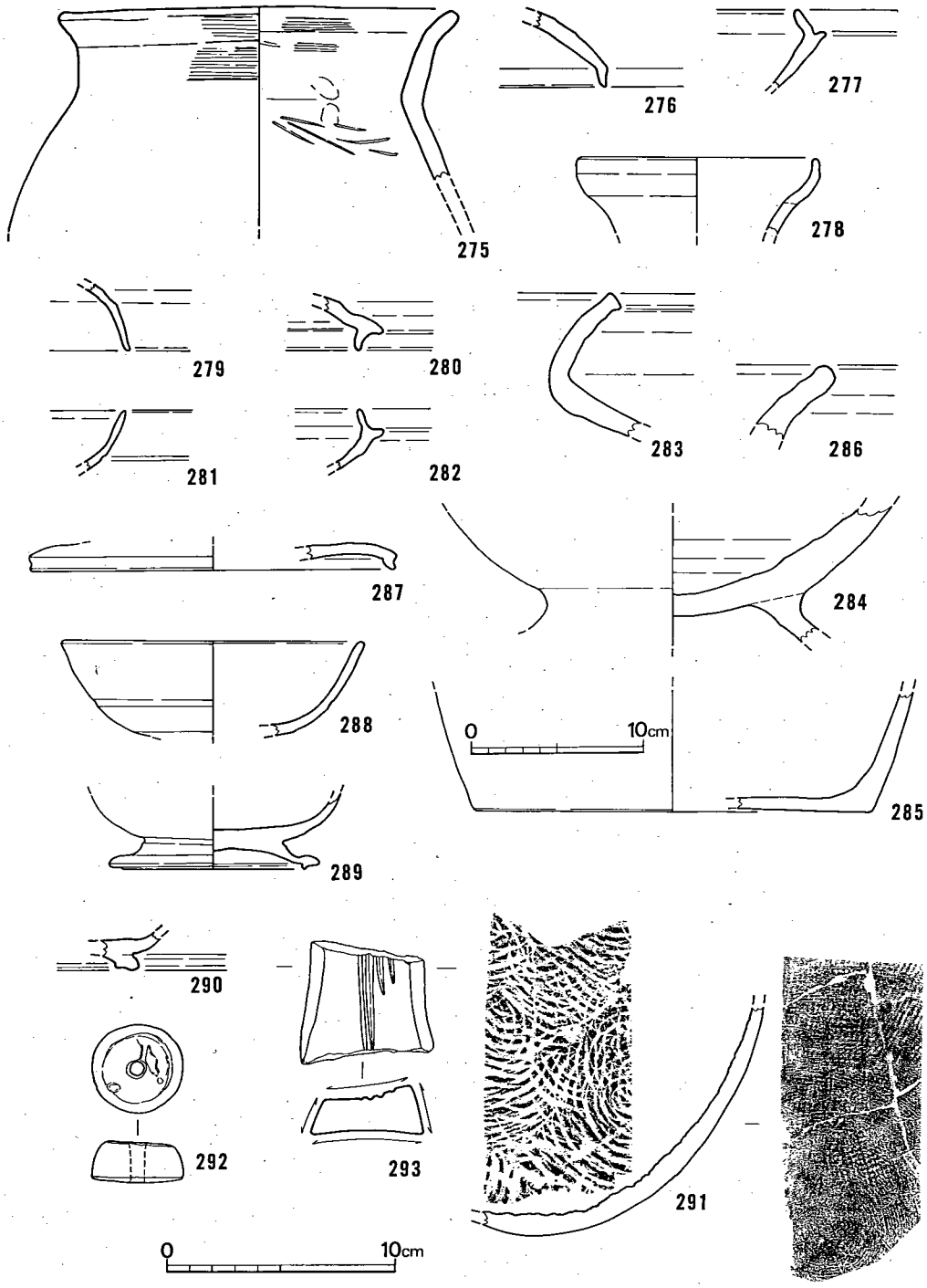
勾　玉（第137図）　長さ5.9cm，最大幅2.0cm，最大厚4mmを測る偏平な勾玉である。2つの紐通し穴は下位の穴が上位の穴を切って穿孔されたものであり，端部が欠損している事実と考え合わせるなら，上位の穴を穿孔した後に端部が欠損して紐通し穴としての機能を果せなくな



第 137 図　32号竪穴住居跡出土勾玉実測図（1/2）



第 138 図　31～34・36号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 139 図　30～32・36号竪穴住居跡出土土器・石器実測図（1/3，285は1/4）

り，改めて下位の穴が穿孔されたと推定される。石材はやや透明感のある淡くて明るい緑色だが，軟質で不純物も多く含まれヒスイではないようである。

33号竪穴住居跡（第138図）

33号竪穴住居跡は調査区中央のやや西寄りに位置し，11号溝の南６ｍにある。辺長3.3×2.55ｍで北壁がわずかに開く小さな台形の平面プランがかなりしっかりと確認できたが，削平により壁高は７㎝しかなく，カマドや主柱穴は検出されなかった。北壁中央には，あるいは出入口になるような90×35㎝のテラスが作り出されている。遺物は全く出土しておらず，所属時期は不明である。

34号竪穴住居跡（第138図）

34号竪穴住居跡は調査区中央部のやや西方に位置し，12号溝の北１ｍ，33号住居跡の南10ｍにある。壁高３㎝と削平が著しく，確認できたのはカマド周辺に限られ，住居の平面プランや規模はほとんどわからない。カマドと考えている黄褐色粘土は東側を向いており，本遺跡にあっては例外的存在である。主柱穴の配列ももう一つ整っておらず，本遺跡の定型的なパターンからはずれる。遺物の出土はなく，本住居の所属時期は不明である。

36号竪穴住居跡（図版59，第138図）

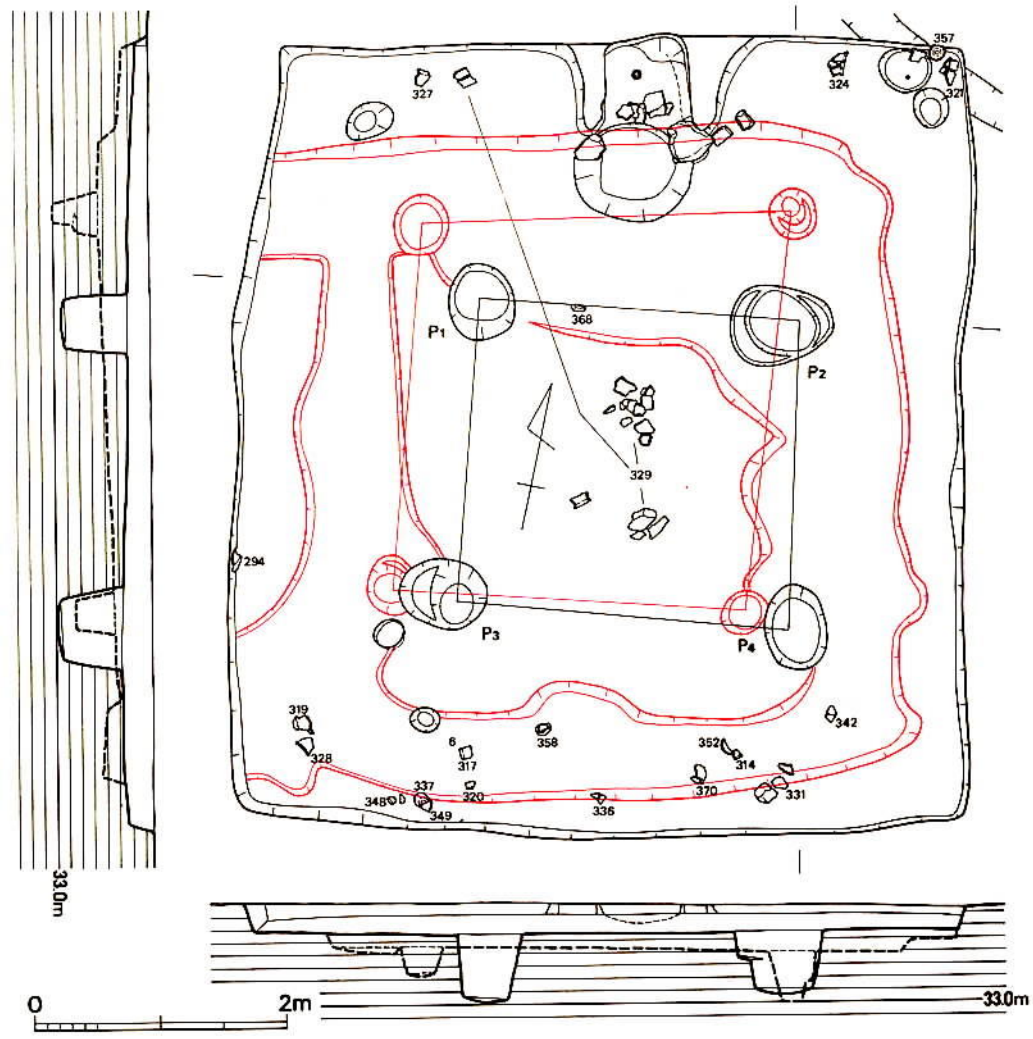
36号竪穴住居跡は調査区北西部の住居群の中でも北寄りに位置し，弥生時代の44号住居跡と古墳時代の51号住居跡を切る。辺長4.35×4.1ｍの方形プランで，壁高は最高で11㎝を測る。主柱穴は整然と配され，径55～70㎝，深さ50～60㎝と大きくて深い。カマドは北壁中央よりわずか東寄りに付設され，火床面は住居の床面より６㎝ほど下がる。カマドと対峙する南壁中央には，1.2×0.45ｍのテラスが住居の外側へ突出して作り出されており，出入口状遺構と考えられる。出土遺物は比較的少なく，図示できたのは須恵器５点と有溝砥石１点である。須恵器から判断して，本住居は７世紀前半代に属するものと考えられる。

須恵器（第139図286～291）　286は甕の口縁部，287は撮の付いた坏蓋の口縁部で，器面調整はいずれもナデ。坏身288の底部外面には回転ヘラケズリが見られ，胴部には１条の沈線文が施される。289は壺の底部に付く脚で，底部外面に回転ヘラケズリを施した後に脚を取付けている。なお，脚の先端部は，受け口状を呈する。290は高台の付いた坏底部で，調整はナデである。291は甕の底部で外面には平行タタキの後にカキ目が，内面には青海波のタタキが施される。

砥　石（第139図293）　頁岩製の砥石で，欠損した両端以外は全面に研磨される。中でも研磨が最も密に行なわれている面には，幅２～３㎜，深さ１㎜の研磨による溝が４本付く。

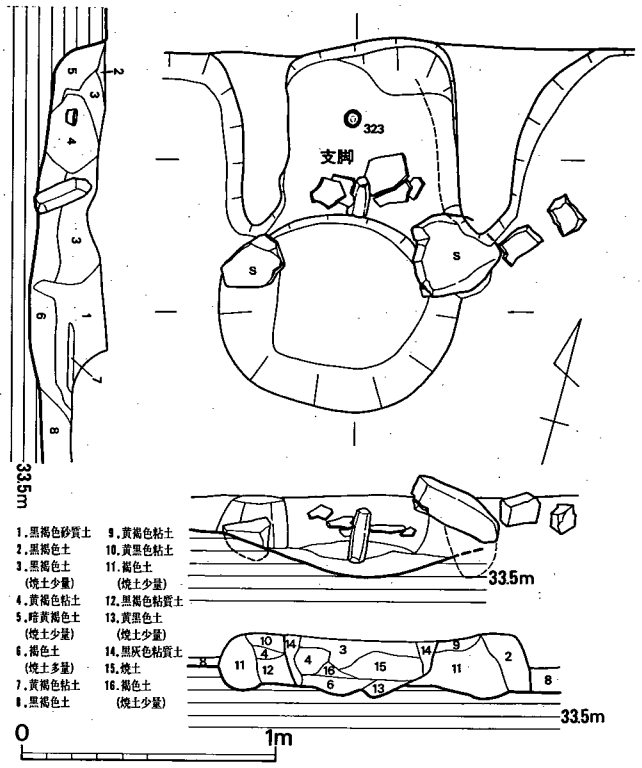
37号竪穴住居跡（図版60～63，第140・141図）

37号竪穴住居跡は調査区北西部の住居群のほぼ中央に位置し，弥生時代の50・52号住居跡と古墳時代の46号住居跡を切る。平面プランは東西5.65×南北6.20ｍの方形を呈し，本遺跡の古墳時代以降の住居の中では最大の規模を有する。壁高は最高で25cmを測り，遺構としての遺存状態は極めて良い。カマドは北壁中央に付設されており，袖の先端には焚口を形成する自然石が若干ずれはするものの，基本的には本来あった場所に据えられたままの状態で検出された。カマドの内部中央には自然石を使用した支脚が北側へ傾きながらも，やはり据えられたままの状態で検出され，その周囲からは二次火熱を受けた土師器片が，北25cmには第142図323の手捏ね土器が出土した。火床面は土層番号（6）・(13) の上面で，住居床面より５cmほど下がる。



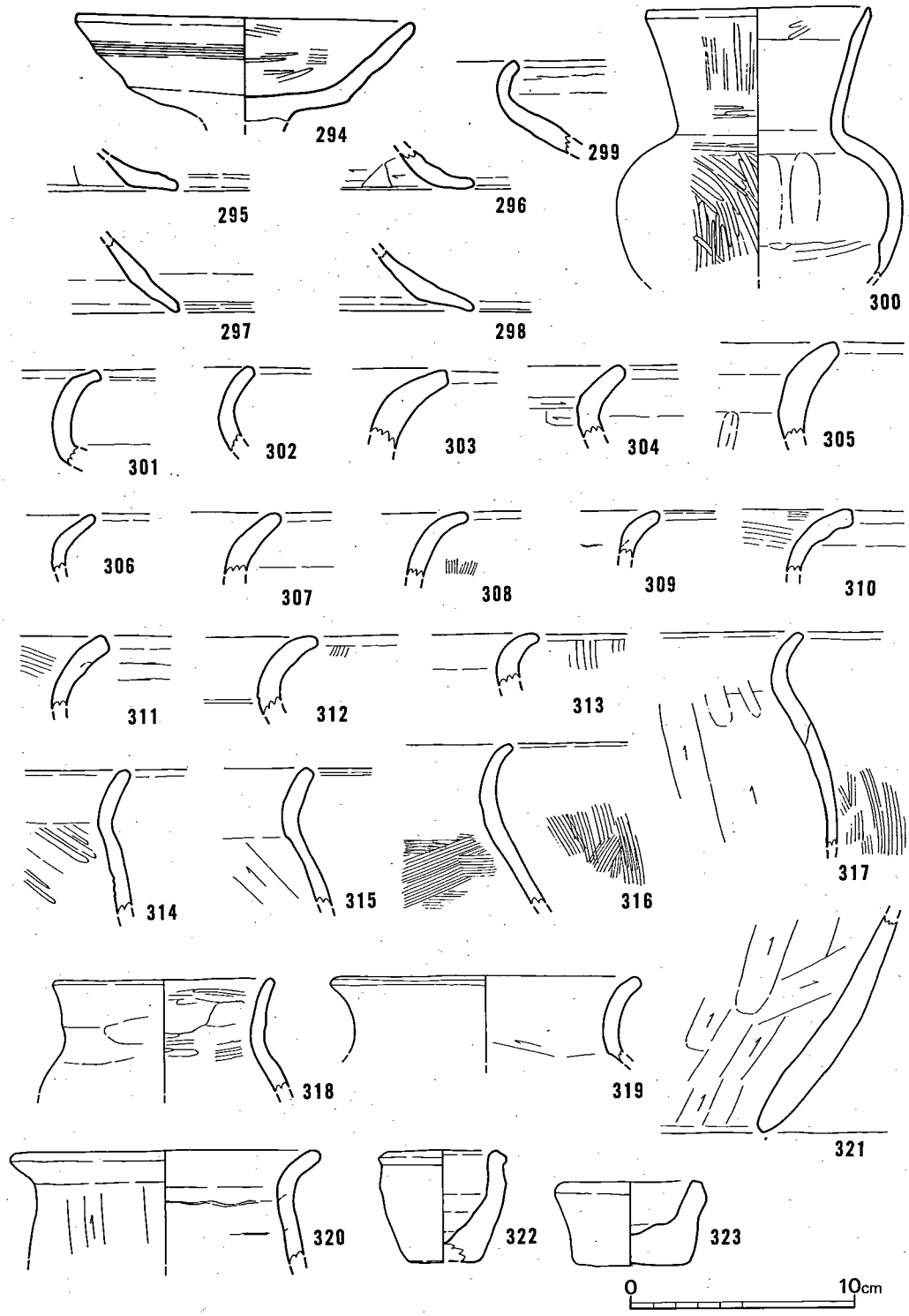
第 140 図　37号竪穴住居跡実測図（1/60）

また，袖に沿うように径５cm，深さ15～20cmの小さい穴が６つほど確認されたが，カマドの構造とどのように係わるのかは不明である。なお，穴の一つは土層番号（14）に相当する。４本の主柱穴は整然と配され，径50～70cm，深さ50cmと深くて大きい。厚さ15cmほどの貼り床を除去すると，貼り床上面で検出された主柱穴より北ないしは西の方向に若干ズレつつも基本的にはそれと同じような配置で，径30～35cm，深さ25～40cmの４つの柱穴が検出された。これは，本住居が最低１回は建てかえられたことを示唆している。なお，貼り床を除去して検出された地山面は，住居中央部が3.0×3.4ｍの範囲で約10cmほど高く，その周囲は幅0.8～1.2ｍの溝状に掘り窪められており，住居内の排水や湿度調整に関連した機能を有しているかもしれない。カマドから出土した遺物は344・352・365，貼り床内から出土した遺物は300・318・322・339・351・355・356，床面から出土した遺物は311・314・317・319・320・324・326・329・331・336・337・340～342・348・349・357・358・368である。この他に第147図の鉄器も出土している。

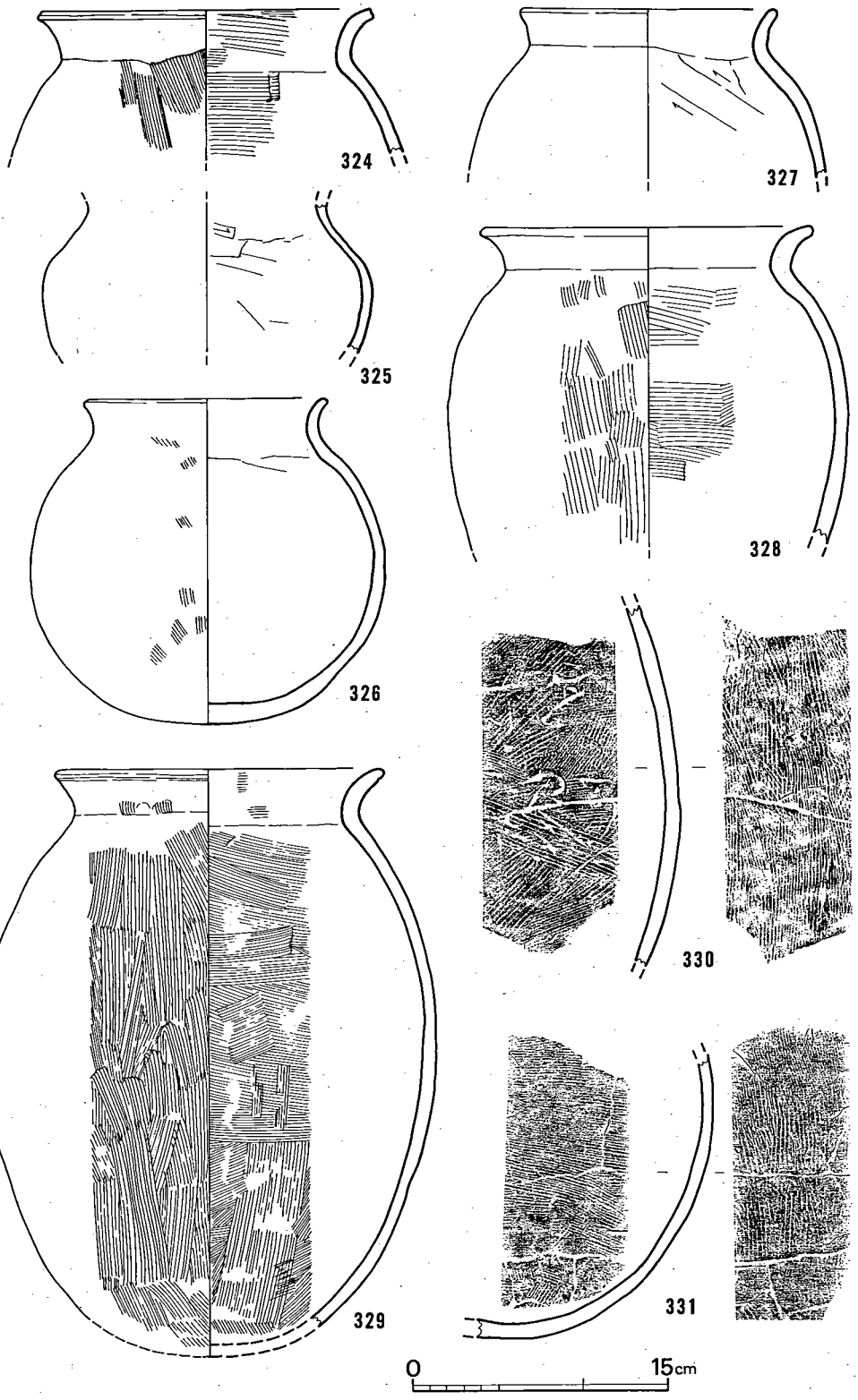


第 141 図　37号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

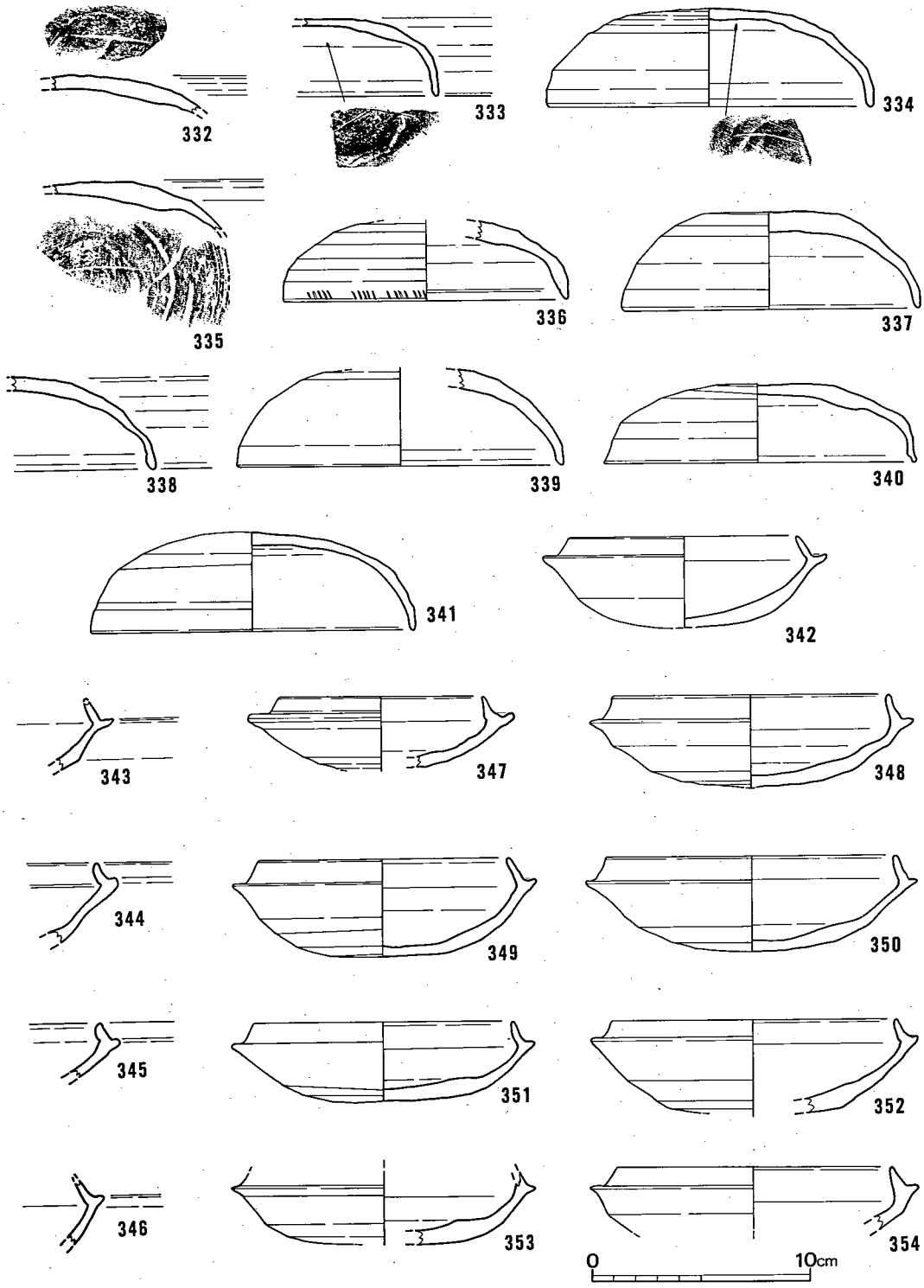
土師器（第142・143図294～331）　294は高坏の坏部で調整は内面がミガキ，外面はナデだが中位にカキ目状の調整（あるいは施文？）が１条巡る。胎土は粗く，２mm程度の砂粒が多く含まれる。295～298は高坏の脚部で，器面調整はいずれも外面がナデ，内面はケズリである。299は短頸壺の口縁部で，調整はナデ。口径10.1cmの壺300には外面に丁寧なミガキが，内面にはナデが施され，内面の底部付近には段を有する。301～320・324～331は甕で，口径11～15cmの一群（318～320）と口径15～20cmの一群（324～329）とに分れる。口縁部の形態は，多くの場合比較的強く外反して端部が細く丸く仕上げられるが，まれに314や318のようにほとんど外反せず胴部も張らないものもある。器面調整は外面についてはほとんどの場合ハケだが，内面は310・311・314・316・324・328～331のようにハケを施すものや，302・304・315・317・319・320・



第 142 図　37号竪穴住居跡出土土器実測図 1　(1/3)



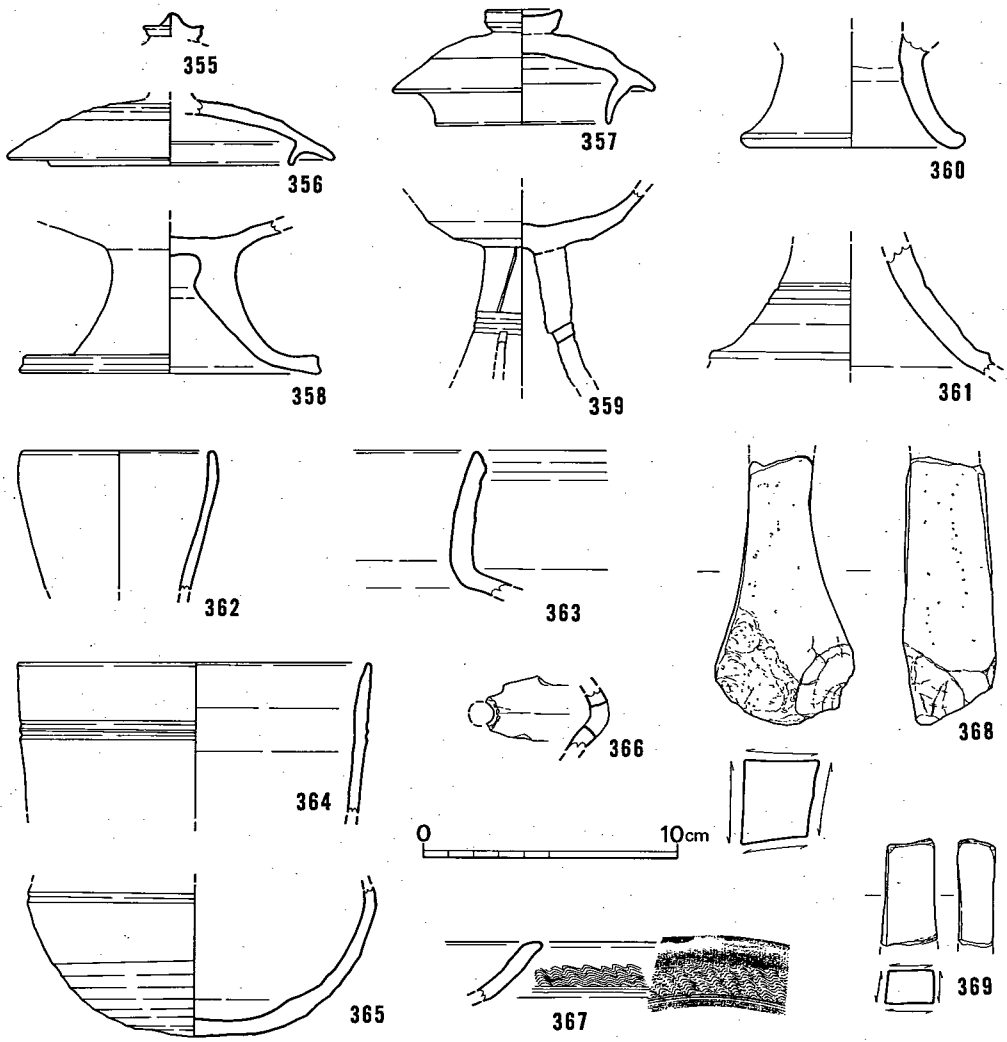
第 143 図　37号竪穴住居跡出土土器実測図 2　(1/4)



第 144 図　37号竪穴住居跡出土土器実測図 3　(1/3)

325・327のようにケズリを施すもののほかに，318のようにミガキを施すものもある。321は甑の底部で，外面はナデ，内面はケズリである。326の外面には全体的に二次火熱を受け，器面の剝落が著しい。322・323の手捏ね土器には，指頭圧痕が多く残る。

須恵器（第144～146図332～367・370・371）　坏蓋332～341のすべての天井部外面，および坏身342～354のうち344～346・353を除いたすべての底部外面には回転ヘラケズリが施される。332の天井部外面ならびに333～335の天井部内面にはヘラ記号が見えるが，いずれも１本の沈線文からなる。336の口縁部外面には，工具痕が付く。坏身の口縁部の立ち上がりは，いずれも同じような形態で低く，ほとんど時間差が感じられない。345・352はいわゆる赤焼き土器である。



第 145 図　37号竪穴住居跡出土土器・石器実測図４（1/3）

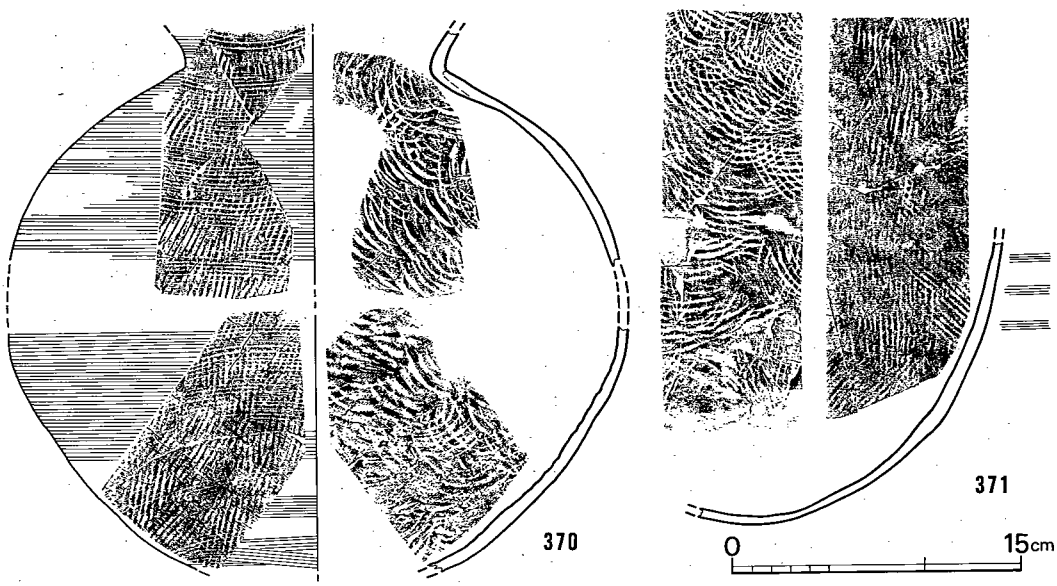
355は坏蓋に付く撮，356は撮の付く高坏の蓋で，後者の天井部外面には回転ヘラケズリが施される。357は壺の蓋で，器面調整はナデ。高坏脚部358～361の調整はすべてナデだが，358と359にわずかに残る坏部の底部外面には，回転ヘラケズリが窺える。359には2条の沈線文と2段の透孔が施されるが，上位の透孔は幅が1㎜しかない。361にも2条の沈線文が施される。362～364は壺の口縁部だが，362はあるいは提瓶の口縁部かもしれない。器面調整はいずれもナデで，口径14.2cmの364は2条の沈線文を持つ。365は壺の底部で，底部外面に回転ヘラケズリが，胴部の最も張った部分に沈線文が施される。366は甕で調整はナデである。波状文を有する367は，甕の口縁部であろうか。370と371はともに甕で内面に青海波のタタキを施すが，外面は370の場合平行タタキの後にカキ目が，371は平行タタキのみが施される。なお，371はいわゆる赤焼き土器である。この他に図示していないが，壁体や坏が融着しさらに全体に自然釉のかかった，外面に平行タタキ内面に青海波のタタキが施された甕の小破片も出土している。337の蓋と349の身はセットで出土している（図版61）。

砥　石（第145図368・369）　いずれも頁岩製の砥石で，端部以外は4面すべてに亘って研磨される。

鉄　器（第147図）　円筒形を呈する口金状の鉄器で，径1.9～1.5cmで高さ1.1cmを測る。

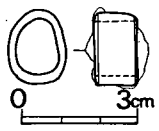
38号竪穴住居跡（図版63，第148図）

38号竪穴住居跡は調査区北西部の住居群の南で，16号溝の南2ｍに位置する。平面プランは4.25×4.55ｍの平行四辺形的にわずかに歪んだ方形を呈し，4本の主柱穴は径45～60cm，深さ

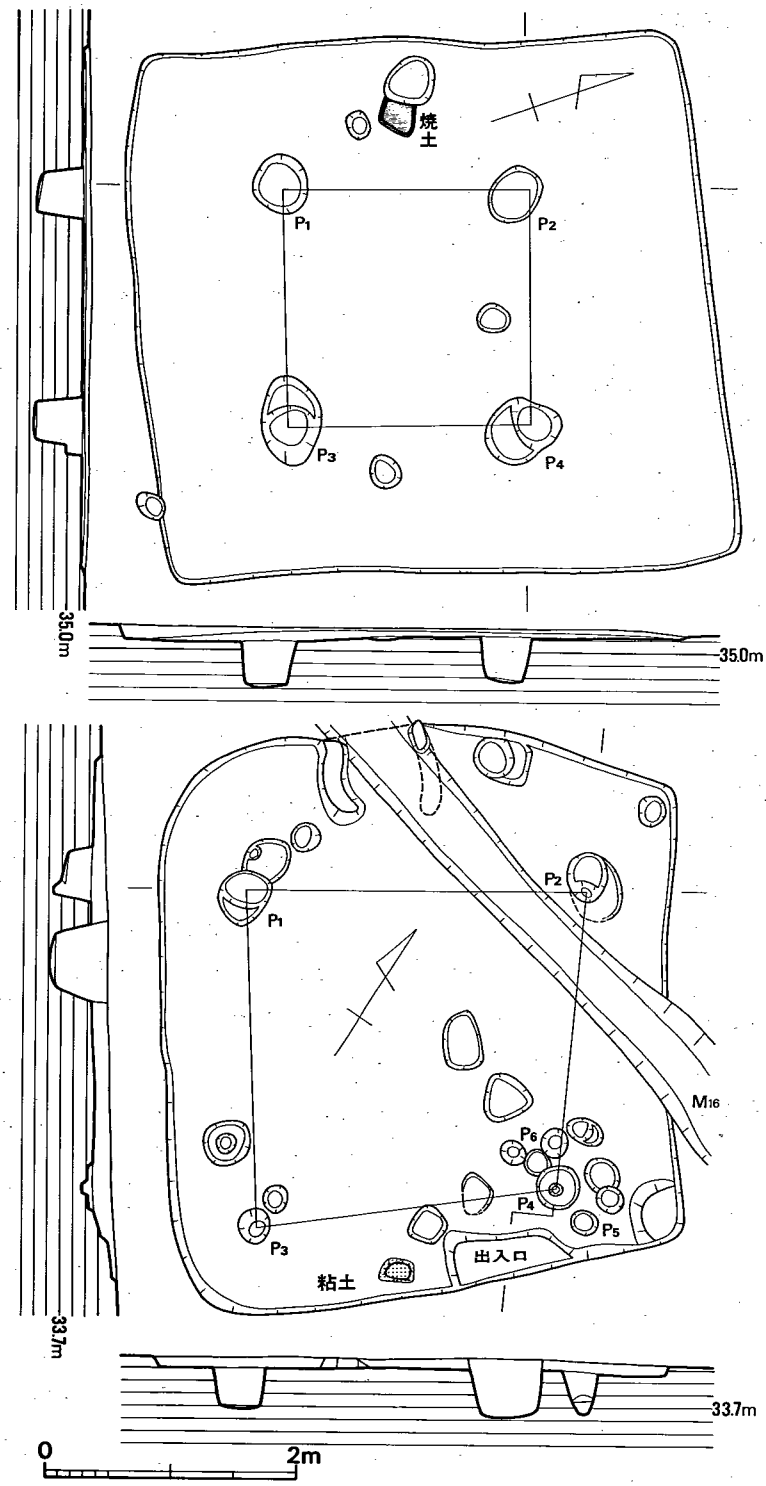


第 146 図　37号竪穴住居跡出土土器実測図5（1/4）

35～40cmを測り，整然と配置される。住居の規模と平面プランは正確に確認できたが遺存状態自体は悪い。壁高は一部8cmほど残るが全体的には3cm程度しかなく，カマドも西壁中央にわずかの窪みと焼土が残るだけである。遺物は土師器の小破片が数点出土しただけで，本住居の所属時期は確定できない。



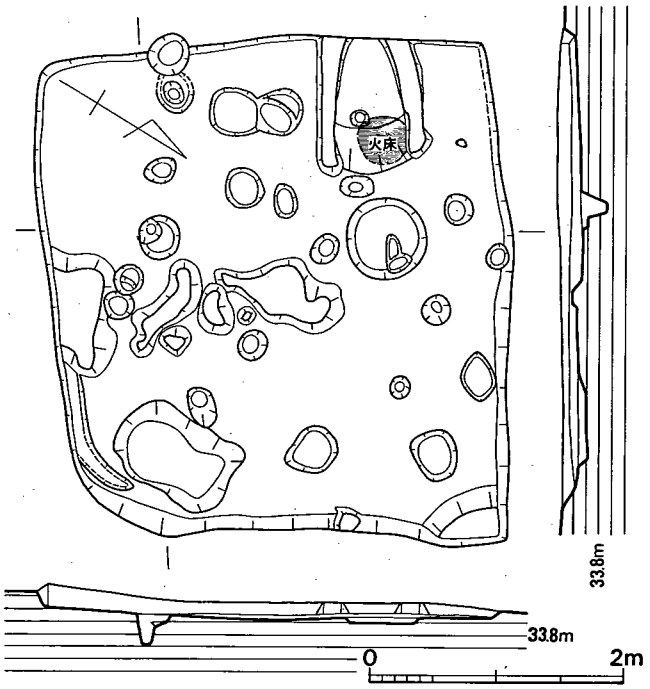
第147図 37号竪穴住居跡出土鉄器実測図 (1/2)



第148図 38・40号竪穴住居跡実測図 (1/60)

39号竪穴住居跡（図版64，第149・150図）

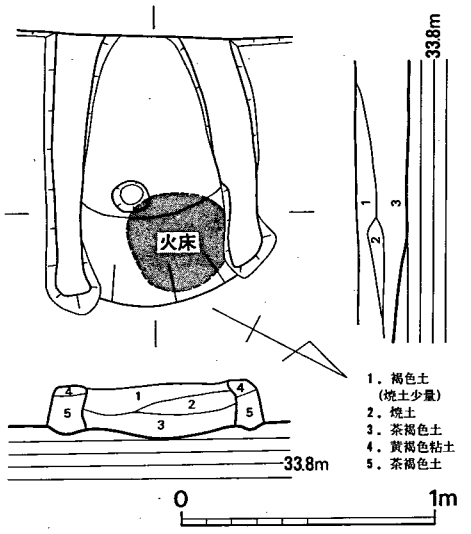
39号竪穴住居跡は調査区中央部の西方に位置し，40号住居跡の南４ｍにある。辺長4.0×3.65ｍの方形プランを呈し，壁高は最高で13cmを測る。主柱穴は検出されず，床面には多くの小柱穴や浅い窪みやテラス状の高まりがあり平坦ではない。カマドは南西壁の北寄りにあり，袖は長く１ｍほど残る。袖の下部は４cmほど掘り窪められ，カマドの土台となる。内部は住居の床面より10cmほど下がるが，火床面自体は住居の床面と同じレベルである。カマドの位置や床面の状態は本遺跡の住居に見られない特徴であり注意が払われる。出土遺物は少ないが，図示したもの中で第151図372･373はカマド内からの出土である。なお，本住居は７世紀代に属するものである。



第 149 図　39号竪穴住居跡実測図（1/60）

土師器（第151図372～375）　372～374は甕で，372は内外面ともハケ，373は外面ハケ内面ナデ，374は内外面ともナデが施される。375は坏であろうか。摩滅により調整不明。

須恵器（第151図376～378）　376・377は坏の口縁部で調整はナデ。378は高台の付く坏身底部で，調整にはナデが施される。



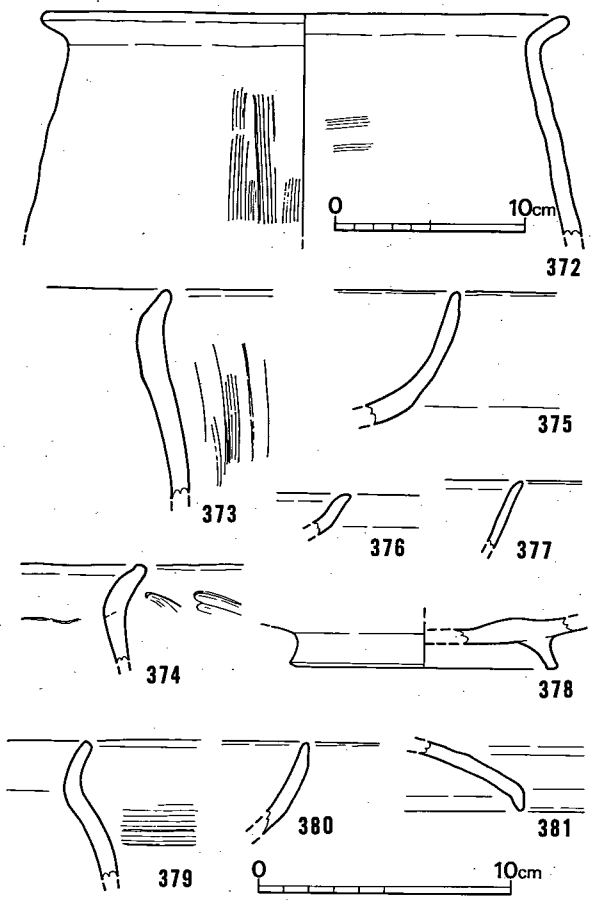
第 150 図　39号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

40号竪穴住居跡（図版64，第148図）

40号竪穴住居跡は調査区中央部の西方で39号住居跡の北４ｍに位置し，住居の北側を貫通するように16号溝が切る。平面プランは辺長4.5×4.0ｍの南西壁に開く台形で，主柱穴もこの平面プランに沿って配置される。カマドは北西壁の中央に付設され袖のごく一部が残る。カマドと対峙する南東壁の中央やや北寄りには0.9×0.3ｍのテラスが作り出されるが，これは出入口的機能を有するものであろう。貼り床を除去すると住居の東隅から多数の小ピットが検出されたが，その性格は判然としない。出土遺物は少なく，図示できたのは３点だけである。

土師器（第151図379・380）　379は甕で，外面にはハケ,内面にはナデが施される。380は坏の口縁部で，摩滅により調整不明。

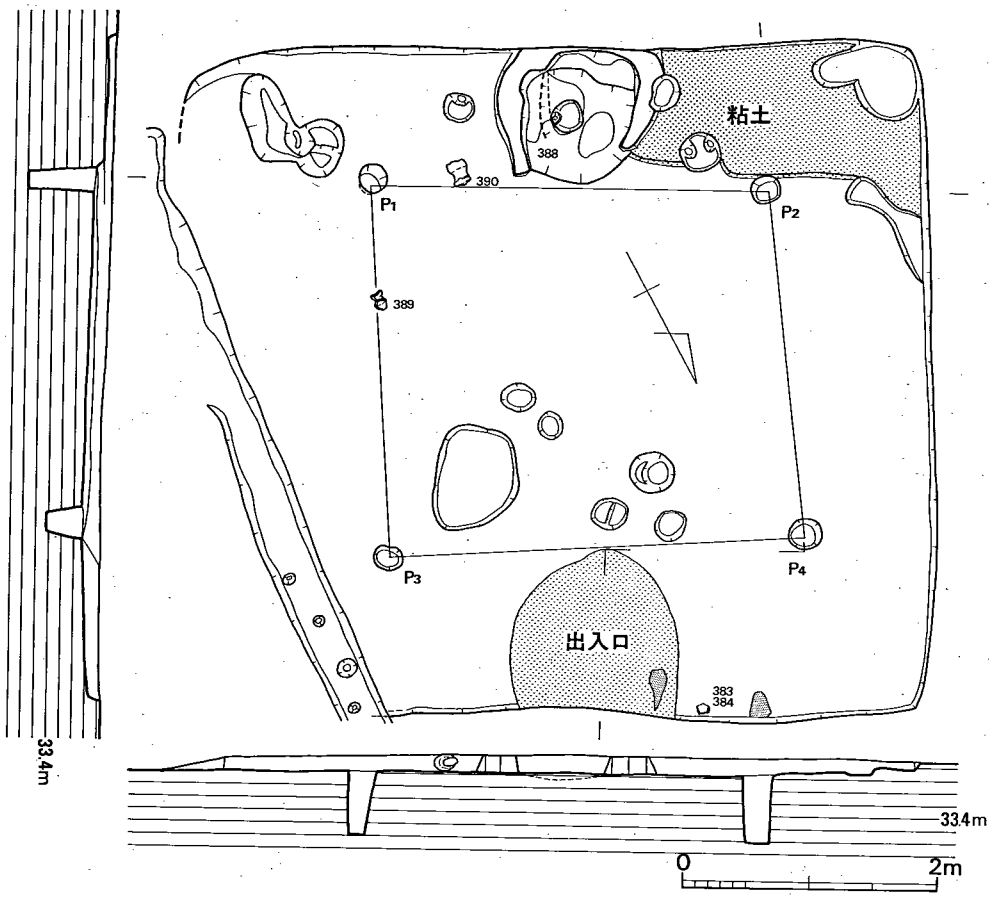
須恵器（第151図381）　坏蓋381の天井部外面には回転ヘラケズリが施される。口縁部は強く屈曲し，立ち上がりは低い。



第 151 図　39・40号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3，372は1/4)

41号竪穴住居跡（図版65，第152・153図）

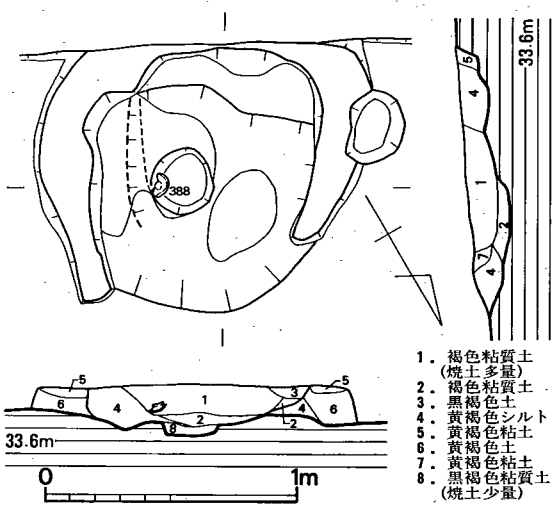
41号竪穴住居跡は調査区北西部住居群の南端に位置し，弥生時代の60号住居跡を切る。住居の東壁部分は現代の溝や削平により残存しないが，平面プランは5.35×5.9ｍの方形を呈する。４本の主柱穴は整然と配置され深さは35～55cmと深いが，径は20cmで本遺跡にあっては相当に小さい。カマドは南壁の中央に付設される。内部は10cmほど掘り込まれるが，火床面は住居の床面とほぼ同じレベルにある。カマドの西側には2.0×1.0ｍの範囲で黄褐色の粘土が広がるが，これは崩落したカマド天井部の粘土であろう。また，カマドと対峙した北壁中央にも1.35×1.20ｍの範囲で黄褐色粘土が広がるが，これは出入口的機能を有するものでカマドとは直接関係す



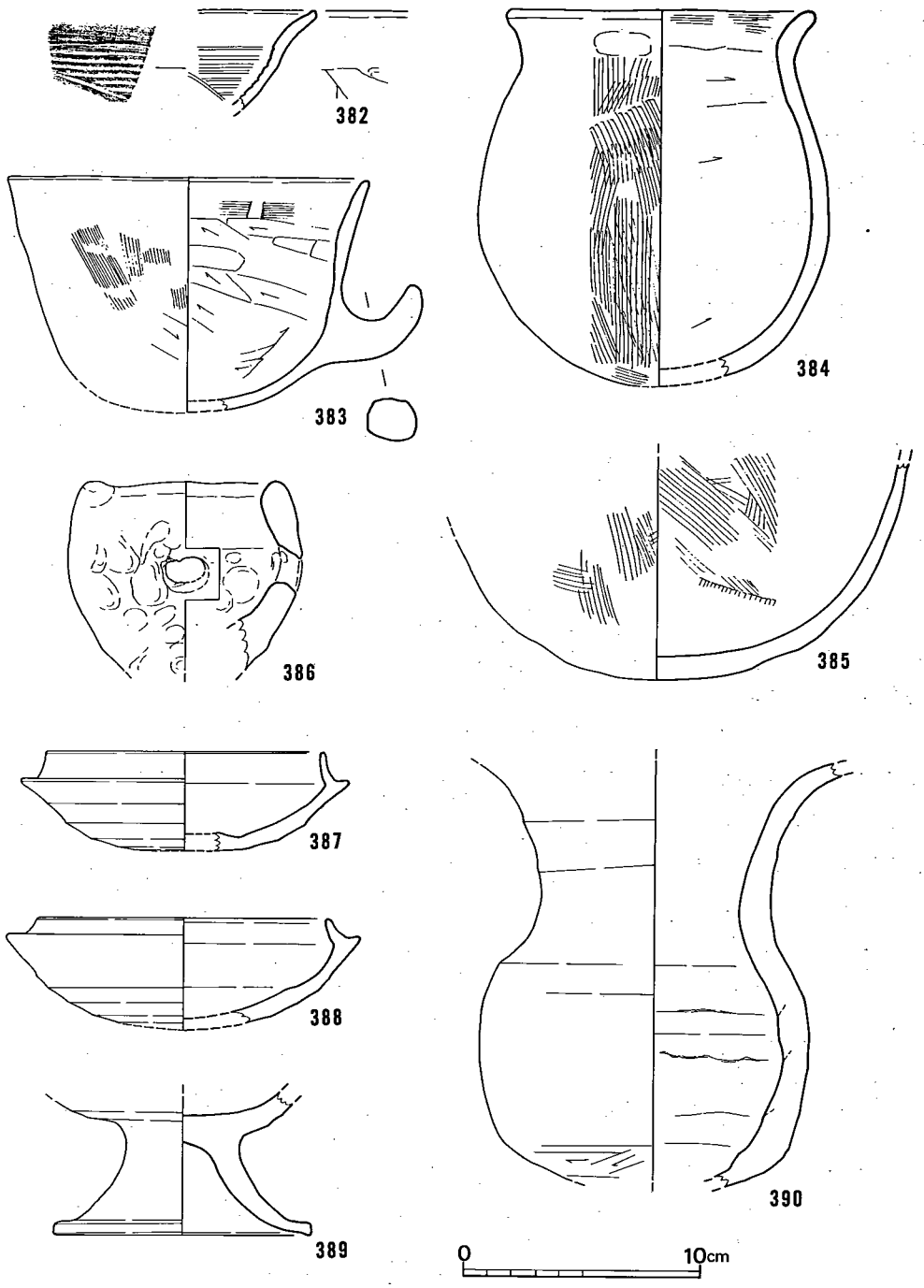
第 152 図　41号竪穴住居跡実測図（1/60）

るものではない。なおこの粘土のやや西寄りには，黄褐色粘土の塊が壁に貼り付くように2箇所検出され当初カマドの可能性を想定したが，焼土や掘り込みは検出されなかった。カマドの位置や主柱穴の規模は本遺跡にあっては特異で，注意を要する。遺物の遺存状態は良好で，図示した遺物のうちカマドから出土した第154図385・388以外はすべて床面からの出土である。

土師器（第154図382～385）　382は鉢の口縁部であろうか。外面にはケズリが，内面には強いハケが施される。383は把



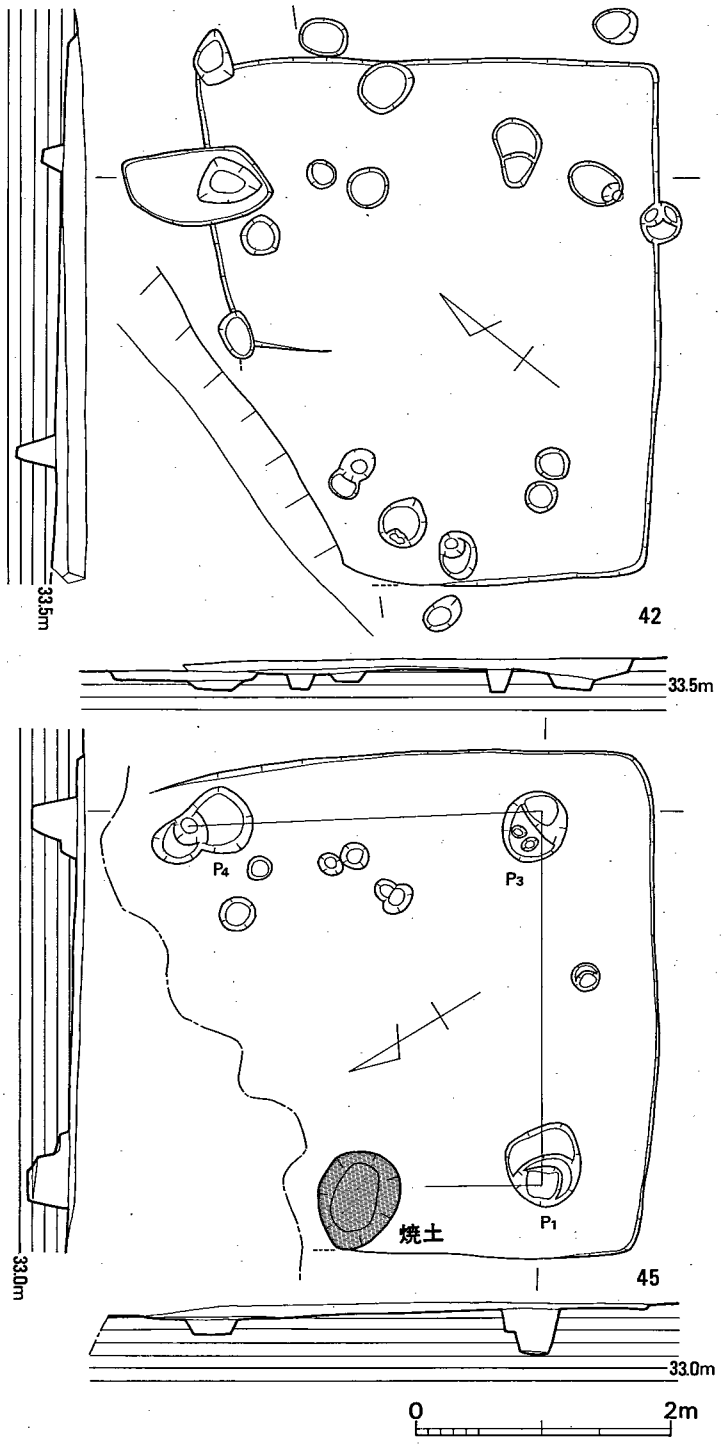
第 153 図　41号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第 154 図　41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

手付きの鉢で，口径15.4cm，器高10.1cmを測る。外面にはハケの後にナデが，内面にはやはりハケの後にケズリが施される。甕384の器面調整は，外面がハケで，内面はケズリである。なお，外面の胴下半部には二次火熱を受ける。ハケを器面調整とする甕385の底部外面には，擦れた摩滅の跡が著しい。386はタコ壺で，内外面には指頭圧痕が多く残る。

須恵器（第154図387～390）　坏身387・388の底部外面は回転ヘラケズリで，口縁部の立ち上がりは比較的低い。389は高坏の脚部で，わずかに残る坏部の外面には回転ヘラケズリが窺える。390は長頸壺で残存器高18.5cm，最大胴部径14.0cmを測る。器面調整はナデだが，底部外面には回転ヘラケズリの後に静止ヘラケズリが施される。内面には多くの粘土接合痕が残る。



第155図　42・45号竪穴住居跡実測図（1/60）

42号竪穴住居跡（図版66，第155図）

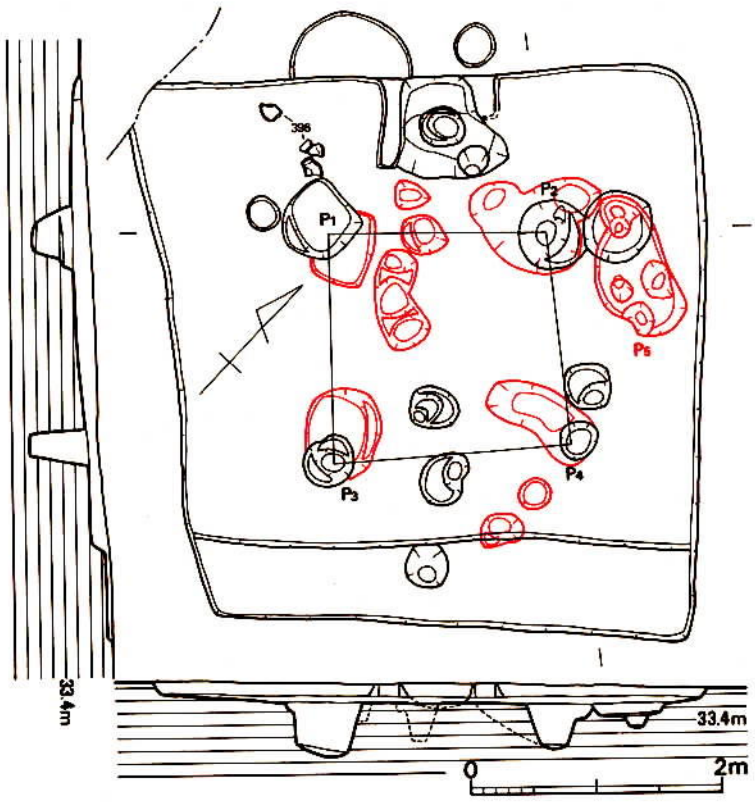
42号竪穴住居跡は調査区北西部の住居群の中で最も西に位置し，38号住居跡の南西５ｍにある。住居の西端を削平されるが，平面プランは辺長4.1×3.6ｍの長方形を呈していたと考えられる。主柱穴として適当な位置にある柱穴はなく，また柱穴自体も小さく浅い。カマドは確認できなかったが，北西壁中央にはわずかに焼土が検出され，もともとはこの北西壁中央に付設されていたのであろう。壁高は最高で20cmを測る。図示した土器は，いずれも床面から出土した。

土師器（第158図391･392）　坏391の口縁部内外面にはナデが施されるが，それ以外には全面にミガキが施される。392は高坏の脚部で，器面調整はナデである。

須恵器（第158図393）　坏蓋393は復原口径10.4cmと小さく，器面調整はナデ。

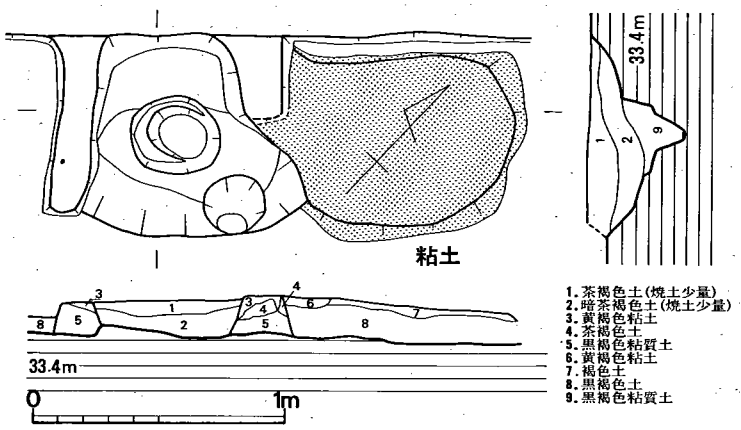
43号竪穴住居跡（図版66，第156・157図）

43号竪穴住居跡は調査区北西部住居群の西方にあり，42号住居跡の北５ｍ，44号住居跡の南西７ｍに位置する。辺長4.5×4.4ｍの方形プランを呈し，南東壁には幅55～65cmのベット状テラスを有する。４本の主柱穴は整然と配されるが，柱と柱の間は平均1.7ｍと狭く，４本の主柱穴は他の住居より中央へ寄っている。カマドは北西壁の中央に付設されるが北側の袖の残りは悪く，カマドの北側へ1.7×1.3ｍの範囲で広がる黄褐色の粘土の存在と考え合わせるなら，カマドの天井部が北側へ崩落したことが推測される。なお，カマドの下部で検出された２つの柱穴は，カマドに関連するものではない。遺物は比較



第 156 図　43号竪穴住居跡実測図（1/60）

的多く出土したが，図示したもののうち第158図394・398・402・406はカマドから，397・401は主柱穴Ｐ１から，405はＰ５から，396・403は床面からの出土である。



第 157 図　43号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

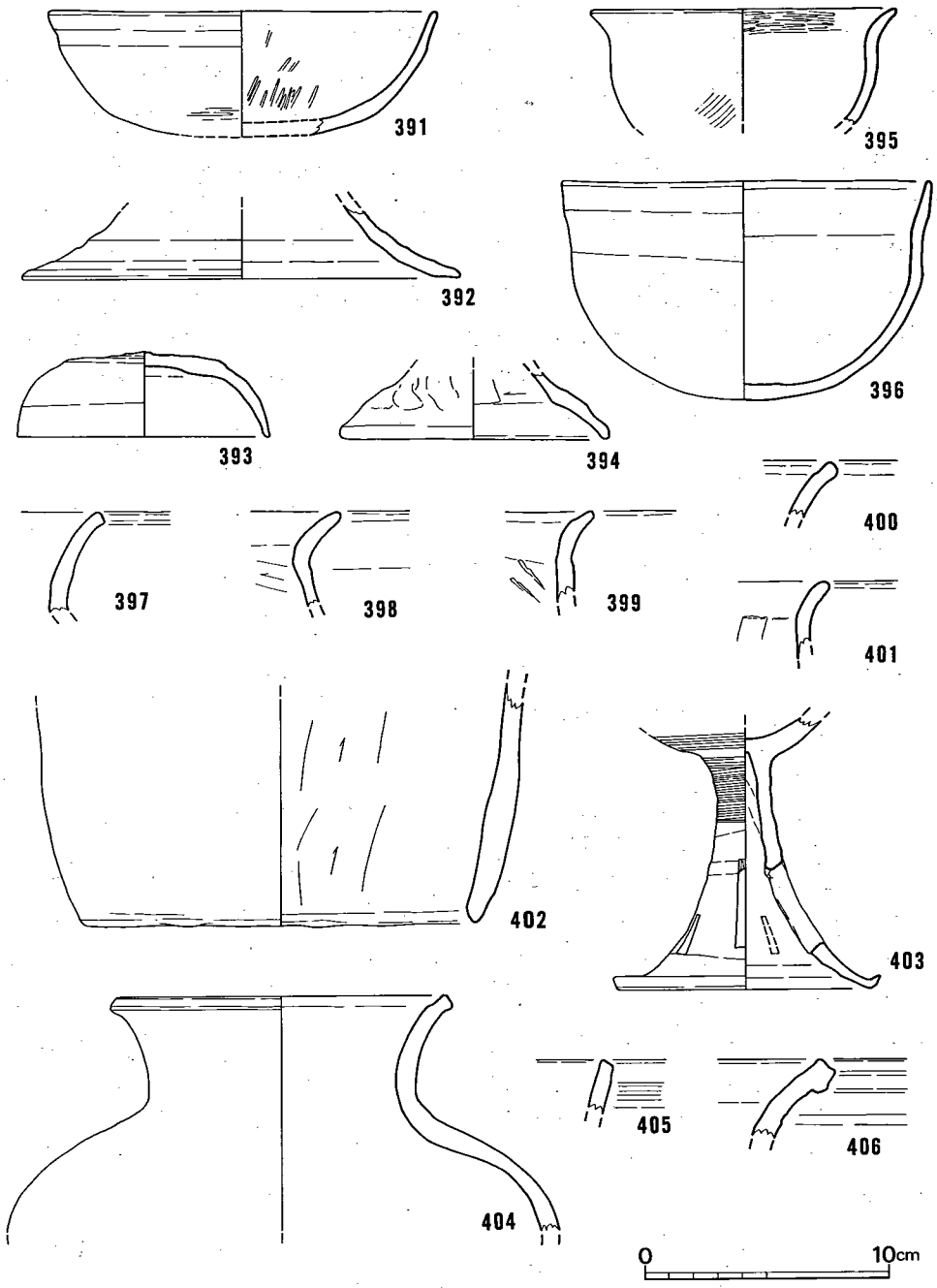
土師器（第158図394～402）　394は高坏脚部で，内面にはケズリ，外面にはナデが施される。鉢395と396の器面調整はナデだが，395の口縁部内面には丁寧なミガキが見られる。396の口径は15.0cm，器高は9.0cm。397～401は甕で，398・399・401の内面頸部以下にはケズリが施されるが，それ以外の内外面はナデである。甑402の内面はケズリ，外面はナデ。

須恵器（第158図403～406）　高坏脚部403には３方向の長さの異なる透孔が穿たれ，脚部上半部と坏部の外面にはカキ目が施される。また，内面上部にはしぼり痕が残る。404は摩滅が著しく調整不明だが，胴部外面には波状文の痕跡が窺える。405の外面にはカキ目が，406にはナデが施される。

45号竪穴住居跡（図版67，第155図）

45号竪穴住居跡は調査区北西部の住居群の中で最も北に位置し，弥生時代の44号住居跡の北西壁に近接する。北側1/5を現代の水路によって削平され，主柱穴は３本しか残っていない。残存する辺長は4.0×4.0ｍで，平面プランは方形を呈していたようである。主柱穴はいずれも大きく，径45～50cm，深さ35～40cmを測る。北西壁中央には，径80×65cm，深さ15cmの浅くて緩やかな窪みに焼土が詰まっており，カマドの痕跡と考えられる。壁高は最高でも８cmと低い。遺物も小破片で少なく図示できたのは１点だけであるが，これ以外に須恵器もある。なお，第159図407はカマドの痕跡である焼土中から出土した。

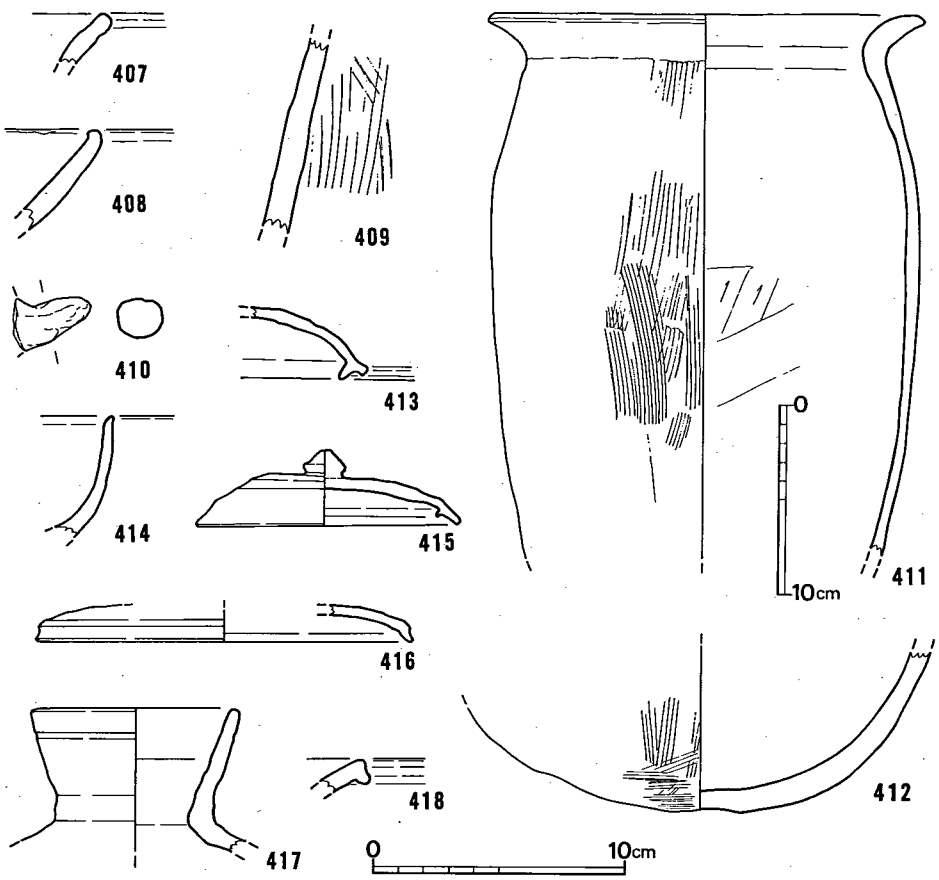
土師器（第159図407）　甕の口縁部であるが，摩滅が著しく調整不明。



第 158 図　42・43号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

46号竪穴住居跡（図版67，第160・161図）

46号竪穴住居跡は調査区北西部の住居群のほぼ中央に位置し，弥生時代の52号住居跡を切る。北東壁は削平され，遺構検出時においてすでに地山が剝き出しになっていた。平面プランは辺長4.0×4.5m程度の方形を呈すると考えられ，南西壁では最高11cmを測る。主柱穴は最高で20cmと浅く，平面プランに対して若干歪んだ配置である。カマドは北西壁中央に付設され，1.1mの袖が残る。火床面は住居の床面より10cmほど低い。カマド内の埋土には，カマド本体に使用された黄褐色の粘土が混在する。住居の床面を除去すると上面2.75×2.45m，深さ25cmの浅い土壙が住居西側で検出され，第159図408・410・412等が出土した。あるいは本住居に伴うものかもしれない。遺物は比較的多く，カマドからは409・414・417が，床面からは411が出土した。遺物から判断して，本住居は7世紀代に属するものである。調査時点では，本住居が37号住居に切られるという認識であったが，整理作業を経た現段階ではその先後関係が逆になっており

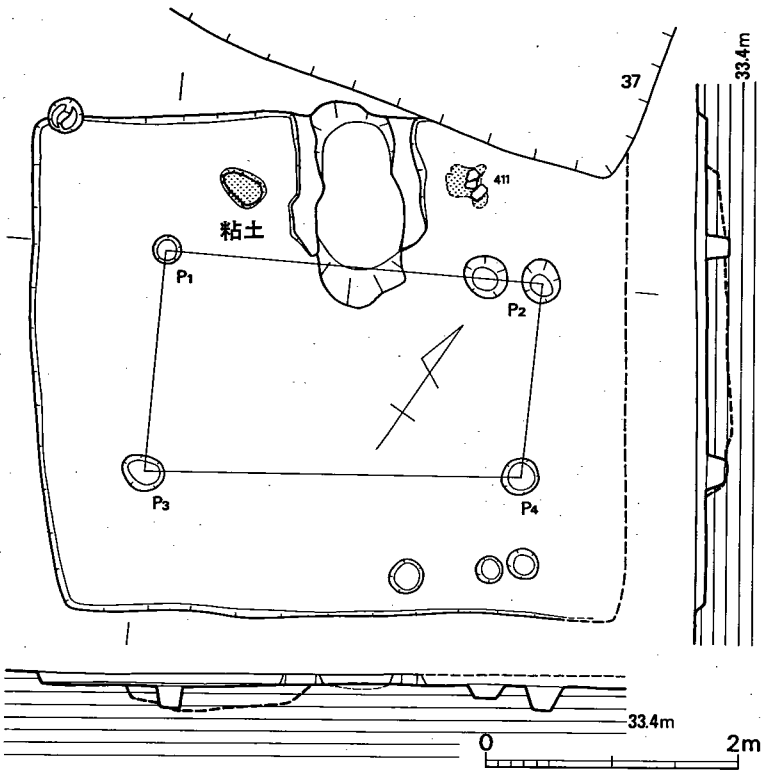


第 159 図　45・46号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3，411・412は1/4）

注意を要する。

土師器（第159図408～412）　408は鉢の口縁部であろうか。調整はナデである。409は甑で外面はハケ，内面にはナデが施される。410は甑の把手である。411と412はともに甕で，411の外面にはハケ，内面にはケズリが，412の外面にはハケが，内面にはナデが施される。411の復原口径は23cm，器高は27cm以上を測る。

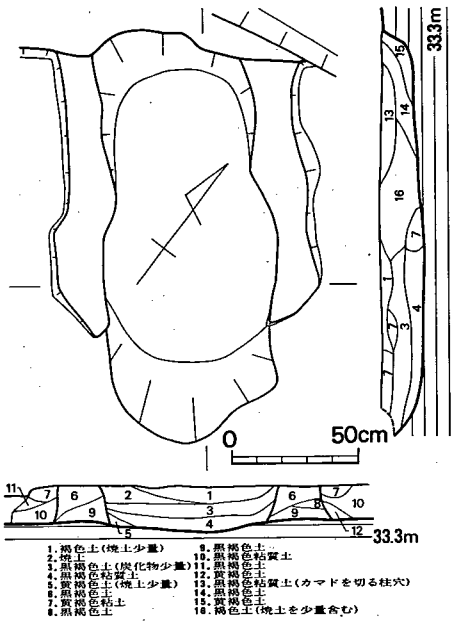
須恵器（第159図413～418）　坏蓋413と坏身414の器面調整はナデである。壺蓋415の天井部外面には，回転ヘラケズリが施される。416は撮の付く坏蓋で，調整はナデ。416は提瓶もしくは平瓶の口縁部であろうか。外面には1条の沈線文が入り，全面にナデが施される。418は甕の口縁部である。



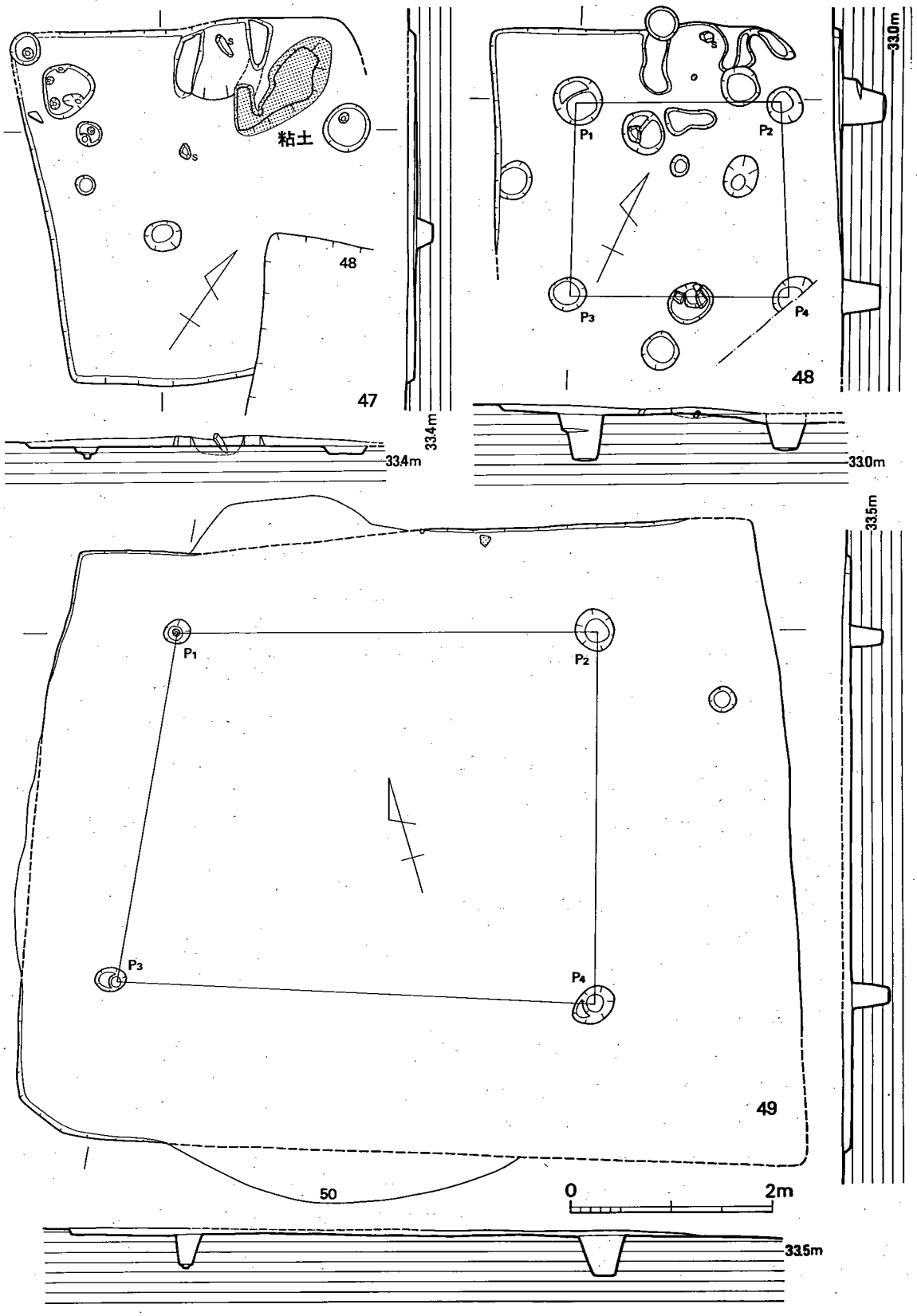
第 160 図　46号竪穴住居跡実測図（1/60）

47号竪穴住居跡（図版67，第162図）

47号竪穴住居跡は調査区北西部の住居群の中でも南寄りに位置し，48号住居跡に切られ弥生時代の60号住居跡を切る。北東壁および西隅は削平され残存せず，東隅も48号住居跡に切られているため，住居の東側の状況は判然としない。現存する辺長は3.5×3.4mと小さく，平面プランは方形を呈する。壁高とともにカマドも高さ10cm程度しか



第 161 図　46号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第 162 図　47～49号竪穴住居跡実測図 (1/60)

残らないが，自然石を利用した支脚が若干傾きながらもほぼ据えられたままの状態で出土した。カマドの内部は住居の床面から10cmほど掘り下げられているが，焼土は支脚の中位から上のレベルで広がっていた。カマドの東側にはカマドに接するように1.2×0.5mの範囲で黄褐色粘土（図中のスクリーントーン）が広がるが，これはカマドの天井部が西から東の方向へ崩れ落ちた時の痕跡と考えられる。出土遺物は少なく，図示できたのは2点だけである。

土師器（第163図419）　甕419の器面調整は内外面ともハケだが，内面は頸部より下位にしか施されず，しかも粗い。

須恵器（第163図420）　420は甕の口縁部で，器面調整はナデである。

48号竪穴住居跡（図版67・68，第162図）

48号竪穴住居跡は調査区北西部の住居群の中でも南寄りに位置し，47号住居跡や弥生時代の60号住居跡を切る。本住居の東隅は現代の水路に切られ，その上全体的に削平は著しく，壁が確認できるのは住居の西側1/3程度だけである。径40～50cm，深さ50cmほどを測る4本の主柱穴は整然と配置されており，もともとは1辺3.5m程度の比較的小さな方形を平面プランとしていたようである。北壁中央に付設されたカマドは黄褐色粘土の袖をわずかに残すだけだが，内部中央からは支脚として使用された可能性のある長さ10cmほどの焼けた自然石が出土している。図示に耐えうる遺物はなく，土師器の小破片が10点ほど出土しただけである。

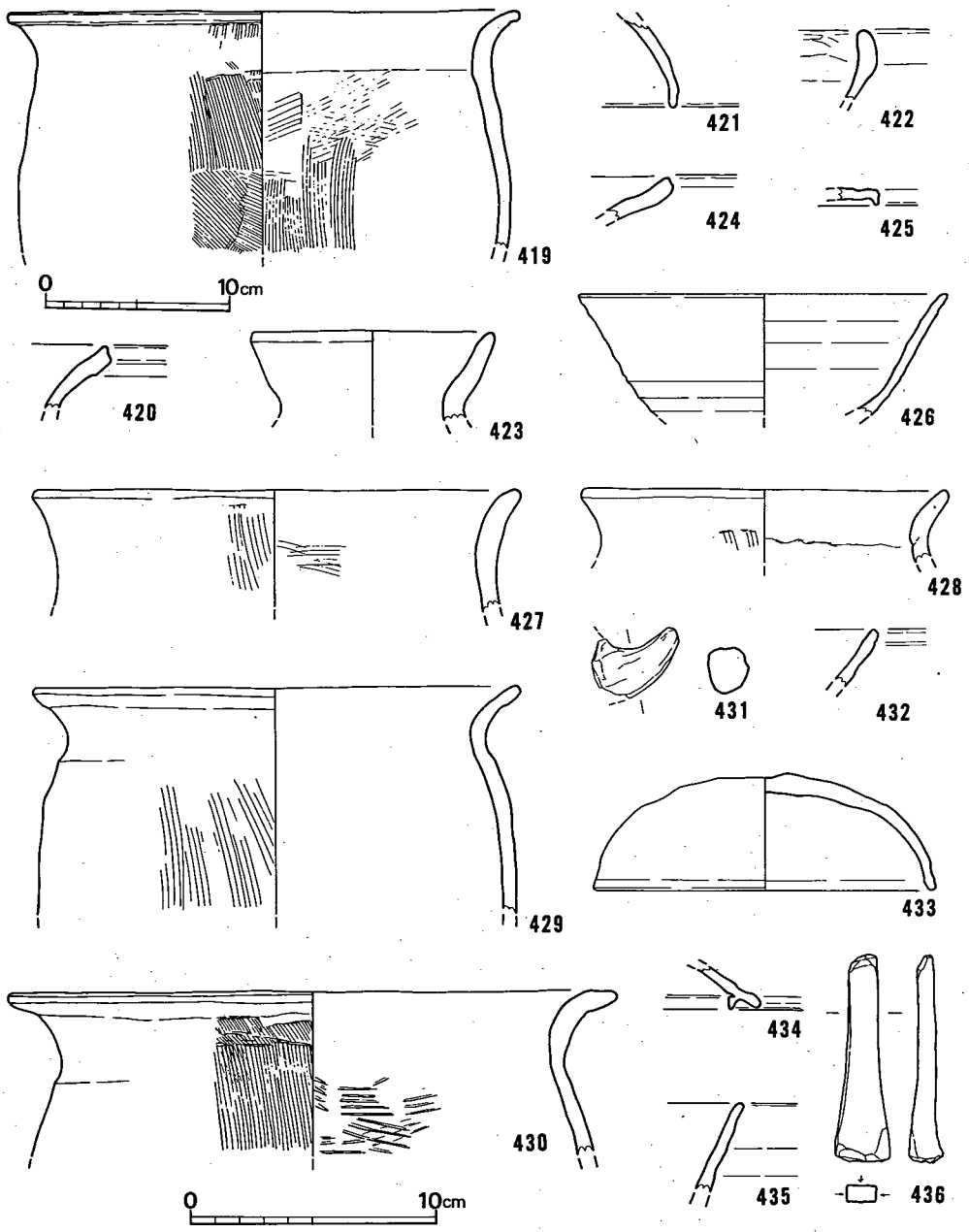
49号竪穴住居跡（図版12，第162図）

49号竪穴住居跡は調査区北西部の住居群のほぼ中央部で，弥生時代の50号円形住居跡の上にちょうど重なるような位置にある。当然50号住居跡を切っているわけであるが，調査時においては50号住居跡に対する認識が多少遅れ，本住居に伴う柱穴や床面の認定が不十分であった。従って，遺物等から判断して本住居に確実に伴うといえる柱穴は，図示した5つだけである。平面プランは辺長6.2×6.7～7.8mの南東壁が開く台形を呈していたようで，このプランは主柱穴の配置にも対応している。北壁の中央にはカマドが付設された痕跡と考えられる黄褐色粘土が検出され，また砥石（第163図436）もカマドの東に近接して出土した。出土遺物で図示できたのは，第163図421～426の6点にすぎない。須恵器は7世紀代に属するもので，426はP2からの出土である。

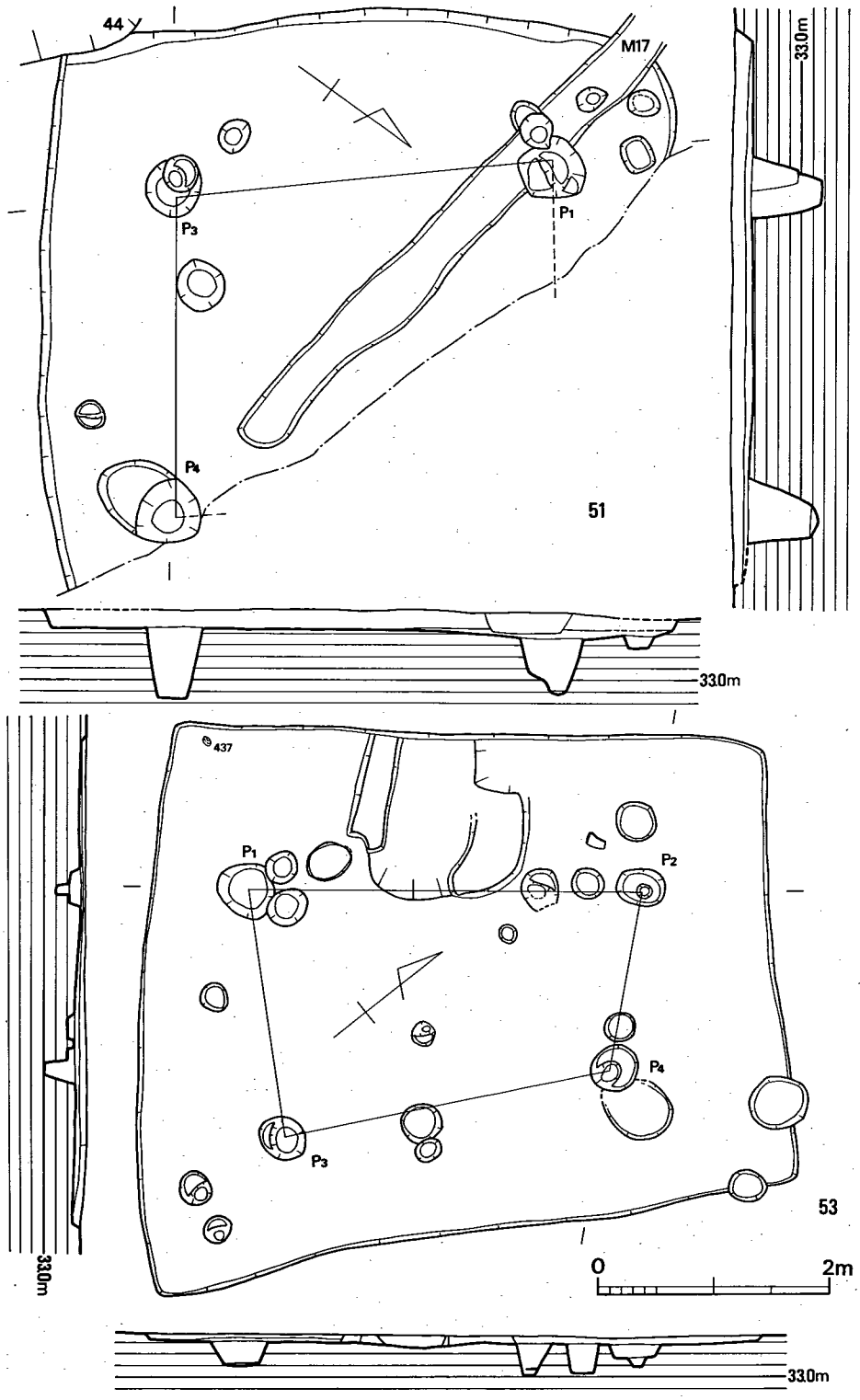
土師器（第163図421～424）　421の坏蓋は，摩滅が著しく調整不明。422～424の口縁部の器面調整にはいずれもナデが施される。

須恵器（第163図425・426）　425は撮の付く坏蓋の口縁部である。426はいわゆる赤焼き土器で，外面下半部には回転ヘラケズリが施される。

砥　石（第163図436）　粘板岩製と思われる砥石で，太い方の端部と左図背面以外はかなり使い



第 163 図　47・49・51号竪穴住居跡出土土器・石器実測図（1/3，419は1/4）



第 164 図　51・53号竪穴住居跡実測図（1/60）

込まれている。

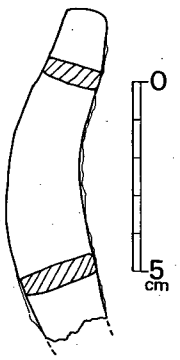
51号竪穴住居跡（図版67，第164図）

51号竪穴住居跡は調査区北西部住居群の北端に位置し，弥生時代の44号住居跡は切るが，奈良時代の36号住居跡と17号溝に切られる。住居の壁高は最高で18cmを測り遺物の遺存状態は良好であるが，北側1/3は現代の道路に大きく削平され，カマドも残らない。残存部分から判断して，住居は辺長5.5×5.0m程度の方形プランを呈していたと考えられる。主柱穴も3本しか残らないが，径40～50cm，深さ45～60cmと深い。第163図433は主柱穴P3から，434・435は貼り床の除去に際して出土した。出土遺物から判断して，本住居は7世紀代に属する可能性がある。用途不明の鉄器が1点出土している。

土師器（第163図427～432）　427～430は甕で，外面の調整にはすべてハケが施される。内面は428・429がナデ，427・430がハケである。口縁部はいずれも外反し，端部は丸く仕上げられる。431は甑の把手，432は坏身の口縁部で外面にはミガキが施される。

須恵器（第163図432～435）　坏蓋433は生焼けで摩滅も著しいが天井部外面には回転ヘラケズリが施されているようである。434も坏蓋で，やはり回転ヘラケズリが天井部外面に見られる。435の調整はナデである。

鉄　器（第165図）　平面形態は「へ」字状，断面形態は長方形を呈する現存長9.0cm，最大幅2.0cm，厚さ7㎜の鉄器で，一端が欠けており用途は不明である。



第165図　51号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）

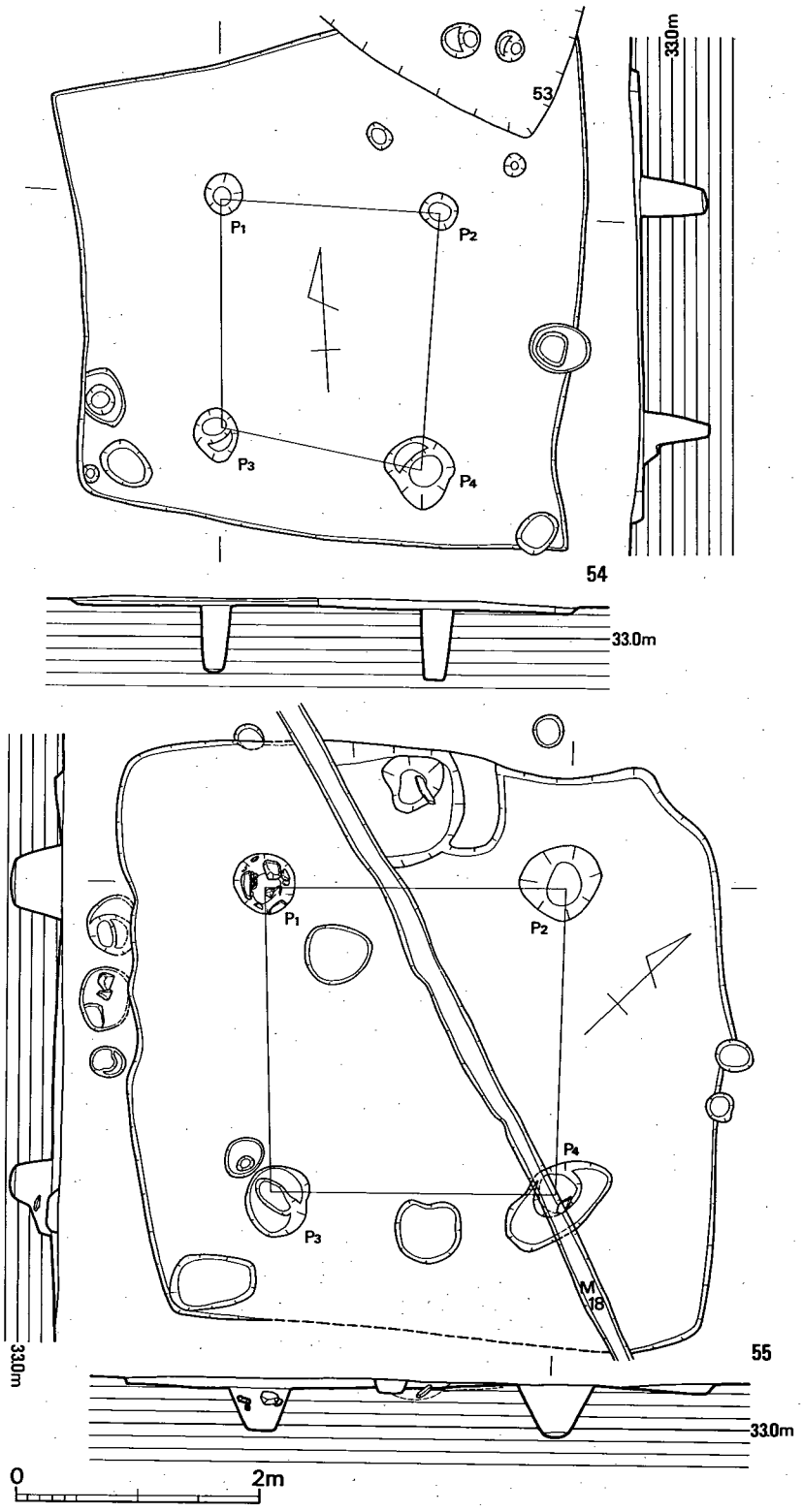
53号竪穴住居跡（図版69，第164図）

53号竪穴住居跡は調査区北部住居群の中でも南寄りに位置し，54号住居跡と10号掘立柱建物跡を切る。辺長3.8～4.95×5.35mの不整方形を平面プランとするが，4本の主柱穴もこの平面プランに対応した位置に配される。住居の遺存状態は貼り床が3～5cmほど残るだけと悪く，北西壁中央に付設されたカマドも袖になる黄褐色粘土と内部の焼土がわずかに残るだけである。遺物も少なく，図示できたのは1点だけである。

須恵器（第167図437）　437は甕の胴部で，底部外面には回転ヘラケズリが施される。内面調整はナデで，最大胴部径は9.6cmである。

54号竪穴住居跡（図版69，第166図）

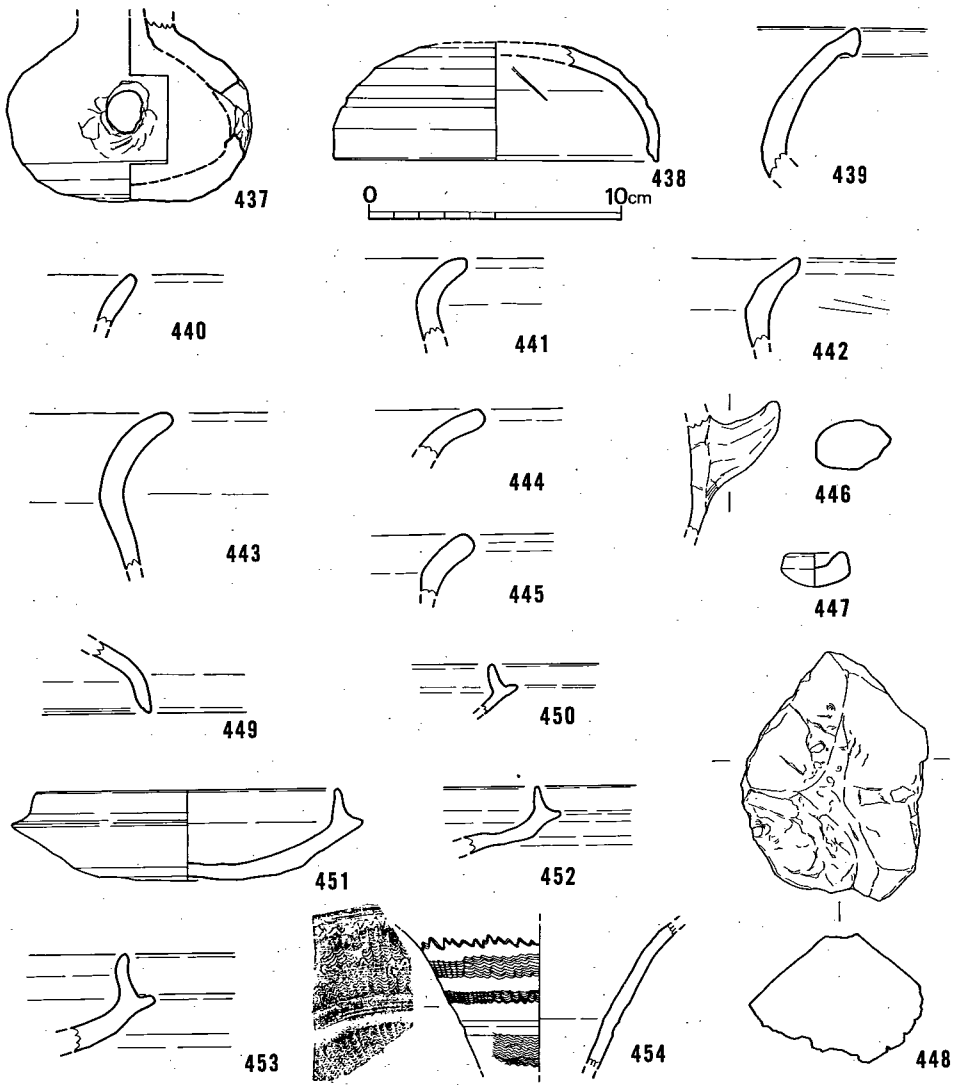
54号竪穴住居跡は調査区北部住居群の中でも最も南に位置し，53号住居跡に切られる。平面プランは辺長4.2×4.15mの不整方形を呈するが，4本の主柱穴の配置は53号住居のように平面



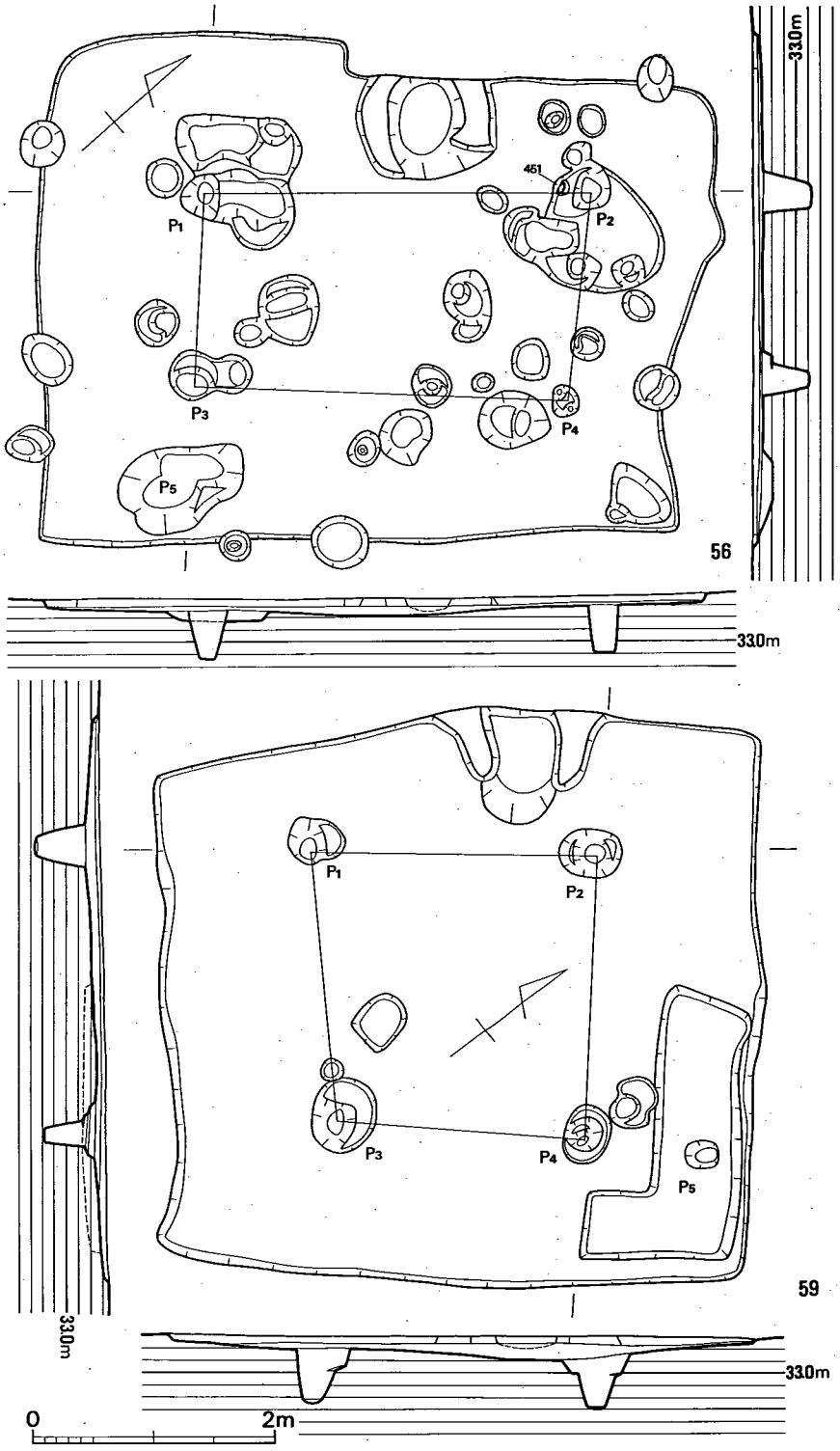
第 166 図　54・55号竪穴住居跡実測図（1/60）

プランに必ずしも対応していない。主柱穴自体は径20～40cm，深さ50～60cmと，細いながらもしっかりとしている。住居の遺存状態は極めて悪く貼り床が１～４cm程度残るだけで，カマドの痕跡も全くない。遺物も少なく，図示できたのは２点だけである。

須恵器（第167図438･439）　坏蓋438の天井部外面には，器面調整として回転ヘラケズリが施される。439は甕の口縁部で，調整はナデである。



第 167 図　53～56号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 168 図　56・59号竪穴住居跡実測図（1/60）

55号竪穴住居跡（図版69，第166図）

55号竪穴住居跡は調査区北部住居群の中でも東寄り，57号住居跡の南0.5m，53号住居跡の北1mに位置し，奈良時代の18号溝に切られる。著しい削平のため南東壁は残らず地山も一部露呈しているが，平面プランは辺長4.8×4.8mの正方形を呈する。主柱穴も整然と配され，径50～60cm，深さ35～45cmを測る。主柱穴P1からは，寝石として使用された拳大の礫10点余りが柱穴の壁際で検出された。カマドは北西壁の中央に付設されるが，西側の袖は18号溝によって削り取られ残らない。東側の袖も黄褐色の粘土が薄く残るだけだが，住居の床面より10cmほど下がったカマドの内部には，自然石を利用した支脚が倒れた状態で出土した。遺物は少なく，図示しえたのは3点だけであるが，これ以外に須恵器の破片も含まれる。

土師器（第167図440～442）　440～442はいずれも甕の口縁部である。器面調整はナデだが，442の外面頸部以下にはケズリの痕跡が窺える。440・441は貼り床から，442は主柱穴P3からの出土である。

56号竪穴住居跡（図版70，第168図）

56号竪穴住居跡は調査区北部住居群のほぼ中央で，53号住居跡の西3m，58・61号住居跡の東1.5mに位置し，12号掘立柱建物跡は切るが15号掘立柱建物跡には切られる。平面プランは長方形を基本としながらも，北西壁の南側半分が北西方向に30cmほど突出する変則的なもので，南西壁辺長4.2m，北東壁辺長3.7m，南東壁辺長5.3mを測る。壁高は7cm足らずで，遺存状態は悪い。4本の主柱穴は径20～30cm，深さ40cmと安定しており，住居の平面プランに対応した横長の配置である。カマドは北西壁のほぼ中央に付設されるが遺存状態は悪く，焼土と袖に相当する黄褐色の粘土が薄く残るだけである。貼り床を除去すると多数の小柱穴が検出されたが，これらの中には弥生土器を出土するものもいくつかある。

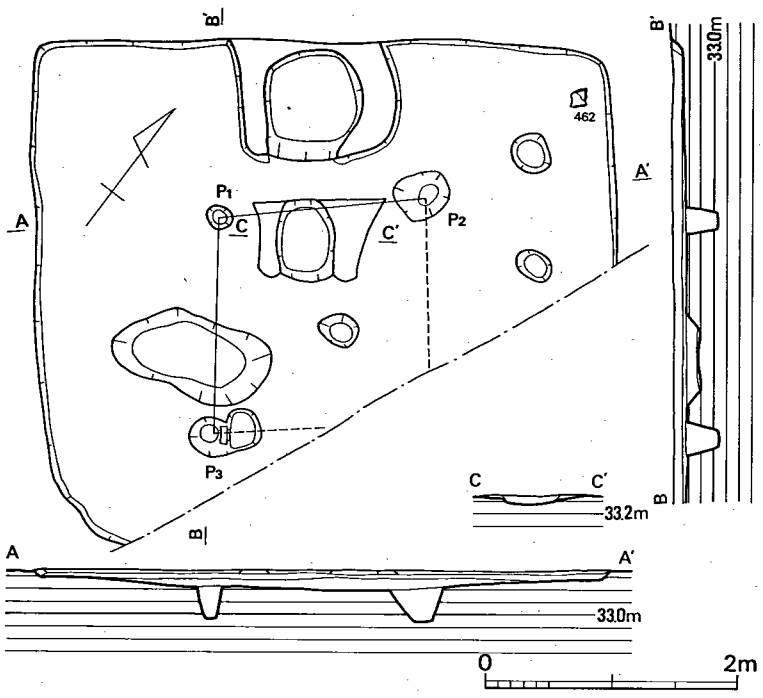
土師器（第167図443～448）　443～445は甕の口縁部で，器面調整はいずれもナデである。446は甑の把手で，内面にはケズリが，外面の把手下部にはハケが施される。手捏ね土器447には指頭圧痕が残る。448は土師器と同じ胎土の粘土塊である。手のひらにちょうど収まる形をしており，土器作りに使用される粘土が手に握られたままの状態で焼かれたものであろう。

須恵器（第167図449～454）　坏蓋449の器面調整はナデ。坏身450～453の中で，底部外面に回転ヘラケズリが施されるのは451と453である。口縁部の立ち上がりはさほど高くない。鉢454の器面調整はナデで，外面には沈線文の上下に波状文が施される。P5出土。

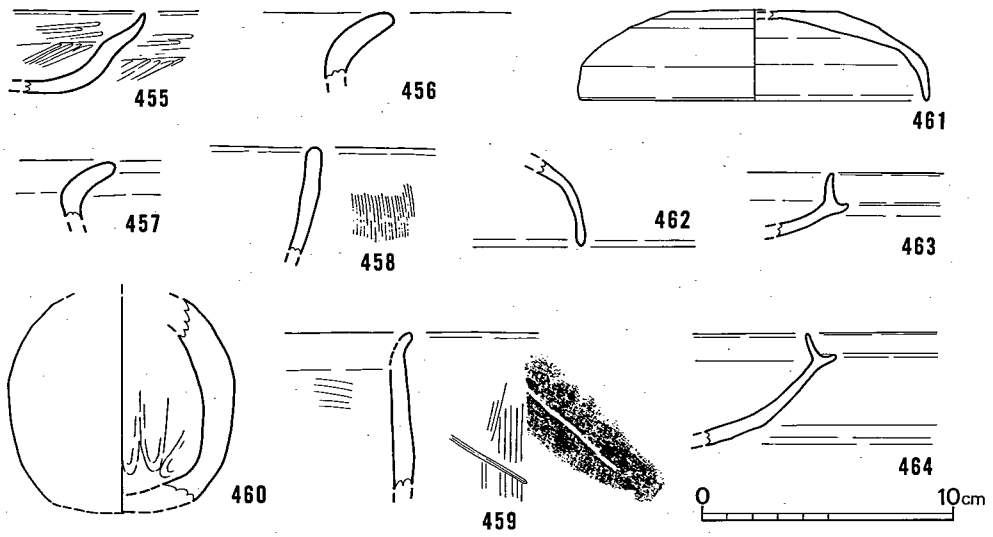
57号竪穴住居跡（図版70，第169図）

57号竪穴住居跡は調査区北部住居群の中でも北東寄りに位置し，55号住居跡の北0.5m，62号住居跡の西5mにある。住居の東側1/3は現代の水路下にあり，調査をすることができなかっ

た。平面プランは辺長4.55×4.0mの方形を呈し，深さ25～30cmの主柱穴が3本確認されている。壁高は2～6cmと遺存状態は悪く，遺構検出時においてすでに地山が剝き出しになっていた部分もある。カマドは北西壁の中央に付設されるが，焼土と袖に相当する黄褐色粘土が2cmほど残るだけである。また，これとは別にもう一つのカマドが，貼り床を除去する過程で主柱穴P1とP2の間に検出された。中央部の浅い掘り込みと袖に相当する黄褐色粘土が薄く残るだけであるが，本住居の構築以前のものであることには間違いない。出土遺物は比較的多く，第170図456・463は主柱穴P2



第 169 図　57号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 170 図　57号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

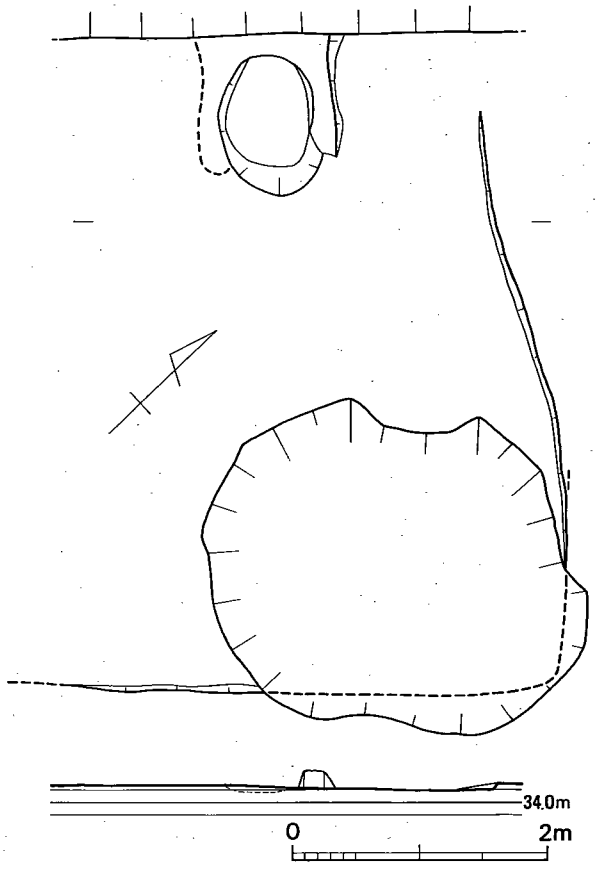
から，457・458は貼り床からの出土である。

土師器（第170図455～460）　坏455の内外面には丁寧なミガキが施される。456・457は甕の口縁部で，調整はナデ。458・459は甑で，458の外面はハケ，内面はナデである。459には内外面ともにナデが施されるが，外面には1条の沈線文が見える。460はミニチュアであろうか。多くの指頭圧痕が残る。

須恵器（第170図461～464）　坏蓋461の天井部外面と坏身464の底部外面には，回転ヘラケズリが施される。坏身口縁部の立ち上がりは，さほど高くない。

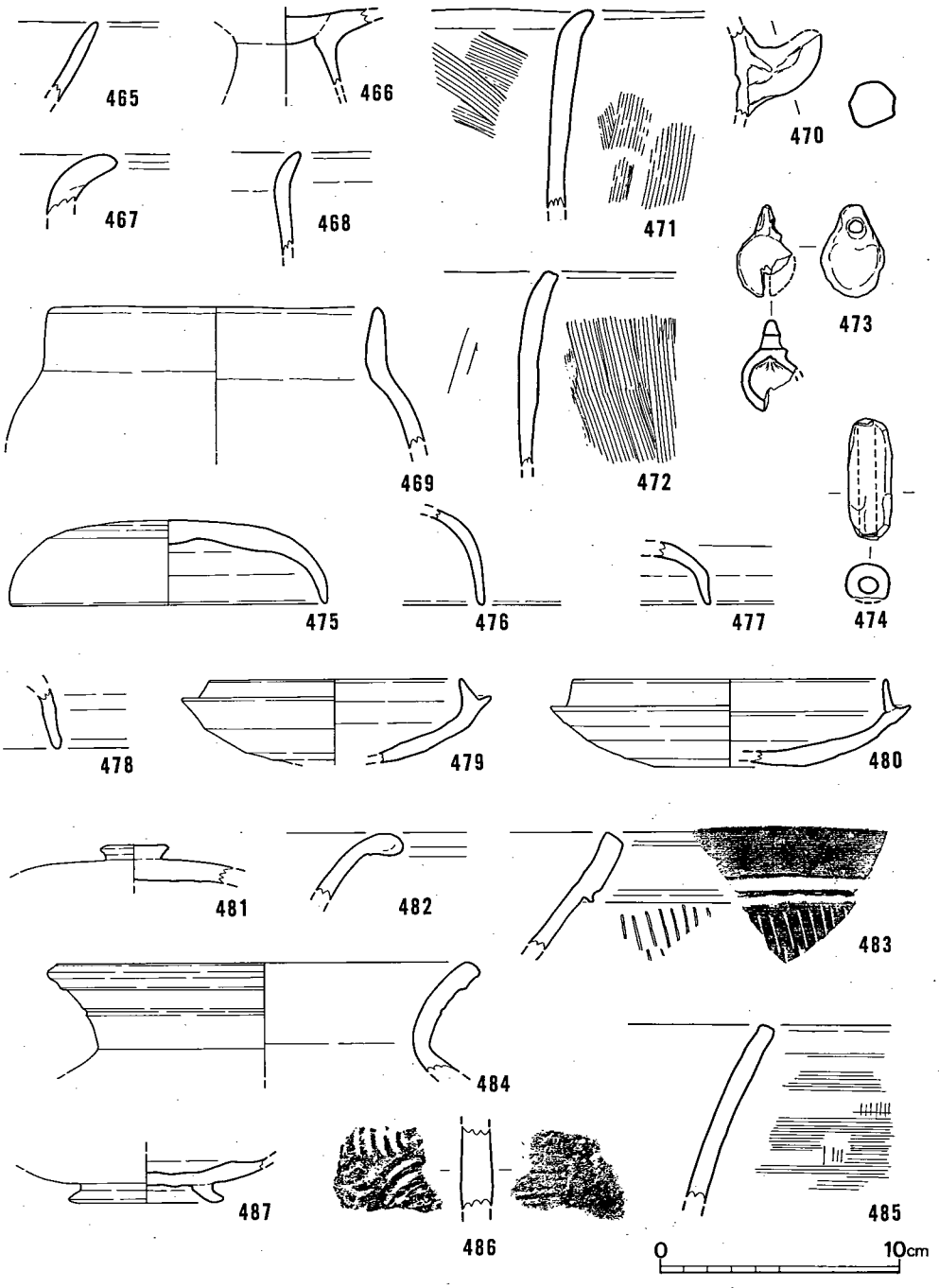
58号竪穴住居跡（図版71，第171図）

58号竪穴住居跡は調査区北部住居群の中で最も西で，56号住居跡，12号・15号掘立柱建物跡の西0.5～1mに位置し，弥生時代の61号住居跡を切る。しかし，現代の家屋によりその大部分が削平され，残っているのはカマドの北側の袖と北東壁および南東壁のごく一部で，主柱穴も確認されていない。残存部分から判断して，住居は1辺5m程度の方形プランを呈し，61号住居跡の中にちょうど収まるような位置にあったと考えられる。カマドは北西壁に付設されるが，先述したように北側の袖と焼土が含まれる中央部の掘り込みが検出されただけである。遺物は撹乱部等を含め比較的多く得られたが，いずれも破片は小さく遺存状態はあまり良好でなかった。本住居に確実に伴うのは，第172図の471・474・476・482・485の5点である。



第171図　58号竪穴住居跡実測図（1/60）

土師器（第172図465～474）　坏465，高坏466，甕467～469は，ともに摩滅が著しく調整不明。469の口径は14.2cm。470は甑の把手，471～474は甑の口縁部である。471の内外面にはハケが，472の外面にはハケ，内面にはケズリが施



第 172 図　58号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

される。473は土鈴で，内面にはしぼり痕が残る。474の土錘は長さ5.0cm，孔径0.7cmを測り，図の上端には黒斑が付く。

須恵器（第172図475～487）　坏蓋475～478のうち，475・477の天井部外面には回転ヘラケズリが，476にはカキ目が施される。475は口径13.2cm，器高3.5cm。坏身479・480の底部外面にも回転ヘラケズリが施される。481は高坏の蓋で，調整はナデ。482～486はいずれも甕と考えられる。485の外面にカキ目が施される以外，他の器面調整はすべてナデである。483の文様は沈線文ではなく，刺突文である。484の口径は17.5cm。486は胴部破片で，外面に平行タタキ，内面には青海波のタタキが施される。487は高台の付く坏身の底部である。

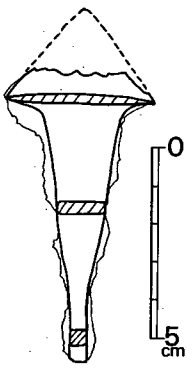
59号竪穴住居跡（図版72，第168図）

59号竪穴住居跡は調査区北部住居群の中でも最も北に位置し，11号掘立柱建物跡の北西0.5m，58・61号住居跡の北東7mにある。平面プランは辺長4.6×4.9mの方形を呈するが，北西壁は外側へ若干膨らむ。主柱穴は住居プランに対応して配され，深さはいずれも50cmと比較的深い。カマドは北西壁中央やや北側で，この壁が外側へ最も膨らむところに付設される。焼土と袖に相当する黄褐色の粘土が薄く4cmほど残り，中央部は住居床面より5cm下がる。住居の東隅には幅70cm，深さ5cmの「L」字状に延びる浅い落ち込みが検出されたが，性格は不明である。第173図のような鉄鏃も出土している。

土師器（第174図488～494）　坏488～490はいずれも摩滅により器面調整がわかりにくいが，488の内面にはミガキが施される。491～493は甕である。491の調整は外面がハケ，内面がケズリである。摩滅で調整のわからない492は，口径13.0cmと小さい。493の外面と口縁部内面にはハケが，内面頸部以下にはケズリが施される。口縁部内面に平行する2本の文様は，沈線文でなく圧痕のようである。494は甑で，内面はケズリである。

須恵器（第174図495～497）　坏蓋495の天井部外面には，回転ヘラケズリが施される。497は器台の脚部であろうか。器面調整は内面がナデ，外面はカキ目で，透孔が穿たれる。2条の沈線文の上下には，斜位の平行沈線文が施される。

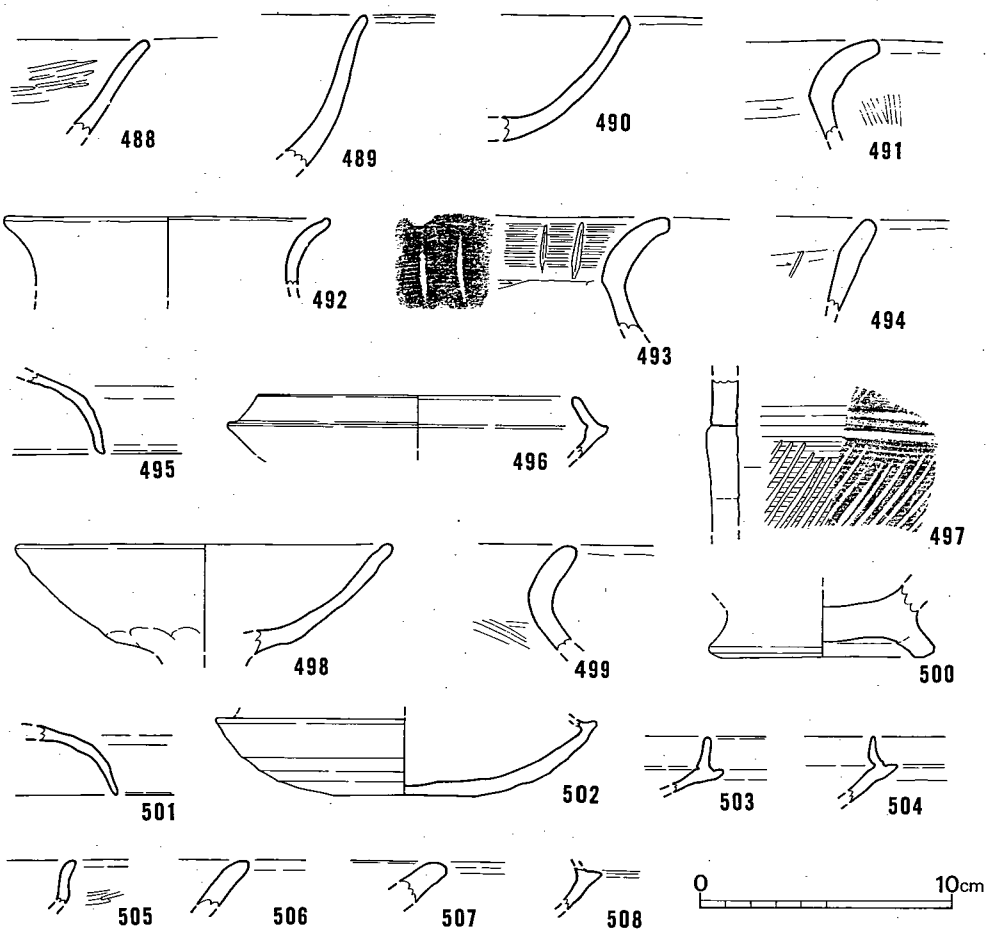
鉄　鏃（第173図）　先端部は欠損するが，現存長7.8cm，最大幅4.0cmを測る鉄鏃で，鏃身の厚さは4mmで断面形態は長方形を呈する。



第 173 図　59号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）

62号竪穴住居跡（図版72，第175図）

62号竪穴住居跡は調査区北部住居群の中でも東端に位置し，63号住居跡の西1m，57号住居跡の東4mの距離にある。辺長2.75×3.1mの隅丸方形を平面プランとし，本遺跡において最も小さな規模を有する住居である。南西壁に沿って幅25cmのベット状のテラスがあり，径30～40cm，深さ10cm

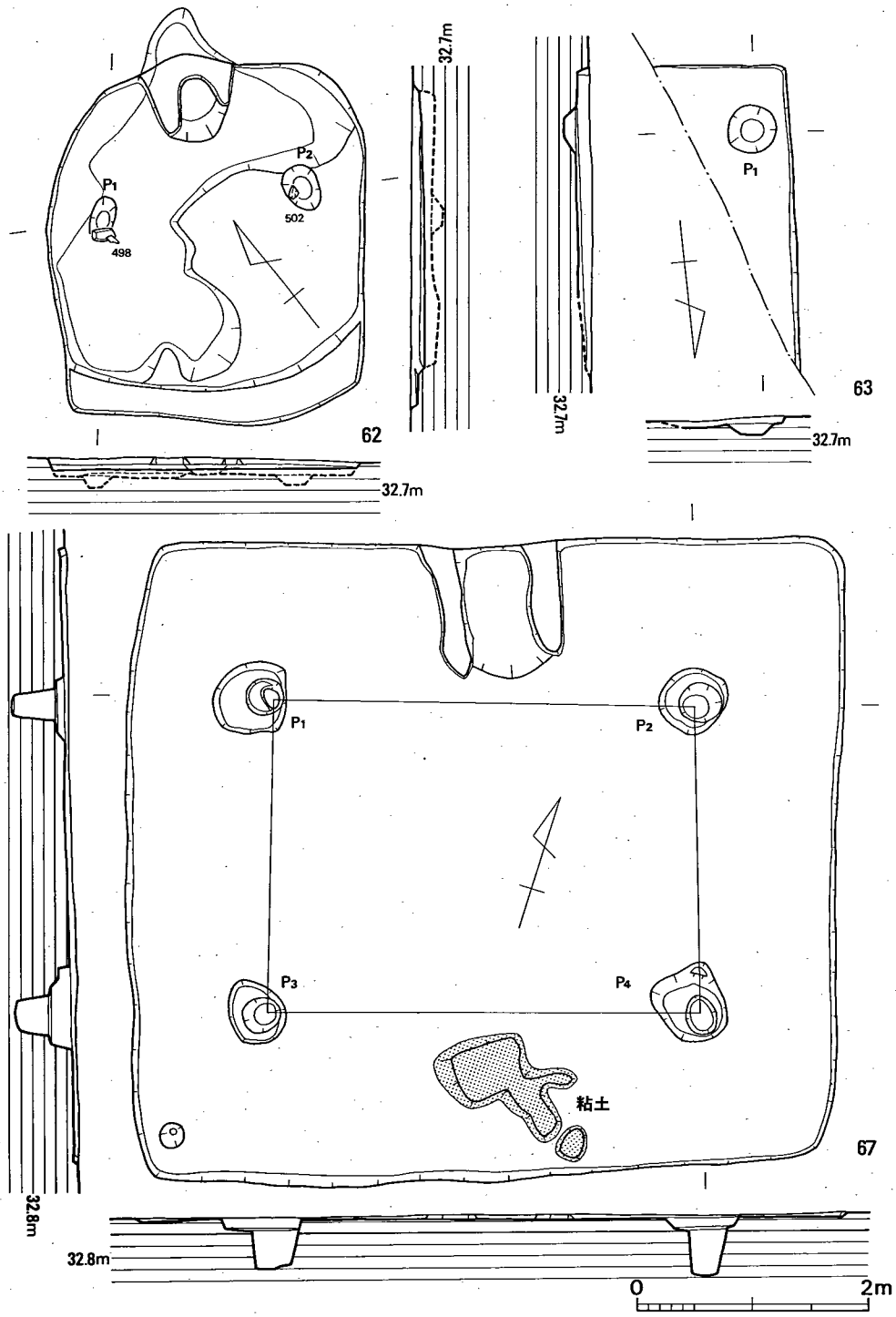


第 174 図　59・62～64号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

の浅い2本の主柱穴はカマドに向かって左右に配される。そのカマドであるが，北東壁の中央に付設され，焼土と袖の黄褐色粘土が厚さ5cmほど残る。カマドの北西部には三角形状で長さ40cmの突出部があるが，埋土は住居床面下の北側に広がる浅い落ち込みと同質で，遺構としてもつながっており，カマドとの関連性については俄かに決しがたい。第174図500はカマドから，498・502は床面からの出土である。

土師器（第174図498～500）　高坏498の器面調整はナデ，甕499の内面はハケ，外面は不明である。500は台付きの底部で調整はナデ。台の径は8.9cmを測る。

須恵器（第174図501・502）　坏蓋501の天井部外面と坏身502の底部外面には，器面調整として回転ヘラケズリが施される。502の口縁部は欠損するが，立ち上がりはさほど高くないようである。



第 175 図　62・63・67号竪穴住居跡実測図（1/60）

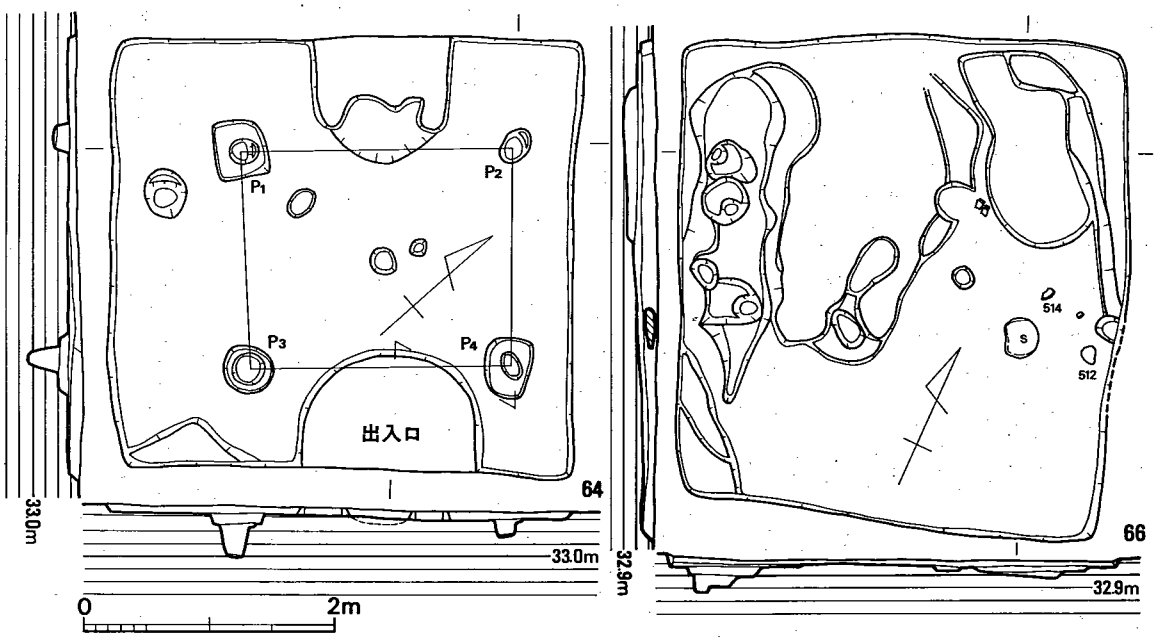
63号竪穴住居跡（図版72，第175図）

63号竪穴住居跡は調査区北西部住居群の東端で62号住居跡の東１ｍに位置するが，その大部分は調査区外にあり，検出された辺長は，南北2.7ｍ，東西1.1ｍに過ぎない。主柱穴やカマドも調査区外で住居の構造はほとんどわからないが，平面プランは方形を呈するものと考えられる。遺存状態は悪く，壁高は４㎝程度である。遺物は少なく，図示できたのは須恵器２点だけである。

須恵器（第174図503・504）　503・504は坏身口縁部である。この部分での器面調整はナデである。

64号竪穴住居跡（図版73，第176図）

64号竪穴住居跡は調査区のほぼ中央部に位置し，この中央部から北東に延びる浅い谷の中の微高地上にある。周囲には同時期の住居がなく，１軒だけ隔絶した感がある。辺長3.7～3.5ｍの正方形に近い平面プランを呈し，壁高は５㎝と遺存状態は良好でない。主柱穴はいずれも２段掘りで，径25～45㎝を５㎝掘り下げたところで径20㎝の穴を20～25㎝ほど掘り下げる。主柱穴の埋土には黄褐色粘土を意図的に混ぜており，本遺跡では67号住居に類例を見る。カマドは北西壁中央のやや北寄りに付設されるが黄褐色粘土とその中央部に焼土が残るだけで，遺存状態は悪い。カマドに対峙する南東壁中央のやや北寄りには，壁に沿って黄褐色粘土が1.45×0.9ｍの半円形状に広がるが，これは出入口としての機能を有するものと考えられる。遺物は少な



第 176 図　64・66号竪穴住居跡実測図（1/60）

く小破片ばかりで，図示できたのは4点だけである。なお，主柱穴とカマドと出入口の位置関係はいずれも等間隔で整然としているが，住居プランの中では全体に北へズレている。

土師器（第174図505～507）　505は坏で，内外面にはミガキが施される。506･507は甕の口縁部で，調整はいずれもナデである。

須恵器（第174図508）　508は坏身で，調整はナデである。

66号竪穴住居跡（図版73，第176図）

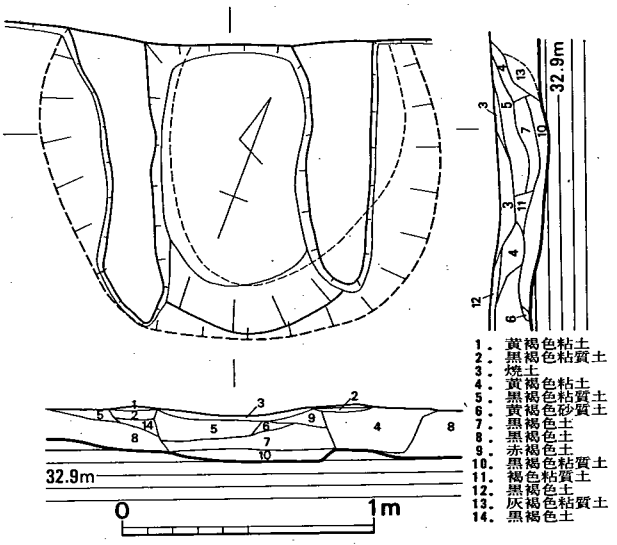
66号竪穴住居跡は調査区西部に散在する住居の中でも最も北に位置し，67・74号住居跡の北4mにある。遺構の検出時においては，辺長3.9×3.5mの方形プランがはっきりと確認されたが，カマドや主柱穴は検出されなかった。床面も平坦にはならず，多くのテラスや浅い落ち込みと柱穴で凹凸が著しい。遺物は比較的多く遺存状態も良好で，他の住居から出土する遺物と変わりないが，カマドや主柱穴はもとから存在しなかったようで，本遺跡にあっては特異な性格を有する。出土遺物から，本住居跡は6世紀前半代に属する。

土師器（第179図509～512）　坏509と甕510の器面調整は，内外面ともナデ。510の口径は20.3cm。甑511の外面はナデ，内面にはケズリが施される。512は甕の底部で調整はナデである。

須恵器（第179図513～515）　坏蓋513の天井部外面と坏身514･515の底部外面には，器面調整としての回転ヘラケズリが施される。口縁部の立ち上がりはいずれもかなり高く，器高も高い。本遺跡から出土する須恵器の中にあっては，最も古い様相を示す一群である。

67号竪穴住居跡（図版74・75，第175・177図）

67号竪穴住居跡は調査区西部に散在する住居の中ではやや北寄りで，66号住居跡の南4mに位置し，弥生時代の74号住居跡とちょうど重なるような場所にある。平面プランは5.5×6.1mの大きな長方形を呈するが，壁高は2cmしかなく遺存状態は悪い。4本の主柱穴はこの平面プランに対応するように整然と配置され，いずれも2段掘りで深さ50cmを測る。柱根を補強・安定させるためか主柱穴の埋土には黄褐色粘土が意図的に混入されており，この特徴は64・68

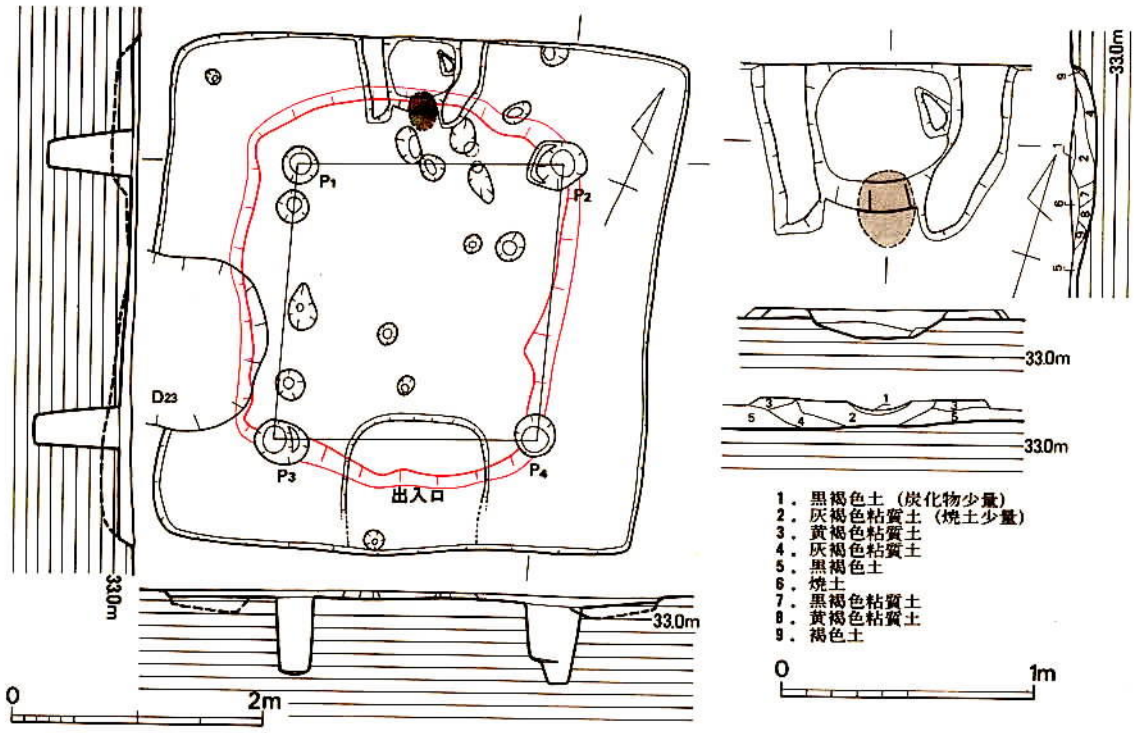


第177図　67号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

号住居のそれと同様である。カマドは北壁の中央に付設されており，長さ1.1m，幅1.35mと規模は大きいが，著しい削平により袖に相当する黄褐色粘土は2cmしか残っておらず，火床面もすでに剥き出しの状態であった。このカマドで特徴的なのは，東側の袖の下部構造にある。それは，東側の袖の下部に敷かれた厚さ15cmの黄褐色粘土で，ゆるい地盤を補強しているかのようである。弥生時代の住居上に構築されたためであろうか。なお本住居検出時において，黄褐色の粘土がカマド周辺に細かく広く散っていたが，これはカマドの袖や天井部が崩壊した時の痕跡と考えられる。カマドと対峙する南壁の中央には，出入口的機能を果たしたと考えられる黄褐色粘土が，1.1×1.2mの範囲で広がる。削平が著しいためか出土遺物は少なく，図示できたのは3点（第179図516～518）で，そのうち518はカマドからの出土である。66号住居跡同様，本住居跡も6世紀前半代に属する。

土師器（第179図516・517）　516は高坏の脚部で，外面にはミガキが，内面にはナデが施される。517は胴下半部が少し膨らみ平底のように底部が潰れる甕で，外面にはハケ，内面にはケズリが器面調整として施される。外面には二次火熱を受けるとともに，炭化物が付着する。

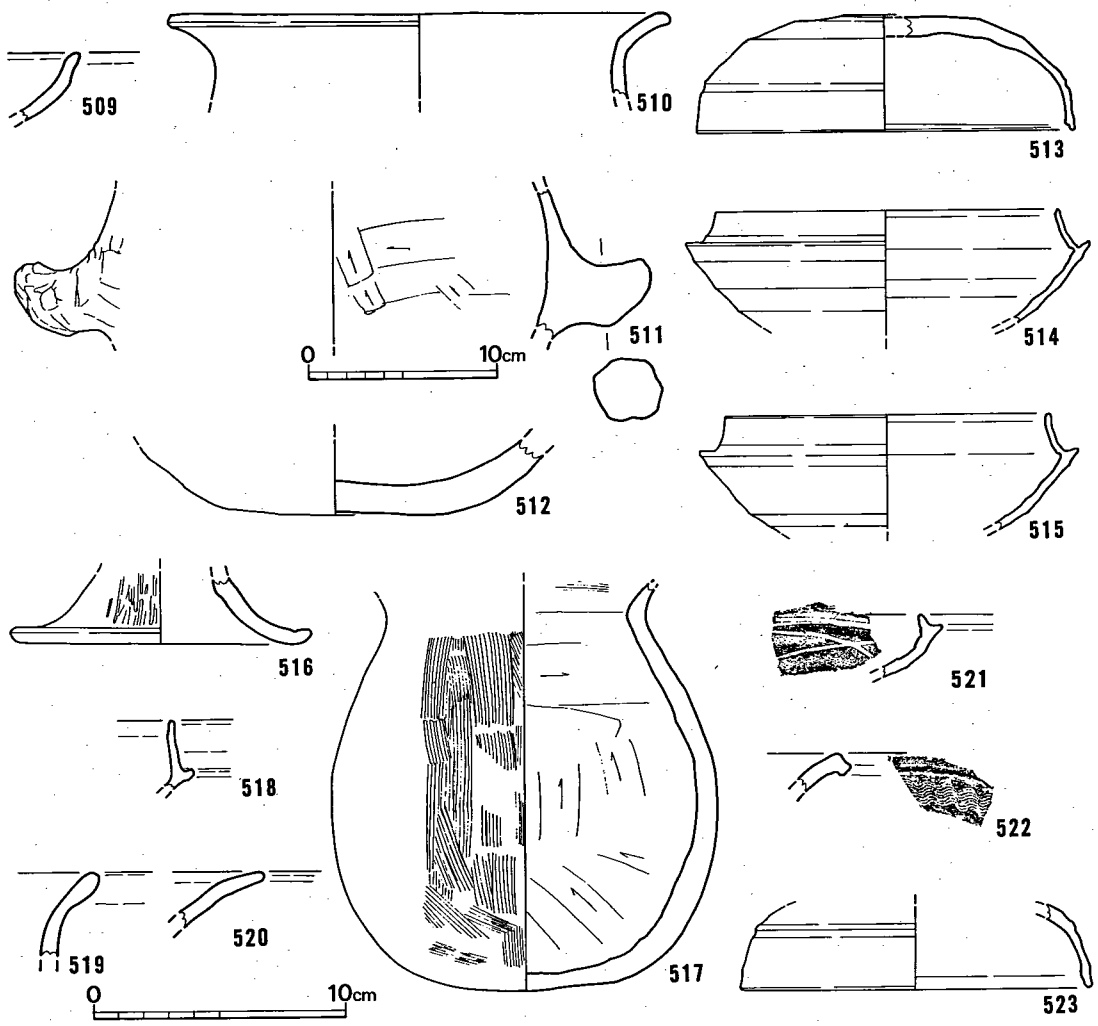
須恵器（第179図518）　518は坏身の口縁部でその立ち上がりはかなり高く，本遺跡から出土する須恵器の中では，最も古い様相を示す。



第 178 図　68号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60，1/30）

68号竪穴住居跡（図版75，第78図）

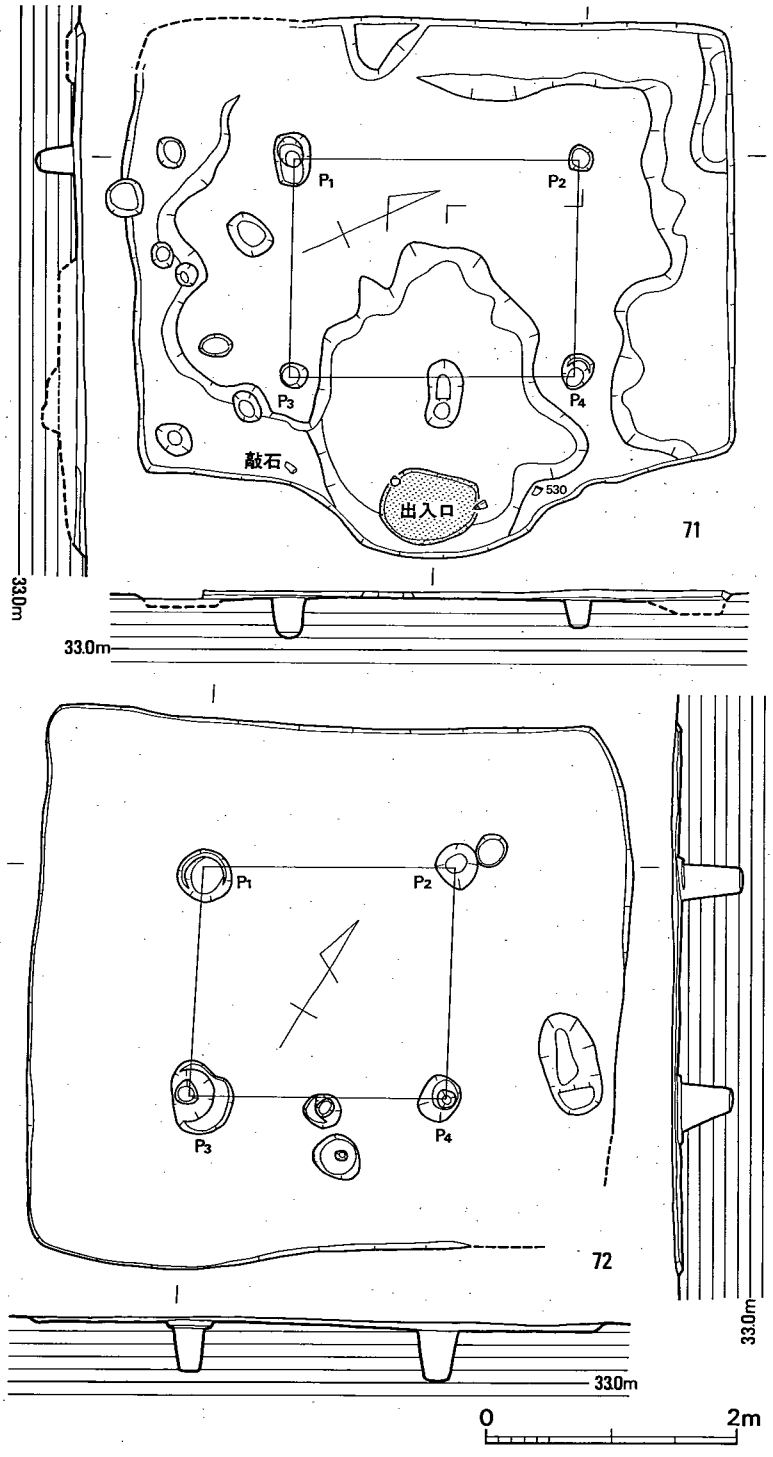
68号竪穴住居跡は調査区西部の中でもやや北寄りに位置し，67・74号住居跡の東６ｍで23号土壙に切られる。辺長4.1×4.1ｍのわずかに歪んだ正方形を平面プランとし，４本の主柱穴はこのプランに対応するように整然と配置される。主柱穴は径30～40cm，深さ60～70cmと深く，64・67号住居と同様，埋土には柱痕補強のために黄褐色粘土が混入される。住居の壁高は４cmしか残っておらず，北壁の中央に付設されたカマドも遺存状態は悪い。カマドの内部は10cmほど掘り下げられているが，火床面自体は住居の床面と同じレベルである。カマドと対峙する南壁中央には，出入口的機能を果たしたと考えられる黄褐色の粘土が，1.1×1.1ｍの範囲で隅丸



第 179 図　66～68号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3，511・512は1/4）

方形状に広がる。貼り床を除去すると，壁に沿って巡る，幅50～65cmで深さ10cmの溝が検出された。このような住居の下部構造は，37号住居でも見られる。遺物は少なく，図示できたのは須恵器3点だけである。

須恵器（第179図521～523）　523は坏蓋で，器面調整はナデ。坏身521の器面調整もナデだが，内面には「×」のヘラ記号が施される。522は甕の口縁部で，外面には波状文が施される。



第 180 図　71・72号竪穴住居跡実測図（1/60）

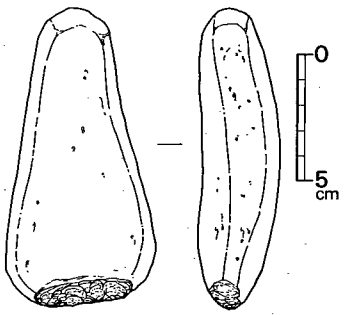
71号竪穴住居跡（図版76・77，第180図）

71号竪穴住居跡は調査区中央部のやや西寄りに位置し，19号掘立柱建物跡の南６ｍ，20号掘立柱建物跡の北東２ｍ，21号掘立柱建物跡の北７ｍの距離にある。住居の西隅は削平され遺存せず，また南東壁は出入口部として60cmほど突出するが，基本的には3.5×4.75ｍの長方形プランを呈する。径20cm，深さ25～40cmの４本の主柱穴は住居のプランに対応し，長方形状に整然と配置される。カマドは北西壁の中央に付設されるが，南側の袖が厚さ２cmほど残るだけで遺存状態は悪い。カマドと対峙する南東壁には，0.8×0.6ｍの黄褐色粘土が敷かれるだけでなく，幅2.5ｍ，長さ60cmに亘り外側へ突出部が作出される。いずれも住居への出入口的機能を果たすものと考えられるが，本遺跡には他に類例のないタイプである。床面下には壁に沿って幅40～60cm，深さ５～10cmの浅くて幅の一定しない溝が巡り，また出入口部付近には2.5×2.0ｍ，深さ５cmの浅い落ち込みが検出された。37号住居や68号住居でも同じような床面構造が見られるが，出入口部が掘り込まれるのは本住居だけである。遺物は少ないが，土師器・須恵器の他に第181図の敲石が出土した。531は床面から，524は床面下からの出土である。

土師器（第183図524～527）　524は坏で，調整はナデ。525・526はいずれも甕の口縁部だが，摩滅により調整は不明。527は甑の把手である。器面調整はやはり不明。

須恵器（第183図528～531）　坏蓋528～530の天井部外面ならびに坏身531の底部外面には器面調整として回転ヘラケズリが施される。528は口径12.9cm，器高3.2cm，529は14.9cm，3.6cm，530は15.0cm，4.9cm，531は12.5cm，3.9cmを測る。531の口縁部の立ち上がりは比較的高い。

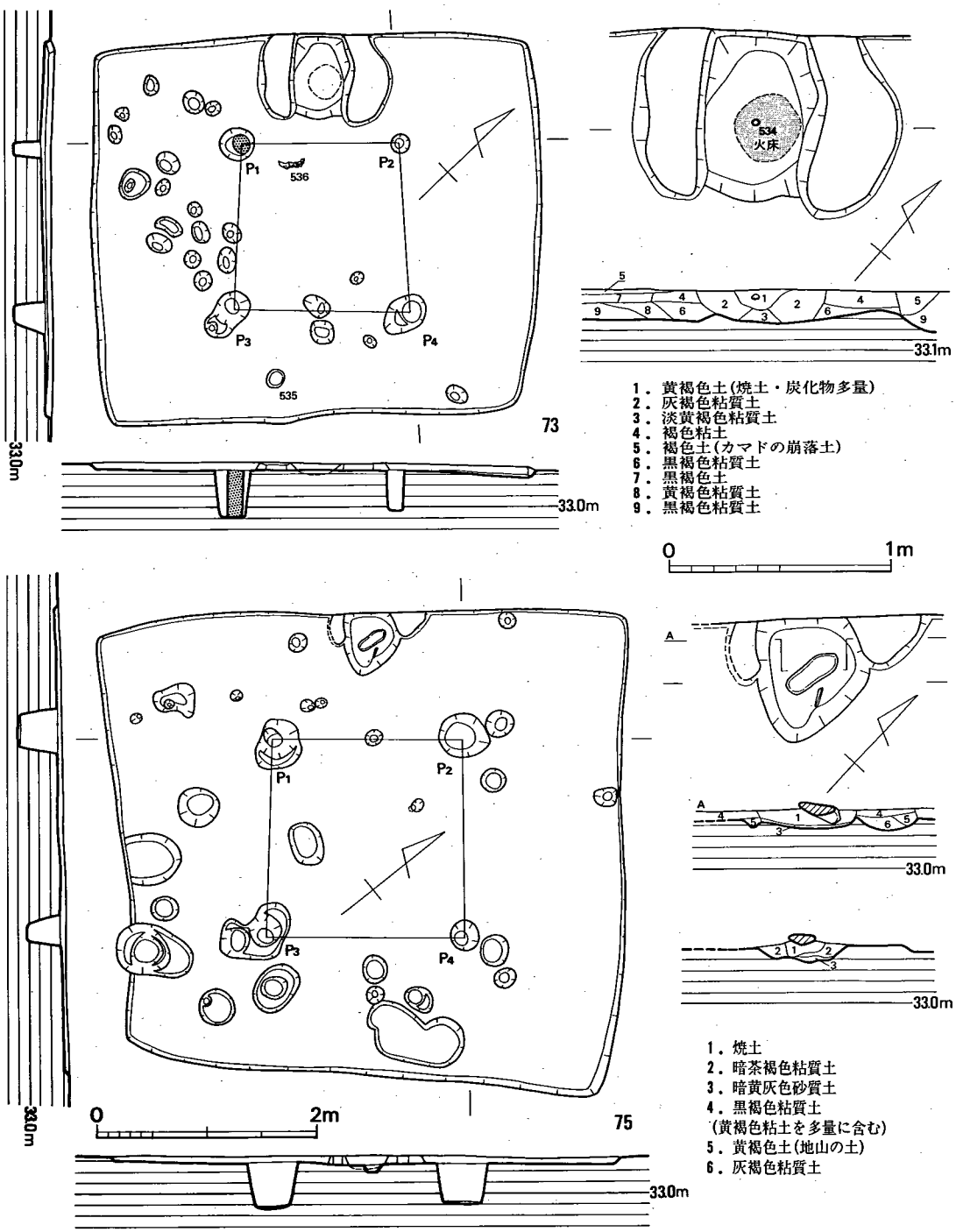
敲　石（第181図）　長さ11.5cm，厚さ3.0cmの石材を素材とし，太い方の先端は敲打によって潰れる。



第 181 図　71号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）

72号竪穴住居跡（図版77，第180図）

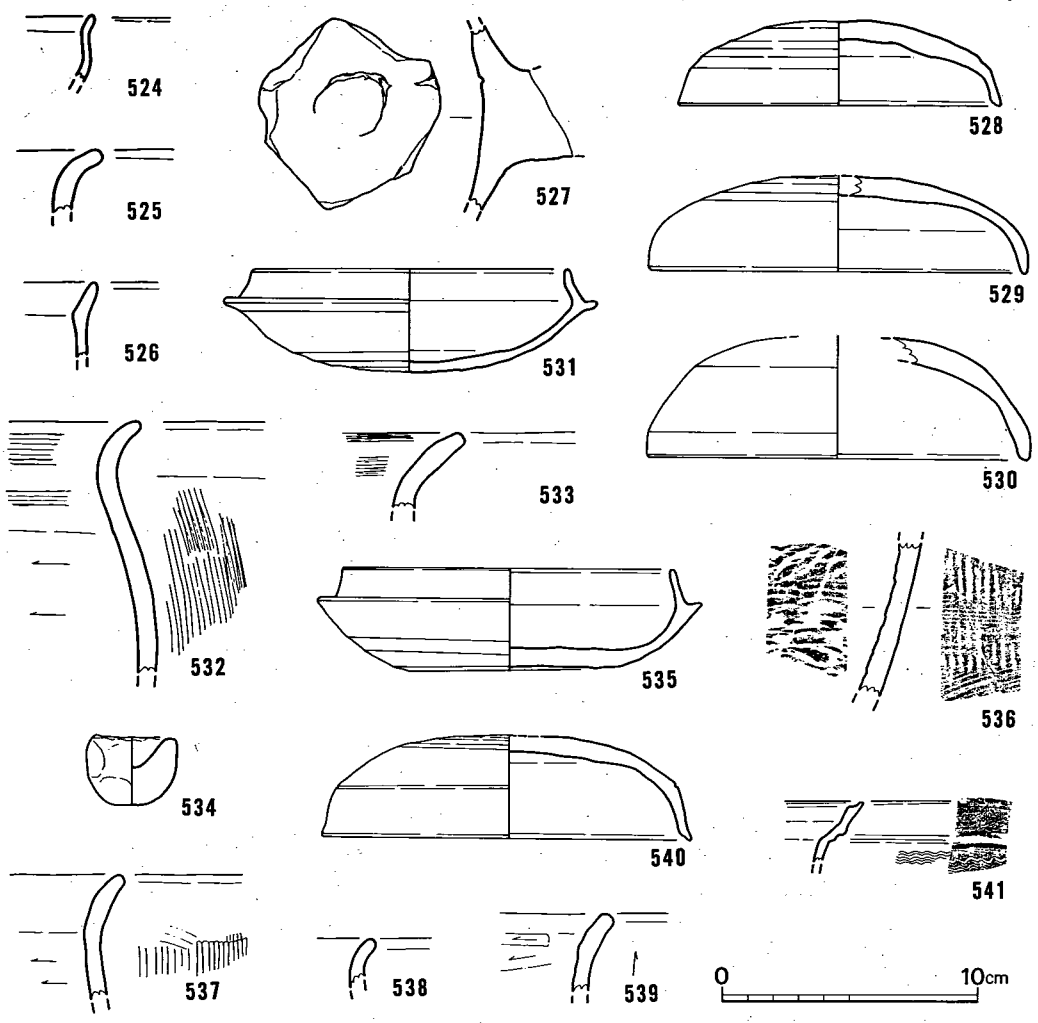
72号竪穴住居跡は調査区中央のやや南寄りで，10・21号住居跡の北６ｍ，20号掘立柱建物跡の南西３ｍの距離にある。24号掘立柱建物跡と切り合うが，その先後関係は明確でない。東隅は削平され，検出時点でも貼り床が３cm程度残るだけで，カマドや出入口等の付設物も残らず，遺存状態は極めて悪い。辺長4.4×4.7ｍの方形を平面プランとし，径35～50cm，深さ40～50cmの主柱穴は平面プランに沿って整然と配置される。遺物の出土はまったくなく，所属時期は不明である。



第 182 図　73・75号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60, 1/30)

73号竪穴住居跡（図版77・78，第182図）

73号竪穴住居跡は調査区中央の東側に位置し，67・74号住居跡の南10m，75号住居跡の北西6m，71号住居跡の北9mの距離にある。19号掘立柱建物跡と近接するが，切り合ってはいない。平面プランは辺長4.1×3.45mの長方形を呈するが，壁高は最高で5cmしかなく，遺存状態は悪い。径15～30cm，深さ40～45cmの4本の主柱穴は整然と配置されるが，中でも主柱穴P1では径15cm，深さ45cmの柱根部が確認された。カマドは北西壁中央部に付設されるが，袖にあたる黄褐色粘土は残らず，その基礎となる褐色粘質土のみ残る。第183図534の手捏ね土器はカマドからの出土である。内部は10cmほど掘り込まれ，そこに焼土や炭化物が堆積するが，火床面自体は住居の床面と同じレベルにある。床面下の西部には小柱穴が集中し，北東部は10cmほ



第183図　71・73・76・79号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

ど落ち込むが，遺物の出土はない。遺物は全体的に少ないが，床面からは第183図532・534・535が出土した。出土遺物から，本住居跡は6世紀中葉に位置づけられよう。

土師器（第183図532・534）　532・533はいずれも甕である。532の外面および内面の口縁部にはハケが施されるが，内面の胴部にはケズリが施される。533の外面はナデ，内面はハケである。534は外面に指頭圧痕が残る手捏ね土器である。

須恵器（第183図535・536）　坏身535は完形品で，口径は13.1cm，器高は4.0cmを測り，口縁部の立ち上がりは比較的高い。器面調整は全体的にナデだが，底部外面には回転ヘラケズリが施される。536は甕の胴部破片で，外面には平行タタキの後にカキ目が，内面には青海波のタタキが施される。

75号竪穴住居跡（図版79，第182図）

75号竪穴住居跡は調査区中央部の東側で，73号住居跡の東6m，76号住居跡の西6m，23号掘立柱建物跡の南4mにあり，22号掘立柱建物跡に重なるように切られる。平面プランは4.4×4.75mの若干歪んだ方形を呈するが，壁高は最高7cmしかなく遺存状態は悪い。径35～50cm，深さ40～50cmの主柱穴は住居のプランに反して整然と配置されるが，その中の主柱穴P2では径20cm，深さ35cmの柱根部が確認された。カマドは北西壁の中央に付設されるが遺存状態は悪く，その上22号掘立柱建物跡に南側の袖を大きく切られる。袖は長さ25cmしか残らないが，8cmほど掘り込まれた内部からは，長さ25cmの自然石を利用した支脚が焼土の上に寝るような状態で検出された。出土遺物は少なく小破片ばかりで図示しうるものはないが，土師器の他に須恵器も数点見られる。

76号竪穴住居跡（図版80，第184図）

76号竪穴住居跡は調査区東部のほぼ中央に位置する。75号住居跡の東6m，23号掘立柱建物跡の南東5m，25号掘立柱建物跡の北4mの距離にあり，カマドや主柱穴の一部は1号溝に切られる。平面プランは辺長4.65×4.25mの方形を呈するが，北隅方向に若干歪む。4本の主柱穴は径35～55cm，深さ35～40cmを測るが，主柱穴P3・4ではそれぞれ径20cm，深さ34cm，径19cm，深さ35cmの柱根部を確認した。カマドは北西壁中央に付設され，内部には5cmの掘り込みとそこに堆積した焼土と炭化物を検出した。南東壁の中央やや南寄りには，1.3×0.6m，深さ2～3cmの浅い落ち込みがあるが，出入口との関係は不明である。貼り床を除去すると，主柱穴P1～3に切られた柱穴（P5・7）が検出された。これらの柱穴は本住居が構築される以前の住居の主柱穴と考えられ，本住居は最低1回の建て直しがあったことを物語っている。なお，主柱穴P4の周辺からは貼り床除去後も建て直し以前の柱穴が確認されなかったが，これは主柱穴P4がその柱穴のあった場所に掘り込まれているからであろう。出土遺物は少なく

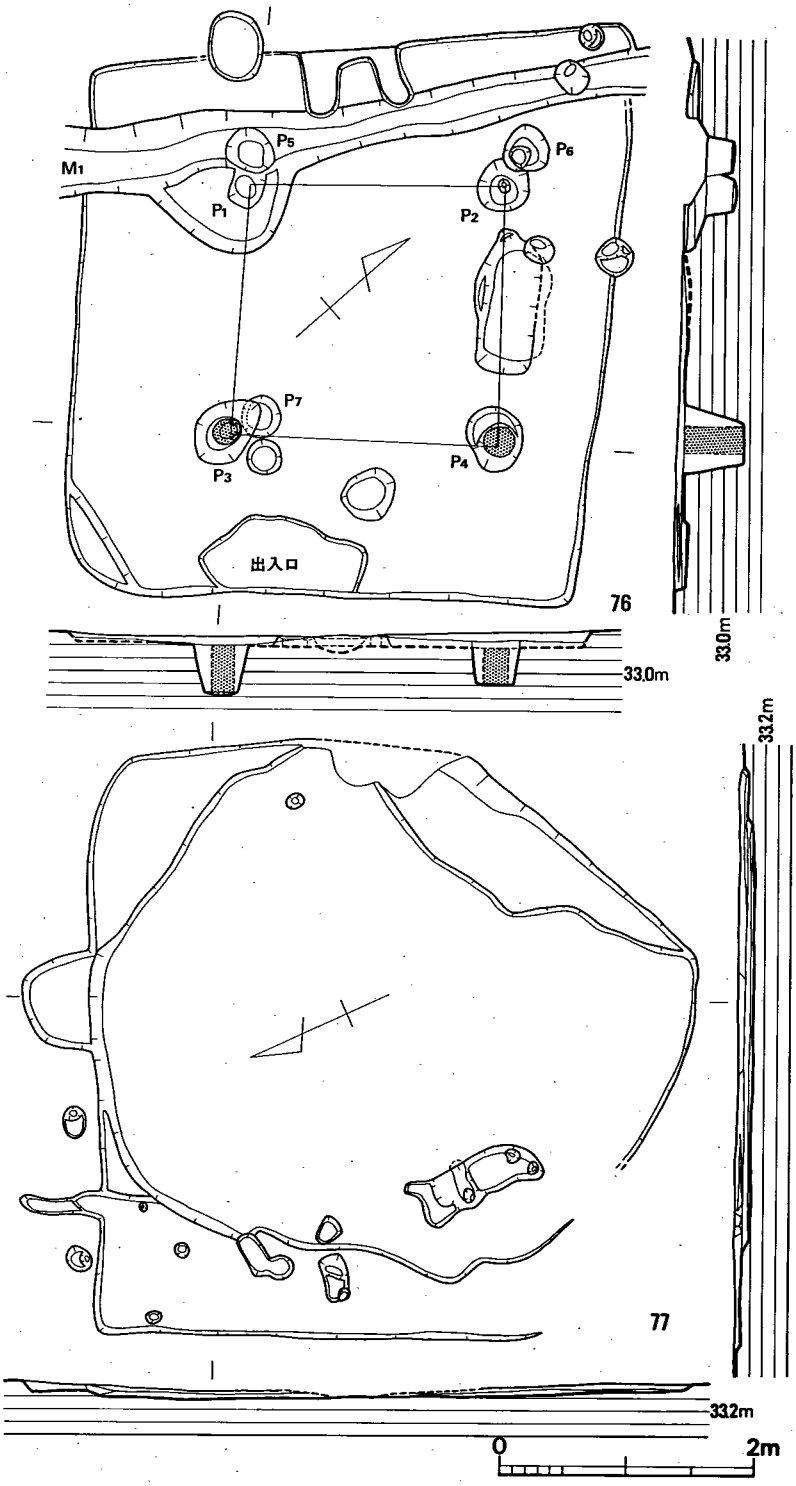
図示できたのは土師器3点だけであるが，それ以外に須恵器の小破片も含まれる。

土師器（第183図537～539）

537～539はいずれも甕の口縁部である。器面調整は，537の外面がハケ，内面がケズリ，538は内外面ともナデ，539は内外面ともケズリである。

77号竪穴住居跡（第184図）

77号竪穴住居跡は，当初適当な規模を持った平面プランが確認されたので，竪穴住居跡として77号という住居番号を付けた。しかし調査の結果，灰褐色粘質土の埋土，平坦にならない床面，存在しない主柱穴とカマド等の様々な要素から，竪穴住居跡ではなく浅い落ち込

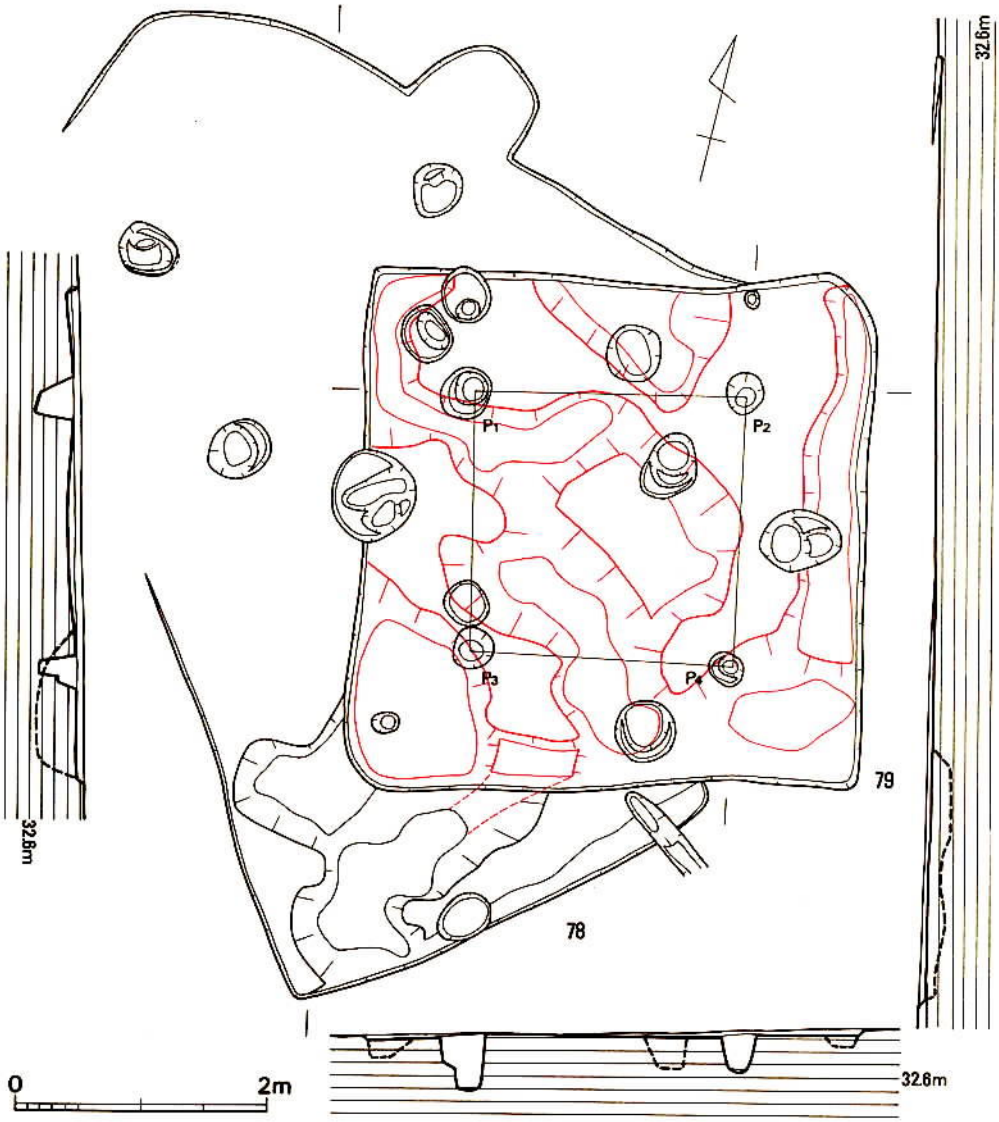


第 184 図　76・77号竪穴住居跡実測図（1/60）

みという認識に至った。本報告にあたっては「竪穴住居跡」の項目で説明しているが，これはあくまで便宜的な取り扱いである。なお，出土遺物は少なく小破片ばかりだが，土師器の他に須恵器も見られる。位置は調査区南東部，２号住居跡の北２ｍ，３号掘立柱建物跡の西２ｍ，26号掘立柱建物跡の南東２ｍである。

78号竪穴住居跡（図版81，第185図）

78号竪穴住居跡は調査区の東端に位置し，80号住居跡の南西３ｍ，29～31号掘立柱建物跡の



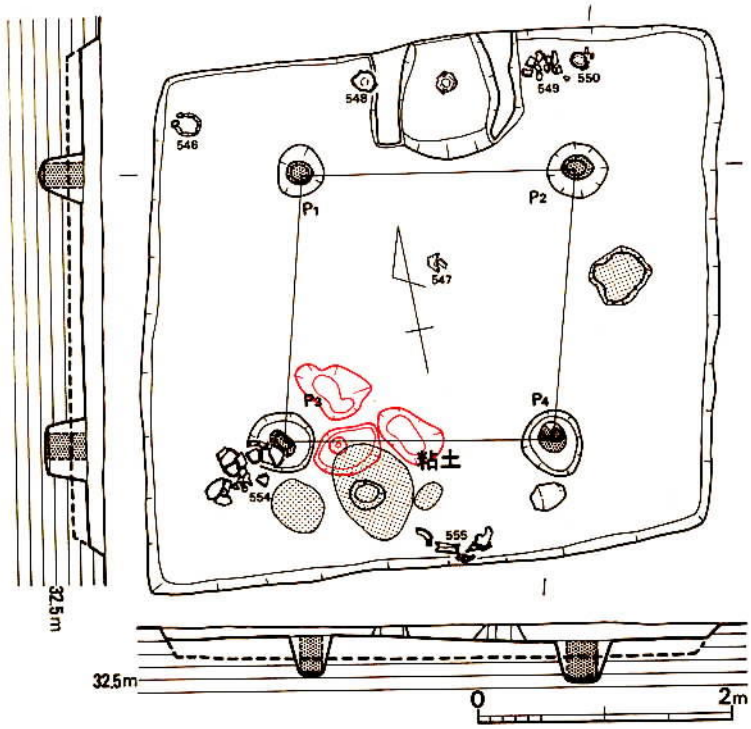
第 185 図　78・79号竪穴住居跡実測図（1/60）

東４ｍの距離にあり，79号住居跡にその大部分が切られる。79号住居跡の北側では方形プランになるであろう壁と，その中央にはカマドと考えられる黄褐色粘土や焼土の広がる幅0.9ｍ，奥行き0.7ｍの半円状の突出部があることから，竪穴住居跡という認識に至り78号という住居番号を付けた。しかし，主柱穴や南側半分のプランは検出されていないという問題点も残っている。現存する辺長は，5.1ｍと1.2ｍである。遺物は数点の土師器片だけで，図示できるものはなかった。なお，カマドと考えられる突出部の底面からは，姫島産黒曜石製の石匙（第271図５）が出土したが，これは明らかに縄文時代の遺物で本住居に伴うものではない。また，79号住居跡の南側でも方形プランになるであろう遺構が検出されたが，黒色土という埋土の他にカマドや主柱穴はもちろん遺物も未確認であることから，住居として扱わなかった。

79号竪穴住居跡（図版81，第185図）

79号竪穴住居跡は調査区の東端に位置し，80号住居跡の南西３ｍ，29～31号掘立柱建物跡の東４ｍの距離にあり，78号住居跡を切る。辺長4.0×4.1ｍの正方形プランで，壁高は最高で７cmを測る。４本の主柱穴は径30～35cm，深さ30～45cmで整然と配置されるが，カマドは検出されていない。床面下は凹凸が著しく，深い所では床面から約40cm下がる。床面下の埋土は黒色土で凹凸は一部住居南側の方形状遺構まで延びていくが，それ以外はこの住居の範囲内でちょうど収まる。従って，住居構築時に掘られたものと考えられるが，その性格については不明である。出土遺物は少なく図示できるのは２点だけであるが，そのうち第183図541は床面下からの出土である。

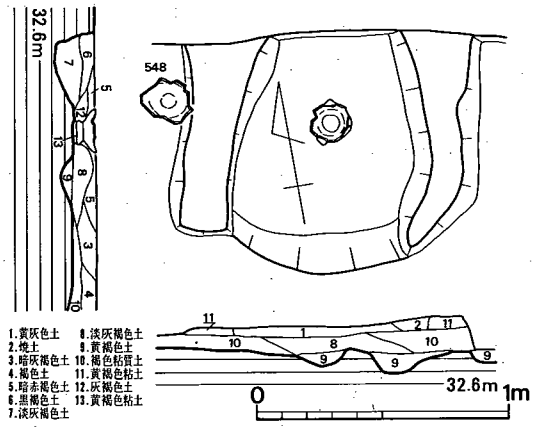
須恵器（第183図540・541）　540は坏蓋で，天井部外面には回転ヘラケズリが施される。541は甕の口縁部で調整はナデ，外面には波状文が施される。



第 186 図　80号竪穴住居跡実測図（1/60）

80号竪穴住居跡(図版81～83，第186・187図)

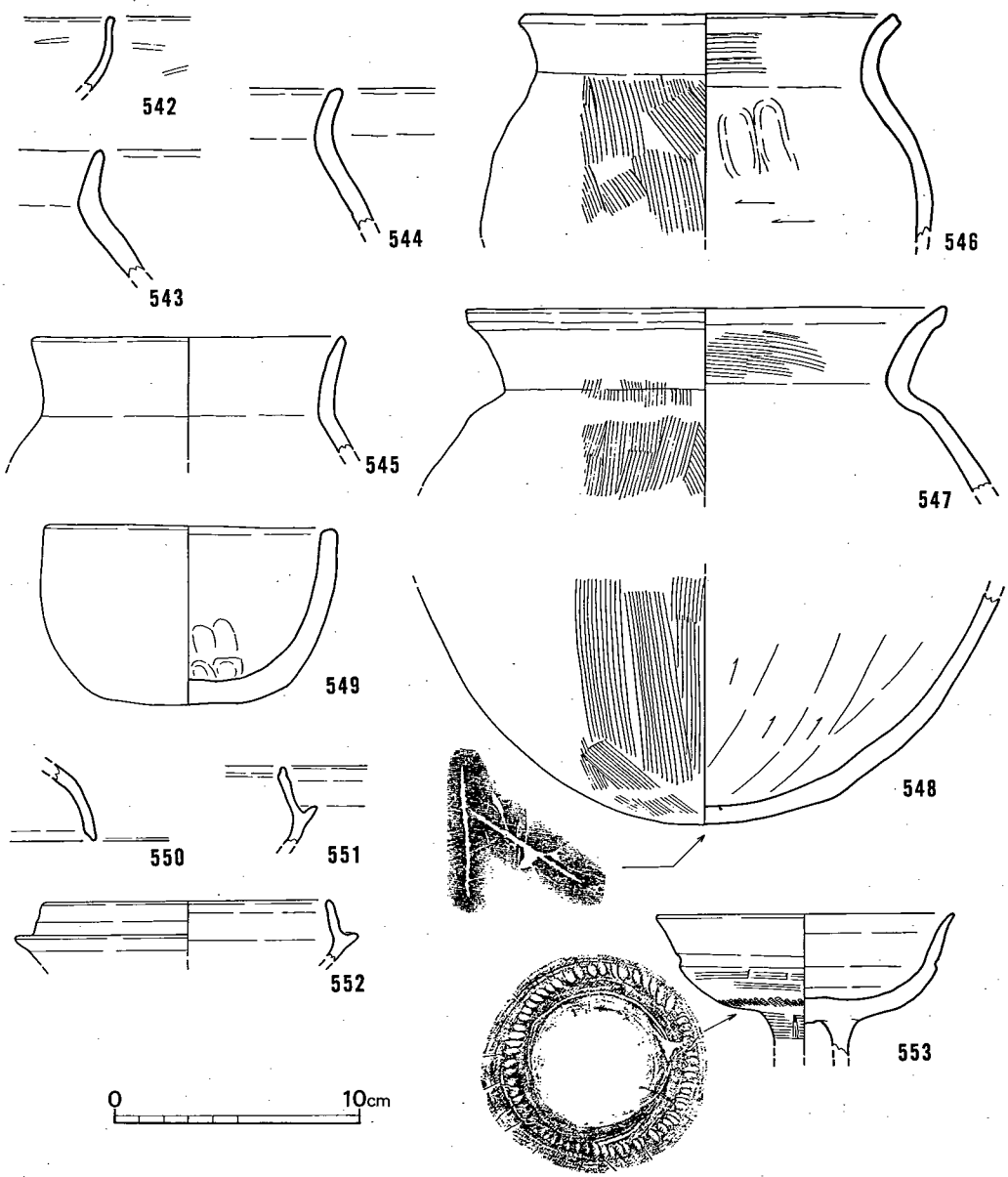
80号竪穴住居跡は調査区の最東端で，79号住居跡の北東２ｍに位置する。平面プランは辺長4.45×4.15ｍの平行四辺形状に歪む長方形で，壁高は全体的に15cmを測り，遺存状態はすべての点で良好である。４本の主柱穴は径35～45cm，深さ35cmを測り，いずれにおいても径20cm，深さ30cmの柱根部を確認した。配置自体は等間隔で整然としているが，住居の平面プランに対応するものではなく，カマドとも軸がズレている。カマドは北壁の中央に付設され，袖の黄褐色粘土がしっかりと残る。その中央部には，支脚として転用された壺の胴上半部が逆さまに据えられた状態で検出された。この支脚土器の中には上半分に灰・炭化物・焼土が堆積し，下半分から口縁部の下までには黄褐色粘土（土層番号13）が固定のために敷き詰められていた。南壁中央からやや西寄りには黄褐色粘土がブロック状に広がるが，これは出入口に関連するものかもしれない。貼り床は厚さ12～14cmで全体に均等に貼られており，これを除去すると平坦な地山面が全面に広がる。遺物の遺存状態は極めて良く，第189図544～549・556・557は床面からの543は貼り床からの出土である。



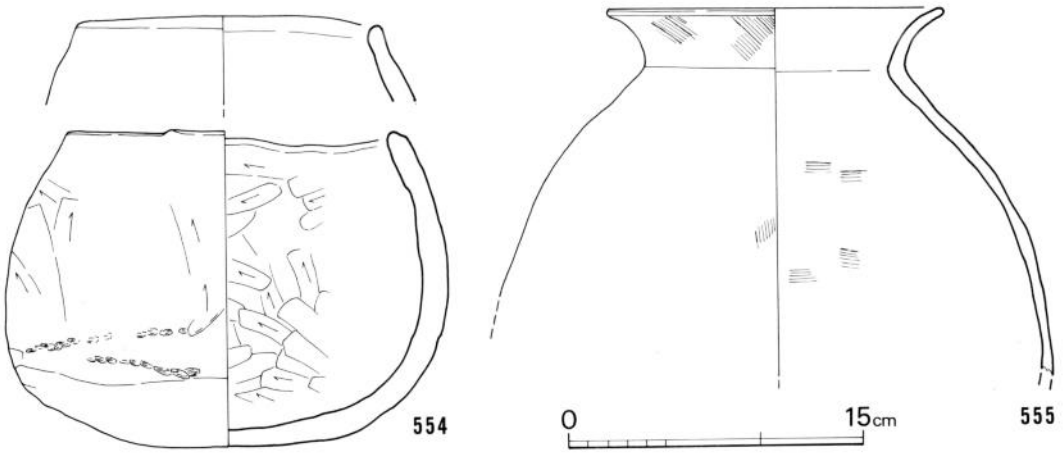
第 187 図　80号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

土師器(第188・189図542～549・554・555)　542は坏で，内外面にはミガキが施される。543～548・555は甕で，口径が復原できるものに関しては，口径12.5cmの小型545と，口径15.2cm，19.1cm，18.5cmの大型546・547・555とに分れる。543～545は摩滅が著しく，いずれも器面調整は不明。546と547はともに，外面と内面の口縁部にはハケが，内面の胴部にはケズリが施される。555もかなり摩滅しているが，内外面ともにハケが痕跡的に窺える。548は甕の底部で，器面調整は外面がハケ，内面がケズリである。外面にはヘラ記号が見える。548は小型の鉢で器面調整にはナデが施され，外面は二次火熱を受け赤褐色に変色する。554は器高16.6cmの完形品の鉢であるが，全体的に歪んでおり，口径は最大17.9cm，最小16.4cmと計測場所によって異なる。器面調整は全面にケズリが施されるが，その後で口縁部付近には内外面ともナデにより調整される。口縁部から下位へ10～13cmの胴下半部には，１～２条の縄目圧痕がほぼ全周するが，これは縄によりこの土器を釣り下げていた痕跡と考えられる。また，底部には籾をはじめ各種の繊維圧痕が残っている。なお，支脚に転用された壺は現在行方不明で，発見次第報告する予定である。

須恵器（第188図550～553）．坏蓋550および坏身551・552の器面調整はいずれもナデで，口縁部



第 188 図　80号竪穴住居跡出土土器実測図 1　(1/3)



第 189 図　80号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)

の立ち上がりは比較的高い。553は口径12.0cmの高坏坏部である。器面調整はナデだが，わずかに残る脚部にはカキ目が施される。坏底部の文様は櫛描きの刺突文で，脚部には 3 方向の透孔が穿たれる。　(水ノ江)

第 190 図　カマド内の支脚甕

第 191 図　盛土工事と調査風景

第 192 図　安武・深田遺跡のその後（築城インターチェンジ，西から）

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 ２	登録番号 ２

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告－４－

上　巻

平成３年３月31日

発　行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印　刷　㈱チューエツ九州工場

福岡市博多区東比恵２丁目９－１